がた骨折つて。巧み出された事ながら。外の目からは出來過る。言はば武將の御身にて是しきの御慰み。有るまい儀とも申されず。其上朝比奈女房は。親判官が乙娘。若狹の局の妹を遊女なんぞと言ひ落し。猫の或は鎧のとて我が君を嘲るは。兩人共に反逆と睨んだ眼は違ふまい。返答聞かんと罵れば。重忠カラ〳〵と笑ひ。ナニ我々が逆心とは。古へ秦の趙高が鹿をば馬と爭ひて。世を傾けし故事なんど聞きはつゝての咎めよな。地それは惡人此方は忠義の鎧讒人の。地鼠を取らする猫なるぞ。隨分用心あられいと。フシ空嘯いて在します。地賴家甚だ立腹あり。詞ヤア推參なり汝等。諫は臣の道なれど若年者と侮つて。嘲哢するこそ奇怪なり。地二度對面叶はぬぞ其所立去れと宣へば。兩人聲を打揃へ。地ナウ御勘氣とは曲もなや。主君は二代我々父子。元暦治承の昔より。建仁正治の當代迄身は泰山に倚懸り。命は鵞毛に等くして。奉公怠る事なければ。地追放たるゝ覺えなし。詞諫の詞は苦けれども。身を助くるの良藥にて詔ふ辯は甘けれども。地命を滅す毒草と。夢聊かも御存じなく。忠臣は遠ざけられ。佞媚の族が勸めにより。すゐていの柳腰金谷園裡の花の顏。酒宴妓樂にお目眩み心を奪はれ給ふ事。お笑止や情なや。三仁去つて殷空しく。詞范增死して楚は亡びし兩人蟄居致しなば。土屋北條土井岡崎新田佐々木千葉上總。地其外名有る諸大名賴みなき世を憤ほり。皆分國に引籠り讒臣奸人時を得て。禍必ず蕭墻より忽ち起つて萬代の。源氏のお家の恥辱となり。君萬歳のお命も。亡し給はん淺ましやと。秩父はお袖に取付けば。和田は疊を打敲き。フシ諫言實に道理なり。地賴家左右の返答なく。ひかふる袖を振放ち。殿中深く入り給ふ。地二人は溜息ほつとつぎ。實に良禽は木を擇ぶ。賢臣は師を擇ぶ。愚將と知らで今日迄。仕へし事の後悔さよ。地廣言憎しと聞き給ひ。重ねて討手給らば。潔よく腹切つて。臣下の手本にせんものと。フシ悄々立つて歸らるゝ。地近習の者共辭々に。詞ヤア後れたる人々かな。君を恨みて腹切るに。所選みは無い筈ぞ。地所望〳〵と取捲いて。スハ事こそと見る所に。地重保朝比奈龍象の。浪を蹴立る如くにて。一文字に駈來り。大太刀振つて立懸れば。詞にも似ず我一と。フシ逃げて御殿に走り入る。詞義秀給も

怒りをなし。しや物々し慢人めら。帝釋天の威を藉つて。喜見城に籠るとも。地朝比奈手くせの門破り捻り殺して捨つべしと。兩人御殿へ駈入るを。和田も秩父も取付いて。詞ヤレ逸まるな若者ども。三度諫めて容れられねば身を退くは君子の道。地首陽の巖に世を凌ぎ渭濱に釣を樂まば鎌倉ばかりに日は照るまい。御殿へ向うて慮外すな。ヤレ待て〳〵と引留むる。秩父は伯夷が仁を說き。和田は四皓が義を守る。重保朝比奈兩人は。かうせい豫子が刺客の。猛きを寫す虎の髭。獅子の吠ゆるが如くにて往つ戻りつ飛返り。踊り狂ひし有樣は。須彌勃海を跨りし。龍伯公の勢も。是にはいかで勝らんと。見る人聞く人今の世に。語りて。共に興じける

第三

地唐土に優りし物は何々ぞ。京羽二重と大名の。お道具持の造り髭。揃うて〳〵徒士の衆。手を振る腰振る鳥毛振る。鶴が岡への御參詣。先驅後乘きらめきて。光りを三の大鳥居。だんかづらの松かげに。御乘物を舁据れば。乳人お婢女立かゝり。高麗の飴仙家の蜜。龍眼肉ともてかしづく。御果報日本一幡君。實生を出すはゝき木や。若狹の局當年はお厄年とぞ白重。薄紅梅の袖匂ふ。柳が枝に初櫻。フシ咲かせて見たる景色なり。地後乘滑川四五右衞門。二重の腰も奉公の。七重に折りて若君の御前に蹲づき。詞殿御怠屈成されたか。もう追付けで御座るぞや。八幡樣へも厄神へも。手々を合せてのゝ樣とおつしやると早今の間に。お背がによんによと伸まする。取わけて今日は。放下もあり能もあり。蜘蛛舞綾織八挺鉦。鳥追萬歳大黑舞見せましたならてつきりと。館へ往のとはおつしやるまい。地久しい事ぢやかゝ樣のお腰がな痛みましよ。爺父めが膝へ乘せませう。お出なされと愛すれば。詞イヤ〳〵此處が面白い。いつもの樣な切合しよ。地爺父も人形を持つて出い。早やう〳〵と大將の。フシわやくは心廣かりし。詞サア切合も仕ませうが。あれ〳〵あそこを見さつしやれ。西から南へ押渡つて。漫々たる大海も。をつくるめて若殿のお泉

水も同じ事。鯛も有り海老も有り。鰹節の生たのが。びち〳〵とはねまする。連立て往て見せましよと紛らかせども イヤ〳〵〳〵。詞おれは切合〳〵と。地お膝元なる辨慶人形。鉞持つてはげ頭。こつりと鳴れば。アイタシコ。詞八幡堪忍ならないと。地心得て持つ懐中人形巴女が大長刀。詞エイヤツトウトウエイヤツトウ。地如何はしけん若君の人形砕け落ちければ。詞かゝ樣大事の辨慶を爺父めが此樣に仕をつたと。地むづかり給へば母君や女房達は入代り。賺せどきかぬ〳〵とて。泣入り〳〵仕給ふに。うろ〳〵涙に四五右衞門。詞若君堪へて下さりませ。今年ちやうど四十年。御奉公仕れどか樣に不覺仕らぬ。地正八幡も照覽あれ。巧んでは致さぬと。幼人人に誓言も。フシ實體過ぎてをかしけれ。

鳥追大黒舞

鳥追ブシやんら目出たややんら樂しや。千町や萬町の鳥追が參つた。福の神を祝ひこめしらげもよねやろ。ましらげもよねやろ。よねやろがぢやうには福と德と參つて。宿かろと申す。宿借り候はば殿も榮え候。我が身も榮え侍ふ。三下リ大黒舞ブシ大黒舞を見さいな。福大黒見さいな。大黒〳〵。大黒と申すは。大唐の人ならず。天竺の人ならず。住吉の角の方に炭屋を仕て居られた。夫で色が黑いは。本調子鳥追やんら樂しやんら目出たや。三下リオン大黒舞を見さいな福大黒を見さいな 水調子誰人の誰やろ。左大臣に右大臣。關白殿のお手かけぢや 三下リ大黒と申すは〳〵。角前髮の昔より夜這好なお人で。あちらの隅でもちよこ〳〵。こちらの隅でもちよこ〳〵。隅々でちよこるとて。炭消にけつまづいて夫でお色が黑いは。詞コレ大黒舞。とつとと彼方へ退いてたも。鳥追歌の邪魔になる。ホ、〳〵〳〵有樣がわしやめたり。女の口から鳥追とはいか成る君が鳥追ぞ。色の黑いがお好なら大黒舞も相伴せう。ハ、〳〵〳〵有樣がわしや傾城ぢやが。樣子が有つて此通り今日鳥追の水上ぢや。ハアいはれを聞けば面白や。身共とても浪人者。妹の傾城に

何卒巡り逢ん爲。大黒の今ぶきぢや。あんまり遲いた中でもない。なんと一所に行くまいか。成程〳〵さうしましよ。さあ大黒舞やらつしやれ。先づこなたから謠はつしやれ。やんら目出たや。やんら樂しや。詞四五右衞門聲をかけ。コレヤ〳〵鳥追大黒舞。よい所へ參つた故和子の御機嫌直されて。皺腹一ツ助かつた。とてもの事に今一節お慰め申してくれ。コレハ〳〵有難い。お詞を聞きまする。お望みと有るからは。傾城の身の上を。鳥追にして謠ひましよ。鳥追やんら目出たややんら樂しや。千兩や萬兩の身請客が參つた。比企の家に祝ひ米姉御もよねやろ。妹御もよねやろ。よねやろがぢやうには慾と惡と巧んで嫁らそと申す。よめらし候はば比企も榮え候。我が身も榮え候。嫁らす處とは誰人の誰やろ。和田殿に秩父殿。大將軍のお手かけぢや。御代の盛りとは若殿のナホスフシ御祝。地歌や心に懸りけん若狭の局顏さし出し。よく〳〵見れば都にて同じ流れを勤めたる。妹女郎の八千代なり。何故斯る身の上と。問ひ度も有り淺ましも亦。語りたさに來れ共。人目を忍ぶ粹同志の。フシ顏と顏とに知せあふ。地夫さへ有に大黒舞。面引取れば是はそも。兄の花垣伊織の介。あら懷かしや戀しやと。飛付く程に思へ共。若君の爲比企殿の身の仇とこそ成るべきと。スエテ急來る胸を押鎭め。詞ヤイそこな大黒舞。おぬしは龜相者さうな。當り障りに成ることを必ず云ふな謠ふなと。地詞はさげて心には。戴きまする兄樣と。フシ知らせま欲しき風情なり。地四五右衞門氣もつかず。詞大黒舞も。何なりと面白う申しませ。地伊織はじつと會釋して。然らば拙者も身の上を。お慰みに申しましよ。三下リ大黒舞大黒〳〵ならず者の大黒。大黒と申すは。天竺の人でなし。上京の素浪人。ちやんが一せんあらがねの。槌で打つても金は出ず。乘るべき俵持たざれば。米に妹を代なして。それで親子暮した。さつても哀れな大黒。されば果報は知れぬ物。米に賣つた妹が。此國の殿樣の奥樣になつたげな。詞さらば無心を云はうと。旅立の大黒さつてもむさい大黒。大黒舞を見さいなむさ大黒見さいな。大黒の能には一に妹が見ぬ顏で。二に惡い根性で。三にさあらぬ面をして。四ツよい物着張つて。五ついかつい氣色で。六ツむさい下心で。七ツ何がおしうて。八ツ厄介嫌

ひおる。九ツ此方を得向いで。十ヲで吐胸つきをつた。扨も慘い大黒。ナホス地様子知らねば四五右衞門肩身ゆすりて打頷き。さぞ〳〵腹が立申そ。扨々々々妹めは。言語道斷悪くい女郎。當分榮花に誇る共何の將來善んべい。そんな不義やつ此方から。勘當をぶち切つて。若いが花ぢや立身の思案しがくを仕召されい。近頃侮づりがましいが御合力申すとて。地腰をさぐつて百の錢。フシ轉りと傍へ投やれば。ハツトばかりに押戴き。冥加に餘りし御合力。とてもの事に此錢を。妹が面へ投げたいと。恨みを含む目の内に。餘る。涙ぞ道理なる。地若狭も今は人目にも。餘り難儀の色見えて。四五右衞門に差向ひ。詞其方はようぞ氣が付いた。貰ふ者より妹が。蔭で聞たら嬉しかろ。イヱいかな事〳〵。悦ぶ事は扨置いて戯けた爺父と笑ひましよ。ハテなうさうは云はぬもの。他人の目にさへ淺ましく。見る影もなき姿形。地妹は身に命にも。代へて苦しう思ふらん。されども若しは國の爲。家の爲又子孫の爲。三ツを一ツにからめたる。切ない義理の有る故に。一人の兄に憂いとも。犬畜生と云はれても。名乘らぬ妹が心かと。他人の我が身に引當て。思ひやるさへ魂も。消ゆるばかりに悲しやと。餘所目は餘所の涙川。フシ沈むはやがて我が身なり。地取亂しては叶はじと。形を作り居直りて。詞よし無き事に暇取つて。神や晩しと待給はん。鳥追ばかりは若君のお伽に屋形へ召連ん。大黒舞は立歸れと。輿の戸はたと鎖給へば。地ソレお乘物やりませい。ハツト答て行列の。フシ足もしと〳〵過行けば。地伊織の介大音上げ。詞若狭の局よつく聞け。嫌はゞ兄には成るまいが。たつた一言人知れず。問はで叶はぬこと有つて。形を變し様を變へ。漸々巡り遇ひたるぞ。地一夜は館へ連れて行け若狭の局妹と。フシ人目も云はず呼吼れば。地笠原太郎駈戻り何とも成らぬ横道者。詞若狭の局の御事は。比企の判官能員とて。お大名の親里あり。何者に頼まれて斯る慮外を吐出す。白狀する迄家來共それ打敲けと罵しれば。ヤア麁忽ばし成さるゝな。容こそ微祿致したれ心は花垣伊織の介。棒の先でも當てたらば。八幡堪忍致さぬと。反打ちかけて氣色する。笠原元より武骨者捜浪人の腕ずんばい。たゝき落せと下知せられ。追取卷いて打ちけるは。笑止と云ふも餘り

あり。地若狭の局身を悶き。詞ヤレ麁忽すな早まるや。地廣い世界に同じ名の。有るまい物でなき物を堪へて往せ浪人も。むしを死なせて逃げていね。ヤレ逃げ逃がせと聲を上げ。あせり給へど心なき。雜人原は聞入ず。起れば敲き立てば打ち。落花狼藉花垣と。フシどつと笑うて入りにけり。地無慚やな伊織の介。聲をばかりに泣叫び。エ、胴慾者妹め。此體を見てようもようも。打捨てゝは歸るよな。命の内に此恨み。おのれ晴さで置うかと。すご〳〵立つて行く袖や。紙子もちぎれ頭巾さへ。行方も知らぬ大黒舞。打出の小槌うつゝなき。身の行く。末こそ三重おぼつかな。フシ玉しげる。地家に住む身は物思ひ。知らで貌さへ形さへ。氣さへ若狭の局とは。名にこそ立れ人知らぬ。下の歎きに消えかへる。雪見の亭に立出でて。淺茅を近く招き寄せ。詞扨々久しや懐しや。ほのかに聞しは和女にも。判官殿の情にて。朝比奈を殿御に持ち侍かるゝと沙汰せしが。地思ひの外のなり形ち。氣遣しやとの給へば。地淺茅は暫し涙ぐみ。問るゝさへも恥かしき。あだに果敢なき身の上を。哀れと思しフシ給へかし。地勤めを致す折からに。重保様と云ひ交す。深き中をばひき裂れ思ひも寄らぬ和田殿へ。嫁入て往たる其晩は。恐ろしいやら悲しいやら。現心もなかりしに。詞武道を磨く朝比奈殿。事の道理を聞分て。重保様とお出合に變らぬ中の緣結び。御取持に預りしを。父御に劣らぬ堅意氣で。悪逆無道の判官が娘とあれば添れぬと。地顧みもなき御返事故。然らば親子の緣切つて。其上添うて給れと詞をつめて別れしが。詞工の多き判官に。逢うて云ふのも氣味悪く。傳を求めて頼まうもお前ならではなき故に。今日物詣を幸ひに。道に待受け候と。フシ悄々として語りける。扨なう左様な事ぞとは。夢聊かも知らざりし。いとしや苦勞しやつたの。地遠慮がましい今迄になぜ談合はし給はぬ。氣強う思や親と子の。緣が切りたか切らしてやろ。それまでもない自らが。思案一つで添してやろ。詞昔は勤めの兄弟分今改めて眞實の。姉を持たと思うてゐや。地嫁入も御所からさせませう。化粧田に卅町。一幡君の伯母上を。重保妻に遣はすと。使を以て云はせたら。秩父殿で御座らうが。否ぢやと云うて御らうぢやれ。アヽ慮外ながらと時にあふ。フシ人の詞ぞ頼もしき。

淺茅はハツト手を合せ。詞そんならお前は姉様か。地此若君は甥御かと。髪を搔撫抱き上げ。今は心も落着いて。お庭のかゝりお物數寄。谷七郷を手の下に見越の塀の馬場先を。引連れ來る大名は何十人と知らねども。色の黑いは朝比奈殿御器量よしは重保様。詞不思議や今朝の大黑舞本田が肩に打かゝり。地此處へ來ますと云ひければ。ハツトばかりに驚きて若狹も立つて見おろせば。地無慚や花垣伊織の介。顏も手足も疵つきて。身に添ふ物も切れ〳〵にて。諸大名に引添うて。オクリ評定所にこそ入りにける。地コハそも何の詮議ぞと。治め兼ねたる胸騷ぎ。ナウ姥もおじや誰も來い今朝の様子は知る通り。大黑舞も浪人とや打ち叩かれたる口惜さに。人を殺めし物ならん。詞賤しき形と云ひながら一幡君へ一度でも。お目見え致せし者なれば。相手はどなたで有うとも。地品によつたら自らが。肩を持つまい物でもない。次の間へ往て聞ておじや。ヤレ行け〳〵とせり立てゝ詞は強く心には。如何なる罪を仕出して。憂目に逢せ給ふぞと。立つて見居て見うろ〳〵と。フシ案じ入つたる氣色なり。地腰元二人立歸り。詞大黑舞は何者やら秩父殿を一番に。諸大名衆が贔屓して相手は比企の判官様。仔細は未だ知れませぬ。ヤレ取わけて氣遣ひなまた行け〳〵と追ひ遣りて胸に手を置き思案して。最早大事に成つて來たたしかな事を見ぬうちは。秩父が取持つものでなし。腹立ち紛れに兄様の。如何なる事かの給ひて。我が憂名をや流さんと。フシ忍び涙ぞ道理なる。地乳人の松代遽たゞしく。走り歸りて云ふ様は。詞いや早興の醒めたこと。朝比奈殿へお嫁入の判官様の娘御は。京六條の遊女ぢやと。和田殿からはの給ふを。判官様は眞實の娘と有るの爭ひを。秩父殿が中へ出で一ツ二ツの給ふと。判官様が轉りと負け。親でない子でないとの誓言の上にて。朝比奈殿のお内儀が秩父殿へ貰はれて。此一埒はさらりと濟み。跡がお前の詮議ぢやげな。地聞いて參ろと走り行く。淺茅は心いそ〳〵と。姉様も早御苦勞に。成さるゝ事は入りませぬ。重保様の女房と私には札が附いたれど。地お前の事が氣遣ひと案じ。顏こそ。優しけれ。地若狹はハツト泣出し。ナウ羨しの淺茅やな。扨淺ましの身の上や。實に世の中は飛鳥川。變る淵瀬と聞きしかど。二人が中を今の

間に。早く歎きと悦びの。フシ替る物とは知らざりし。地何を隱さん最前の。大黑舞こそ自らが。詞誠の兄にて候ぞや。傾城の身の習ひとて賤しき兄を持つたるが。さして恥にはあらねども判官が娘こそ。君の寵愛淺からず一幡君を儲しとは。日本六十六國には知らぬ者とてよもあらじ。地諸國の大名小名に。若狹の局と侍かれ。榮花を見るは君の恩。元の根ざしは判官の。惡にもあれ善にもあれ。須彌より高き恩ぞかし。地さりとて誠の親兄を。仇に思ふに無けれども。詞一幡君の一門に。大黑舞と云はれんは。瑕ある玉の如くにて。親子の光りは消失せん。親子の光り失せたらば。判官一家は滅ぼされん。逆心募る天罰にて。外の口より知るゝとも。恩をば仇で報ずべき。道理は更に無きものを。地今こそつれなく過ぐるとも。若君御代を嗣ぎ給はゞ。心の儘に親兄へ御孝行申さんと〻思ふ心の一筋を神ならぬ身は御存じなく。見捨てゝ歸る恨みと云ひ。打ち敲かれたる無念さに。訴人に出でさせ給ふこと。恨みと更に思はれず。詞正直正路な四五右衞門。我が身の上と知らずして。扨々惡い妹めぢや將來が能うあるまいと。地云ひしは胸に應へしが。早く報いの來りしと。思ひ出すさへ淺ましと聲を。上げてぞ泣き給ふ。地淺茅も左右う涙のみ。應答もやらで居る内に。二人の腰元立戻り。胸押撫でて息をつぎ。詞御身の上を唯今が大黑舞と判官殿。角目かなめの受答秩父殿の仰せには。お前が遊女に極らば賤しき腹に若君は。よもや胎らせ給ふまい。取替子でも致したか。負けものかの二ツの内。一幡君も門前より大黑舞の面を着せ。地追ひ拂はんとの御評定。若も左様に成つたらば。こちとは何と成るべきと。縋り付いてぞ泣出す。地若狹の局聲を上げ。聞しにも似ぬ重忠が今の詞の愚かやな。天下の鑑と云はるれど。流石は東夷にて。武道は知れど文は無く。花は有れども實を結ぶ。辨へさへもなかるらん。后高位の御身にて。徒ら有し噂もあり。海士の腹から大臣の。生れ給ひし例もあり。詞傾城遊女の胎内に。大將の子が胎らぬとは。何んの書物で見出し泥の中より生ひ出づる。地蓮より猶美くしき花の顏面白露の。玉よりげなる若君を追失はんと云ふ事は。忠義か扨は逆心か。源氏を守りの御神は。など餘所に見てお在ます。賴家卿の御運さへ。末になつた

か悲やと。咽返り〳〵。 スエテわつと叫ばせ給ひける。 地涙の中に若君を膝元近く引寄て。果報拙くまし〳〵て。賤しき母が腹よりも。生れ給ふか淺ましや稚く渡り給ふとも。只今母が云ふ事を篤くりと能う聞給へ。 詞大將の子と云ふものは死ぬべき時に死なざれば。人の笑ひを受くるぞや。母が詞を懸けたらば此守り刀にて。咽の邊りを突貫ぬき。賴家卿の胤と有る。證を見せて母が身の。恥辱を雪ぎ給はれと。 地云含めれば一幡君わろびれ給ふ氣色なく。腹十文字に切らうかと。莞爾と笑める稚顔。見るに目もくれ心消え。抱き付いてぞ歎かるゝ。 地淺茅曳しと押止め。アア道理やさりながら。 詞二度の便りに跡先の詞の違ふ所あり。傾城の名も假親も。變らぬ姉と妹を。我は秩父の嫁にしてお前を若君諸共に。追ひ失はん樣はなし。 地浮くも沈むも同じ世に今より誠の兄弟ぞ。甥御と契り初めたる詞はいかで違ふべき。篤と樣子を聞屆け。死なでかなはぬ道ならば。跡にはなどか殘るべき三ツ瀨の川を諸共に。手を引いてこそ渡らめと。 フシ諫め合ふこそ優しけれ。 地若狹の局顔を上げ。なう嬉しの人の詞や。七度結びて姉と成り。六度契りて妹と成る。それは誠の兄弟よ是は今日しも假初に。云ひ交したる契りとて一所と迄にの給ふは。先の世よりの約束と思ひ遣るさへ睦まじき。眞實覺悟極めてか。 詞アヽ愚かなる仰せやな。武士の性根は時に依り味方が敵に裏返る。例はあれど傾城の云ひ交したる心底は。 地違へぬと云ふ手本は末世の人に見せうもの。急せ給ふな姉樣怯れを見せな妹と。互に顔を見合せて。莞爾と笑うつ泣きもしつ。 フシ死を待つ內ぞせつなけれ。 地斯る所へばたばたと。乳人腰元駈戻り。 詞なうお悅び成されませ。判官殿利潤に成り。大黑舞は大騙。由井が濱にて御刑罰。 地仰せ付られ候と。きほひ懸れば兄弟は。命を延る悅びの。中に歎を引出す。伊織の介が縛めを。本田の次郎繩取にて。屠所の羊の引綱や。隙行く駒の足元も。よろり〳〵と行く道を。若狹はわつと泣倒れ。又起上りあれ〳〵。あれなう兄樣〳〵と。聲からしたる呼子鳥。うき川竹につらなれる。枝を放れし鶯や。子は子なりけり時鳥。悅びの浦歎きの浦。恨を誰に由井が濱。波なき方に立波の。袖の浦とは兄弟が身の上。にこそ知られけれ

フシ嬉しとは。昔ぞ詠みし星月夜。明くる詫しき鎌倉の御所の御門の七重八重。越えつ忍びつ隱ろひつ。若狹の局妹は淺茅と云へど淺からぬ。思ひは一ツ二人連。 フシオクリ現つへ心もフシ亂ればし。一幡君が今も猶。母に添寢の夢や見ん。 スエテ寢顔脇顔笑ひ顔。目にちらつきて身をさらぬ。袖と袂のうら〳〵に ギンオクリ涕碎けて音無しの瀧の。白絲八糸による。 フシ物ならなくに別路の。心細くも夜の道。 地迷ひ來る身がやつ過ぎて春まだ寒し雪の下。ハヅミ積る思ひにフシ愛別離苦の。理りしるき曙や。 地東光山の鐘の聲。別れを歎く人有れば眠りを。覺す法の友。親同胞は遠近に。菫菫も名のみして ヒロヒ霜の。芝道踏みしだく。紅匂ふ空燻に。誰待つ宵の侍從川。 オクリ寄せては返る白波のふじが。谷とはあれやらん。一刷毛。さつと橫雲は。誰筆。 フシ染めて隈取りて。四季の詠めもとことはに。代々を重ねし鶴が岡。三下り歌こゝはやれ。何處ぞと道人に問へば。此處はさ。坂川辻町ぢやとさ。 ナホスフシ心ばかりは由井が濱。 フシつらなる枝を。打波の胸に徹へて身に懸る。責て空しき假にだに。行合川の丸木橋踏みは。返さじ一筋に千代の。例しの細石無き名の數や數ふらん。無常を告ぐる野鳥の。 スエテ聲も。鋭どき松蔭に暫らく。休らひ給ひけるフシ梟は寢に行。鳩は起きて出づるとかや。明けなんとして玉鉾の道まだ闇らき岸かげに。高札立てて高提燈さし寄りて見給へば。 詞何々若狹の局が兄。花垣伊織と云ふ者上を僞り掠めし故。刑罰に行ふと。 地讀も終らずこゝそこと。見渡す向ふに獄門の顔は知らねどそれとのみ。するゝ〳〵と走り寄り。なう淺ましの御姿や。人をも殺め盜みをし。重き科有るものこそは斯る憂目に逢ふと聞け。ありの儘なる有る事を。云ひも開かでやみ〳〵と。非道の掟に逢ひ給ふ。是と云ふのも自らが。名乘て出でぬ誤りを。百千萬の云譯も。今では甲斐も渚漕ぐ。蜑の小舟のこがれ來てせめて最期の御顔を。拜まんとこそ思ひしに。早くも變る兄上の。御面影とばかりにて。二人は其所に倒れ伏し。泣くよ

り。外の事ぞなき。地本田の次郎近常夫とは知れど知らぬ顔。詞ヤイ〳〵女寄るまいぞ。言語に餘る大罪人首なと盜み取れんかと。本田が番を相勤む早や〳〵返れと云ひければ。地二人は頓て起直り。詞ハア秩父が家來の本田よな。我こそ若狭の局なり。是なるは又淺茅とて汝が主人重保が。樣子は知つてゐる女。就ては彼なる高札に心得難き事こそあれ。詮議が闇い狼狽た秩父に是へ參れと云へ。尋ねんとの給へば。近常ハツト畏り。驚き入たる仕合かな。扨又詮議の筋に付き何か御不審候よし。重忠召すにも及ばぬ事憚りながら拙者めが。申開き候はん御尋ねあれと領承す。ム、何といふ其方が主人に代つて返答とや。只今尋ぬる色品を。若し云譯に詰りたら。地まああの如く汝が首獄門の木に曝すぞよ。心を鎭め能つく聞け。詞あの高札に若狭の局が兄伊織の介と書付しは。確かな證據あるならん。然る上には彼の者を上を僞り掠めしとて。なぜ刑罰には行うたぞ。地但し僞り者ならば。若狭の兄とはなぜ書いたぞ。二ツに一ツは重忠が。誤りにては有るまいか。フシ返答聞かんとの給へば。近常莞爾と打笑ひ。云うても女儀の事なればそこ等は御存じ知られぬ事。國の政道致すには非理法權の四ツの文字第一に仕る。理非の捌きは常の事。理は持ちながら一國の。法を背けば落度となる。理も有り法も背かねど。權威には又壓るゝなり。權威と云うては誰あらん比企の判官能員殿。理非善惡も顧みず。地法も無法も辨まへねど。君に出頭無二と云ひ若狭の局の親御ぢやの。一幡君の祖父樣のと。もちのぼしたる權威をば。碎く時節の來らぬ故。糟をくらつて泥水の。澄るをじつと待つてゐる。重忠は溫和の武士。花垣伊織お局の兄と見するゑて有りながら。詞首を打しは政道に。權の一字を用ゆるなり。又高札の書付は。近常自分の了簡にて。學問したる事もなく智慧に餘計も候はず。善なれば善惡は惡。見えた所をまつ直に云はねば聞かぬ生れ付。地御名を出したが落度なら獄門の儀は扨置いて。火刑にも遊ばせと道理をならべ云ひ立つれば。地二人は兎かうの詞なく スエテ差俯。むいておはします。詞近常居丈高になり。拙者めも亦御局へ御不審の申すべし。兄を敬ふ禮儀をば御存じあらば昨日にも。名乘つて御出で成さるゝ筈。イヤ〳〵身こそ大事ぢやと御引きな

さるゝ心底なら。只今是へは無用な事。生ける時には無禮をし。物をも云はぬ死首に。地くど〳〵とした云譯は心得難しと冷笑へば。地淺茅はやがて差出でて。詞ヲ、能い御不審さりながら。遊女は義理の商賣にて身を庇ふなど云ふ事は。かけても知らぬ事なれど。大將軍の奥樣の昔のしがを云はるゝは。夫の恥辱子の恥辱。地判官殿の恥辱にて名乘り合ぬは伊織殿。只一人の恥辱ぞと最かる〳〵しき了簡が。地思ひの外に兄上の。身を滅ぼせし悔しさの云譯もしつ御首を。烟になして亡き跡を。弔ひ給はん其爲に御所を諸共出たれば。詞再び歸る心でなし高札を打割つて。首をこなたへ渡されよ。地但しは了簡成るまいかと守り刀を取出し。妹が拔けば姉も拔き。どうぢや〳〵と詰寄るは。フシ何れせつなき心なり。地近常ハツト感涙し何しに惜み申すべき。首は勿論軀共。只今進上致さんと。覆を明くれば伊織の介は走り出で。ヤレ妹よ兄樣か。是は〳〵とばかりにて フシ呆れる。も亦涙なり。伊織涙を押拭ひ。昨日の恨み引かへて。今日の心底滿足せり。詞某當地へ來る事御身に逢うて身の榮花。極めん爲にて更になし。去年三月五日の夜羽黑山の修驗者。豪海と云ふ法師に一夜の宿を貸しけるが。親玄藉が寢首を搔き夜の内に逃失せしを。地此處やかしこと草を分け緣を求めて尋ぬれども。知れぬこそ道理なれ賴家卿の歸依僧にて。營中を離れぬよし狙ひ寄るに手術なく。そなたを語らひ討ん爲遙々此處に下りしと。始終を語れば若狭の前こはそも夢か淺ましや。假令暫しは別るゝとも待つとし聞かばいつぞは又。鎌倉へ呼び取つて。朝夕御顏を拜まんと。仇の頼みもなき身ぞと。咽入り〳〵フシ歎かるゝ。地漸う涙を押止め。能くこそ思ひ立給ふ親の敵と云ふからに。討たで叶はぬ道なれば心を盡し氣を碎き。狙ひ了せて討給へ。兄樣賴むと云樣に。守り刀をずいと拔き心元を刺通せば。こはそも如何にと人々は。フシ驚き騷ぐばかりなり。地伊織は膝に擡抱き。詞心得難き有樣や。兄弟名乘り逢ひたるが一分立たぬと云ふ事か。地樣子を語れと云ひければ。地若狭は苦しき聲を上げ。ア、愚かな事をの給ふかな。廻り逢うたる嬉しさは。冥途の道の土產ぞや。宿世いか成る報にやうさも辛さも悲しさも。身に積む罪のあぢきなや。聞けば聞く程自からは。世に存へん

様はなし。判官殿の常々に。詞若狭の誠の親兄弟生きて此世にある内は。いつか名乗出づべきと心の休まることなしと。戯れ事にの給ひしが。其豪海と云ふ法師。分けて懇志の中なれば。それを頼みて父様を殺し給ふに紛れなし。討たれし親も自ら故。討たする親も自ら故。今又狙ふは誠の兄。地手引をせぬは不孝なり。心を合せは是迄の。榮花の恩に預りし後の親をば親とする。義理に背くが悲しさに。斯くこそ思ひ　フシ定めしぞや。體は朽ちて行くとても。我が魂ば妹の淺茅が胸に殘し置く。詞兄弟心を合されて。敵を討つて父上や又自らが修羅道の。苦患を早う救うてたべ。本田殿へは取分けて。地申置き度き事こそあれ。一幡君の行末を。宜に見立て給はれと。重忠殿へ頼うでたべ。是のみ黄泉の障りぞと。口説言こそ哀れなり。近常涙押拭ひ。詞お心安く思召せ伊織殿の御事も。敵を首尾よう討たせん爲成敗せしと僞りて。大罪人の首を討ち獄門の木に曝しも。是皆主人の計略なり一幡君を御代に立て。地重忠後見致す事。何しに違背申さんと。世に頼もしく答へれば若狭の局手を合せ。アヽ有難や忝や。此上思ひ置く事なし。兄様さらばと云ふ聲の。よわると聞けば玉の緒も。フシ切れて果敢なく成りにけり。淺茅も共に泣狂ふを近常伊織押止どめ。詞姉の魂止りて親の敵を討つ迄はこなたの骸は預り物麁相成れな怪我有るなと。地諫め賺してたつか弓彌猛心はさる事にて。云うても敵は大身者。主人なんどが知惠も借り力も借つて討給へ。若狭の局の御最期は。沙汰なし〳〵御死骸を。密かに寺へ送らんと。先づ長持に舁入れて。本田は先肩跡は兄。逢はぬ昔しの戀しさと。逢うての今の悲しさと。擔ひくらぶる棒先の。永き別れぞ　三重是非なけれ

まよひの姿繪

謠フシ牛羊徑街に歸り鳥雀枝の深きに集る。實に世の中は仇波の。寄邊はいづく雲水の。身の果いかに知らざりし。地御樽はしや鎖家鄰。環懷玉樹の閨の内。二世の三世の七世のと。五に契り交されし若狭の局何となく。館を紛れ出

給ひ。今に御行方知れざれば。現心も涙の床身を知る雨の明暮に。翼しほるゝ雛鶴の。地一幡君も朝夕に。母よ〳〵の諸聲に。いとゞ歎きを增鏡。俤うつす姿繪も。それも心に任せねば。責めては夢を頼むてふ假の枕の假御殿。一念既に亂るれば。迷ひの門を開くとは。知らぬ御身ぞ味氣なき。謠石に勢あり水に音あり。風は大虛にわたる。形を今ぞ現す女。懸軸を離れて心魂忽ち。顯はれ出たり不思議やな。二人フシ水莖の。筆の禿と身を染めて。眠り習ひの夕邊より。幾朝ごみの春秋を。梅は柳に靡びき合ひ。松は櫻の合ひ床も。昔語りに　フシ成たるぞや。　フシ奥樣なりの。釣夜着に。鴛鴦の衾の羽根かはし。情かはすも色の淵瀨と。水のかしはの浮沈む身は浮草の根を絶えて。娑婆に殘れる輪廻の業火は雲霧の。軒端に立つて雨に霰に。△霜に霙に積り積つて消え返りては。又降る雪の姿の富士よ。烟比べば淺ましや。なう懷かしや一幡君。親子の中は一世とは。江戸誰か云ひけん空言や。泣く音は遠き苔の下露の。そこなる。魂に。答へて餘り悲しさに。姿をかりの懸物に。映て是まで來れりと。障子の内の床しげに。フシすつくと立つておはします。ナホス地頼家見るより走り出で。恨めしの若狭やな。妹背の山の中を行く。吉野の川のよしや世に。何がつらうて悲しうて。スエテ屋敷は遁れ出けるぞ。○アヽ愚かなり〳〵。誰に恨みを由井が濱。親同胞になのりその。フシ名乘れとてしも假初に。忍び出でたる。閨の戸の。跡だに未だ鎖さざりしを。誰が通ひ路と今はは。ねし小夜衣。妬ましの男やな。△地いやらしの妬みやと逃んとすれば。○引戻し。△拜めど。○顔を打振つて悟氣は女の手癖口癖往古今も。貞女宮女も。定家墓や蔦墓。はひ纏はれても。△此身元より植木にあらねば。臺に輝く鏡もなし。二人煩惱菩提は。法の道連　フシあら面白の世の中や。○相ノ山夕べ朝の。鐘の聲寂滅爲樂と響けども聞いて驚く人もなし。花は根に鳥は古巣に歸れども行きて。歸らぬナホスフシ死出の道。○詞申殿樣。△なんぞ。○酒をぼふつゝり止めさんせ。△なぜに。○色遊をも置かしやんせ。△そりや成らぬ。○地すりやどう云うても止ぬ氣か。△おゝいかなこと〳〵。○そんなら妾は最う往ぬる。△どこへ。○あの世へ。△詞あの世とは。○はあて冥途へ往にまする。△地頼

家はつと氣を注て。何と冥途へ歸るとは扨は此世を去りしよな。○地藻に住む虫の我からと。双の上に消えし身の此世に心は止めねど。迷ひ來るは君故ぞや直きを捨て曲るに。親み給ふ誤りも。色と酒との二つとぞ。諫め申さん爲ばかり。フシ再び見え候なり。江戸地唐土玄宗皇帝は。御心賢くて。治まる御代は五十年。國土も民も太平の。天子と呼れ給ひしが。海棠眠る楊貴妃の。ナホス木フシ桃の媚ある顔ばせを。御目尻に懸りしより。逆臣起つて御車も。キンオクリ帝都の外に出て給へば。比翼連理と契りたる。フシ羅綾の袖もあだし野の。露かあらぬか魂の在所を。尋ね詫びさせ。フシ給ふとかや。憂きことをくらぶの山の鶯の。子に迷ふのも恩愛の。長地薄き契りの袂には涙を包む春雨に莟める花の若君を。最一度見たし抱きたしと。フシ障子の評に立寄れば。地コハ何んとせん情けなや此世あの世と立隔つ。二人コハリ罪障の雲高くして涙の。霧や戀慕の霞瞑々朦々曨々として。ナホス○地見れども見えず聲も聞えず。南無三寶。親子は一世の契り知られて。泣いて笑うて悶え焦れて。かつはとフシ伏してぞ泣き居たる。△地頼家頻に大音上げ。地李夫人去て漢王の空しき床の寫し繪に。魂迎せし烟のうち云はず笑はぬ俤を。歎きしも身の上なるを。現世の逢瀬叶はずば。双に死して此世を去り。極樂諸天は愚かの事。假令地獄の底迄も。誘へ連立て伴へと手に手を取て フシ○行くも歸へるも逢坂の關も此身は止め得ぬ。泣くも笑ふも夢よ現よ 幻よ。最早別れのあら堪難や。地双の罪に修羅の太鼓のさらばと云へば。△暫しと止むる。○袖振り放せば。△目にこそ見えね 二人コハリ踏足元は猛火の煙りこは淺ましやと。逃げつ。轉べどまた行く先も火焔の煙に姿も焦れ。○ナホス身慄してこそ フシ立たりけり。地惡かれと思はぬ山の峯にだに。あふなるものを人の歎きは君を侮り。民を惱す判官父子が惡心惡逆。緣にひかるゝ我が身に報うて。二人廻り車のくるりくる〳〵。くる夜も〳〵明けても〳〵千年萬年。コハリ百千億劫獄卒惡鬼の笞に打れ。山に上れば劔に劈き。谷へ下れば。地紅蓮のこほりに。白無垢却つて唐紅の花も。紅葉も月も。フシ雪も。人間萬事は胡蝶の戯れ。酒は仇をば結ぶの双。色は命を ナホス○地切るの鋏。地皆とり捨て今日より政道正し給へと。

聲華やかに夕告鳥の フシ形は其儘消えてんげり。△地頼家泣く〳〵慕ひ惑うて。座敷の隈々此處よ。其處よと尋ね廻れば。○又立歸る闇浮の有樣向ふに翻然と形を顯はす。△地抱き留んと走り懸れば。其儘消えて雷光石火の水の螢の地ぢら〳〵。ちらり〳〵と立廻る。面影月影諸共に。あくる詫しと云ふかと思へば。形は其儘元の掛軸に。立戻り。フシ畫空事とぞ成んにけり。△地頼家はつと手を打つて。迷悟三界唯一心。昨日の酒の醉醒て。今日は衣の玉を得つ。家には子あり弟あり。國の警衛は和田秩父。搖ぎなき世の鎌倉山。我が身は思ひきりが谷。唯今幽靈存生へ。手向の花と髻を。切つて彼處へ投げ給ふ。順緣あり逆緣あり。共に成佛得脱の道の道とは。往古の聖人も。說き置き給ひける

第五

地天道は滿るを缺き地道は驕奢を憎むとかや。扨も判官能員は若狹の局自害故。地積惡世上に露顯の上先つ頃より頼家卿。御不例甚だ重うして事極り見えければ。謀計日夜身に迫り野心の胸に手を置いて。フシ御次に控へ居る處へ。地願行院豪海は御祈禱の爲宿直して。御枕元に居たりしが。徐り〳〵と忍び出て。判官を見るよりも。詞ヤア比企殿か。法印か。先づ〳〵君の御容態如何渡らせ給ふぞや。然れば次第に日を追つて元氣弱らせ給ふと見え。正體も無き御風情。コレ大切の場に成りしぞや。今にも尼君北條など御居間に詰めかけ。御家督の沙汰あらば。地貴公の仇とならん事。鏡にかけて見えた事。此頃心を盡されし。用意如何と囁けば。詞判官莞爾と打笑ひ。御坊氣遣なさるゝな。そこらはぬからぬ呑込だ。言るゝ通り毛虫めら。病ほうけの頼家に。差込れては年來の大望が成就せぬ。所詮本復ない命一思ひに刺殺し。御家督は一幡へ御相續の遺言と。鎌倉中へ披露せば。地差詰め拙者は執權役。悴どもは自からら。外戚の威を振ふべし。貴僧へも又千石か。二千石は知れた事。詞其上にも和田秩父。北條などが意地ばらば。片端から欺し討ち。コレ床の下を掘拔いて。忍びの者を入れ置いた。地悦び給へと云ひければ。豪海ぞく〳〵小躍し。ハテ

御殊勝な御了簡。萬事は頼み上げますと。フシ頷き合うて居たりける。地頼家卿それぞとは夢にも知らず御寢間より徐々と歩み出で。詞兩人に打向ひ。地今日は一入氣も勝れず。宿直の者がつく〳〵と取廻すのも鬱とし。暫く爰で語らうと。フシ打解け給ふぞ危ふけれ。二人は悦び目配しゝ。左手右手より飛かゝり。刀を胸に押當て。詞コレうつそり殿。どふで快氣のない命。生けて置いては某が。大望の妨げ覺悟なされと突掛る。頼家ハツトばかりにて。差俯伏て在せしが。稍有つて宣ふは。詞人窮する時は僞り。鳥窮する時は摑む。窮鼠却つて猫を喰ふとは汝らが事なるよな。地エ、過つた重忠や。義盛數度の諫言を思ひ出づるも恥かしや。覺悟極し上からは命は更に惜からず。爰を放せ腹切ると二人を左右へ突倒し。既に斯よと見えける時。怪しや御座の疊の下。ぐわらり〳〵ぐはた〳〵と。百千萬の地雷大地も崩るゝ如くにて。頼家卿のおはします御座の疊の下よりも。ずつと差上げ朝比奈が踏んばたかつて立つたるは。堅牢地神の湧出かと。フシ恐れ慄くばかりなり。地判官漸う氣を靜め。詞ヤア後れたかかね〳〵に。牒し合せし悴共。笠原中野は何所に有る。地出あへ〳〵と呼はれば。詞朝比奈から〳〵と打笑ひ。甲に似て穴を掘る鼹鼠のへろへろ武士。地御用ならば進上と。ばらり〳〵と人礫。投げ出し〳〵投り出し。大太刀寛げずつと寄り。詞コレヤそこな護摩の灰。身が法力の鐵縛三寸繩の珠數繋ぎ。ナント弟子にならぬかと。地二人が細首引摑み。ゑいや〳〵と絞付れば。眼を見出し血を吐て眞平御赦免〳〵と。フシ手を合するぞ心地よし。地斯る所へ和田秩父本田花垣駈來り出來した〳〵朝比奈と煽ぎ立れば。義秀は。詞コレ伊織殿。此法師めは其許で。御慰みに料理あれ。地判官は某が只今庖丁致すぞと。首宙に打落す。伊織もすかさず豪海を水も堪らず打放す。ヲ、潔よし面白し。惡人退治國繁昌。佛法繁昌武家繁昌。五穀成就願成就。佛力神力の整ふ國こそ目出度けれ

義經新高館

義經新高館

作者　紀海音

序地兄弟はこれ手足たり。夫婦の中は花衣。色染めかへて新にす。連なる枝を離れては。元の根ざしを得難しと。筆にいはせて敎置く。オロシ〻清む大道の。源や。地扨も九郎判官殿謀反の企おはす由。市に街にとりかく〻に言ひふらしたる根無草。鎌倉殿の殿中には。秩父北條和田上總。晝夜御前に相詰めて。萬民快樂の御籌策。フシ評定有るこそ目出度けれ。地斯る所へ奥州より。秀平が後家正貞尼。次信が母佐藤の局。權の頭兼房。地判官殿より使者として。頼朝公へお目見えを。願はし顔に虎の間の。フシ廣庇にぞ相詰むる。地稍有りて奥よりも畠山重忠。文覺上人相伴ひ三使に對ひのたまふ樣。詞遙々の御上り我が君にも何程か御滿悦に思召す。少と御風氣に御座有る故御對顔は追つての儀。義經公の御口上文覺御坊と某に。仰聞けられ候へと大やうに挨拶有る。三使首を疊につけ。主君義經我我を差上し候段。全く別儀に候はず。御連枝の中近年は御疎意がましく見ゆるに就き。事を好める徒者。虚説を構へ色々と。有られぬ風聞致すにつき。萬一御耳に達しては。地御機嫌の程いぶかしく。地虚名を申開かん爲。參着致し候と。フシ謹で相述る。地重忠少しえせ笑ひ。詞仰の如く下々の轉事を取上げて。申すべき樣有らねども。地楊震四知の戒を。憚りたまはぬ義經公。詞此頃の御振舞不審なきとも申されず。愚意に落ちざる一通り尋ね申さん聞き給へ。此度南都東大寺の大佛供養に事を寄せ。似せ山伏に樣を變へ關所を通りたまふ事。狼藉不禮の其一つ。取分け富樫の關所にて辨慶が讀上し。勸進帳の願文に諸人の助力を頼んで。功德を本朝に止んと。是頼朝の二字を分け中に文字を切入れしは。君を亡し義經の威を本朝に顯はすとの。巧の詞にあらざるや。扨又諸方の浪人者。忍び

忍に奥州へ召集められ候事。反逆の儀ならずして。何等の御用候ぞ承らんと有ければ。兼房蹤ふけ色もなく。ハヘ御尤さりながら。憚多く候へども一々申し開くべし。此度奥州下向の節所々に新關据りし由。押て往來致す儀は後日の咎を憚かりて。主從僅か十三人姿を略し候事。頼朝公へ親兄の禮を守つて致せしなり。勸進帳の願文に怪しき詞候由。其儀は辨慶一人が才覺を以つて當分の。難儀を遁し迄の事。地併し世上の取沙汰を氣の毒に存じてか。高館を逐電して在所知れず成候。詞扨又諸國の浪人ども。忍んで參り候事招寄するに有ねども。地先年八島一の谷所々の軍に我が君の。恩顧を預者どもが尋下り候段。是非に及ばず候と。流るゝ水のよどみ無く。フシ斷り立てゝ申すにぞ。文覺坊も重忠もくわん〳〵と打頷き。詞ホヽ申されたりいはれたり。宜敷御披露申すべし。地君の御機嫌知ねども。兼て御坊と某が。相談致せし事ども有り先づ第一は義經公。高館にましましては諸人安堵の思ひ無く。風説日々に増るべし。西國方へ御居城を。御開き有る物か。外樣の諸武士同然に鎌倉表の役儀をば。御勤なさるゝか。京の君をば人質に御出し有るものか。地三色の内を何れにも。御同心有るならば。君も御安堵成れんと。いひ並べたる辯舌の。落ちた所は文覺が。拾ひ上たる談義口如何〳〵と尋れば。三使はとかうの詞なく。フシハツト溜息つき居たり。地兼房心に思ふ樣。斯く大切なる事どもを。文覺坊や重忠が私にいふ事ならず。上意を受けての三ケ條違背申さば忽に。事の破れは知れた事一期の浮沈爰なりと。とつゝ置いつ思案して。詞先づ以て御懇志の内意を仰せ聞けられて。千萬満足仕る。某とても御主人の所存の程は存ぜれ共。秀平讓りおかれたる城をお開き有ることゝ。外樣の諸武士同然に役儀を勤め候儀は。中々得心候まじ。地京の君を人質に出し申す儀は。兼房が。主人へ伺ふ迄も無く。儘に受合候と。詞を放てば正貞尼。詞ハア是々權の頭。疎忽な返答なさるゝな。家にも國にも日本にも代へじと思す姫君を。地人質にとは我が君の。何しに承引遊ばさん。女ながら我々も。使の數に加はれば。なぜ相談致されぬ。受拾難の有樣と。腹を強へて問へれば。地兼房眼目に附け。眼配三使と言ひながら。斯く大切り樣に成りて

は。地女中の智惠に及ばぬこと。人質の儀は昔より。其例あまた有る事と言はせも果ず佐藤の局。詞ナウ舌長な禮の魂。其身に疑ひ有るときは人質は扨置いて。怠狀誓紙もする習ひ。曇らぬ君がお心を申開きに遥々と。地罷りのぼりし甲斐もなく。姫君樣を人質に。出せと有るのお返事は我々は得申すまい。詞サア誤に成る時は某切腹するばかり。地兩所へ御難は掛けまじと。思ひ込んだる有樣に。重忠文覺笑つぼに入り。一段〳〵さもあらば。貴殿は暫らく逗留あれ二人の尼公に御用は無い。早々國へ歸られよと。フシ愛想も無き挨拶に。地ハツト返事もそこ〳〵に。むつと顔して立か弓。彌猛心を押靜め。前後の首尾を兼房は。分別といひ年配も。家中で一の上坐をば捌く。器量と。三重見えにけり。浮世ぞと。思捨ても跡よりは。平泉にし住馴れて。翌日知ぬ身を京の君。宿直の女中諸共に。地庭もせ近く出てたまふ。寢起の帶のしやら解もはでゝはすはで。徒で。フシ命とりなる姿なり。地和泉が女房花卷は。お側へ寄つて笑顔して。嬉しや今朝はいつ〳〵よりお心輕き御顔。昔の玉の床とてもお命有りての上の事。葎生ひたる宿ながら御夫婦一所にましませば。又なき閨のお樂。地男見るめと降雪の。白さは爰も同じ事。お口ずさみ候らはば。ちと御聞せ給れと。オクリ料紙引寄。フシ墨摺れば。地妹の青柳さし出でてまた頑な歌咄。お氣の詰るに置しやんせ。詞花時鳥月雪より。地只面白いはぬれ咄。サア女房達爰へ出て面々が身の徒を。かくさずと白狀しや。殊におらんは此頃に。異つた色が取たげな。マアお姫樣聞しやんせ。詞彼片岡の八郎殿あつたら器量持ちながら。身持の固さ公道さ。その〳〵仕業といふ事が。地身の廻りなら大小なら。道具といふては家内に筵屏風只一枚。さもしい事ぢやが朝夕にごとう味噌ばかり參るとて。異名を付けて御家中て後藤〳〵と呼びまする。其わか殿がどうしてか爰なおらんに打込んで。戀煩ひをなさるゝげな何と嘘では有るまいが。最早逢うたか叶うたか。フシ明せ〳〵となぶられて。地おらんもふつと吹出し。詞夫には可笑い咄が有る。成程貴樣が聞通りわしもあんまりいやでも無し。地首尾をつくつてこちらから寢間へしかけて懐へ。ぐすと這入とする所を。詞むく〳〵と起上り三指ついて卷舌で。御

所持の珍物打おかず。賞翫せよとの御深切。大悦至極つかまつる。併しながら拙者めが。戀慕に存るおらんとは其元様には候はず。近年天下太平にて双に血をば見ざる故。積鬱朦々湛々にて。遁れ軍が始れかし。地おらんが見たい戀しひと。俤に立ちさふらふと。鼻あかされて戻たと。フシどよみつくつて笑ひける。地女中達は口々に。龜井殿の異名をば。長門櫛とは青柳殿こなたが曰を知つてゞあろ。詞それや問はいでも知れた事。地柳の糸の結ぼほれ戀の亂れを解きわける。長門櫛又水櫛の雫がお腹に早七月。抱付心しめ心ぐはひのよさは長門。印籠。腰の廻りにひつ付いて。朝晩みても飽くまいと。さし合くらぬ高咄し。地京の君は打笑ひ。詞花卷一人まじ〳〵と押だまりやるも小憎てな。夫和泉の三郎を眞田紐とは妹と背の。地縁は切れても切れぬとの。かね言成るか羨しや。詞イエ〳〵左様ぢやござんせぬ。地親と親との許婚。嫁入する迄待兼て。或宵闇の中二階寄れ組まん尤もと。引寄せてしつかとし。め。地暗さは暗し箱梯。ころり〳〵ころ〳〵と。組んで落ちたゝ其音に。母様が駈着けて。どうもとうはが出なんだが。詞上が眞田か。下が股野かと。地仰せられしといひさして。襟を噛やら手を打つやら。フシ女子仲間ぞやかましき。地斯る折ふし鎌倉より。二人の女中御歸りと。呼はり次いで。フシ入來れば。地義經公を始めとして。錦戸太郎安平。伊達の次郎元衡。龜井の六郎重清。片岡八郎經春。フシ各座席に連りて。地鎌倉表の御首尾は如何に〳〵と尋ぬれど。地佐藤の局も正貞も。とかうは無に涙ぐみ。さし俯いて居たりけり。詞判官眉を顰められ。はて氣遣しき有様かな。首尾の善惡眞直に包ず語れとの給へば。二人少く顔を上げ。御對面さへ許されず追返されし我々故。よし惡の儀は存ぜねども。兼房一人相殘り。地秩父文覺相談にて。姫君様を人質の願を立てられ候と。フシ又潸然と泣居たり。ヘツトばかりに京の君する〳〵と走寄り。詞何自を人質と權の頭がいひしとや。地老にほれたか鎌倉の威勢に心臆れたか。それともに我が心にて計ひがたき事なるが。若は密に我が君の。仰付にて有りけるか。お爲に惡き我ならば。御手にかけて今爰で。殺して給へ片時も。別て外へは行くまじと。除により涙ひ取付きて。歎きたまへば判

官も。いらへもやらず。しやくり上。フシ〳〵てぞおはします。地伊達錦戸は歎くに。惡しと思ふ權の頭。思い。幸と顔見合せ。詞ハヽしなしたり〳〵。斯く大切なるお使に不忠の者を遣せしは。御運の末と申さうか後悔先に立難し。地惡さもにくし彼奴めをば。途中に待受打殺し。武士の見懲にするより外更に御思案有るまじと。焚付けられて胸の火の。くわつと燃立御顔色。地いしくも兄弟計ひたり。天命知ずの老耄め。首取つて見せよとの。仰嬉しゝ兄弟は。ずつと立つて行く所を片岡向ふに立塞り。詞待つた〳〵。一言訴訟申す内。そこをばにじり召るゝなと。地はつたと睨み立戻り。御前に畏り。詞御尤とは云ひながら御短慮至極の仰付。外様の千人萬人より一人の兼房は。世に大切なる家臣と云ひ。忠義に於て今日迄片時も撓ぬ老武者が。疎忽の願ひを致せしも。仔細こそさふらはん。呼返されて邪正をば。御糺明有れかしと恐入つてぞ言上す。兄弟かツら〳〵と笑ひ。外様の武士の忠義より家臣の不忠が優るとは。はれ異つたる了簡かな。平生ともに方々が家臣〳〵と高振て。人を人とも用ゐぬ故。付くべき味方も氣を變じ。賴朝公に從ふぞ。地嗜れよと嘲れば。龜井こらへぬ若者にて。ずか〳〵と立かゝり。詞推參なる雜言かな。家臣たる身は一命を君に差上置く故に。一言いふも忠義なり。お主如きは私の意恨を胸に挿み。善惡知ぬ兼房を討手に向ふは何事ぞ。地サアコヽ一寸でも外へ出ば。忽ち四つにして呉んと。鯉口半拔きかくる義經詞あらゝかに。詞ヤア尾籠なり汝等。時世につれて判官が詞も用に立たざるか。地正八幡も照覽あれ。兼房が義に於いて。ふつ〳〵訴訟叶はぬと扇を以つて御太刀を。丁々と打ち給へば片岡龜井は是非も無く。スエテハツトばかりに押退去る。地錦戸伊達の兄弟は。天晴小氣味義經の。御意にあふのが威を見せて。立行く姿ぞ。三重憎てなり。地曉の鐘に連立つ權の頭。地虚實の中を兼房は。畠山が推擧にて賴朝公の御機嫌も。相和ぎて立歸る。使者の面目故郷へは。錦を着よと拜領の。小袖に御紋月毛の駒。踏轟す米塚や增田も跡に陸奥の。浮名取川忠臣の名もいたづらに朽果つる。フシ芭蕉が辻に着きにけり。地何かは知ず向ふより。同勢數百騎群出で。大將と覺しき者眞先につゝ立ちて。權の頭

の貪欲者。老の榮花を極めんとて鎌倉殿に媚諂ひ。主君へ不忠の願事。先達て洩聞え。義經立腹甚しく誅戮せよとの上意を請け。錦戸が執權照井の太郎が向うたり。搦めとらんは易けれども侍は相互。尋常に腹を切れ介錯致し得させんと高らかにこそ呼はりけれ。兼房顏色血に變じ。緩怠なり陪臣ばら。權の頭が不忠とは何者が風說して。君のお耳に達せしぞ。伊達錦戸が年頃の意恨を胸に挿み。讒佞の辯舌に言廻しての事成るよな。上意ぞならば御家臣の龜井片岡なんどこそ。討手には來るべき。己等如きに兼房が一命を落さんや。地それ打散せと下知すれば。双方一度に。拔連て爰を先途と。三重戰ひける。敵大勢といひながら。義を重んずる若者ども。無二無三に切まくれば。少ししらけて見えにけり。地照日は大きに腹を立て。詞なま年寄ての腕ずんばい手捕にせんと飛かゝる。兼房かツら〳〵と笑ひ。地年少し寄つたれど。おのれ如きに負くべきかと。曳やつと引寄せ。鞍の前輪に押付て。首掻切て捨てんげり。主を討せて軍勢ども。一度にどつと駈寄るを。太立拔かざし切立つれば。詞には似ずばら〳〵と。フシ逊るに形は無りけり。地斯る所へ横合より。片岡八郎常春一文字に駈來る。兼房馬より飛で下り大地にどうど居すわつて。八郎君の討手よな。介錯賴むといふ儘に。腹を切んとする所を。詞ヤレ早まるな暫し待て。其方今度の大略を例の讒人兄弟が。いろ〳〵悪く言成して既に討手は乞請しぞ。無實に其身を亡す事餘といへば笑止さに。事を糺さん其爲に忍んで爰に來りしが。京の君を人質とは虛說か但し我が君に。二心有つての義か語れ聞んと云ひければ。兼房は打笑ひ。朋友の誼みとて。能くこそ是迄來られしが。別心かとは曲が無い。鎌倉殿の御所存も諸大名の色めきも。近日に早や高館を攻亡さん御覺悟と。先達て見付けし故。願ひを立てゝ賴朝の。心を暫し宥め置き。急に諸國の兵へ。廻文廻し軍勢を招き集る其間は。假令半年一年でも。京の君は御病氣とて。地延引致す心底に仕畢せ置いたる謀計の。やみ〳〵と成りし事天命とは云ひながら。御運の盡くる時節なり。地我が君の生害も各〳〵が討死も。程は有るまい冥途にて。逆付け參會致さんと。太刀の鐺に手をかくる片岡御て越さるとも。思慮を胸に挿包み。身を果さんとつゝは知れに。

愚なり八郎。手前の道理を言聞けば。大將の御短慮を。世上へはつと取沙汰し今日迄。惡名を蒙きたる。地士卒の心が遷る物兼房が惡名は鹿茸よりも輕くして。義經公の誤は。大山よりも猶重し。放して殺せ八郎と。悶けど猶も抱とめ。詞尤至極さりながら。汝に一の望有り。是より京都に馳上り後白河の法皇へ。歎をいうて御兄弟。和睦の綸旨を申請け。立歸らんは莫大の忠義にては有るまいか。兼房ハツト勇をなし。主人の短氣は見ゆれども手前の疎忽辨へぬ。地誠にさうぢや誤た。合點がいたか。合點ぢや。合點か。合點合點かと。兩人一度に立上り。最早歸るか。ヲヲ某は。京へ上つて追付手みやげに。吉左右聞さうぞ。ヲヽ賴もしい〳〵。夫より內に鎌倉より大軍起つて攻むるとも。呂望子房が智を廻し。君も御堅固我々も。無事で貴殿も息災で。忠義の二字の二腰は。朽ちても朽ちぬ金作。武道の切羽はなし鮫。後藤が目貫獅子王の。天に飛揚し地を動し。刹利も首陀も踏散し。輕軒香車を引きかけて。金殿。玉座に。飛入て恩愛戀慕に身を忘れ友を離るも勢にて。東西へ。こそ別れけれ。

第二

地東魯の書籍西乾の經にも孝は萬行の。父母と說き置きたまふとかや。和泉の三郎忠平は。武勇智謀も文學も。兄々よりは丈夫の儒者の行跡見習ひて。親秀平の尊骸を。埋みし塚の木の本に。フシ暫しとてこそ柴の庵。フシ引結びたる。白衣の紐。解かで別れし其日より。三年の喪に入相の。長地兼て亡父の秘藏せし。白糸威の鎧をば。松の小枝に懸置きて。在すが如く朝夕も。お好の料理手づからに。フシ切め正しく盛並べ向ふに急度給仕盆。詞アヽ先づお箸なされましよ。お汁に心を付けまして小黑崎のまな鶴に。武隈の鹽松茸あしらひに入れました。こちらに指身がござります。衣川の七年鯉今朝程網を入れました。地鹽竈の濱燒は珍しうも候はず。金華山のこだゝみで御酒一つ侑めまし。御膳はさらりと取りまして。宮城野の萩の花。後段に上げたう候ふと問うつ答へつ一人言。フシ殊勝にも亦哀れな

り。地斯る所へ妻の花卷。息をばかりに駈來り。入らんとするを詞を掛け。詞コレヤ〳〵女房。公門に入る時に鞠躬如たり。入れられざるが如くすとは。孔聖魯論の金言。忠平が妻室とも呼るゝ者が騒しい。ぶしつけな何事ぞ。ハテそこ所じや無いはいの。地鎌倉殿より近日に大軍討手に向ふとて。お館は今朝より上を下へ返します。何かは置いてざれいなと。急にせいたる赤面の。顔に流るゝ汗の玉。フシ萩の露より美き。詞ハヽハヽいや〳〵虚説である。棠棣の花鄂として韡々たらざらんや。よし又眞實なればとて龜井片岡なんどいふ。歴々の御家臣あり。外様には伊達鉾戸。忠平一人參らぬとて。少も何の不足がある。地佐藤次信忠信が妹と生れ。きよと〳〵と。物驚きは見苦しい御膳中ばぢやそこ退と。睨付られて花卷は。詞ソレハこなたに傚はねど夫に代りお主への。地お爲に死るといふ事も胸にとつくと納て居る。爰の道理を聞かしやんせ。詞御前に於て先程から。軍評定とり〴〵にて。若殿原は一戰に勝負をせんと逸り過ぎ。錦戸伊達のお二人は。うぢ〳〵と只御卑怯な相談ばかり成さるゝ故。傍輩衆が口々に兄弟なれば三郎も。臆病風を引込んで。此場へ出ぬかなんどとて。無念なあてこと聞きまして。私しや口惜しうて成りませぬ。何程孝行成されても臆病者と言はせては。艸の蔭にて親御様お嬉うはござんすまい。理を非に枉て來たまへと。縋り付く手を振放し。詞ヤイ三年の喪は天下の通喪なり。夫程の義を辨へぬ愚蒙の族は。臆病とも卑怯とも言へ構ぬ事。其上兼て扶持し置く。秋山理助茂木半藏。顔も姿も某が形か影の如くにて。三人並べば三人の忠平有るかと汝でも。見紛ふ程に拵へ置く此兩人が討死せば。地正眞の忠平が立戻つて天晴な目覺し軍見すべしと。武に長じたる高慢が。フシ鼻へ和泉の三郎に。女房是非も泣聲にて。まる三年を獨寢の。つらきが上にこんなまあ。孔子に倒され果つるぞと。オクリ呟き屋形に走行く。フシ心も空に。地魂も飛んで何國に落人等。追々に走出て申し〳〵與五兵衛樣。詞算盤屋の三五郎か。お主はどこへ逃げめさる。地どこと申して行先に。一門は無し錢は無し。かたりはしつけぬ尚貧なり。皮肉切うも鳥目なり。漸う思ひ付きまして。安達が原の黑家へ。鬼の小姓に參ります。ヲヽ知れぬは人の多

の上ぢや。賣本の五十や三十は。有に任せてかけ商ひ小家を持つた不祥には。屋根がへも此夏する。内造作を漸うと。一昨日仕舞うてろくしきに美豆の小島へ退ますする。あたふた騒ぐなべがかゝ養ひ君の森岡へ。にじりこもうと駈走る嫁入せぬ子を羽黑山。落山伏がかひ〳〵敷肩に引掛退も有。すつぽん突の竹藏は淺香の沼へと這回る。鞠屋の見利は白河へ繪匠の道佐は屏風島。葛籠風呂敷甥姪と。子をさかさまに泣聲は。オクリ物騒しき景色なり。地忠平不審に思ひつゝ市中を離し山林に。かく騒動は何事と立上つて見るよりも。詞ヤイ〳〵夫なる町人ども。察る處汝等は鎌倉殿より大軍が。押寄するとの風説を聞おぢをして面々が。家財迄振捨てゝ。狼狽廻ると覺えたり。腑甲斐なきものどもかな他國へさ迷ひ歩んより。大將の下知を請けなぜ籠城は仕らぬ。罷返れと云ひければ。皆々一度に首を下げ仰にては候へども。ゑいやつとうは武士の役。町人の兵法は。逃るが極意と承る然れども今日迄。油斷致して居りましたも殿樣の御事は。日本一の兵。鐵の楯よりも。慥な事と面々に手鼓打つて居りましたに。誰言ふと無く今朝より。ヤレ和泉の三郎こそ鎌倉殿へ一味して。夫故山家に取り籠り。館へ返り給はぬと。騒ぐ程にける程に斯う言ふ内も後から。首切る樣に候と。フシ戰ひ慄くばかりなり。地忠平大きに仰天し。詞ヤア〳〵何と某が。鎌倉殿へ一味ぢやと町中の取沙汰か。なか〳〵左樣に申します。地ハア南無三寶後れたり。下々迄も言ふならば。上の御沙汰も嘸有ん。最前女房が諫めたる臆病の名は厭はねども。二心有る侍と。君の疑蒙るは。父尊靈への大不孝。一片の理に偏て。忠義に眼昧き故天汝等が口を借り。戒めたまふか有難や。急なる時に忠孝の。二つは全く立難し。一まづお暇たまはれと。再拜九拜百拜し。面影に添ふ白糸縅鎧を取つて肩に掛け。取傳たる弓馬の家。弓矢の傳授箱傳授。しつかと締る眞田紐。强い所は目にも見よ聞いても語り傳ふべし。我に追付く町人ども。跡より來れ方々と。飛ぶが如くに鶴隼の高館さしてぞ。キホヒ三重馳歸る。フシいでや文治の。地冬の空。四方の梢も霜枯て。賴朝義經連れる枝も越えつと隔たりて。大軍襲ひ來る由高館に相聞え。軍評定とり〴〵の。中にも和泉の三郎は。今度の大將承り。己が館を

出城として。雲霞の如き鎌倉勢。只一戰の勝負ぞと。胸に智謀を疊込む譽は其身一人に二人の郎黨一樣の。武者振。鎧太刀指物三人並び立ちたるは。何れを影よ形とも離莫が眼を借らずして。見分難なき有樣にて同じく采配おつ取て。士卒の掟軍の沙汰いかめしくこそ語りける。

軍配團

抑此平泉と申すは。日本無双の要害四陣相應の名城なり。東に山を戴て。朝日輝く鯱は。魚鱗の備自から。たとへて見るも　フシ逞しき。フシ北に流るゝ衣川。水滔々と高館に。寄せてはさつと引汐の洲崎に。遊ぶ友鶴は。是鶴翼の。フシ詠ぞかし。如何なる强敵。コハリ强兵も。千里が外に嘯き拂ふ虎の門。西に鐵門轔々〳〵。りんと締めたる其時は。獅子奮迅の勢。　ナホスフシ叶ひつべうこそ見えざりけれ。一の櫓は正八幡。八千矛の神建雷。第二の櫓は麻利支天。日天。月天廿八宿拠。第三は五大尊四方の角は四天王。愛染明王不動の三十六童子。勸請申し奉る。四夷八蠻のあら戎。蝦夷が千島も一同に。競起りて來るとも責るに方便を失はん。況や以つて鎌倉勢何十萬騎寄するとも。地君の御運も大手の木戸も。さつと開て忠平が。駒の蹄にかけ散し對ふ敵を梨子割。胴切。車輞り。雲に氷に霜霰。はらり〳〵はら〳〵〳〵はらり〳〵。と追散さば。ヤレ憂世の慰み。フシ是なんめり。地忌詞合言葉。是軍令の一大事時の細作忍の者。心を付けて油斷すな。急に住する事なかれ。歪て怠るべからすと。晏平仲が辯を借り。かんげんすいが智を揮へば。諸卒一度に聲を上げ。天晴古今の名將と。譽立。〳〵勇立。得物々々を取持ちて。寄する敵を。キホヒ三重今や〳〵と待居たり。さる程に鎌倉殿より寄手の勢畠山を先手として。大將副將千葉上總。佐々木岡崎土肥豐島。其外宗徒の諸大名。都合三十六萬餘騎。旌旗を天に翻へし和泉が城を十重廿重。取圍たる軍勢の太刀の光は玲〻と。フシ氷を縮たる如くなり。地見上る城の高櫓さも悠〻と忠平は。見る目まばゆき緋縅の鎧の金物閃めきて。さも花やかに美しき女に酌を取らせつゝ汲むや和泉の三郎は數十萬騎の軍勢を。蟻とも蠅とも思はぬは。フシ不敵にも亦恐しき。地寄手は之を見るよりも悪き敵の振舞かな。一刻に責落せと鉦を鳴らし太鼓を叩き。三度上げたる鯨波の聲。數千騎鏃を揃へつゝ。霰の如く射かくれば大門門いて楯の板。突立て〳〵駐合せ。死生知ずの兵ども。親討たるれども顧ず。主を殺して引返さず。追つつ卷くつつ入亂れ。火花を散して。三重戰ける。地城の上より之を見て。詞ヲヽ健氣なり潔よし。いで忠平も貯へし。奥州鍛冶の錆矢をば。一矢振舞申さんと。三人張に十三束。指し詰引き詰め仇矢も無く表に進む軍兵の。眞向眉間內兜鎧も楯もたまらばこそ。五六十騎射伏つゝ盃引受ずつと干。フシ手鼓打つてぞ居たりける。詞時に寄手の陣よりも屈竟の若男。ぬつか〳〵と歩み出て。物その數に候はねば誰とも御存じ候まじ。千葉の介が郎等に秋葉藤次鬼澄とて。鎌倉方の人々には手おぢせらるゝ男なり。忠平殿の御精兵驚入て候へども。太刀打の程覺束なし見參やつと呼はれば。三郎莞爾と打笑ひ。優しの者の言ひ分やいで物見んと云ふ儘に。地櫓より飛んで下り。太刀拔翳し切て出で。龍虎雌雄を爭ひてはつしと打ば請流し。裾を拂へばひらりと飛ぶ電光稻妻蝶鳥の。とぶさを立る如くにて。半時計り切合ひしは。目覺しかりける。三重有樣なり。地敵も味方も軍を止め。あつぱれ今日の見物と。拳を握り息を詰め。打守りたる其風情。フシ晴がましくぞ見えにける。地されども忠平手だれ者。透を見つけてすつと入り。思込んで打つ太刀に二つに別れ失てんげり。地弟の藤六跳り出で勢かかつて拜打ち。さしつたりと飛退り暫が間あしらひしが。初太刀に眉間を切割れ。眼暗みてたぢ〳〵と。ひるむ處を疊みかけ敢なく首を打落し。切尖に貫きて。詞鬼とも神とも呼れたる。和泉の三郎忠平を。秋葉藤六鬼澄が討取つたり。と呼はつて。入らんとしたる後より似せ者摑の藤六殿。忠平堅固で是に有り參りざふと云ふ聲に　地南無三寶と振返りかさにかゝつて討つ太刀を。ひらりと後へかけ廻り。弱腰ずつぱと切放されかしこへ轉び失にけり。詞畠山が郎等に仁科團藏春平。退すまじとて駈出る。忠平莞爾と打笑ひ。誠に秩父が家中には本田仁科と名も高き。よい相手

ござんなれ受て見よと。地云ふより早。はつし〳〵丁々と。切先よりも火焔を出し。暫が間揉合ひしが寄れ組んで尤と。互に打物からりと捨て。上になり又下になり二三度四五度跳合しが。遂に仁科を取つて伏せ。首を搔んとする處へ。詞郎等四五人忠平が。前後左右に取付を。シヤ見苦しき奴原と。兩手を廣げ引寄て。地競合際に下よりも。指副拔いて艸摺を。疊あげて三刀刺し。弱る所を跳返し其儘首を搔落し。目より高く指上て。詞又名乘のも古けれど。是こそ實正明白の。和泉の三郎忠平を。仁科團藏討たりといかつがましく呼ばゝりけり。忠平櫓に立上り性懲も無き鎌倉勢。切れば切る程跡よりも湧いて泉の三郎を。汝等如きあら凡夫討取つたるとは緩怠と。地大聲上げて嘲られ寄手は大に腹を立て。諸方の軍勢一手になり。苛つて攻る人馬の聲。上は三十三天より。下は金輪奈落へも。フシ聞えつべうこそ見えにけれ。地斯る處に權の頭兼房は。裸背馬に打乘て。逸散に駈來り。詞後白河の法皇より頼朝義經御兄弟御和睦有るべき旨勅使は黄門定家卿。三浦崎迄御着なり。互に矢を伏せ干戈を止め。此陣ひけやと呼はれば。地城外城内一同に。悦の聲笑の聲。弓は袋に鎧は鞘。俄に鋤鍬斧鉞。亂杭茂逆木竹束より。燒柴艸柴白洲まで。打ち込み〳〵時の間に。水堪止る衣川。干潟となれば武士の立つかひも無き和泉が城。義經が御運は入日影。頼朝は御吉左右萬歳〳〵萬々歳。盡きせぬ御代の例成るわと後にぞ。思ひ合せける。

第三

武士の勇む勢武隈の。松平かに治りて連なる枝のなか〳〵に。變らぬ御代こそ目出度けれ。地右大將頼朝公。忘れず山に御どう座あり。秩父北條和田上總岡崎土屋佐々木の一黨。其外軍勢百萬餘騎鎧の金具光せて。巍々蕩々たる其中に君が齡も長羽織。日本國を膝元へ引括りたる置頭巾。薄茶茶碗に染付の。フシ詩を謂じておはします。地畠山の重忠御側にさし寄つて。詞御連枝の御和睦滞なく相調ひ。四海辭謝致せし事。偏に我が君御威勢の誉きがなす處。併しながら昨日今日事治りし戰場に。如何なる野心の者有りて流矢反矢に紛らかし。地遠矢の狼藉測り難し御物の具をもあそばさず。輕々敷御容體安きに居て危を。忘れぬといふ本文を御失念ばし候かと。諫め申せば御大將悠然として宣ふ樣。詞重忠其方程にもない麁相な事を言ふものかな。頼朝が五體は。仁義五常を甲とし。天地四方の胴丸に諸大名は金物。前後にひつしと鋲立て歩行武者若黨仲間等は。地草摺頼當小手脚當日本國の人民等を。小櫻縅おどしたる我が一領の大鎧。不斷着用するからは野伏なんどのへろ〳〵矢。雨の如くに射かくるとも。何條事の有るべきと。嘯きたまふ御顔色天性備る大將の。寛仁大度の器量やと。フシ上下さゞめき感じける。地然る所へ。高館より御使者有りと末々から。呼はりつげば諸大名威儀を繕ひ軍勢は。左右にはしつて立別れすはと言ふなら一番に。我討取んと待ちかくる。地誠に晴の使者男。器量骨格世の中に。又と二人は長門櫛。透とほる程色白な。御物あがりの角前髪。色と武道の二側目。見るやうで又見ぬ樣で綺麗星兜並居たる。軍勢共は塵埃。微塵恐れず憚らず。のつし熨斗目に麻上下。フシひだためつけて歩みくる。地海野の七郎屹度見て若懐劍もやいぶかしと。つか〳〵と立寄て。詞龜井殿にはさりととては聞しにまさろ御若衆。地ちよつと肌への御情。お赦しあれと戯れて懐へ手を差入る六郎堯爾と打笑ひ。詞拙者はずんと通り者さあ帶解て寢給へと。地四五間ばかり投げつくれば、興醒顔に起上り。はて扨。痛い痴話事と。フシ腰を擦りて入にける。地そ知ぬ顔して重清は御前に畏り。詞御連枝互に今日より。御別心なき御固め。主君の誓紙は先達て貴命の御使者千葉殿へ。相渡し申さるゝ。頼朝公の御一紙を。頂戴致し歸れと有る。主人義經仰を請け。地龜井の六郎重清め推參致し候と。フシ口上迄も立派なり。地大將御機嫌麗しく。云ふにや及ぶ重清。兄敬まふ志義經今より忘れずば。頼朝いかで弟を愍む心のかはらぬと。地御硯を引寄られ。神文細々書流し。御指添を小指に當て。稍暫して宣ふは。詞四十は老の初とは誰誠より いひ置けん。血も枯たるか最前より突ども〳〵出ざるが。如何はせんと御談あり。重清少し顔を上。君には御存じ有る事を。申すも恐多けれど。抑起請の始りは神代の

昔素盞嗚尊。お心改り天照御神はらからの。御中和睦なされし時。戴たまへる。五百箇御統を乞請け。天の眞名井にて振りすゝき噛みくだき。吹出る小霧とは顯に出る血汐なり。之を起請の起りとして中古末代今日迄。大臣公卿僧官より君傾城の二世三世。地熊野の牛王に血をけがし。假の一夜の私語。誓文くされの言分も。犬打童子の約束に。指切髮切致す迄神國の風儀にて。殊更神は正直の首に宿ると候へば。とてもの事に頂の。御血を染めさせ給はれと。フシ憚り。もなく訴ふる。地頼朝殆ど感涙有り。あれ聞き給へ方々。未だ廿歳に足たらぬ。若年者の分として。頼朝に差向ひ。所存の程を眞直に。言散したる不敵さは天晴武士や。侍や。詞にめでて其方が。望に任せ得さすぞと。御眉合の血を點じ。御心靜に認られ。指出し給へば差寄て。二三度見返し押戴き錦の袋取出し。しつかと納て首に掛け。押退て一禮し。詞主人待兼申すべし。御暇下し賜れと。地諸大名にも會釋して。立歸らんとする所を。大將しばしと仰せられ。詞早速ながら其方に某一つの頼がある。是なる小姓大助は和泉の三郎忠平が寵愛の一子なり。邊土に住ば諸藝迄無骨に育ち候まゝ。諸大名の付合をも見習ふ爲に頼朝へ。暫く預け置度き旨文覺坊が言次にて。此春よりも召使ふ。然に今度騒動の。きざしが見ゆると其儘に。急に使を差越して。理不盡に暇を乞ふ。某が返答に。父子の間も敵味方。相別るも有ならひ。成ぬと言うて追返した。其時重て忠平より一生親子の縁切と大助方へ不通狀。頼朝も亦言ひ掛り猶々打捨置きたりしが。地最早世上も治まりて。上下祝ひ樂むに。大助一人心底に憂ひ歎かん不便さに。暇をくれんと思へども聞ば和泉の三郎は。殊の外の意地張者今と成りては此方から戻すというても請取まい。親子の縁を切らするは政道に私あり。頼と云ふは爰の事。器量と言ひ又發明者。地龜井が弟と名告せてもさのみ恥辱も取るまいが。うけ取って歸るなら。本望たらんと宣へば。詞清重御顔打守り。ア、道理かな〳〵。地諸國の大名小名が。從ひ靡く大將の。智計の程は凡俗の測知るゝ事ならず。御暇だに遣されば。成程召連歸らんと。領承すれば頼朝公。御嬉し顔に是や大助。主從の縁切た本國に立歸れ。今日迄仕へし恩賞に。よい兄分の持すぞと。

地御。歟も有難くはっとばかりに手を合せ。名殘惜しさと嬉しさと。二つの涙目に持ちて。御前の罷立ちたれば。龜井も跡にひつ添うて。使者の首尾好し土產好し。追開いたる兄弟。若衆の櫻念者の梅。百萬餘騎が口に酢を溜めて。つれ〳〵。三重詠やる。フシ實にや高きも賤しきも。世界は濡の畫遊び。續三番双六の。勝は乞目の義經公。負ける。も時の京の君。戀のゆきたけ差向ひ。痴話や悋氣のそば杖に。私等もいつか青柳が。フシ心に思や詞にも。地和泉の三郎忠平は。御前へあゞる大島臺。妻の花卷長柄を持ち。疊ざはりもかたづまる。例の引言自慢にて。形を慎み手を拱き。詩經の角弓の篇に。是兄弟によければ綽々として豐なること有り。兄弟によらざれば交やましき事を相成と。古語に僞候はず殿のお心休まれば。地家中は勿論國中の。端々迄も賑々敷。空の氣色も鳥の音も。まだ冬ながら春めきて十八公の若緑。千鶴萬龜の御行末ハヽ。お目出度う存じます。義經威義を搔つくろひ。兄弟干戈を止るも。其方が忠勤故。取分て又行末を。祝ふ心の臺の物。夫婦が切なる志何を以ってか報ずべき。幸ひ是なる屏風繪は。古千枝の常則が。諸國の名所を見る如く心をこめて畫寫し。地延喜の帝に奉り。夜のおとゞに立られしが。後白河の御時に。平大納言に下されて。義經が手に渡りしなり。詞花卷が慰に。讓り與ふと宣へば。地女房悅び立寄て。又類なき御秘藏を。我が身に下し賜る事。有難いとも嬉しいとも。申す詞も候はず。あづまの果に住馴て。外へ參つた事はなし。歌學の道は皆目なり。名所とも舊跡とも。猫に小判の樣な物姫君樣は常々に。お心ざしが深ければ。とてもの事に名所を。御道しるべと願ふのも。フシア、慮外なと云ひければ。地京の君打笑みて。自とても委くは。辨へ知るに有らねども。さあらば案内申さんと。扇をとりて立上り。オクリ語りへたまふぞ面白き。

屏風八景

先づひんがしの屏風には。面白や花の都の初春や音羽の山の。薄霞。今日立初し年波の。賀茂の川風長閑にて氷解

け行く清瀧や。谷の戸出る鶯の。聲や高尾に聞ゆらん。　スエテ鳥羽田の面の末續く。淀野の澤のまこも艸。芽含わたる折しもは。　フシ美豆の御牧の。放れ駒。　地實に音に聞く津の國の。難波の浦の春風に。　スエテ高師の濱や住吉の松の。綠も一入に。咲きてかゝれる藤波は夏のていかと打見えて。雲井の餘所の時鳥。　フシ高間の山をや過ぎぬらん。　フシ龍田の川の卯の花や。十市の里の夏衣。かけてや曝すさほ川の岸の柳の。下納涼。いつの間にかは神風の伊勢の濱荻打戰ぎ。今こそ秋に近江路や。　スエテ冴えゆく月の鏡山。光を磨く水海の。波や氷と見え。ぬらん。荒てやさしき不破の關。　スエテ旅行く人の立別れ。稻葉の山や。宮地山。峯の。紅葉の色々は。　フシ誰かは染めし。唐衣。二むら山の村時雨濡れてさわたる雁がねの。落つる平沙は。渺々と汐の干潟の入海に。濱名の橋は跡絶て。ツキオクリ小夜の〻中山。是かとよ。　フシ打越見れば大堰川。漲る水の浪枕。早くも爰に清見潟。關の戸さゝぬ君が代の。久しかるべき例には。　地千本の松こそ目出度けれ。富士の高根の白妙に。積れる雪を見るからに。　フシ冬の氣色は面白や。伊豆の三島の宮立も。　謠幾世經ぬらん神さびて。鎌倉山の星月夜。大磯小磯こゆるぎの。沖に釣する。　フシ蜑小舟。漕がれて歸る夕暮は。遠浦の歸帆是ならん。秋の千種のいつとなく多枯果てて武藏野の。はこの池水氷川。なう〳〵あれ〳〵見たまへ。鷗鷺鷥都鳥。群居て遊ぶ粧は筆の限りや盡すらん。　地扨又こなたは下總の。香取の浦にてはします爰は上總の枝の濱。　フシ常陸に鹿島の御社や。ふりさけ見れば筑波根の。　地峯より落つる水無の川。未だ春には有られねども波に花さく櫻川彼の貫之の言の葉に。かけし昔の俤も。實に理と陸奥の。　フシちかの〻鹽竈松島や。　フシ小島の海士の。苫屋形。　地吹荒したる浦風はそとの濱にや通ふらん。末の松山衣川。阿古屋の。松の木の間より沖に見えたる津輕が島。千鳥友呼ぶ袖島や。蝦夷が千島の有樣迄殘るかたなき筆のあと。　地よく〳〵覺え候へと。敎へ給へば夫婦の人愈〻。喜び興じける。

地斯る所へ龜井の六郎重清は。君伴遠に有るべきと足を早めて歩みくる。跡に續ける大助は久しうぶりて二親の。顏

を遙に打守り御懷しさも床しさも。包めど胸に綻びていそ〳〵したる取形も。俄に濕る佛も我が子と知れど父親が。見ぬ振すれば花卷も顏を伏屋の箒木を。　フシ身の上に知るばかりなり。　地義經鶴井を御覽じて。　詞フ、堅固にて戻つたな。シテ賴朝の權勢は如何樣な有樣ぞ。諸大名は誰々が左右には相詰し語れ聞んと御諚有。六郎詞を押鎭め。御兄弟とは言ひながら御果報の違し事。譬へて申さば築山と富士を見上る如くにて。　地四方八里が其の間に必死と並ぶ軍勢の。鎧の光は秋の野に咲亂れたる女郎花。石崇が金谷園項羽が威勢を振ひたる。鴻門の會とてもよも是程には有るまじと。いか樣ぎよつと致せしが元來某御館を。　詞出るよりしていかな事生きては二度歸るまじ。軍勢如何程あらば有れ賴朝公と抽者めが間十間有るならば飛びかゝつて指違へ。今度の鬱憤晴さんと存じ極めて參りしが。　地推量とは格別にて御前表は打和ぎ。御用心有る體も無く黑羽二重のお小袖に。御道服を打ちかけられ。御側へずつと召れつゝ。御親切なる事どもを暫し相談遊して。御心よく神文を御認め候と。　フシ錦の袋差上ぐれは。　地義經益〻御悅喜有り汝が今日の功名は。蘭相如が奏に行き晏子が齊に使せし。武勇にいかで劣るべき慰賞乞によるべしと。自筆に御判すゑられて扇に取添へ賜はれば。六郎はつとにじり寄り冥加に餘る仕合と。二三度四五度押戴き。御前に差置て首を俯せて申す樣。　詞人の羨む感狀を辭退申すは何とやら。をこがましく候へども。感狀褒美と申す儀は外樣の武士が事により。主人の手前を浪人し他國の奉公望む時。感狀書が候の褒美に預り候のと。言立にする爲には究竟一の御恩賞。此龜井は一生に外の主人を賴んとは。　地ゆめ〳〵存じ候はず用に立てねば大切な。感狀とつても反古同然御返じ致候と。忠義の詞底深き心の水の重清と。　フシ各あつと感じ合ふ。　地中にも忠平横手を打。　詞ハ、でかされたでかされた。力を盡し勞をつくし其報を望ずとは貴殿の事。遁今の一言は武士の敎になる詞。　地板にも刻み石にも彫り是は龜井が金言と。末世に名をば止めたいと賞歎すれば重清。　詞ハ、〳〵〳〵殊の外なる御褒美に却つて當惑仕る。就いては御子息大助事主從の緣切つて。某伴ひ立歸つた勘當赦して遣されい。ハア異な事を仰らる。大助といふ世悴

をば忠平は持ませぬ。されば貴殿の片意地は鎌倉殿も御存じ故。拙者めに預けるとひたすらお頼み有つての事。地ひらにひらにと言ひけれど。返答もせず見向もせず子にも色にも迷はざる。フシ忠義一圖の男なり。地斯る折とや青柳は。壁訴訟なる獨言。餘所にはあんな頼もしい人が跡から出て來るに。此身は何と成うぞと尻目遣へば京の君。打頷いて義經の。袖をひかへて宣ふは。あの六郎と青柳とは疾うからくさり合うた中。忍び〳〵に契るのは氣苦勞さうな物じやのに。めをとにしたらよからうと。おづ〳〵ちよつと言うて見る。うけは中々義經公。夫島臺とお詞の。オクリ變らぬ〻内と姫君はつい飲みそめて青柳にさすがはよめり心にて。思はゆさうな顔付が。フシ千代の結や萬世の。地龜井に廻る盃を大助其儘走り寄り取つて微塵に打碎き。詞ナウ曲もない龜井殿。まだ兄弟の盃さへ致さぬ内に女房わざ。地あた見苦しいいやらしと。顔に散せる霜葉は。二月の花より照增さる。地青柳むつとせき上げて。詞是そこな性惡。巧やつたの〳〵。若衆嫌ひは知て居る。どこぞの女と馴合うてこんな時にはこうせいと。あの子に頼んでさせたのぢや。地夫程いやな青柳に。やゝうむ樣にはなぜしやつた。まどやる物か盃を飲んでこなたへ戻しやるか。どうじや。〳〵と縋り付きてぞ泣叫ぶ。地六郎聲を和げて。尤々さりながら。心を鎭て重淸が。言譯聞いて了簡せい。詞賴朝公のお心に此大助を國元へ。戻したいとは思せども。親忠平が請取らねば恥辱をお取りなさるゝ故。龜井を賴む弟にせい大助によい兄分を。肝煎などとの御詞。百萬餘騎の軍勢が耳を寄せて聞いて居る。すれや某は今日より日本一の衆道すき。地何程そなたが可愛うても。賴朝公への聞えも有り。大助まへぶり有る内は此盃は致さぬと。詞を放てば義經公甚だ立腹まし〳〵て。詞ヤア何と言ふ六郎。兄賴朝が挨拶で汝に弟を持すれば。義經夫婦が仲人で其方に妻を遣る。孰の命を重ずるサア返答を聞かせいと。地あらゝか成りし御聲に忠平慌てて走出で。詞御尤も〳〵。先づ御鎭り成れませ。コレ龜井殿。出來ませぬ。殿より外に主人をば求めぬこなたの心底で。賴朝公への義理立も日本國の大名が。笑ひ謗りも構はぬ事。手前の一分立ん迚立派な事のたまふ程。最前の金言が泥の中へ埋

るゝが。地夫でも合點が行ぬかと。誅の詞是非も無く。誤入て候と。頭を下ぐれば義經も。忽ち御氣色直りつゝ。さ有ば奥にて祝言の。盃改ため致さすべし。皆々こなたへこなたへと。オクリ打連〻御殿に入りたまふ。フシ跡には母と。大助と哀れ果たる顔付にて。そばへも寄ず物言ず。フシさし俯いて居たりしが。地暫く有りて大助は遽り傍りを見回して。申し母樣是申し。母樣なう是母樣と。呼べと花卷答へねば向ふへじつと立回り。詞なぜにお詞下されぬ。花卷顔を打背け。忠平殿はお主へ義理と。自は又夫へ義理。地父が勘當したる子に。母と云るゝ名は無いと。ずんと云れて途方無く。元の處に立戻り。恨めしげなる聲を上げ。親の不興は赦されず。龜井殿には見放さるゝ。アア是非も無き身の上と。地袴の上を後へはね。押肌脫ぐを尻目に見て。詞大助それは何するぞ。人そばへなら見苦しい。アゝ曲もない事言はしやんす。若輩なれど私も鎌倉殿の御家來ぢや。アゝ賴朝の家來ならなぜ鎌倉へ立歸らぬ。イヤ〳〵往んでは大助が一分が立ちませぬ。千年万年奉公も。只一日の宮仕も。主といふ名は同じ事義經公のお詞は。六郎殿が立て給ふ賴朝公のお詞を。水に成したる私がどふまあ生きて居られましよ。詞お前は他人で候へども介錯して給はれと。思入つたる氣色を見て。地母は覺えず走り寄り。ヲゝ健氣な者の心やな。お主の義理に死ぬるとも。其義理ばつた詞さへ生寫しなる親と子の。取替もなき獨子を親の不興もお主への義理と思へば是非も無。忠義の爲に勘當し忠義の爲に死ぬるのを。逃走れども得止めぬ。フシ此身の義理こそ悲しけれ。地町人の子に生れたら父が勘當したりとも。母が影身に立隱しかくまふ術も有るべきに。和泉の三郎忠平が妻と呼れて片時も。男の目をば暗まして宿には足は止さゝれず。鎌倉殿へはいなされず天地の内に居所は。無き身の上と覺悟して。潔よう腹を切れや。おまへは他人となぜ言うた。誠の母ぢや母親が介錯して得させうと。地帶引しめて片肌脫ぎ。掛けたる刀拔持ちて。後へ頓て立廻り。心靜に死ね〳〵と。詞は淸く心には。地世間の親は我が子をば。萬々年と祈のに。首を討んと立廻る。此身は鬼か氣違ひかと。胸へもてくる涙をば。撫でおろし〳〵。フシ打守るこそせつなけれ。大助少も惡

びれず。詞私が死ぬるは定り事かんまへておば樣の。さがない故で有つたとて中惡うして下さんすな。ヲヽ優しい事をよう云うた何しに人を怨めうぞ今日爰へ死に來る。過去の業ぢやと思うて居る。地此世の因果は是非もなし未來大事ぢや西向いて。彌陀如來を頼みましや。詞イヤ〳〵念佛申しても親の勘當請た身が。何の佛に成りませう。牛とも馬とも成り替り御奉公致しましよ。やれいま〳〵しい事云ふな。地誤もない其方に勘當は表向。親子の緣は變らぬぞ。爺親とても我とても。やんがて冥途へ死んで行く極樂へ往て待つて居や。詞そんなら嬉しうござんする。心がすつきり晴れました。南無阿彌陀佛彌陀佛と。地十遍計り唱つゝ。脇指逆手に取直し。乳の下にさし寄れば。母は後に力を付け。詞でかしたずつと引回せ。せくな後れな。地又引けと。右へ廻るを相圖にて。甲斐々々しくも介錯し。オクリ上着を脱いで打覆ひ。地邊ののりを押拭ひ。元の所に押直り。泣かぬ顏する目の內は。フシ武士恥かしき女なり。地龜井青柳兩人は。とさん盃持出て。詞大助どれへ參られた。兄弟分の杯が致したう存じます。ハア忝うござんすが。心地惡しうて先程から寢轉うで居りますが。重ての義に遊しませ。姉さま夫は私への御遠慮でがなござんしよ。最前の首尾成る故義經樣のお前にて盃はしたれども。大助殿と兄弟の契約濟ぬ其內は。本の夫婦ぢやないと有る夫での事でござんする。フヽすりやお二人の相談ぢやの。地成程そんなら逢はさうと。小袖まくれば紅の中に臥たる顏形。龜井ははつと聲を上げ大助扨は腹切つたり。早まつたりし若者と。狼狽纏れば青柳も。ともに取りつき抱きつき。最愛の人の心やな。お主に放れ二親の。不興は赦りずせめてもの。頼に思ふ龜井殿聞えぬ仕方と一筋な。雅心にした事を。跡先なしにさがなくも云散したる恥かしや。赦して下され甥の殿。こらへてたもや大助と。フシ口說に甲斐も涙なり。詞六郎は小聲になり。大助を死せては片時も跡に殘られぬ。そなたは何と思うて居る。私も生ては居りませぬ。地ヲヽ其筈ぢやと言ふより早。刺違んとする所を。忠平奧より走出で。六郎を抱留れば。妻は青柳引分る六郎は泣喚き。詞死せて下され忠平殿。大助を死せてはこなた夫婦へ立ちませぬ。地慈悲ぢや死せて死せて死せてと。振放す手をしつかと取り。詞こりや狼狽者。行方も知ぬ大助が死だと言うて某へ。立ぬと云ふは何事ぞ。急かずととつくと分別せい。何者の子か知ねども未十二や十三で。お主の詞を水に成し一分か立ぬとて腹を切つたは健氣者。夫こそ武士の性根なれ。私事に刄物をばちろばはするは匹夫のわざ。あた見苦しい取措やれ。いやさ忠平。御意を守つて青柳と夫婦の盃相濟んだ。是からは又大助へ。義理を立つるが誤か。アヽ暗い〳〵主人の仰は。青柳と夫婦と成れと宣うたり刺違へとのお詞か。未來で添うなんどとは君傾城のばさら事。お主の詞は反古に成る夫でも義理を立てたるか。忠平が思案には頼朝公の詞も立つ。元來主君の詞も立つ其方達が義理も濟み忠平夫婦も滿足する。裁を默つて見て居よと。地言詰められて兩人は。死るにも又死れぬ義理。生てはどうも居られぬ義理。侍冥利に盡きたかと。足摺してこそ居たりけり。地忠平とつくと坐に直り。詞こりややい青柳爰へ來い。姉は我が子を殺してさへ泣きたい顏を押隱すに夫はどうした未練な事。龜井殿と大助が兄弟分の盃を其方立つて酌をせい。サア龜井殿あの方へおさし成されと言ひければ。地あつと答へて盃に涙半分干兼て。しやくりあぐるや酌人は。顏を袂にさし入れて。現心も有ばこそ。死骸の傍に指置いて。フシかしこへどうと臥轉ぶ。詞忠平は聲を上げ。大助定めて嬉しかろ。頼朝公の詞を立ち。おぬしも犬死せぬからは。忠平夫婦も滿足な。地今日よりしては青柳を汝と思うて朝夕に。見て慰ぞ六郎も。念頃にして給はれと。さしもに剛の忠平も。フシ忍泣くこそ道理なれ。地花卷はにじり寄り死骸を膝に抱き上。双を腹に立つる迄御勘當を氣にかけた。詞魂はまだ家の內にうろ〳〵として居るで有ろ。耳有らば聞きや目有らば見や。あれ爺さまは泣かしやるぞや。親子の緣が切れぬ故聲を立てて泣しやるぞよ。地母は僞云ひはせぬ。ナウ忠平殿。大助が潔よい死顏見て我が子と。地一言云うて遣らしやれい。一世一度の花卷が無心でござる我が夫と。フシ手を合せてぞ搔口說く。詞忠平死骸に打向ひ。何樣今日歸るのは親子の對面しよう物と。思うた當が違うた故無得心なる忠平と。嘸や恨んで死んだで有ろ。死人に甲斐無き云譯を一通り語るべし。御兄弟の和睦

の事人は目出たう思へども某は心得ず憚かりなれど我が君に頼朝公のお詞を用ひぬと有るお心が。つくが破れの起りにて。是より萬事萬端の。威勢爭ひ出來せん。頼朝公の御所存も退いて案ずるに。今日我が子大助を國へ戻して より〳〵に。此忠平をお味方へ招きよせん謀。遠くも有らず御兄弟。御中再び不和に成り。一戰起らん其時節和泉の三郎忠平は。頼朝公に緣有りと諸軍勢に言はれては。地是迄成せる忠節が。やみ〳〵となる無念さに。武命に汝を捨たる故顏さへろくに見ざる事。殘念なりさりながら。妻なればこそ子なればこそ。討ちも討つたよ。潔よう。腹をも切つて死んだ故。嬉しい親子の對面する。邪見なとも酷いとも。恨んで呉れるな大助よ。女房言譯して呉れい。そなたはようも泣かぬぞと。言ふを涙の滿汐に堤も切て花卷はわつと泣出す。其聲は。フシ松風騷ぐ如くなり。地稍有つて忠平は。亂る心取直し。フシアヽ迷うたり〳〵。今日は和睦の御壽。歎を止めて笑ひ顏。龜井夫婦は奥へ往きや。我等は法の營と。空しき骸を搔き抱き。泣々館を立出でて。歸るは野邊の夕烟殘るは閨の空炷や。煩惱の火に恩愛の。歎を積て取りくべて。無常にも泣く戀にも泣く。袂の時雨袖の雨空に知れぬ五月空やと皆人哀を催ふせり。

第四

地臣正の忠阿順の徒良將之を察すとかや。源九郎義經公驕ます〳〵超過して。國民愁へ歎くよし。鎌倉殿へ洩聞え。二度御中不和に成り。急ぎ追討有るべしと。文治五年の夏の天晝の月夜の卯の花絨。畠山重忠は諸軍に一日先達つて。逆柴山を屯とし。手勢をすぐつて三萬餘騎中に股肱と頼まれたる。本田小五郎近富。仁科團藏春平。廣瀨藤内兄弟を。フシ膝本近く招き寄せ。地軍配團おつとり延べ高聲に宣ふ樣。詞抑高館の城塀は日本無双の要害。軍將には和泉の三郎古今獨歩の勇士故。敵に九分の强み有るなれども人の和を言へば。日本國の軍勢が頼朝公の德風に。地艸の靡くが如くにて。義は泰山より重くして命は鴻毛に猶輕く。亂杭逆茂木引破りぼつかけぼつ詰め打寄せば。忠平一

人龍木の隱形の術働くとも。纔か五日か三日に責め亡ぼすは知れた事。詞然るに重忠去年の冬和泉が城の先陣にて。多くの味方を討すといひ。大將を討洩せし事世の人口も口惜く。地今度に於ては此手にて是非忠平を討ん爲め。又々先陣乞ひうけし。四人の內に一人は。軍の勝負を顧ず。只一筋に狙寄り。引組て討つて取り我が鬱憤の散ぜよと。フシ理立てゝ云ひければ。地本田の小五郎つゝと出て。詞御諚の趣近富めが。胸にどつかと納候ふ。誰彼といふ迄無く明日中に忠平が。首搔切つて見參に。入れ參せんと答へれば。三人の者聲々にイヤ存外な事を言ふ。見た事も無い初陣に高名だては無用なこと。土產に入るならこちとらが軍の跡に這回り。拾首して間に合せ。ホヽ成程そちとがいふ通り。今度軍の寺入するいろはに本田小五郎は。地似物かぶる鍛錬は。いかさまゑひもせぬ京と。フシ天窓を叩いて打笑ふ。詞仁科大きに腹を立て推參なり近富。似物かぶるか正眞の汝が首を捻切るか。地勝負せんと立上る。シヤしやら臭い顆骨。打碎かんと飛びかゝるを。廣瀨兄弟取付きて。こりや味方討何事と。フシ漸抑へ鎭めけり。詞重忠打笑ひヲヽ頼もしい〳〵。地某指圖致さんと。地矢立の筆を取出し。文字を書いてひん圓め。一二三四の揉鬮に前後は天に任すべし。方々開けとのたまへば。地武士の本懷此度と。面々心に信を取り。南無八幡大菩薩本田が一を取つたぞと。踊上つて悅べば。三人は又闘取の。オクリ負けて〳〵片屋へ入る如し。フシかゝる所へ。地佐々木の三郎盛綱と案內させて入來る。跡に引かせし囚人の身には三衣を着しつゝ。月代靑く大たぶさ。狼狽廻る頰付を。都の茶筅鉢叩。瓢簞出たる駒よりも。フシ珍しうこそ見えにけれ。詞盛綱秩父に對面し。去年と申し當年も先陣と言ひ取分て忠平と御對陣雌雄の譽と存ずれば。御羨しく候なり。就いて今朝隣陣江間の小太郎園より。法師一人忍出る。陣所へ出家の往來は珍しからず候へども。隱れ廻るが怪しさに。搦めて詮議仕れば。頭巾の下はあの通り。其上お聞き遊され。城方へ內通の書簡を持つて居りました。御覽あれとて差出す。重忠披いて讀みあぐれば。明後卯の刻合戰の節兼約相違有るべからず。且又一味の輩は。何れも甲の忍の緖を切らせ置き候まゝ。御味方の軍勢ども。必ず見損じ

なき樣に。御下知最肝要なり以上。高館の城内へ御存の何某より。地重忠暫く思案しテ何者の家來とも白狀は致さぬか。然ば不敵な所存な奴。どう責問ふも云ひませぬ。ムヽさうござろ〳〵。ヤイそこな横道者。まだ是ばかりで有るまい。外にも有らう白狀せい。彼の男打笑ひ。女童の諺に。四相を悟る重忠と。言ひ囃すれば誠かと付けあがりした當推量。狀より外に何にもない。出さぬと有つて重忠が其儘に置くべきか。小五郎團藏立寄りて衣類の襟を解いて見よ。地承ると走寄り。上着下着を引裂いて。小帳一册取出す秩父莞爾と打笑ひ。詞成程かう有る筈の事。サア佐佐木殿ごらうじませ。何ぢや毎日聞書帳。一つ弓の重籐眞艸行。矢の地の大小太刀の品。公家に二品武家の太刀馬の毛色は五種五色。一つ正月十六日樓の普請成就にて働勢二千五百人。外の出張へ六百人。一ツ三月三日式例は例年に相變らず。一つ。五日の夜に入て佐々木の三郎盛綱より。味方へ一味内通の獻上物三種。文箱一つ到來といと細かに記しける。地盛綱はつと赤面し大小拔て重忠が膝元に差置ば。詞ハア佐々木殿何なさるゝ。されば只今囚人が訴人の實否立迄は盛綱とても科人よ。腰の物をば預けます。對決仰付られば滿足に存じましよ。秩父から〳〵と打笑ひ。弓矢取ては日本に勝る者無き佐々木殿。智謀は次にござるよの。コレヤ敵より謀。今度寄手の中にても。こなたを第一敵方に恐ろしう思ふ故。城へ内通有るなどと頼朝公に疑はせ。責口を引かせん爲。古へ陳兵張良が。范增を斥し例に倣ふ計ごと。これ反間と申す者。まつた甲の忍の緒を切つて軍に出る事。必ず忠義の輩がお主の爲に討死する。後の證據に致す事。虚實を知らぬ軍勢が迷へば味方の害に成る。本田は陣中駈廻り明日の出陣には。いづれも甲の忍の緒を切つて軍を致せよと。軍勢共へ云渡せ。囚人惡き奴なれど命を助くる立歸り。忠平にいはふには。斯樣な愚者の謀計重忠が黑眼を。開くに及ばずと慥にかたり男めは。地法體させて追拂へ畏つたと夕顔の。智惠の蔓はふ畠山。くはせて見ても參らねば。はて何とせう道性の坊。はつち〳〵〳〵發明な。旦那殿樣さま〳〵〳〵と。聲も慄ひて。三重逃げて行く。地人間萬事塞翁が馬の足並行歸る。矢叫びの音鬨の聲。天地も。崩るゝばかりなり。

地片岡の八郎は姫君のおはします。中門の戸に立寄り。大音聲で。詞京の君へ申します今朝迄は敵味方牛角の軍に候しを。錦戸伊達の兄弟めが寄手へ加はり候故。外樣の武士は猶以つて殘なく落失せて。城中の軍勢は二百騎ばかりに成り候。我君にも御最期の御酒宴只今眞最中。併しながら生害は同事と有るの御心。地追付け御左右有る迄は。必ず早まり給ふなと。フシ言捨ててこそ入りにけれ。フシ皆人の世に有るときは數ならで。憂にはもれぬ中々に。艸葉に置ける末の露。地元の雫と今ぞ知る。フシ命の限り京の君。地佛壇の間へ出て給へば。御供に參る女房達。先づ一番に佐藤の局。同く娘の花卷。妹の青柳。其外以上十三人。フシ今日を限りと白無垢に。こうがうの緣盡きず。知死期待間は朝顔の。フシ葉越しに咲ける如くなり。地京の君宣ふ樣。日頃は主從一所ぞと。思ひ入つたるもののふも。皆落失せる世の中に。女心の一筋に。地死出の山路の郭公。鳴音を聞くに人々と。伴ひ行くこそ嬉しけれ。地三世を掛けて諸ともに。斯くこそ見まくほしけれと。しほ〳〵としておはします。地佐藤の局も打しほれ。げにや師走の月夜とも。すさめられたる老が身は。此世に心殘らねど若木の花の人々を。一度に脆く吹嵐。御最愛やとばかりにて。娘の顔を打守る。フシ心の内こそ道理なれ。姉の花卷さし寄つて。愚の詞候や。されば古歌にも散ればこそ。いとゞ櫻はめでたけれ。浮世に何か久しかるべきと。フシ聞くものを。取分に我々は今別るれば今に又。御俤を三瀨川手に手を取つて渡る身の。何かは思ひの有るらんと。心强くは諫むれど。理知らぬ涙のみ。フシ膝に。散行白玉を。フシ貫きとめぬ。青柳は。思ひくゆらす袖香爐。焚きかはしたる我が夫は。軍に出給ふ度毎に。詞甲の下の亂髮。大刀鎧迄とめ伽羅の。地其俤はすがれ共。烟は夫の形見ぞと。フシ御前にさしおけば。京の君は取上て。アヽ定なの世の中や。我一とせ仙洞の宴に召されし時。十種香又は花鳥香。小艸。宇治山香などは。世にきゝ馴て古めかし。源平香といふ物こそ。分けて其名も義經と。御戲に預かりしも。地いつしか今日は引きかへて昔語に成りしそや。身は慣はしの橘柴と。聞いて廻すも我々が。烟競べや。フシ身を焦す。フシ憂とつらさと。悲しさを。取集めたる身

ながらも。泣かぬを義理の笑顔とだえは頓て打しめる。愁を拂ふ箒もて飲めや歌へや樂めと。最期の酒宴。ぞ始りけり。フシ然る折ふし。地秀平の後家正貞尼。あわたゞしげに走來て。中門の戸をあらけなく。明よ〳〵と打敲く。地すは君よりのお使と。走りよりて押開き。是はと言うてはつたとさす。詞ヤアナウ嫁御心得ぬ。正貞と見て開きたる門をばなぜに立出す。アヽお聲が高うござります。ヲヽ高くば低う物言う。姫君樣はどうなされた。早御最期が近付いて御酒宴なされてござります。お供の女中は十三人。お帳面もしまりました。お前の事は幸におつむりも圓ければ。他人の謗も侍らはじ。地お耳へ入らぬ其内に。お館へお歸りあり。姫君樣や我々へも。香花手向て下されませ。詞正貞聲を荒らげて。すりや逃さうとて立出したり。地常々そちは夫程に。愚痴な者では無つたが。最期近くで血迷うたの。心を鎭てよう聞きや。詞母の爲に橋を渡すは不孝なり。父を殺して恥を忍ぶは孝行ぞや。地名をも義理をも顧ず。命救ふを孝行と。思ふは世間の嫁姑。五十四郡の大將。秀平殿の後家ぢやぞや。詞そなたの夫の忠平は何者の腹から出た。日本一の兵は正貞が生んだぞや。嫁御花卷返答しや。詞イエ〳〵夫は立ちませぬ。そんならなぜに無道なる子を二人迄生ましやんしたム、錦戸伊達の兄弟が。敵に成つた云と事か。周公丹の聖人さへ。兄の無道を得しづめず。柳下惠が賢なるさへ弟の惡は得止どめぬ。天より受る氣質にて。古へ今も例有る事。地假令我が子は何十人。惡人も有れ無道もあれ。地正貞が氣を疑ふはお主一人が了簡か。佐藤の局がいひ付か。明けなば爰を破るがと。劃れよ碎けと打叩く。花卷なく〳〵。是申しお前の兼ねてのお志。よう知拔いて居ります者。私が何しに疑ひましよどうなりとしてお前をば。地お助け申さう爲ばかり。とに角お歸りあそばしませ。何事有つてもあけやしませぬ。詞不孝になるが通さぬか。夫でも開く事ならぬ。破るが。いゝや。地あけ〳〵と外から叩く内から押す。忠孝二字の爭ひを中戸一つの隔にて。互に。わつとぞ。泣出す。地佐藤の局堪へ兼ねて。すつと立寄り戸を開き。正貞尼を誘ひて。フシ御前にこそは。フシ出でたまふ。地姫君世にも嬉しげに。最前よりも數々の。樣子は是にて聞きました。地冥途の同じ道連と。御盃をさし給へば。正貞尼三度押戴き。昨日にも一昨日にも駈參るべき私が。遲なはりたる言譯を老の末期の一曲に。地御物語り申すべし。今一つ召れよと。盃を扇のせ姫のお前にさし置て。膝立直し拍子をとる。

軍物語

舞フシ萬代と。名は高館の城郭も。卯月の空の初紅葉。詞日本國の諸大名。鎌倉殿の下知を受け。押しに。おして來る程に。舞地したかみ川の南より。くり駒山の峠迄。ナホス軍勢ひつしと。フシ居並んで。白旗中黑かしら黑。大旗小旗すそこの旗。團扇の旗は兒玉黨坂東の八平次。揉にもうで責めよする。味方小勢といひながら。武勇の譽隱れなき。龜井の六郎重淸。片岡八郎常春。詞中にも和泉の三郎こそ。諸軍勢が目にかけて。組んでや打たん射てや落さんと。地物に騷がぬ秩父さへ。おとなげ無くも先陣を。望ませたりし忠平は末代迄の手柄ぢやもの。手ひどい軍を致せかし。能い方便をば出せかしと。フシ高き所に駈上り。地遠眼鏡をばひつそばめて。覗く程に〳〵。一昨日の卯の刻より。酉の刻迄いかなあからめせざりしが。親の一念屆いてか。一昨日の戰は。城方が八分の勝。詞嬉しうて夜が寢られず。地明ると其儘遠眼鏡。一日詠めて居たりしが。六分の勝は致せども。精氣が弱つて見ゆるがと。思ふに違はず今朝は軍は牛角に成りし故。南無三味方が負に成る女なれども秀平が。寢覺の床で端々を聞覺えたる事も有り。いで忠平が加勢せん。弓よ太刀よと取急ぎ。鞍置馬に打乘りて早二三町駈出しに。詞ホウイ〳〵ト呼掛る。何事なりと振返れは。照井が弟の七郎め。大音聲にぬかす樣。錦戸伊達の御兄弟。賴朝公へ味方と云ふ。ハアなむ三寶と思ふと早。地馬よりころりと轉落しを。手綱とらへて漸〳〵と。よろぼひ廻り這廻り。爰迄は來るよなう。アヽ何とせう是非がない。詞我君の御運の盡。お歎き有るなお姫樣。地女房達悔めやるな。驪山宮裏の海棠も。フシ馬塊の土に埋れ

ん。地王昭君が月の眉。胡國の艸の中に居る。西施が雪の膚さへ狐舟の水の哀世や。さう言ふ人も。死ぬれば。傳へし其身も又々死ぬる。りやうきが妻もりようが手かけも王陵孟子の母も死ぬれば。聶政豫讓が妹も死ぬる。釋迦も入滅達磨も死るゝ傳敎弘法法念親鸞。死て生れて。生れて死て。環のばんのめぐるに似たり。電光石火の。フシ如くなり。冥途の旅は先もなし。誠に人界は火宅の住家。誰か一人安からん。上に在つては下を惱し。奢心の彌增に。終には其身を亡すなり。有るに付きても悲み或は。戀の山路を分迷ひ。煩惱の土に身を責められ。盡す思ひの數々に。ゑい。〳〵。〳〵〳〵〳〵我と打のる火の車。一生は盡くるとも。望は盡きぬ淺ましさよ。只何事も夢ぞかし。迷ひの雲を打拂ひ。輪回の絆押切りて。菩提の船に棹して。彼岸に至り〳〵て。コハリ成佛の玉座に連り。盡ぬ榮花を極樂の。玉の臺の樂を。ナホス願へやねがへ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛。〳〵。願以此功德平等施。一切同發菩提心往生安樂國と。回向の聲も十四人。勇み〳〵し有樣は。忠有り義有り。情有りともなか〳〵申すばかりは無かりけり。

第五

地威公が車の鶴も去季斯が繫ぎて樂しめる。犬骨折つて高館や。伊達錦戸さへ氣を變じ。寄手の勢に加はれば況や諸國の寄武者共。或は落失せ降參し。纔か百騎か二百騎が。城を枕と一筋に思ひ入つたる梓弓。射ちがへる矢は夕立の軒端を過ぐる如くにて。責寄すれば追返し。追返されては責めかゝる。兩陣互に氣を振ひ。千騎は一騎に討ち成され。僅一陣殘るとも。フシ果つべき軍と見えたりけり。地片岡の八郎常春は。一の關の南口。多くの軍勢引請けて。切つて出でたる氣相も。黑糸縅の腹卷に今日の晴ぞと肴流して。金銀のより糸に。連打つたる飾り總。裾金物はちらちらちら。ちらめき渡る太刀先に。ぽつかけほつ鑢振廻はる。地佐原の十郎義連が。魚鱗に構へ控へたる。陣中へ切つ

て入り。捲くり立てゝ難ぐ程に。陣場に足を溜め象ねし。詞爰に器量も秀づなる。日の丸の指物は。照井の七郎光直と名告も流石面伏。鬼神と聞えたる。片岡殿の切先へ。對ふは少し緩怠を。御免ぞいと言ふ儘に。眞一文字に掛りける。其名は兼て輝し。照井の水に見參し。道明寺の引飯に暑氣をはらし申さんと。地只一呑の廣言も。心なるかな忽に。眞甲微塵に打碎かれ茂り合ひたる道芝を。血汐にこそは染めたりけり。詞三木の隼人入代はり。疊掛けて打つ太刀を。丁々と受流し左手へひらりと引つぱづし。地返す刀に諸足を。高股掛けて切落され。堤の原をころ〳〵〳〵ころり〳〵とこけ廻る。名にしお神酒の德利と。フシにつこと笑うて立つたりけり。詞義連が郎等に。明石二來といふ法師。地望む所の大將を。松に來る風なつかしと。持つたる長刀水車。くるり〳〵くる〳〵〳〵くるかと見れば明石坊。二つになつて須磨の月。波爰もとや泡沫の。フシ哀れはかなく成りにけり。詞本より八郎平常がこと味噌汁のはしらかし。いか物喰の菜入らず。軍は殊に好物にて。はね箸は致さぬに佐原殿の蒸肴。地葛溜の鹽加減。ぬくもりの冷めぬ間に。賞翫致すと駈向ふ。氣色は刀八毘沙門の。フシ阿修羅を追ふが如くなり。地流石佐原の十郎も。手綱控へて支へしが。詞片岡が切先に。馬の太腹切さげられ。地只一跳にはね落され後陣をさして逃てんげり。地主討たせじと押隔たる。郎等共を八郎が。死物狂ひの荒軍に。はらり〳〵と薙倒され。井地はむくろに埋れて。フシ深田は血汐ぞ滿ちたりける。詞只一筋の馬踏故。左右を許す油斷にて。堤の下より射上る矢片岡が咽笛に。過たすはつしと立つ。軍にはし疲れたり。大事の急所あなく。よし〳〵今は是迄と。刀を咽に突通し。形は艸に藏せども。譽れは上古末代に。類なすのゝ。三重青嵐。フシ共に靡す。白旗は雲間に出づる弓張の。六日の月も晝の影光堂の西面。若葉は埋めぬ櫻が谷龜井の六郎重淸は。萌黃匂の腹卷に。五枚甲の高角を。內にくゆらす名香は夕の烟ほの〴〵と。海士の燒さし汐釜も浦に傳うて艸摺も。縅も匂ふ出立にて。得手を提たる十文字。やり過せじと賴朝の。本陣目がけ駈出しは。山路を過る郭公。枝を放るゝ翼にて。フシ見かへる氣色も無かりけり。地寄手も見るめ四つめ結。旗も士卒も靡せ

て。佐々木の三郎盛綱軍勢に聲かけて。詞高館殿のお腰付。長門印籠。フシ餘すなと下知の采。地詞に迫る丸太の蘆次。麥野の五郎龍虎の如く駈向ふ。詞シヤ物々しと重清は。地會釋に餘る花菖蒲。六日の露の面ざしも色白く柔和にて。心は奬噲張良が。今度の軍を限りぞと。鎧物の具構ひなく刺通し突通し。手痛く働く鎗先に何かは以て堪るべき。地二人一度にかつぱと伏す。象鼻に卷し百合の花。フシ形もためず成りにけり。地此勢に追立られ。引追けば入替り。後陣の若手加勢の組。殊更よき太刀佩いたるにや。柴田の四郎といつし者。刃向いたる長刀を。冠の板にて受流し。かけて通るを飛違へて横に薙ぐ。柴田が腰を車斬り。二つになつて失にける。地今は是迄軍はしつ。最後の廣言夕影も。待たぬ命は陽炎の飛ぶが如くに勇立只。詞賴朝公を討取つて鬱憤の散ぜんと喚叫んで駈出す。地妄を大事と盛綱も。防ぎ戰ふ其中に。詞照井が弟鷹野四郎身不肖には候へども。鷹野が鎗と鎌倉に人の知つたをお相ぞと。素鎗構て指向ふ。重清は十文字。兩將互に手だれと手だれ。地入違ひ駈けちがひ。甲の星は打物の。金光耀き。きら〳〵〳〵。きらり〳〵ときらめくは。フシ紅蓮の氷も斯くやらん。地骨も碎け身も裂けと。暫し戰ふ其内に。詞鷹野が高股突通され獲む所を重清は。透さずすつと折入つて取つて抑へて首を掻き。立上らんとせし所を高井の源吾下り合うて。龜井が鎧の透間をば。疊かけて刺通し。終に首をぞ打落す。地甲も匂ふ鬱髮苔る梅も綻びて。朝の風に夢破る。浮世の眠。三重醒めて行く。地山の手を指し馬上にて。和泉の三郎忠平が。鎌倉殿を一太刀と。鱗の魅入れし性根さへ。時至らんと白糸縅長刀振つて駈廻る。責口は畠山。懸命名譽の重忠が。氣轉奇妙の下知なれど去年の手懲に進み兼ね。日の目拜まぬ鼠。フシ穴へも這入心地せり。詞仁科團藏踊出て。本田に素縄引せんと。大太刀振つて切掛る。忠平は誰ぞとも白柄の長刀追取延。地打て來るを請流し。ひらりと返す切先に。眉間をちよいといはされて。途方失ひ東やら。仁科は馬の下腹へ。フシ我と飛入る夏の蟲。地緋縅の鎧武者。いづれあやめと二人運。引きぞ傾ふ和泉殿廣瀨兄弟見參と。得物〳〵を掻い込うで。詞去年の暮の大節季。賦はる首が二つ迄。つまが騙うて

いき惡ひ。此算用で帳消と。左手右手へかけ向ふ。忠平につこと打笑ひ。古借錢の御算用。扨は命の劃殘り。匪毛よりも猶輕く。しのぎはゑん〳〵かつかくと。地暫しが間戰ひしが。左右拂ひし長刀の。水車にや乘つたりけん。兄弟一度に二二ンが四。フシ劃つてはかなくなりにけり。地本田の小五郎近富は。關東無二の大勇力。小櫻縅の胴丸に。連錢蘆毛に鞭打つて。好む處の長刀を柄も四尺双も四尺。合せて八尺の長刀を扇の如く閃かし。駈け廻り追ひめぐり。くるり〳〵くる〳〵〳〵。車の火花は切先に馬は巴に白泡はみ。五色に綻れる厚總は。羽をひろげしかうらんの。フシ番が舞ふに異ならず。地互に蹴立る馬煙。孰れを和泉。孰を本田と分けざりしが。兩馬が合に落ちさまに。本田を下に組敷いて。透さず首を掻落し。詞立上らんと振りかへれば。早高館に煙立ち。地火焔のぼつて雲を燒く。神變鬼沒の三郎も。長刀からりと彼所へ捨て。運盡きて忠平が。最期の體を末代の手本にせよと云ふ儘に。腹十文字に掻切つて活るが如き仁王立ち。天晴惜き武士と。譽る聲又勝鬨の聲も。靜けき源や。君仁愛の深ければ。臣も禮義を失はず敎の道も亂れざる。國家安全億萬歲變らぬ。御代こそ目出度けれ。

義經新高館終

心中ふたつ腹帶

心中ふたつ腹帶

作者　紀海音

地草に木にたとへて見れば若衆梅。女は櫻坊主の山吹衣ま袖より。牡丹のさかりりんとした　フシ武士の姿はおのづから。地色うぶにそみたる紅の園生のたねや末葉まで。わきて遠州濱松は御家中廣き其中に。小身なれど手を置いておもき山脇十藏の。屋敷造のお物數奇其折ふしの月花に。かへて嗜む武藝の道砌も深き藪垣の。向ふに目あての埜を構へ本弓の稽古的。戸田卜齋を師範に立て門弟沼津本之進。南條定七秦源八いづれも弓引きつがひ。拳を固め肘を張り鏃を揃へ聲をかけ。我劣らじと爭ひしは　フシいかめしう。こそ見えにけれ。地色卜齋はつく〳〵と稽古に氣を付け目を配り。詞ホウおの〳〵見事〳〵。射法力の入れ所村の肉置矢の輕重。羽の吟味に至る迄殘る所はなけれども。地どうでも體が固まらぬあながち人に射勝たうと。思ふばかりは勵みでない一ぶんに油斷なく。工夫の心坐りなば自然と的中致すもの。詞既に孔子の曰ふにも射る事は君子に喩へ。あたらざれば其身に求む。手前を直し隨分と功を積むこそ第一と。フシさも細やかに云ふ所へ。地色主山脇十藏は同苗半兵衞諸共に。かしこに歸れば卜齋。詞ハア十藏殿お歸りか。豫てお心安さのまゝお留守をも顧みず。地射場を借用仕りゆる〳〵稽古致す段。無禮の至りと相述ぶる。詞十藏會釋して是は扨痛み入る。よい場を持てば品により物干にさへ貸すならひ。地ましてや御念比といひ殊には豫て極の稽古日。在宿致す筈なれども。同苗半六只今は名も半兵衞と改め大坂の住居。町人に罷りなり候へども當所の人數改めにて。年に一度は極まつて判形に罷り越す。其儀によつて今朝より御役所へ召連れ出で。それより一家のはし〳〵へ暫しの對面則ち今夜八ツ立に大坂へ立歸る。用意何かに取紛れ無亭主の段御免あれ。コリヤ半兵衞。

以前のお師匠友達衆對面致せと詞の下。半兵衛殿懇に。詞先づ以て卜齋樣。御息災に御凌ぎ。ひとへに滿足仕る。師弟のちなみ折々は御悤の御見舞申す筈。何をいうても只今は商人の身の忙がしく。地年に一度の參着さへ昨晩參りて明朝は。罷り上る故。おのづからの如才者御免し下さるべし。詞李之進殿定七殿。源八殿を始めとして御無沙汰はかり。地顏見れば昔を思ひ懷かしい。先づは御無事で珍重と身は町人を卑下しても。どこやら武士の花　釵　フシ八百屋さするぞ惜しかりし。地色卜齋は手を打つて扨も〳〵久し振り。山脇半六時分より殊の外肥滿にて。究竟な若者其骨柄を見るにつけ。思ひ出すはこなたの藝。今迄鍛錬せられなば。恐らくはつかうせんものと。常々皆とも此噂町人とても隱し藝。折節射ても見らるゝか。いかに〳〵と問ひかくる。詞半兵衛は打笑ひ。仰せの如く私めも折角習ひ受けたる弓。何しに捨ては致さねども。町屋に道具散らばはねばもとより學ぶ人もなく。地宮地を心懸くれども。流行るは稽古淨瑠璃で。半弓も見あたらず。たま〳〵事に爪時分東寺駒野へ行く足を。祇園の方へ駈廻り稽古を見ればぞくぞくと。遠慮も忘れ肌押脫ぎ。よつびきひやうどやる風情。詞座中擧つて舌ぶるひ。庇弱な男ぢやが。地さつても怖いと弓力と。手を置かれて歸りしも偏に師匠の御蔭ぞと。あだ粗略には存ぜねども青物賣りの風情ゆゑ。殘念ながら何時となう。消えて仕舞はん是非なさと　フシへり下つてぞ語りける。詞ム、さこそ〳〵推量した。五年十年射ぬとても心を捨てねば下らぬもの。地幸ひ埜も構へてあり久しぶりぢやに只一手。其上是なる李之進前かど互角の藝なりしが。詞荒むと勵む違ひにて及びはせまいさりながら。地互に挑みし所緣ありいざ立合つて勝負あれ　フシはや〳〵見んとぞ勸めける。地色半兵衛押退り左樣の論は武家の沙汰。我々しきが何とゐはや。御免〳〵と辭退する十藏は聲をかけ。詞未練に見ゆる半兵衛。差當てゝお師匠の仰せを背くは無禮なり。手練達者の沼津殿町人の身が射負けしとて。少しも恥にならぬ事。地罷り出でよと弓と矢を取添へて與ふれば。答に及ばず立上り。詞李之進殿さりとては。久しうぶりのお相手と。地云へどもをさめし不承顏。かぶりを振れば半兵衛相手の不足は兎も角も。不興に見ゆる御出でと詞

をかくれど返事もなく。苦り切つたる其風情定七見かねつつと立ち。詞時によつては氣不精に進まぬ事も得てあるもの。地某相手と云はせも果てず李之進聲を上げ。詞アヽ是々入らぬもの。師匠の御意を承る我等さへ動かぬに。外の媒介心得ず控へられよと詞の下。然らば拙者參らんと源内やがて立つ所を。鐺を取つて引留め。ハレヤレ世話をやく樂かな。相手になればいづれもの名が廢るが合點か。地且はお爲を存ずるゆび(ゐトアルベシ)是非〳〵お控へなされよと。物ありげなる有樣に　フシ座はしらけ。てぞ見えにける。地色半兵衛もなまじひに無念に及べどさらぬ顏。李之進殿手が惡い貴殿の藝を仕上げしとてさのみ高うは吹かぬもの。地今は格別其以前互に勝負を較べし時。五社明神の後堂百本が一本も。徒矢なしに見せつけ又。掛川の大會にも二日續けてゐもぎに勝ち。其外機により折にふれ餘程手ごりの覺えがあろ。その意趣ならば猶以て。わつさりと立合はん。フシいざ御出でといひければ。地李之進えせ笑ひ。珍しい事いふ男。シテ先づそちが某と弓のこぶしに勝つたとも。ハテ先立つて知れた事シヤ存外千萬な。其時相手に立つたるは慥か山脇半六とて。御家中の武家友達。大坂の八百屋づれ半兵衛とやらん素町人相手に取つた覺えがない。地いはれぬ弓を引かうより分相應に算盤の。利合を引くが近道と。さも憎體に言ひこなす。地半兵衛今は堪忍の胸に迫りし顏色を。卜齋早く見て取つて眞中につゝと出で。詞よしない所望仕出して半兵衛手前某が何とも迷惑致せども武士の權威を立てらるゝをたつてとも申されず。と云うて是で果してはどうも一座が濟みにくい。中立てゝ了簡せん。弓の稽古は取置いてこれから柔術の勝負を見よ。地さあ〳〵急いで立合へとあせれば半兵衛力を得。いざお相手と差向ふ。李之進尖り聲。詞武士町人の辨へなく再三のお望みは。お師匠にも曲なしと云はせも果てずヤア無法なり。詞李之進。もとより弓馬は武士の藝。取手柔術は町人も身の要害に嗜みて。すはや取るぞと立向ふに。武士は相手にならぬとて懷手してゐらるゝか。是非立合はざなるまいがの。地然らば有無に及ばぬ事。さあ〳〵勝負とせり立つれば。義に詰められて李之進不承々々に身拵へ。嚴つがましくいざ來いとかさにかゝつてつゝと寄る。心得たり

と身をかはし互にあてつけ跳ね合ひしが。半兵衞は手利の達者。ほぐれて蹴返す腰の骨。仰向にどうと倒れしはフシ心地よくこそ見えにける。地色塵打拂ひ李之進はふ〳〵起きて大聲上げ。地表裏者の賣人め。重荷に草鞋締めはいて。平生荒氣に働く故。地畢竟相撲同前の暴れ業は間にあはぬ。いで眞劍の切先に命の取手を見すべしと。既に乃に手をかくれば。詞ム、町人の双にて侍首の柔術を見んと。地飛んでかゝるを定七源八李之進に取りつけば。十藏は半兵衞を引止めて叱りつけ。詞お師匠の御差配にて一旦の無念を晴れ。喧嘩は互に五歩の持ち。事相濟んだ其上に縱へ先から募るとも。地最早見ぬ顏聞かぬ顏穩便にをさまる筈。此上ながら卜齋老李之進殿心底に。憤りなき樣に偏に賴み存ずると。さも神妙に云ひければ。卜齋は打頷きいかにも某受取つて。重ねて盃させ申さんとかう云ふ間に日も暮るゝ。最早お暇申さんと皆打連れて立ちければ。李之進振返り。詞たま〳〵腕が利いたとて。いきり立つは商人故。武道は格別劍術が。知りたくば此方へ習ひに來い其時は。さつぱりと首と胴との別れの指南。地ぎやつと云はせて見すべしと。肘押張つて睨みつけ。さも憎さげに立歸れば。十藏親子は送り出て。慇懃に一禮し　フシ次の一間に立歸り。地色互に今の無念さを胸に持てども持たぬ顏。十藏は何となく。詞コレ半兵衞。夜の短いに八つ立ち。草臥も續いたくつろいでお寢やれ。ハア是は勿體ない。若い時の辛勞は買うてもせいと申します。地御老體の養ひが大事先づお休みなされませ。ホウ老いては子に從へとは得手勝手の諺。然らば行つて寢る程に。追付けまどろみ召されいとオクリ言ひ捨て〻奥にぞ　フシ入りにける。地色半兵衞は差俯向きとつおいつの胸の內溜息ほつとつき出し最前の惡言を無念と思ふ私より。詞百千層倍口惜しうお腹が立つてなりますまい。天晴山脇十藏と。誰に劣らぬ武士の身を。地半兵衞といふ町人を子に持ち給ふ故により。いかい恥辱を見せまして面目なうてなりませぬ。詞姿形こそ町人なれ。もと侍の悴ぢやもの。地入つて死んでくりよ。イヤ〳〵それでは仁右衞門殿。よしない武士の子を貰ひ。憂目を見ると悔い恨み。地歎き給はんおいとしや。武士と町人二人の親。中に立つたる半兵衞は。いづれへ孝を立つべしと。スヱテ拳

を。握り居たりしが。地短氣の聲のせき上げて。兎角堪忍なり難く。討果さんと覺悟を極めそつと立つて目を配り。奥を窺ひ床にある。硯引寄せ行燈の。火もかき立つる筆の跡死ぬる仔細は書かねども。是迄の御恩の書置一通り。さらさらと認めて。卷き納めたる箱の蓋。詞新靱油懸町八百屋仁右衞門殿。生所遠州濱松。地山脇氏と書く所に奥よりけはしき足音。南無三寶と懷へ隱すとはいざ白無垢に。尻ひつからげ鉢卷しめ。手鑓かい込み十藏は。逸散に駈出づるを半兵衞やがて駈塞がり。互に顏を見合せ。フシハツト驚くばかりなり。地色半兵衞は取縋り。詞死出立にてあわたゞしく。逸興千萬何事と。地問はれて猶も氣を苛ち。詞ヤイ云はずとも知れた事。元來今日の口論も。もとを糺せば此十藏。娘が事を先立つて。きやつめが妻に貰はんと。ひたすら申越したれども。無骨者を知つたる故。再應使を受附けず。地山名郡の代官。豐田新之丞と內緣を取結び。家督を立つる欝憤にて。思ひも寄らぬ汝に迄。恥を與へし其段は許してくれよ半兵衞。詞エ、さぞ無念口惜しかろ。見てゐる親を推量せい。卽座に討つは知つたれども。地汝に怪我のある時は養ひ親への言譯ない。それ故事を鎭めたり。半兵衞が一分を十藏立てゝやるべしと。又飛出るを押しとゞめ。詞おせきなされな待つてたべ。私が名を下さじと。命に換へての親の慈悲。忝くは候へども心を靜め御思案あれ。地出合の詞爭ひにも恥を研くは武家の事。地町人の半兵衞が恥といふは駈落か。身上仕失うたるか。是より外は叱られても。ぶたれても踏まれても。此境涯の今の身に。一分立は候はず。然るに何の御生害思しとゞまり給はれとフシ事をわけてぞ詫びにける。地色十藏は聞入れず。詞其方ばかりへ義理でない。大坂の養ひ親仁右衞門方へ聞えても。たま〳〵國へ立歸り恥辱を取るにきよろりと。實父が脇見してゐるはよく〳〵半兵衞惡事ぞと。地疑はせては猶立たぬ爰を放せと詞の下。詞ハアさりとては聞分けない。其仁右衞門も町人。國元へ行き手を廣げ。榮耀をしたと噂せば。悔み腹立ちあるべきが。喧嘩の場を穩便に濟ましたと聞かれたら。地いか程か喜ばれん少しも氣遣ひ遊ばされな。詞御身の武士引當てゝ世間の氣々も暈られず。地輕々しき生害はお年に似合はぬ御短慮。殊に追付妹が家督定め候由。

子孫のためと思召しとゞまり給へと樣々に。スエテ心を籠めてぞ諫めける。地色十藏つく〴〵聞入つてやう〳〵と打頷き。詞ムウ思ひ廻せば一理あり。地然れば生害とゞまらんと持つたる鑓を下に置き。フシいう〳〵とこそ坐しにける。地色半兵衞は喜びて御聞入れ忝し。とてもの事に御誓言承らんと根を推せば。侍冥利大小かけ神以て僞りない。扨其方はいふ如く。町人の氣になりぬいて。武士の恥は用ひぬな。ハテ扨あまり御念が入る。毛頭虛言仕らぬ。ムヽ然らば慥かな誓言〳〵。ハア何が扨町人冥利乞食になる法もあれ武士道は立てますまい。イヤ町人の誓言は利慾に迷へば不斷も立てる。汝に望む誓言は最前書いた狀箱。只一目見て安堵せん。地其誓言が望みぞとせり立てられて半兵衞。ハツトばかりにうろつくを。十藏驚て立寄りて懷中したる狀箱を。引つたくれば詮方なく差しうつ。フシむいてぞ居たりける。地色十藏涙をはら〳〵と流し。詞汝が短氣を知りし故。襖の間より差覗き。最前よりの有樣を一々殘らず見屆けし。地二人の親の恩ばかり思ひ出して大殿の。御恩の程は忘れしよな。詞十二の年より御前へ出で小姓數多ある中にも。勝れて御不便加へられ其餘慶にて十藏も。武士の御加增頂戴し。喜悅の眉を開きしに。長崎よりの客僧。賢藏主といふ相人。汝に双の難ありと密かに殿へ傳へし由。殊なう驚き思し召し。御前に人なき折節某を招き寄せ。しか〳〵の御咄天命とは云ひながら。陣中の討死か忠義の爲に相果てば高名ともなるべきが。短慮の生れ出頭の。當言咎め口論に討果さんは無慚なり。町人にして一命を繫げとあるの重き御意。地もとより迷ふ親心何が扨我子の爲。畏り奉るとお受け申してそこ爰と。尋ぬる內に緣あつて仁右衞門方へ契約し。お暇乞ひに汝をば召連れ出でし其時の。亡君の御喜び今見る樣に忝し。詞即ち只今差してゐる。藍鮫の脇差をお膝元より取出し。長く武道の絆を切り。町家に住めば一腰は。命の親とも主君とも。敬うても飽き足らず。双は命を亡せども。助かるも又双なり。地輕輕しく用ひなと御手づから賜りしは。汝を守る寶劍なり。愛の深きは親なれども我子を君に差上ぐれば。忠義の爲に一命を惜しむなと敎ゆるに。町人にして其方が安穩なれとの御憐み。親十倍の主君の恩それを忘れて短慮にも。討果

さんとは何事ぞ。天命知らずの不忠者と。スエテ口說き立てゝぞ。泣きにける。地色稍あつて涙を押へ。狀箱をしつかと封じ。我印判を取出しとぢめにひしと押認め。半兵衞が前に据ゑ。心を靜めてよつく聞け。詞其脇差は君の一魂。此印判は身が魂。書置開くは死後のこと。それをとぢるは大切な命の門を固むる封印。地色堪忍の締口を開くまじとの誓文にも。起請文にも此文箱。肌身を離さず懷中し是神明のお祓とも。守りとも印文とも誓ひを立てゝ忠孝を。思はゞ身をば顧みて。死んでくれるな半兵衞と。心詞も瀧津瀨に袖は。筏と浮きにける。半兵衞前後涙にくれ物をも云はず居たりしが。押直り聲を上げ。詞ハア淺ましや勿體なや。主君の御恩親の慈悲養父へ孝の三つの海。地渡り較べて數ふればたとへ我身を百千に。碎きても飽き足らず生あればこそ骨に沁み。胸に通りし御意見を何しに餘所になし申さんふつゝと心を取直し武道は口にも出すまじ。過り入つて候と　スエテ手をつかへてぞ詫びにける。地色十藏につこと打笑みて出來したり滿足せり。いよ〳〵相違あるまいな。詞ハア何が扨疑へさぬ。ヲヽ嬉しや落着いた。地是もおぬしが可愛さと。フシ又打解けし涙なり。地色はや丑三つの鐘の音に續くしやん〳〵馬の鈴。門外に聲高く。詞サア旦那殿八つが鳴る。あぶつけ跡付蒲團ばり。地早う〳〵と呼び立つれば。半兵衞ハツト立上り時刻に及ぶ御暇ヲヽヲヽまめで。御堅固で。是程目出度い別れはない。さらりと笑うて〳〵と。顏見合するにつこりも後の。名殘りと　三重へなりにける。

第　二

フシ難波津や。賑ふ門も小夜更けて。鼾較ぶる鐘の聲。數は幾つぞ八軒屋。海士の漁とかゝげたる。宿の行燈しん〳〵と。濱風あをつ上り場に。遠近人の下り舟。押並んでぞ擧り寄る。地船頭眠りを呼覺まし。詞サア〳〵着いたぞ上らしやれ。置忘れのない樣に。地諸事改めてといふ所へ。泊り宿の亭主。三笠屋與次兵衞出で來り。詞待つた〳〵船頭

衆。改める事がある。宵の内から我方に上の衆ぢやが二三人。駈落者のお尋ね。嶋原の色ぢやげな。地殘らず船を吟味して頼む〳〵と舞けば。船頭ども聲々に。類船の内やう〳〵と女中は二人ばつかり。一人は内儀樣一人は若いぼつとり樣。それ〳〵そこへあがらるゝ。勝手次第に穿鑿とざわめく内にしと〳〵と。苦もる露も情知る。ゆかりに靡くなぎ袖や。小褄に色を抱帶はでな姿の女房に。婆の連立つ其風情。荒れし軒端に三日月の。フシ光こぼるゝ如くなり。地色與次兵衞立寄り提灯の。影に見るより打頷き。詞マア大方これくさい者。ぬく〳〵と駈落ぢやの。地追手の衆が此方にぢやいざござれいとせる所へ。次の舟より半兵衞は遠州よりの歸り足。何心なくあがり場に男女のわめく聲。立寄りて小提灯ヤア女房か。半兵衞殿。これ伯母樣扨々と。互に餘儀なく見えければ。與次兵衞は猶うさんげに。フシ控へて樣子を窺ひける。地色半兵衞はしとやかにどなたかは存ぜねども。誰も心のせく時は人違はあるもの。まさしく是は身が女房外をお尋ねなされいと。云へども與次兵衞喰はぬ顔。詞扨は左樣かいか樣にも。町方のお内儀にはばつとかうとな御風俗。御亭樣なら一連かと。地思へばさうでもありそむないはれやれ御麁相申したと。オクリ詞を〻殘し歸りける。地色半兵衞打笑ひ麁相者と悪銀は。いかさま世間に多いもの。して先づお千代伯母樣と。何故の上のぼり。お袋樣は御無事なかどうぢや樣子が聞きたいと。詞の内よりせき立つてお千代は軈て取付くを。伯母は駈寄り引放し。詞エ、未練な。なんにも云やる事はない。地こつちへおぢやと手を取るを。半兵衞とゞめて與醒め顔。詞伯母御はいかう不機嫌なが。女房に恨みが身にあたりか。地何とも合點の行かぬ事お千代どうぢやと尋ぬれば。伯母はいよ〳〵氣を悶え。詞扨しら〻〳〵しい空とぼけ。それに嵌つてお千代はの。とぼけ倒れになりました。地はあこれも云ふまいさあ來いと。急ぎ立つれば半兵衞は。なほも向ふに立隔て。詞それは餘りに頑固。疑ひまがひもある習ひ。善悪共にいつまでも樣子を聞かんと詰ちける。地お千代涙の下よりも。問はぬもつらし問ふも亦。武藏鐙のかけてだに。知るし召されぬ事ならば。聞いて驚を。フシかけてたべ。地色お留守の内に思はずも。姑出の力なく。しよう事なさに

すご〳〵と里へ戻りて母樣の。朝な夕なの煙さへ立兼ね給ふ其中に。詞四五日かゝつてゐる内に。此伯母樣が京參り。立寄り給ふを幸ひに行くへ定めぬ下り舟。地淀まぬ水の緣にて。相見る顔は變らねど。變るは今の我身の上。男の心は川の瀨に譬へてあれど自らは。飽かれた仲とは思はねど。母樣や此伯母樣は。お前も一つ辛さぞと恨みて今のすね詞。言譯をして給はれと口說き。フシ歎くぞ道理なる。地色半兵衞ハツト怪顛して。騷ぐ心を押鎭め歎くは道理さりながら。不慮に爰にて出逢ふが夫婦の緣の切れぬ故。思案しがくもあるべきぞ氣遣ひすなと言ひ宥め。詞これ伯母御。お腹立ちは聞えたが身どもへあたりは不了簡。當月初めつかたよりも參宮致し直ぐさまに國元へ罷り越し逗留は只三日。其外は皆旅の空狀通致さん樣もなし。地留守の間の言事を半兵衞も一所とは。廻り過ぎたるお疑ひ。機嫌直して此上の相談あれと詫びければ。詞ナウあてどのない事恨めうか。こなたと豫て相談の慥かなしるし是見やしやれ。姑御の直筆。お千代をば去狀。夫婦の仲の退き去りは誠の親でも我儘に。さつぱりとはならぬもの。地腹貸さぬお袋が心一つで書かれうか。是でも物が云はるゝかと。半兵衞に投付くれば。不審ながら取上げてつく〻〳〵見れば暇の狀。是はとばかり差俯向き二度。フシ呆れて見えにける。地色伯母は恨みの詞さへ胸に餘りて目に涙。聞えぬぞや半兵衞殿。こなたは元が由ある身仁右衞門殿も歴々。千代が一家は吹けば散る。こちと風情は疎まれてももとより緣はきたないもの。女房さへかはゆくばそこに隔てはあらぬ筈。姑御のさがなうて取りにくい御機嫌に。辛抱するは何故ぞ男の顔を樂しみに。暮す女房に口出して鼠員こそなるまいけれ。陰日向になる程の氣骨は折つてやられても。さのみ人は叱るまい。云ふではないが可愛そに物も見事縫ひまする。書出し一つする程の目は親達があけて置く。紡績なら人あひなら。器量はこなたの覺えてなり。ちつとの落目は華美なれど若い時が二度はないさのみ無理にもあらぬ筈。花の盛りを狼狽へて京の親元三界へ。行てもゐられぬ貧しさを脱み合うても濟まぬ故。身の片付きを奉公と思ひ定めて連れて來た。さぞ本望でござらうと。たくりかけ〳〵。フシ口說き。喞つぞ道理なる。地色半兵衞始終を聞入つて成

程成程一通り。かう見た所は私に恨みはことわりさりながら。神以て存ぜぬ段。地いか樣の義も致さんと。立寄る拍子に懷中より。狀箱の落ちけるを伯母は取上げつく〴〵見て。詞宛名は八百屋仁右衞門樣山脇氏半兵衞とはこなたの事ではござらぬか。狀通は致さぬとぬけ〳〵とよう云はしやるなう。地定めしお千代が事であろどのよな慘い談合ぞ。封切つて見ましよわい。詞いや〳〵さうした物でない。此方へ遣はされい。ハテ紛れない隱すまい。地讀んでなりとも腹愈んと既に封印切りかゝれば。半兵衞周章てもぎ放し箱を開くれば忽ちに。疑ひは晴るれども親の意見の命の封。切るに切られぬ恩愛の深きに代へてさがなくも。養ひ母の胴慾さ思ひ廻せどさすが又。隔てし中と義を立てゝ口には出さぬ品々の。恨みはせめて目にもるゝ　フシ涙に晴らすばかりなり。地色お千代はくわつとせき上げて。詞慚しやつたの抜きやつたの。地其心とは知らずして母樣や伯母樣の。恨み誹りを言ひ宥め半兵衞殿はいとしげに。さもしい心はござらぬと發言放つて今更に。面目ない恥かしい恨めしの男やと。肩に喰ひ付き膝に寄り身を悶ゆれば袂より一通の文落散つたり。半兵衞ちやくと取上ぐれば其手に取付き嚙付いて。大事の物ぢや戻してたべ見せては惡いと周章てしを。取つて突退け睨みつけ。詞去られた樣子が知れかゝる。勿體なくも母人を邪險な心と恨みしが。却つて慈悲であつたよな。暇を取りは取つたれども不慮に遇うての間に合ひ口。間男の出合ひ宿。伯母御のいかつい返禮に。痴話文讀んで聞かさんと。封押切つて繰開けば。コハいかに最期の一通。地ハツト思へど心を鎭めて讀上ぐる。形見ながらに書置の事。一つ我身拙うして半兵衞殿と夫婦になり申す上は。お二人樣をば誠の親より大切に思ひ〻〻。されども足らはぬ心からお氣に入らぬのみならんに。今迄の御憐み。天山忝く思ひ〻〻。一つ夫婦となり申してより。つひに一度の詞も荒らし申さぬ中に。思ひも寄らぬ別れを致し候事よく〳〵の緣の切目と悲しさ此事に候。一つ高麗橋の伯母樣へ。歸り候事も恥かしく石町の伯母樣。京の母樣いづれも貧しき暮らしに候へば。身を寄せ候事も痛はしく候。かれこれ思ひにせまり命の際になり申し候。殘り多きは盡きせぬ仲。取分けかはゆきは宿りし我子。共に消失

せ候事わく方もなきこの身の因果。夢の世の中とは申しながら。又改めて夢のやうにかへすがへすもはかなく思ひ〻〻かしく。地色ハツトばかりに讀み終り。三人共に差俯向き。スエテ聲も立てずに泣き沈む。お千代やう〳〵顏を上げ。とやかう思ひ直しても。夫に離れ長らへてあられぬ命と覺悟して。此世の名殘り母樣にお目にかゝつて其後は。身を淵川に沈めんと思ひ詰めしに伯母樣に。逢うての後は折もなく。今迄長らへさぶらふぞや此世の緣は薄くとも。未來で長く添ふべしと。樂しみにした我身をば。慘いとばかり半兵衞を。じつと見やりし目の內に。恨みと戀の二瀨川。フシ滿ちくる汐ぞ涙なる。地色伯母は思はず聲を上げ。アヽしほらしの心やな。世には去られた夫への。面當のまた意地のとて。つい嫁くもあるに扨。命を捨てゝ先の世を頼むと迄はいにしへの。嫁鑑にも勝るべし。さりながらとつくりと合點をして見てたも。そなた一人を親伯母が。賴み切つたる杖柱男へばかり道立てゝ。二人に孝はないものか嫁入さうとも云ふまいし。奉公さしよとも申すまいいかなる貧苦を凌いでも。まめな顏見りや嬉しいぞや。必ず死んでたもるなと　フシ歎き。佗ぶるぞせつなけれ。詞半兵衞涙押拭ひ。思ひ詰めたる志滿足せり過分なり。何を隱さん某も國元で口論し。打果さんと思ひ詰めはや書置まで認めしを。親十藏の御意見にて命を緊ぐ封印を此狀箱に捺されし故。深き疑ひ受けながら開く事なりがたし。半兵衞が書置は父が見付けて命を延ぶ。今又そなたの書置を半兵衞が見て助くるも。地行末目出度い吉左右なり。町衆又は同行中たゝき廻して近日に。再び內へ呼戻さん伯母御お千代を暫しの內。こなたへお預け申したい。詞ムヽ口では見事さばけれど。いつまで草のつり詞。地色合點がゆかぬとかぶり振る。半兵衞は思案して。詞然らば今より日を切つて五日が內にさつぱりと。地お千代を內へ呼入れん。それ迄のお情を了簡あれと手を摩れば。伯母もやう〳〵聞入れてさうさへなれば互のため。もしも五日が過ぎたらばこなたの內へ持込むぞや。詞それ迄何しにせつぱしで。手廣う迎ひにやりまする。違ひはないの。地誓文と。互に堅めゐる折ふし。駕やりませう駕やろい。フシやりましよいとぞ云ひかける。地色幸ひ東も白んだり人目を忍ぶ夫婦

づれ。千代をば乘せて駕のとに。付けしねうちも坂東聲。フシ實盛なりと人や見ん。地かゝる所へ與次兵衛が。噂に寄りし亡八の者はた〳〵と駈來り。詞此駕なは紛れ者ソレ引出せと罵れば。半兵衛駈隔て。近頃無體千萬。此内は身が女房。荒氣を出さずと通られと。地ことわり云へば聞き入ぬ。お内儀樣拜みたい〳〵。フシとばれかゝれば。詞ヲヲ女房の開帳なら。先づ三百目持つて來い。ヤア僞るまいぬかすまい。それ見よと駈寄るを。地ならぬと支へて入り亂れあなたへ押合ひ。こなたへくづれ。暫し捻ぢ合ふ其隙に。一人はづして駕をあけ。提灯かゝげびつくりと。詞こりや違うたと飛退けば。地皆一同に首尾惡く揉手をして腰かゞめ。詞ハハ〳〵〳〵。結構なお内儀樣。是をついでにお近付き。笠の地御用に立ちましよと。フシ云ひ捨てゝこそ逃げにけれ。地色半兵衛怒り押鎭め。本意なけれども親よりの意見の狀箱押戴き。堪忍するが町人風。女房は又當世の風世間の人が誹らうが。母者人がくすべうが。此ばつとした俤を。我等が宿のお千代ぢやと打連れ。てこそ三重へ歸りける。

第三

フシ世の中はしんき〳〵の新うつぼ。地水火風を借住居。先陰早き八百屋見世内證ともに吉野葛。練れた親父は結構者ふきの姑にが口に。嫁菜の袖をひたし物千代とはあだの女松茸。二世の緣さへ瀨にかはる。淺草海苔と身は焦れ。何としやうがも松露にも。心ばかりをつく〳〵し。筆には盡きぬ憂きふしや。寄庚申を精進のだしに使うて半兵衛は。晝より出でし留守まもり仁右衛門甥に嘉兵衛とて。地戀の物馴れ譯知りが首尾をくろめる墨硯。手代利介が算盤も。フシ氣のとく〳〵と彈くなり。地色後世のもとでの念佛講闇路を照らす小提灯。仁右衛門夫婦奥より出で。詞ホヽウ嘉兵衛。寄特に精が出る。若い間は銀ずき。年寄つての談義ずき。是人間の一大事同行結の掛錢も。ない袖振つては つきあはれぬ今宵の當屋はいつとても。法度を背いて夜食が出る。酒もしゆんだら夜が更ける。半兵衛が追付け戻る

迄見世をばあけな寢まいぞと。老の繰言こまやかに。詞のあとも針を持つ姑はつゝこど聲。詞半兵衛は今夜戻りやせぬ。表も裏も締めて寢や。地夫婦が聲で叩かずば必ず戸をばあけまいぞ。合點がいたかと云ひければ。詞コレかゝ。さがなう物をおいやるな。蓑子に來てから今日迄。夜泊りをせぬ半兵衛が。庚申參りすればとて戻るまいとはなぜおしやる。サア半兵衛の參りやつた庚申樣は石町。伯母の所へ先度から嫁の千代めが來てゐるげな。顏突合せ夜もすがら庚申待をしをらうと。地女の性は嫁や子の中も法界惱氣口。内外の者の聞く前も迷惑さうに仁右衛門は。詞はて扨それもまゝにしや。見ざる聞かざる云はざるが。庚申樣の御誓願。知らぬが佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と。地繰る數珠の。呟きながら打連れて。オクリ表へいこそは出てにけれ。フシ接木の。枝は。雨露の。惠みも薄き桃櫻。半兵衛夫婦が身の上に今こそ。思ひ知られたれ。地色五日と限る約束の今日さへ暮れて初夜の鐘。覺悟は胸に極まれど同行中の扱ひを。もしやとばかり頼みにて。知死期待つ間の二人連親の目盜む夜歩きは。我宿ながら忍ばしくそつと潛に耳寄せて。フシ内の樣子を窺へば。地色嘉兵衛は筆を持ちながらつく〳〵物を思ひ顏。詞ナント利介。お婆が先の氣相でも。寺同行の御意見で。邪險の角が折れうかい。イエ〳〵存じも寄らぬこと。生れ付いたる熊手性。今度の起りも根が慾から。按摩取の印可めが。跡先なしの饒舌口さる浪人の娘とやら。年は十八數銀は大金で七十兩氏系圖より確かなる商人へやりたいと。頼まれますと聞くとはやわゝしいわろが小聲になり。どうやらそれは耳よりな。かねぐ〳〵お主も知る通り役に立たずの嫁御寮。地さらりと去つて其跡へどうぞ世話して貰うてたも。畑をして來い一杯と天目酒に呑込んで。先へ言込むこちらへも。返事聞かせてひつそ〳〵。頷き合ひの最中と。聞くさへ胸もひいやりとお千代はそこを立退けど。半兵衛はまだまい〳〵と。フシ這入りたさうに覗きゐる。地色袖口取つて引戻し扱衆の返事迄。待つこともない我々が最期の衣裳も守り迄。小宿へ出してある上にうろ〳〵そこに居給ふは。今の咄にお心が殘りや。すると恨むれば。詞アヽよしない事をいふ人かな。おれは心が殘らねど。去られたそちを此内へ。呼戻したる心

にて中戸口から手を引かば。地それぞ誠の夫婦づれ恨み悔みも晴れぬべし。思案こそあれ暫らくと立忍ばせて半兵衞は。潛押しあけずつと入り。詞兩人共に待つたであろ。日暮れぬ先に戻らうと思ひの外に當月は。いつにかはつて大參り仔細を聞けば去ぬる夜。地音樂響き花降りて雲中に御聲を上げ。庚申の御神體青面金剛童子とは。文字も青き面と書き青きを好み給ふ故。青物賣りを守らんとあらたに御告げありしよし。言傳へ聞傳へ市の側から打ちあけて。參る程にける程に御門前から押合うて。鰐口の緒へ取付く迄ゆつくりと三時半。かゝる尊き物語聞いて内にはゐられまい。嘉兵衞も利介も參つて來い。參れ〳〵とそやされて。常も利介はとび介で。帶もそこ〳〵。フシ駈出づれど。地色嘉兵衞はじろりくわんとした。顔付さへも氣味悪く。やゝ暫しためらうて。詞親父や母は同行衆兎や角とある挨拶に。夜明けてなくば歸られまい。隱れて嘉兵衞も參つておぢや。いやまあ止に致しましよ。相場の悪い折節ひよつと知れたらあの婆が。地並大抵ぢやあるまいと。取つてもつかぬ挨拶に重ねて返す詞なく。成程それはよい嗜み其心から此頃は。商賣に精がいる旦那衆から青物の。御用はいうて來なんだか。詞誠に忘れて居りまする。平野屋殿から明日は振舞をする半兵衞に。ちよつと參れとお使が二三度も立ちました。ムヽさうであろ〳〵。行かずばなるまいさりながら。殊の外なる草臥やう名代に往て聞いておぢや。イエ〳〵先より念入れて。獻立も相談する。直きにとあるのお使。地御太儀ながらと動かねば。半兵衞はわざと腹立て聲。詞仔細をこねる男がある。獻立一つ書く程の器量を持たぬ其方なら。明日が日にても半兵衞が死んだら八百屋仕舞ふかと。地きめ付けられて是非もなく。フシ不審顔して出て行く。地色影見送りて表へ出て千代が手取つて引入るゝ。跡は鎖しに詮方も。スエテ涙先立つばかりなり。千代は覺えず聲を上げ移れば變ろ世の中や。二人添寢の諸白髮千年と頼む我家を。今日は冥途の旅やどり手馴れし襖押入も。名殘惜しげにあそこ爰。見世の先なる小板敷撫でつ擦つゝ默いて。仁右衞門樣の折節に爰に坐つておはせしと。フシ思ひ出すも懷かしや。地不調法なる自らが悪い所を陰になり。日向になつて明暮に。姑御へのお取成し。數限りなき御

恩をば死してもいかで忘るべき。去らるゝ朝も贈して手づから御膳据ゑたれば。物をもいはずほろりつと泣いてお箸を取られたる。其面ざしが見納めとなり行く身こそ悲しやと。フシむせかへ。るこそ。道理なれ。地色ともに泣音の半兵衞。詞尤なり。フシさりながら。地そなたの事は數ならず國を離れて十五年。誠の親より大切に介抱ありし甲斐もなく。長地先立つ我は不幸とも物知らずとも思されん御心底こそ恥かしとしやくり。上げてぞ居たりける。フシ餘所にも嘸な。袖の雨。風呂敷包み手に提げて。嘉兵衞すた〳〵立歸り。しやくれど開かぬ表口わるゝばかりに打叩く。地色二人ははつと立上りよろつく内に外よりは。あけよ〳〵と喚く聲。ヲヽ〳〵〳〵とばかりにて。あなたこなたと這ひ廻り。やう〳〵と身を押込に。千代を忍ばせ半兵衞は。戸をあくれども打開けぬ。胸塞がりてきよろ〳〵と。フシ物をも言はず立ちまへば。地色嘉兵衞も共に隅々を覗き廻りて押込を。あけんとするを立隔たり。詞嘉兵衞慮外な何故あくる。ハテ珍らしい御咎め。此押込は道具入れ。用があつてあけまする。イヤ〳〵用があるにもせよ。宿へ戻つて直ぐ樣に。其上包んで手に提げしは。いづかたで取つて來た。ムヽ風呂敷包みの疑ひなら。是御覽あれ赤毛氈。ハテ似合はぬ物を持つてゐる。イヤ樣子は追つて申すべし。夫婦の衆の留守の内。地櫃のとろくへ納めんと。明けにかゝれば手を取つて。詞近頃小氣な男かな。見付けられたら半兵衞が遠州土産と言うておけ。地先づ下に居よ商賣の返事が聞きたい獻立は。フシどうぢや〳〵と紛らかす。地色詞のはづれ顔の色心は附けど附かぬ振。押鎭まりて畏り。詞明日のお振舞お客の方から獻立が。謎に致して參りしをあらましばかり覺え書き。地聞し召せとぞ讀上げける。先づ本汁に大寺やほとりに遊ぶ童は。フシちしや白魚と知られたり。有情非情の乘合に棹なき舟の行方とは貝燒などの事ならん。木の葉折り敷く其上に。からくれなゐの心中とは。哀れとぞ見る子持鮒。添ふに添はれぬ中々にいつそ双に刺身とは。包めど我が吸物に幾度肝を冷し物。思ひ直してたび給へ。折が變れば氣も變り。又面白い獻立の出來まいものにも候はず。定めなき世は人の常何をか恨み葛餅が。後段の筈に候と。心に餘る意見狀押當てゝ。こそ讀みにけ

る。 地色半兵衞はさあらぬ顏。 詞扨面白き獻立や。併し魚類の振舞をなぜ看屋は請取らぬ。さればそれにも咄あり。お出入致す看賣りに。堀江彌兵衞と申せしは。 地器量はさのみよからねど戀路の手だれ上手者。惚れたお山が三百人。忍んで逢ふが四五十人。中に取つても若松屋なをと互に腐り合ひ。女房に持つぞ持たれんと。契りをかはす間々に市とやらいふ生娘と。ちえ／＼くり事が嵩じて來て。はや五月の腹に帶。隱されもせず親も知り。つい呼入れて嫁びろめ祝儀の樽を贈るやら。三國一を謠ふやらそこらあたりがざゝめけばなをが燃え立つ胸の火に妓女傍輩が焚付けて。彌兵衞が往てゐる先々へ附いて廻つて恨み泣き。喰付き噛付きしがみ付き。去るか死ぬるか死ぬるか去るか。二つ一つとせたげられ孕んだ女房は去なされず。なをはいよ／＼堪忍せず。是非に及ばず心中し難波の野邊の草の露。名は繪草紙にとゞまりぬ色と義理とに迫つては。日頃の智慧も出でぬもの。そこが膝とも談合でこちとが樣な者にても。明かして言はゞどうぞ又死なさぬ首尾もあるべきに。聞えぬ堀江の彌兵衞やと。 フシむしりかけたる口占に。 地色半兵衞ぎよつと行詰り物をも言はず押込の。内にお千代はわくせきと身を悶えたる胴震ひ。襖に響き敷居までびりゝびりゝと鳴り渡れば。女はうちらで鼠泣き。男は外から猫の眞似。 フシ憂さが中にもをかしけれ。 地色嘉兵衞そろりと立上り。美濃吊しなど引かれては。元が息になる穿鑿とつか／＼と立寄るを。半兵衞周章て突倒し。 詞嘉兵衞お主も相應の惡所遊びもする男。ひよつと出合ひの初戀を見現はしては興がない。 地そこらは粹め氣を通せ。 フシ通せ／＼と詫びにける。 地色嘉兵衞疊打叩き。 詞あんまりそれは曲がない。なぜ有樣におつしやれぬ。私ことは二三度も追出されたる身なれども。伯父仁右衞門に色々と詫言立てゝ給はりし。お前の情で立つてゐる。嘉兵衞に何の遠慮があるいか程隱し給うても。 地聞かねど知れた御心底同行衆の扱ひが。叶へば重疊さもなくば刺違へんとの言合せ。見付けた所は違ふまい切なうも悲しうも。思し召さるゝ筈なれども死なんと迄は短慮の沙汰。世に心中も多けれど銀に詰まる か逢ふ事の。ならぬ切迫の時にこそ。八百屋といへば輕けれど勝手乏しい事はなし。上町邊に借屋を借り行通うても

逢ひ給へ。たとへ五貫目三貫目帳面合はぬ事あらば。嘉兵衞一人が引負うてお二人の名は出すまい。命の代りに立てたいと。思ひ込んだる私が詰らぬ。意見は仕らぬ。思案を變へて下さりませ。縋り付いても取付いても。中々死なせはしませぬと。誠を立つる男泣き。 フシやさしく。も亦わりなけれ。 地色半兵衞も稍涙ぐみ。慈悲なる親の血筋とて。頼もしい氣を持つものかな。其心とも汲み知らで隱せし所が面目ない。お千代／＼と呼びかくれば。おもはゆげにも立出づる目は泣腫れて顏痩せて。見交すばかり打守り。ナウおいとしやと。 スエテいふより外は。なかりけり。 地色半兵衞心に思ふ樣死ぬると言はゞ此者が。附纏うて離れまじ。賺して此場を遁れんと世に嬉しげに打笑みて。 詞げに負うた子に敎へられ。淺瀨を渡るといふ如く其方が意見にて。兎や角思ひくづ折れしも洗うた樣に打晴れた。 地借屋の事も內證も萬端お主を賴み入る。當分は先づ親里へ房して置くがよい道理。女房嘉兵衞に禮言やと僞り知らす目くばせに。お千代もやがて合點してお志の數々は。どうも詞に盡くされず。夫婦が命の親樣と手を合はすればこちらにも。若輩者の言ふ事を得心あつて嬉しやと誠と嘘の笑ひ聲 フシ夢に夢見る如くなり。 地色仕濟ましたりと半兵衞はお千代と共に立上り。伯母の方まで宵の內送り屆けて明朝は。駕で故鄕へ送るべし。親父や母の歸られたらまだ庚申から戻らぬと。どぎ／＼首尾を合はせてと言捨て行くを引きとゞめ。件の毛氈差出し。 詞お駕の內の敷物に進上致すと申す儀は。慮外がましく候へども嘉兵衞がための寶物。追出されたる其砌友達どもが指差して。疊の上では死ぬまいと蔭言いふが無念さに。心直して去んで見しよ。 地それとも願ひ叶はずし辻垣下で死ぬるとも。毛氈敷いてゐるならば疊の上も同然と。意地を立てたが身の幸ひ。再び此家へ立戻る嘉兵衞にあやかり給へとの。 フシ御祝儀なりと言ひければ 地色お千代はぢつと笑顏して何より嬉しいお心づけ。此毛氈で夫婦づれ夜の花見に參らんと。詞のはづれ氣も付かぬフシさすが若氣の不覺なり。 地色然る折ふし仁右衞門夫婦同行衆と高咄はや門近く立歸れば嘉兵衞騷がずお千代をば。小櫃の先に屈ませて半兵衞共に椎茸の。 フシ莟を選つて居たりけり。仁右衞門戸口に立休らひ。太郎兵衞殿五右衞門

殿七兵衞殿には取分けて。遠方といひ夜も更ける。平にお歸り遊ばされい。ハレヤレいはれぬ御遠慮、お膝を抱きに三人が申し合はせて參るから。七兵衞一人は歸られぬ。地夜食は食べる引つかける煙草一服御亭主のお氣扱ひにはなるまいと。明くる潛戸我一と。オクリせり合ひ〳〵内に入りにけり。地色五右衞門先へ進み出で。詞早速ながら申しましよ。御夫婦共によう聞かしやれ。是の嫁御が去られても手前に損も仕らず。呼戻されても此方に別に利得もなけれども。よく〳〵懇意に思ふ故宵から今迄三人が。取付け引付け頤の。かいだるい程詫びれども。あへんども打たれぬは侮つての儀か但し又。大切な事餘所外で言づてわざな仕方ぢやと。ふくればしあつてかと是まで附いては來たれども。言ふべき程は最前に底を叩いて仕舞うた故。地急に才覺なりませぬ。フシ兩人出やれと押し退さる。地色太郎兵衞鬚籠に腰をかけ。夫婦合ひには別儀なし不義放埒だにあらざれば。何を仕落何を非難に去なすべき。姑去りに極まつたりたとへ五日が十日でも。お千代の顔を見ぬ内は。太郎兵衞が朝夕を。此内で養はれん フシかたがた。いかにと詫びにける。地姑はつゝと出で。詞ア、太郎兵衞樣よい推量。仁右衞門殿は佛樣。女夫の仲はちん〳〵。去なしたは此母。お前の樣なよい衆の嫁御にしては似合はうが。此方づれの内にて飯をも炊かにやならぬ身で。肌には小袖鼻紙は。延べでなければ手に觸れず。地わしらはお寺の奉加さへ百目の銀は太儀なに。五兩とやらの櫛を挿し鳥甲程髻出して。太夫の道中する樣に狹い所を八文字。そこらあたりの青物は。踏み潰されて芥になる。其費でも積つたら此身代はひづみましよ。是が八百屋のお内儀に フシ成り遂げうかとえせ笑ふ。地七兵衞にじり寄り。詞こなたの樣に言ひ立つれば。詫言の手はあがれども。どこを聞いても其樣によい事ばかりは揃はぬもの。身どもが嫁は隨分と。世帶はようする歩くにも。八文字は踏まねども一文字を得引かいで。是も又氣の毒。仁右衞門殿。そなたもちつと物言はしやれ。地嘆がこはさに默つてか。結構者ぢやと囃されて。あんまり自慢遊ばすな。詞結構とは冥加の事。とうなんとは野老なり。せいなんとは芹の事。牛兵衞連添ふお千代なら。小殿原ではござらぬか。もし閨の夜のつれをのこ

心中などを召されたら。地取返しはならぬぞやちと相談もして見給へ。詞いかにもおしやれば其通り。若い奴等の事なれば短氣を出すまいものでもなし。腹に物言ひありとも聞く。孫を愛して遊ぶなら嫁の憎さも忘られん。ナウ嘆。地何と思やるとやはらを入れてうら問へば。いか樣こなたは如來樣。詞二三十年身の油絞り溜めたる金銀が。地忽ち水になる事を見ながら孫がかはゆくば。はてどうなりとなされませ。詞したがわしには暇下され。短い浮世に氣に入らぬ顏見て修羅を燃そより。地頭こそげて未來をば。助かる樣に致さうと。フシ緩む氣色はなかりけり。地色仁右衞門今は詮方なく牛兵衞嘉兵衞爰へ來い。詞樣子は今聞く通りの事。いかにお千代に添ひ度うても母を坊主にやしられまい。叶はぬ事と思ひ切れ。扨又嘉兵衞もよつく聞け。今では心持直し身を持ちさうに見ゆる故、幸ひ甥御の事なれば家督にせんと思ひ付き。嫁を追出し牛兵衞も出て行く樣にしかけると。世間の人に謠はれては仁右衞門が名が汚れる。地一夜も足はとめさゝれぬ今出て行けといひ渡す。嘉兵衞驚く氣色もなく。お前の詞を請けずとも此方から出て行こと。思案極めてをる故に恨みには思はぬが。胴慾なは姑御。詞嫁一人が憎いとて大勢に憂身を見せ。嘉兵衞は爰を出て行くと明日から路頭に立ちますぞや。地お寺參りの行戻り菰をかぶつて付け廻らば。餘りみめでもあるまいが。それでも嫁が去りたいか堪忍がならぬかと恨みても唧ちても。心つれなく返事せず見向きもせねば詮方なく。ずつと立つて行く所を牛兵衞は引きとゞめ。詞ヤレ狼狽者どこへ行く。お暇が出たで去にまする。先づ待て。地イ、ヤ暫しとて押合ひへし合ひ引据ゑて。詞コレ親父樣。早まり過ぎた御了簡。母の言分一々に尤至極と思ふ故。千代めは身どもが去りました。誰に恨みもないからは家出を致さう樣がない。それに此者追出せば結句にお名が出つる事。同行衆にも今迄の千代が扱ひ捨て置いて。地親父樣へ嘉兵衞をば。詫言賴み存ずると。聞くより三人頷き合ひ。詞婆はこちとが手に合はぬ。仁右衞門殿は結構者。地嘉兵衞事を詫びまする。詞ハテどうなりと御意次第。地あんまり早うて本意ないとオクリ笑うて 〳〵こそは歸りけれ。地色母は兎角の詞なく奥へはいれば仁右衞門も。入らんとせしが立戻り。詞牛兵衞

一つ飲んで寢や。地酒は憂ひを拂ふとは。醫書にも書いてあるげなと。フシしを〳〵として入りにけり。親の惠みは深けれど。御緣は今が限りぞと。お千代もそつと這出でて。スエテ共に見送る後影。嘉兵衞は何の氣も付かず締めあけにする潛の戸。早う〳〵と招けども猶も名殘はをし鳥の。なかじとすれどせき兼ねて。わつと叫べば洩らさじと。打ちかぶせたる。毛氈の闇より。闇に〻三重出でて行く。

道行星の數

歌我が纏路は糸なき三味よ。〳〵。なんのねもせで泣きあかす。合見れば思ひの雲の帶〳〵。合扨も。短夜。心のせくにござんせ。合いやと。おしやろとこちやもう。さうさんせ。二人が仲に。名取川。おゝそれ。二人と二人と名取川。ナホスフシ濡れて涙の血に染むる。フシ田籑の島と。詠み置きし。難波のことも是ならん。よしあしのや變る世の。それも思へば夢うつゝ。フシ靱を出でて二人連。色の外なる色毛氈ひじき物よと肩にかけ。フシオクリつらきに名殘も。今宵ぎり。フシ生れかはりて。先の世は。とても殿御の古里の。オクリ松濱〻風に誘はれて。本フシ離れぬ仲の睦言を。仇になさじと思ひ詰め。夜の玉鉾道急ぐ。長地知死期くる〳〵數珠のかず煩惱菩提と聞く時はあの世ばかりの樂しみに。行かんとすれば卯月闇。涙にくれて道見えず思ひ。廻せば〻はかなしや交せし。ことの淺からぬ。隔ての雲の重なりて。二世と契りし仲を裂く。月に水まさ花に風。津村の土手をあだし野の。スエテ其俤と草深き。アミドブシ螢かすかに飛びつるゝ。身より思ひの餘ればや。フシ蟲さへ胸をや。こがすらん。夜も早いたく更けぬらん。わけとなき行く郭公。半太夫フシまこと冥途の鳥ならば地獄の有樣語れ聞こ。フシ聞くともいかで。變らめや。今宵限りのうき命。止めて止まらぬ。三瀨川。ナホス岸に繫ぎし綱手こそ。弘誓の舟と。フシ觀念し。スエテ歎く心は曇れども曇らぬ。空の星月夜。あらまほしやといふ星も。年に一夜の契りぞや。たとへば雲の上とても。天の河を隔てなば。人の

つらさに變らじな。糸かけ星の。ほそ〳〵と。附添星や。妬むらん思ひ星とは七夕の。緣と聞けどまゝならぬ。フシ浮世に似たる類ぞや。○地光もうすく丑寅にあれ〳〵見ゆる星樣は。△詞ヲ、假のうつゝのほし佛。地やどり星とはいつ迄も。二人妹背變らぬ夫婦間。フシ我身の果はすばる星。○地ア、思ふまい心からたとへ奈落に落つるとも。祭文跡に歸らじさりながら。女はいとゞ罪深く。從ふ道も忘れ水。哀れ都のひぼのほし。結び目とけて濁江に。うかれし事を思ふには。あまねき門に立寄るも。ナホスフシ爰ぞ一念重願寺。フシ念彼觀音の。力ぼし助け給へと諸共に。心をこめて願ひぼし亂れ心の亂るゝとも。利劍卽是の誓ひにて。心やす〳〵極樂に至り至らんこなたへと。スエテ互に勇め進む身の。フシ勸進所。にぞ着きにけり。

捨つるに極めし。身の上も。そゞろに心細げにて三途の川は目の前の。麥吹く風の小波や。空淋しくも名乘るてふ。死出の田長を友がねに。さいたら畠の案山子かと。見るにつけ聞くにふれあの世に。たぐふぞあぢきなき。地色半兵衞お千代に差向ひ。詞此勸進所のお寺には談義の絕ゆる時もなう。千萬人の參詣に一遍づつの御回向も。地つひに罪障卽滅の法の緣こそ。賴もしき。爰ぞ最後の場所とやがて用意を敷きかくる。朱の褥の毛氈や嘉兵衞が。くれし其時は。嗣長く身上持ち堅め町屋住宅据ゑよとの。地心には今引替へて死出の門出の相莚未來は蓮の臺とも。變じて浮むよすがぞと二人しづかに座を占めて。詞人間一生あざなへる繩の如くと傳へしは。今日の身の上。八軒屋で出合ひし時互に書置明かし合ひ。危き命を夫婦とも遁るゝ上は老先も。諸白髮まで添ひ果てん。思へば愁ひの文ではなく。結ぶの神の守札。地末賴もしや目出度やと祝ひし事も夢現。醒むれば元の書置よな。とてもかくても死神に引かるゝ緣は辻占の。時のぎえんもなきものと。フシ身を觀じてぞゐたりける。地色お千代はいとゞ打萎れ心中といふ二文字は。流れの女に限りしと昨日は餘所に思ひしに。今日は夫婦が身の上に飽きも飽かれもせぬ仲を。由ない障りに隔てられ仇に朽ち行く是非なさと。フシ平伏し。てこそ泣きにける。地色半兵衞涙にくれながら。詞ア、おろかなる悔みごと。

兎角二人が腐り合ひ。切られぬ緣を恨むがよい。女房去るに七つの法。去らぬに三つの敎へあり。中にも親の氣に入らぬ女房に添ふは不孝なり。又去所なき妻を去るは夫の義にあらず。とくに暇をやつたらば孝行の道は立つ。しかしそなたの親里は。養ふ風情もない貧家。すりや去所ない同然。去るに去られぬ敎へなり。地此二道に差詰まり斯くなり下る有樣は。もとより覺悟と詞にはいへども洩るゝ露涙。詞痛はしや十藏殿。常さへ武士の突詰めた。氣質ながらも半兵衞は。武士を捨てよと御意見は。我が行末を安穩に。地あらせん爲の敎へをば今やみ〳〵と死したらば。さぞやお悔み歎きの程。思ひやるさへ。フシ勿體なや。地色養親の仁右衞門殿。お氣の弱い生れつき。此譯を聞き給はば老後の憂ひ持病の種。彼といひ是といひ一方ならぬ不孝の罪。空恐しき身の上と。スエテ口說き。立つればお千代も亦。穗にあらはれて叫び入り。アヽ我とても道ならぬ。歎きをかくるは同じ事。老いたる母の手一つに。育て上げられ人と成り丁度今年が廿四の。年重なれど今日が日まで。是ぞと思ふ孝もなく。つひには双に身を果たし。愁ひを見するばかりかは。入まへの程世渡る業。老の湯水は誰が取つて御心を休むべき。不孝ともつたなしとも。我からわかぬ身の上を。許してたべや母樣と。ほとりも知らず手を合はせわつと。ばかりに泣きまどふ。詞半兵衞は顏を上げ。ハアいつまでいうても同じ事。夜明けぬ先に最期をば心靜かに遂ぐべしと。地西に向ひて手を合はせ。利劍即是彌陀號。南無阿彌陀佛と回向する。お千代は沈む涙さへ落ちて乾かぬ小硯を。懷より取出し。詞斯うならうとは知らずして西の宮參りして。地須磨や明石の名所をも。記し置かんと求めしが。今引替へて書置の。御用意もやと差出せば。詞ナウよい合點さりながら。我一代の書置は懷中の狀箱。心にも文言にも死する時節に二つはなし。地そちこそ早う書置しや。詞イヤわしとても先達つて去られた時の書置が。小母樣の手にあるからは。是ぞ末期のとゞめ筆。地あだの思ひの數々はとてもに書きは盡くされず。しかし辭世の言の葉を殘し給へと勸むれば。半兵衞頷き筆を取り。詞げに世の常に死したらば。野べの送りの引導に一句一偈も受くべきに。この儘行かんはかなさよそなたも一首口ずさみ。

自ら是を引導とも經帷子の焚偈とも。地回向の種と案じつゝ硯引寄せ書付くる。文字もちら〳〵星月夜。詠み續けたる其歌に。はる〳〵と濱松風にもまれ來て。涙に沈むざゞんざの聲。お千代同じくかくばかりいにしへを。捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消えぬ名こそ惜しけれと。兩首一所に卷納め。半兵衞は懷中より件の狀箱取出し。辭世に相添へ前に据ゑ。思入つたる體なりしが。胸押しくつろげ脇差を。すらりと拔いて脇腹より。前へなかば引廻す。お千代は取付き聲を上げ。こは情なの御事や。女は心おろかにて覺悟してさへ狼狽ゆるに。ひとり先立ち給ふのは。扨は我が身を捨つるのか。恨めしや胴慾と。フシ悶え震ひて歎きける。地色半兵衞ちつともわるびれず。詞女心の淺はかさよ。是程の傷で死なんとはおろかなり〳〵。樣子あつての切腹。抱帶を二つに切り其一筋にて切口を。地急いで卷けと聞くよりはや周章てゝほどく抱帶。心は何と白縮緬用意の剃刀取出し。せき狂ふ手も震ひながら。やう〳〵中より押切つて夫の肌を引廻し。しつかと締めてうろ〳〵と顏をながめて涙ぐむ。詞半兵衞詞おだやかに。そなたが最期の顏も見ず。何しに先立ち行くべきぞ。此脇差は某が此地へ養子に來る砌。主君よりの拜領。武士の刀は忠義を胸とし。町人は又禮儀に差す。大切の一腰を武道にも用ゐず。禮儀にもかゝはらず。穢らはしき兩人が最期にばかり使はん事。勿體なし冥加なし。武士の眞似して引廻すは主君への追腹。山脇氏に立戻れば親十藏が封印も。破つて破らぬ道理なり。是からそちと死ぬるのが。地今の八百屋の半兵衞ぞと。齒を喰ひしめて息をつき。これお千代。その半分の抱帶。そなたが腹にしつかと締め。四月になるかならぬ子に。せめて末期の祝ひ納め。世にあるならば來月は。帶の祝ひよお乳母よと。さも勇ましくあるべきに。明日をも待たぬ今の身は。五月とも霎月とも。つゞめて名殘を惜しむぞと。フシそゞろ涙にくれにける。地色お千代は帶を取上げて。しやくり上げ〳〵。スエテ前後涙に。沈みしが。地生れぬ先に行末を頭堅かれといはた帶。長地それは世にある人の事是はそれとは引替へて長き別れの親子の緣。斯くなる身とは知らずして嬉しや子をば產んだらば。二人が仲の樂しみに。明暮れ抱いつすかしつの。愛らしい事見る

度に憂きが中をも打忘れ。夫婦は猶も親しみの媒介となり一つには。世に子を持てば世帶じみ。なり形をも窶すとや。然らば我が思はずの伊達も自然とやむであろ。姑御にも氣に入らうあら嬉しやな産宮樣。平産させて給はれと。願ひし事はいたづらに。身持ながらに消えて行く。名殘は我が身一つにて。別れは二つ人間の種を斷つのも同じ事。何の咎なき腹な子を。共に死なする不便さよ。許してくれよと詞さへ。泣く〳〵帶を取上げて。肌に廻し引締めて。顏見ぬ母が形見ぞと。スエテかつばと。伏して泣きにける。地はや引渡す山かつら寺の晨朝告げ渡れば。いざや最期の時こそと座を打拂ひ身構へす。お千代は覺悟の面ざしも名殘の花のあてやかに。露持ち餘る風情にて。フシ手を合はせてぞ坐しにける。地色半兵衞につこと打笑ひ。詞ヲヽ出來したりいさぎよし。地未來は一所ぞ迷ふまじ。今ぞ限りと脇差を。取直せしがさすが又。長き別れの顏ばせに。心も騷ぎ腕たゆく。差付けてはためらひ突かんとしては堪へかねて。暫し時刻を。うつせしが。地色南無三寶おくれしと氣を取直し一心に。南無阿彌陀佛と刃の先。喉にぐつと突通せば。あつとばかりに身を悶え。手足を伸べて苦しげな中にも夫を打守り。打守りたる一念の。輪廻の心ぞ。果てしなき。されども四つの借り物を返ししまへば油なき。燈火消ゆる如くにて。がつくりと伏す有樣は。フシ哀れにも亦惜しかりし。地色いで追付かんと半兵衞は。主のゆかりの一尺五寸最期の際と押戴き。只一刀に喉笛を　フシ貫かれて死したりけり。地色生年既に三十八。花過ぎ頃の若緑木の下闇は靑物や。町人なれどいにしへの。武道の燈かゝげたる末に。名をこそ照らしける。

心中ふたつ腹帶　終

傾城無間鐘

傾城無間鐘

作者紀海音

序詞素問に曰く。春三月これを發陳と云ふ。天地と共に生じ萬物以て榮ふ。形をゆるやかにして志を生ぜしめよ。生じて殺す事なかれ。賞じて罰することなかれ。是れ春氣の應ずる所にして養生の道君子の道。民を養ふ源氏。御先祖足利尊氏公四海を掌握ありしより。爰に至つて百餘歳。子々相承の將軍職。頼兼公の御權勢。オロシヘ申すも中々。愚かなり。ユリ地朝日子匂ふ松かざり。地都ぞ春の花の御所御弓始の吉日とて。席を設けて虎の間の廣縁近く坐したまへば。管領細川勝元山梨日向前司久國。御はたあづかり弓大將仁木赤松吉良石堂。役目々々に從ひてフシ巍々蕩。蕩と相ならぶ。地今川備中守俊秀三尺あまりの大的に。道德仁義禮智信の文字を面に書きならべ。御前にさし置き。謹んで申すやう。詞御代萬歳の御吉例次手よろしくさし上候。是は君子の六的とて國家の主たる御身には。片時もはなれぬ心の的。先づ第一は道德の的の小眼狙ひ付け。政道決斷事々物々。地あたれば國家泰平なり射はづせば國あやふし。第二には仁の的天地と心をひとつにす。たとへば雨露の草木を惠み榮ふる春陽の。溫和の德を大將の寛仁大度とたつとめり。詞第三には義德の的賞罰こゝにあきらかに。功ある武士をあげ用ゐ佞邪の輩を追退け。地善惡理非の黑星の眞最中に射あつる事。詞一張の弓のいきほひたり。地第四五六は禮智信三つの的を心に懸け。かりにもあだ矢有るべからず主君の禮は慈悲の的。臣下の禮は忠の的子として親に孝の的。朋友五倫は信の的。政道輔佐は智慧の的。拳のくるはぬ愼みに今日より此のまとを。評定所にかけられて然るべう候と。事理顯然たる辯舌に。將軍を始として近習外様の大名迄。あつぱれ稀代の賢臣と オクリ 各〻感じ フシ居る所に。地桃井民部之介豐常。囚人を追ひ立て

大庭に引すゆる。詞久國見るより聲をかけ。ヤア是々。貴殿の龜相我儘もをりに觸れては興にもなれ。お家代々御嘉例の。お弓始を知りながら遲參めさるゝのみならず。不吉尾籠の囚人をお目通へは何事ぞ。急いで罷り立たれよとはつたとにらめば。豐常むつとせしが押鎭め。ハ、、、、、。春早々から老臣のお呵りに遇ひまする。某所願の事ありて遠州諏訪の明神へ。社參の願ひは評定衆の。披露を以て我が君より首尾ようお暇つかはされ。極月二十六日に私宅を出でし砌より。今日の儀を心にかけ夜を以て日についで。馬上に眠をしのぎつゝ佐夜の中山こえしは。夜半の過と思ひし頃。山間よりもおびたゞしき焰の上る訝しさに。かけおりて見てあれば。此のいたづら者たゞ一人樹木を倒し火を點じ。山を拔きぬき伐ぬいて早五六間ほり入りしを。引き出し打ちたゝき仔細を問へども返答せず。同類有りとも白狀せぬ言語に絶した不敵者。地搦め取りしは天晴な豐常めが年玉物。御披露頼み存ずると フシ空嘯いてあひしらふ。詞久國かツら〳〵と笑ひ。彌〻以て不覺人。桃井の家をつぎ評定衆の末席にも。連るからは是れしきの是非善惡は見ゆる筈。正しくきやつは土百姓利慾のために谷間の。薯蕷など掘らん爲やみをてらする松明が。そこらの樹木に燒移りあわてふためくたゞ中へ。其方がかけつけて無體にいましめせめし故。地しさいをいふもおそろしくもとよりどうるゐあらざれば。白狀せぬもしれた事よし何にもせよ御祝儀の。お庭をけがすはいま〳〵しい夫れ誰か在彼の者をいましめ解いて追ひ放せと呼ばはれば遠侍。ぢやうじやく雜色立かゝるを。詞豐常いかつて追しりぞけ。ヤア推參なり久國。おぬしがくさつた眼には土百姓と見まがへ共。水晶輪の目利には一しさい有浪人者。殊更もつて懷中に金五十兩たくはへしは。辻斬强盜まがひなし。山を掘り拔くなんどとは底意の知れぬ横道者。御祝儀日とて差おくは女童の物祝ひ。亂の治むは武の一德勝元殿の始めとして。仁木今川吉良石堂政道輔佐の老臣達。未だ評議も出ぬさきに今日此の頃のなりあがり。地出頭ぶりの廣言は得こそ堪へぬ持病あり。サアまあ一言はき出せとそり打て立ち上る。久國も太刀押取り膝け寄らんとする所を。人々中に押へだたり。理非はともあれ御前への。恐れぞひらに〳〵との諫

めに折れて和いで。ぐつと鎭まる主從の フシ道の道こそ殊勝なれ。地勝元君にさしむかひ。詞兩人が口論も共に忠義のつめ開き。地狼藉の儀は御赦免ととりなしあるもおとなしき。地賴兼御機嫌穩やかに就中豐常が。訴へつ一通り其儘には指おかれじ。幸今川持參せし仁義禮智の的はじめ。俊秀詮議致せとの御意有がたく頭を下げ。緣側に進み出で。民部之介に會釋して。詞暫くの內彼者が繩をゆるして今川に。預ける事はなるまいか。ハテ其元のお指圖なら。地ともかくも迚豐常は。其儘縛切りほどけば今川近く招き寄せ。詞汝樣子は聞く通り。上意を受けて某が詮議を致上からは。僞つても僞らせぬ。拷問拵せられぬうち。眞直に白狀せよ。して先づ分に餘つたる金子は何とて貯へしぞ。仔細をきつといひ開け。さん候此金子合力主は我が娘。親の貧苦を悲しみて心一つに六條の遊女町へ身をうつて母が方へおくりしは。孝行に似て不孝者身不肖に候へども。以前は近藤某とてれつきとしたる武士の果。土を食つて死ぬればとて娘をうつた金銀にて。口中はうるほされず。詞ゆきて主人になげけども。廓の法はもゝ銀にて。ひまはくれぬと承引せず。捨てられもせず五六年肌に付けたる此の金子。地我手に在つて石がはら。他人の目には世の寶。フシ差上げ申すと撒き散らす。詞ム、いうた所は武士一疋。その潔白な性根にて山を切ぬき樹木を燒き。非道のたくみは何故かまへる。同類あらふ白狀せい。イヤア今川殿。武勇智謀も如何なこと貧しうては世にたゝれず。誠や佐夜の中山の地中に埋む無間の鐘。つけば忽現世には富貴を得れど未來には。八萬地獄へ落つると云ふ。ア、愚かなる人心や。未來と言ふは僧法師の愚者をだまする方便說。地地獄極樂今日の苦樂二つの外にはない。我その鐘を打ならし。娘がばするどに言ひ放す。地久國そばよりさし出てあれ聞給へ人々。天晴武士の生粹かな出世を望むは先祖への。孝行と言ひ武勇と言ひ。おく賴母しいお侍かさねて屋敷へ來られい。久國が取持つて知行の墓に取つかせん。今川殿の長詮議御大儀々々々さらりつと。是ぎりにして濟まさつしやれおゆみ始の時刻も延び。殿も退屈遊ばさんともどかし顏に立ち

騒ぐ。今川後へ目もやらず膝立なほし聲あらゝげ。詞汝大きな表裏物。ならべ立たる辯舌を。久國殿は殊の外御感心をなさるれど。此の今川はのみこまぬ。未來の沙汰まで言ひ破る發明な智慧持て。女童の言ひふらす無間の鐘をつくとは。某をなぶるのか但しは實に知らぬか。知らずば言て聞かすべし。そのかみ糟尊御在世に祇園精舎の鐘の聲。諸行無常のひゞきあり。寒山寺の夜半の鐘。旅泊の夢を驚かし龍宮界の梵鐘は。地三井のながれに音をとゞめ高尾の三絶天王寺。六時堂の鐘の聲黄渉調のしらべ迄。無明煩惱のぞこりて菩提をすゝむる名はあれど。富貴利慾に荷擔人する有名無實の無間の鐘。千日千夜叩けばとて富み榮えうかうろたへ者。詞おのれに限らず世上にも愚痴文盲の侍が。追從言うてなりあがれば慾心つのり色々と。あられぬことに心付き下賤の者をかたらうて。地なせる事とは今川がとくよりにらみ付け置いた。一責せめば忽に白狀させるはやすけれど。小人の謀とるに足らねば用捨して。一命助くるぞ罷りかへれ。と言ふ聲も。胸にこたへて恐ろしくフシかへりみもせず逃げ行くを。詞コリヤやいまて〳〵親父まで。娘を賣つた代金は此方へとゞめ置。是は唯今お上より汝が貧苦を御憐愍。金五十兩遣はさる頂戴致と投げ返す。地道德仁義禮智の的。あたりましたのお聲をばかけてぞ。頼む。三真春日影。梨子地に見ゆる鞍鐙乘馬乘物追手口。大名衆の供廻り揃ひの緑若黨の。猶若やかな鬢付に頭かつぱる氷さへ。今朝解け初むる朝東風やしやッつら寒きけしきせぬ。奴が髭の書初も春にひかれてえびす顔。物まうどれい年玉は。フシない〳〵〳〵とたはぶるゝ。詞コリヤ新まいのお草履取。うつかりと心得たら旦那を迷子にすべいぞえ。今日のお裝束すあうとやら。ながととやら。長たらしい物引ずつて。小人嶋の帆かけ船をすてつぺいに打かづきて。鼓のない德若ださ。既に去年も鹿藏めが萬戔の供をして。播磨迄のめつたとなぶれば關内眞顔になり。いか樣そちがいふ通り一國の大名が。あり與がりに其儘ぢや。地弓始より姫始。柱立てがな舞はしやらうと。フシ一度にどつとぞ笑ひける。フシ日既に亭午に傾き御前をさがる諸大名。わきて三人なかよしの先に立たる細川は。乘物に手をかけて今川殿桃井殿。いざ〳〵馬にめしませい先其元に御召。と。互

に禮義細やかに　オクリ詞しへためらひ居る内に。女房よんだら川へ投込め。〳〵。〳〵。榮華の春の花壻に。若水を參らする御馬先ぢや。其處のけ〳〵とフシざんざめかしてかけ來る。地笠鉾花桶其の跡になりをかしげな立烏帽子。竹馬に乘りの繩手綱フシ見る目も餘り氣疎けれ。地勝元向に立むかひ。詞町人共が初春の樂遊びと存ぜしに。ささしく煙井の兵藤殿。ハテけしからぬお物好。シテ何方へ御遊山ぞ。ハア是は〳〵御家老衆。先づ以て御慶々々。自分が今日の扮裝を。御存じなきは御尤。久國殿のおと娘上意を以て某が。妻に舊冬もらひしゆゑ。近習衆より花壻を祝うて賜はる若水桶。地かうしたなりを我君へ一目御目にかけたらば。益御機嫌よからんと。御前へ上り候と。いひ捨て馬を乘出す。桃井やがて引もどし。詞ヤイうつけ者よつく聞け。殿發明にましませども大酒をこのませ給ふ故。折に觸れてはばさらなり御行跡がなげかはしく。我々共が諫言はお耳にさはりて遠ざけられ。久國や某方が御機嫌とり〴〵ほえたるが。お心に叶へばとて傍若無人の振舞は。執權職を嘲るのか殿をたわけに仕立るのか。フシ返答聞かんときめつくる。詞兵藤びくともたじろかず。おろかなり桃井。忠臣の諫言は病をなほする良藥なり。されども見立の違ふ時かへつて毒となる物ぞ。天下の武將の御身にて酒宴遊興遊ばすは病にしては輕い事。それを何ぞやかた〴〵が國のみだれで候の。世上の聞えがあしいのと附子人參の補藥より。おもい意見をあてがふ故冷むべき邪氣も滯り頭痛八百なさるゝを。某抔は排毒散只一服でさらりつと。地御機嫌直す名人醫者。耆婆扁鵲も如何な事おいて樗井の兵藤と。フシ嘲る顏も惡體なり。地今川莞爾と打笑ひ。詞いか樣さうもあらう事。療治は藪に功のもの一段〳〵さりながら。竹馬にもせよ城内へ駒かけ入れんとする事は。不吉といはうか若しは又反逆人と定めうか。評議によつて其方を國法におこなへども。久國壻とあるからは此今川ものかぬ中。あひ壻がひに用捨する馬よりおりてわびせられい。地但は首を切らうかと三人左右に取りまいて。どうぢや〳〵とせり付けられ。詞ハアあやまつた御免なれ。地さうぢや〳〵御ゆるしと馬よりおりてうろ〳〵と。おそれて顏も赤猿のフシ三番叟ふむごとくなり。地三人一度に手を拍つて天晴

武士や御器量や。名字は篦棒幼名は。野暮太郎月惠方より。外法頭のお通と笑うてこそは　三重へ別れ行　フシ民草の靡き靡かず家の風。吹つたへたる將軍職頼兼公の御威光。朝日輝く東山今日の子の日の御遊びは。昔のためし新玉の。春に引かへ弓取の諸大名の奥方へ。名にし負うてふ姫小松取り囃せとの仰せを受け。思ひ〳〵のはれ小袖をとこ尊む定紋を。御簾高々とまき上させ大將御出ありければ。例の山梨椿井の兵藤。近習の若人居流れて。御土器もとり〴〵の品定め色定め。お目の正月御壽命はいきの松原末廣の。扇を顔に格子窗或は鼠鳴猫撫聲　オクリ晴れ〳〵敷ぞ見にけゝ。　シテ先一番の梅匂ふきぬのかほりもしめやかにちんまりとしてむつちりと。きむすめだちの姿は誰。　ワキさん候あれこそは今日の子の日を末の世に。書きもつたへて覺帳仁木殿の命取。　フシ名は卷筆と承る。　シテフシ實に好ましき。かほ鳥や。春の初のかきぞめに。ねやの大筆廻りよき墨と硯のこい中　キンも。羨し又妬ましや。ねたみとあだと情との。三つをかさねて一つまへはでに。はすはに。フシすんとして。いたづら顔に置わたも格氣は漏るゝ目のうちに。武士縛ろ下紐の。裙に　フシほのめくお敵は如何に。　ワキあれこそあひにあひぼれの。約束堅き石堂殿。石に立矢の通り者虎と呼ばれしお妾の。名も立かはる今年より。おか樣なりの君候　シテそれよ。誠に戀かぜの床に烈しき夜著蒲團虎うそぶけば千里が野邊。日本國が夜々の睦言口說手をかへて。男の心はかり目の　フシ鷗髻こそ可愛らし。見るからぞつと魂も。ぬけてや空にとぶ鳥の飛鳥井殿の姫もしの。御所の木ぶりを其まゝにねながら寫す水鏡。桃井民部が妻なんめり。　ワキ天晴お目利違ひなし。　フシ親はらからに似通ひて。器量優れて尋常に。利發餘つて會釋よく。歌書にさらせしふたかはめ。つくろひ。　フシなしのかご島田。ぢつとしはりし笄の。お照の君と申とかや。跡はたれ白綾の　小オクリ裏ふき返す紅梅や芥子にくゝりし袖口も。あかねさす日はまばゆしときどく頭巾のうちより。めもとのしほに寄る鯨大きな紋は隱れなき。勝元殿のぬれさまと　ハツミ粹か見立てゝ候也。　シテげに春風に打靡き　姿の柳細川がほそ身づくりの上作物。心詞もみだれやきはだへなかごは知らねども。慥におはらざねもりの。　フシめくぎ穴こ

そゆかしけれ。　ワキ扨又あれは輕忽や。とりなりばつとだんびら者。かたちはにほふ三郎が荒砥卸しの新身かや。頬の赤いは宇都宮公道殿のあしかけか。　フシ聞かまほしやとさゞめけば。　シテ名乘るも厚き顔の皮。赤松樣が折に觸れあじやらもじやらも慾深き。わしが魂見すかして。　歌煙草一葉が千兩しよとまゝよ。二千兩しよとまゝよ。裏の菊女に買てのまそ。やんれ買てのましよしやりむり買てのましよ。それがかうじて〳〵とフシにつと笑ふも厭らしき。遙かに後に引下り。　被衣は草に預けしと言はぬ計りにうなぎ綿。大事は前に有物を後帶とは屋敷めく。　長地北の方めく上代めく伊勢や小町を脇立にならぶ方なき今美人。今川殿の御内方。あさかといへど淺からぬ中は取分け水際も。たつて見居て見どう見ても。是れぞきずなき玉あられ音は聞くより目で見てはしんぞ八幡こりやどうも。どうも〳〵と譽め立てゝ。心を絲に賴兼公更に性根も現なき春の。あしたの一刻は萬金丹と氣の藥。齡も野邊の小松狩千代に八千代に萬々歳オ、目出度しとぞ祝ひける。　地かくて五人の北の方小松を扇に取り揃へ　フシ御前間近く居流れて。　地襟かき合せ手を支へ。　詞誠に子の日の御祝ひ今日を千歳の始にて。　地限り知られず盡きもせぬ松の葉の散り失せず。正木のかづら長き世の目出度き例候と。いひ揃へたる詞の花梅か櫻か桃井の。　フシ桃の媚ある姿なり。　地大將御氣色餘念なく遠目よりかは近優り。揃ひも揃うたぼつとり者あつたら者を大名等に。賞翫さする殘念さよ。四五年前に子の日をば催したらば片端。我手に入れて遊ばふに扨も跡へん〳〵と。思へどあのの武士や矢竹心も打忘れ。酒が腰押す色好み御土器を取上て。なむ〳〵と受給ひ。　詞コレそこなきやら達。戀故胸にせきすわり受けたる酒がのみ干されぬ。　地誰彼なしに一口宛付けざしにしてくだんせと。戀慕の混る御上意に內方達は興醒めて。目と目を見合せ躙り退き立もたゝれず後には。佞人共が取廻しいかなるめにか靑疊。　フシ塵をひねるぞ道理なる。　地今川が北の方淺香と言ふはとしばへも。おとなしやかに進みいて。　詞恐れも憚からず。女の身として上樣をお直にをがみ參らす事。　地其お嬉しさ有り難さ。袖にも身にも冥加にも餘る喜び候と詞の水の淀みなく。じつ體つくる體つくる。氣配の花も珍らかさに。大將

人目も辨へず手を取てぢつとしめ。詞我一天下を掌に。握つたよりは美しい此手を握る心よさ。地何に譬へんから衣唐天竺も日本も。取つて行けなるたのしみと。浮き立ち給ふを振り放し。詞アヽお情なや淺ましや。御酒に御心奪はれて色に禮儀も御忘れ。國の政道法式迄父久國が愚かなる。心任せと打やりに遊ばす故に忠臣は。怨を含みて引籠り民百姓の口の端に。地懸らせ給ふ御行跡恥かしきとは思さずや。詞扨今日の御祝ひお家代々嘉例として。赤松家より四つ白のしゆんめに白鞍置かせ。破魔弓に鶴の羽にてはいだる矢。小松をおふせて獻上す。馬は陽の獸是春の氣を知らせ。四つ白と書いては雪を踏むと讀ます。是雪間を分けてとの吉例にて。弓も松も駿足も今日の例に引かれたり。又赤松の名字をば今日一日は若松と。稱ふる故實候も子の日の緣に寄せらるゝ。かゝる目出度き例をば改め女中の小松狩。陰にだくして陽を害ふ上に好むを風と言ひ下にならふを俗と言ふ。かく尾籠なる風俗を天下國家に及ぼさば。地賤が伏屋の爺嗅迄色にふけりて朝夕の。渡世を忘れ末々は。飢えて凍えて盜みをし世の亂れともなりやせん。御思案遊ばせ殿樣と。或は諫め或は泣き。こぼるゝ涙青柳の。糸につながぬ玉なして　フシ風にもまるゝ如くなり。詞久國怒つて。ヤイそこな不孝者。親の厭ひな學問達つべこべと聞とむない。かたくなむこの今川と閨の睦言癡話言にも。引き言いうて夜を明すか。忠臣は主の爲一命をさへ惜しまねば。況いや女房の付けざしなど。こび〳〵恪氣はせられまい。地親孝行ならちやつとのめ。やれのめ〳〵と座をもてば。淺香莞爾と打笑ひ。詞差合ひくらぬが當世とをしへ給ふも親の慈悲。先忝なうござんする。殊更此程樽井殿洒落れた風俗遊ばして。細川桃井今川は撩治の見立が惡い迚。御嘲りにあはれし由。地連添ふ身では腹が立つ何とぞ恥辱を雪がうと。女房仲間が寄合うて無い智慧出して居る折柄。今日のお召を幸に夫にかくともしらせずして。館を出し我々が諫めを御耳に留まりて。御酒も今日よりあがるまい。色の道をも嗜もと御誓言を夫への。土產にすれば歸らるゝせんなき事には我々が。徒遊びも同然故互に覺悟極合ひ。恐れながら双物をば懷中致し候と。五人の女房一同に守刀を拔き持ちて。只今自害致すのを。不便と思召されぬか。御

誓言は出ませぬか。曲もなき大將樣お情ない我君と　スエテ泣き叫びたる聲々に。地將軍も近習も酒の醉ひ迄さめ果てフシ座敷はしんと澄みにけり。末座に有し惡女つか〳〵と走出て。詞お座がしめつてお笑止な。爰らをわしが捌きませう。將軍樣も輕忽な。いかにお金が澤山でも三百目宛五人前。つひえなかねを捨てうより色少し黑けれど。地夫なし鴉を自らが口添へてやらうかえ。歌牡丹芍藥百合の花。菜種の花にも蝶は寄る。地何處やらよい味もちつゝじ。取りついてからいつ迄も離れぬ所が調法で。ごはりまらすでごはんすと。フシ立寄所を　地後より兵藤軈て引戻し。詞おのれ大きなまいす者。形は女言いひは草履摑の中間口。いそいで化を顯はせと。地頭をたゝけばすつほりと鬘はぬけてすてつぺい。中間額の荒男びつくとしたる氣色もなく。詞ちくとん計小眼でよく見だされた二才殿な。下拙は栗生茂太八とて。二合半扶持かぶる下郎めでごはりまらすでごわります。お歷々の御參會七五三から五々三から。蒸菓子干菓子藥酒流れ歩くでござるべい。のめり出たらどん腹にくはつけいさしよと存じたに。茶椀酒にも出會さぬ　フシひだるいことだとゑせ笑ふ。地勢ひ猛き有樣に將軍驚き給ひつゝ。奥を指して入給へば在りあふ者共一同に　フシはらりと座敷を立にけり。地内方達は思はえず虎の尾を踏み鰐の口。遁れ出たる心地して。双物も鞘に懷に袖つま合せ帶の皺。のし〳〵立つて行所兵藤奥よりかけ來り。詞其處な奴め待おろう。おのれ下賤の身をもつて上を侮る狼藉者。地それ餘すなと下知すれば家來の者共數十人。拔きつれ〳〵切りかくる。まかせておけろと茂太八はそばなる大木。えいうんと拔くより早く振り上げて。むかゝ者をば拜打すそを拂へば毆打。縱横無盡に打ち拂へば皆ちり〳〵に　三重八逃げてんげり。オヽさもさうず〳〵。女とも見え元來は男なりけり。業平に。器量は少し落ちたれど無病息災まめ男。灸の痕なき無疵者。顏はぬり砥の荒女房奥樣方のお供して。往んだらはねつこ手鞠つこ。歌サハリ西の風もな吹いそ。東の風もな吹いそ。枝を鳴らさぬ時津風　キン君が齡は八萬歳。已等が命は茂太八百。ういやつ〳〵やつこの〳〵。やつこなるはと皆人興じあへにけり

第二

地八隅知る君が叡慮にかけられし。加茂川の水雙六の。骰子のめよりは情もなき人をフシ戀めぞまゝならぬ。地されば將軍頼兼公過ぎし子の日の姫小松。引わづらひし今川が妻重ねじと義理立てが。小面憎いも色の意地情知りめを聞出せと。久國兵藤かけ廻り廣き都を北南。地西六條の遊女町態よき松の名も高き。今川と言ふ傾城をフシ後先なしに根引して。フシ移し植ゑたる。花の御所。名さへ顔さへ姿さへ。濡れてまろめし今川の流れの身とは名のれども。長地深間の客に二世三世結び固めて下紐の。外には解かじと神かけて。表面許は藤柵。しなへ靡かぬ心の水。春の光はさしながらつれなき氷はり強く。殿をばふつてふり付けて。木ぶりもすによき拗松の。枝さし交す盃を。抑へずのまずあひをせずひん〳〵としてうちそむくフシ是れも女郎の一くせなり。地久國見るめも氣の毒さにさしよつて小聲になり。詞コレサお女郎。揚屋などでは大盡をのぼすとやら持たすとやら。樣々仔細有ことゝ咄に聞いたれど。此方どもは不案内。御殿中のお遊びはじやらりくらりと頭から。小舌だるいが御好物。誠に女は氏なうて玉の輿に乘るといふ。詮はお身が事。地ひよつと御機嫌損ねたら後悔しても返らぬと。フシ身になり顔にこま付る。今川えせ笑ひおいてくだんせ親父樣。詞既にお前のお娘御が子の日の遊びのもや〳〵に。殿御へ義理を立切て見事なさはいで有つたげな。地お素人には奇特な事況や以て朝夕に。をつとへの義理心中を商賣にする傾城が。さもしい所存が持たりようか。まだな事をと言ひさして。フシ櫛持ちかへて撫で付る。地黑髮よりも將軍のお心猶も打亂れ。餘り情がこはいぞや戀には義理が有ことゝ。知つたればこそ大將が此の寒い夜をうご〳〵と。丸寢して居る心底をすもじ遊ばせ粹樣と。もたれ給へばちやんと退き。地下からお出で遊ばしてもしぶとい心な此の今川。きりなりとも突きなりとも耳でも鼻でも削がしやんせ。請られて來た言分ををつとへ立てゝ見せたいと。眦にほろつと零るゝは。露かあらぬか初梅の匂ひを。

わくる景色なり。地久國ほうど持て扱ひどうも急にはいきそむない。先づお能でも言付て殿を慰め申さんと。打咳げば兵藤も如何樣それも宜うござらう。詞それにつき今日はお庭の祈禱とて。猿を舞はせて居りました。中々興ある慰み故御しやうらんも有らうかと。地お次にまたせ候が是はいかゞといひければ。一段のお慰み。急いで參れと言ふ聲に

風流猿まはし

オクリ牽かれ〳〵出づるやフシ猿まはし。小腰を折つてうろ〳〵と廣廂に畏まる。詞兵藤見るより。ムゝ近くよれ〳〵。盧外は御赦免さりながら頰被を取ませい。ハア御諚ではござれども。猿まはしの法としていかなる高家の御前でも。此の儘で居りまする。フウ法と有るからは苦しうない。地急いで猿を廻しませ。詞畏まつてござる。狂言猿が參つて能仕る。御知行くわつとまさる目出度き　オクリ踊るは手もと。〳〵たつち見馬やまきおろしの。春の小馬が參つたり。地より泉がそうじやうすれば。天より寶が降り來つて。人命草木。そうじやうすれば。南面の泉水に積んだる寶は何々ぞ。綾が千反錦が千反。唐物を積みたゝへてハンヤ。きん田のよこ田の。朝霞しよんぼりしよぼりと。植ゑうづ物。しよんぼりしよぼりと來ました。そなたの庭を今朝こそ見たれ。黃金の桝にてよねを量ろに。フシよねの心を量ろに。地よねと言ふのに氣が付いて聞ば聲から姿から。ナウ新樣ぢやないかいのと。走りよるをアゝ申し〳〵　詞麁相を仰せられますな。成程新猿々々〳〵牽。人怖ぢをする若猿のかき搜したる　地搶頭、亂れてからは難しと言はれてぢつと跡へより。詞アゝ猿と言ふものを目留めて見たは今日始て。地可愛らしやいたいけやようこそ爰へ來てくれた。定めて物がいひたかろ但は何も言はざるが。お主はよいと思ふかとフシよそへていふも何とやら。詞久國は聞咎め。ヤイそこな不敵者。姿をかへて我々を一杯食はせにうせたるな。昔もさる例有り。傾城事のおこりより大黑舞の鳥追のと。世上の沙汰にものつたれば如何な事油斷はせぬ。而もおのれはたつた今新猿牽といふからは。にせ物にまがひがない。

地言譯あらば吐き出せ。然なくば爰を立たせぬと鍔もとくつろげ立ちかゝれば。詞アヽ申し〳〵。それはお前のお聞違へ。身共は代々猿廻し。猿數多ござれども初春の御祝儀故。若猿を牽きましたを。新猿かとお尋ね故左樣でござると申たが。誤ではござるまい。イヤ言譯がくらい〳〵。地誠代々猿引ならおむまやの御祈禱に。猿をまはする故事來歷今爰でいうて見い。詞コレハ〳〵苦々しい。此の儀は我等が仲間でも秘傳に致ことなれども。申さずば又にせ物とてお咎めに遭ひませう。必他言致さしめすな。總じて猿と言ふ物は。千年の壽命を保ち。漫々としたる猿智慧有り。諸藝に器用なることは人間にも勝るとて。異名をましらと申すなり。就中亂舞が上手故猿樂とも名付けたり。豆腐がすぎて候故田樂とも是を言ふ。馬と言ふ大ぼやしは背に物を置くより外。一藝もござらぬ故猿殿のお蔭にて。亂舞がしたいと頼みしに。地たいこの傳授致せしより。今に至つて馬共が。太鼓を打て遊ぶこと フシ師匠の恩と悅びて。廐の守と尊めり。馬に限らず人間も裸參りをする時は。 オトリ諸願必ず庚申。淨土宗の祖母達は。 ヲトシ猿猴大師と拜むとかや。地緣由は大略此のとほり。お疑ひなさるゝなと フシと口に任せていひ散らす。地文盲不智の久國くはんくはんとうなづきて。詞出かした言譯聞屆けた。扨々猿めはうらやましい長生を爲るやつかな。定めていつがいつ迄も夫婦の中は睦ましかろ。猿牽暫時差俯向き。由ない事をお尋ね有り。思はぬ落涙仕る。地畜生の身の上にも變らぬは浮世の中。此奴が母猿父猿はあるが中にも睦まじう。千代もとかけし間なるを無得心なる親方めが。銀にめくれて母猿を思はず外へ賣り渡され。跡に殘りしやもめ猿朝夕泣いてをりまする。されども男猿は生れ付性根のふとい者なる故。たとへ暫しは別るゝともめぐりあはいで措くべきか。只それ迄の命こそ大切なれと覺悟して。身を謹んでをりますが。詞アヽ不便やな可愛やな。女猿は心ちさうてまゝならぬ身を怨み詰め。地短氣な心もおこらうかこひ煩うて死なうかと。其事ばつかり明暮に案じ惚れたる男猿めが。心の内を露計傳へたう候と。 スエテしやくり上たる物語。聞ては如何こたふべき心迄くる涙をば。しがらみかけて今川はとゞろく胸を押鎭め。詞イヤナウ猿牽。そなたは猿の

身の上を物語しやれども。地聞けば聞く程さりとては可愛い男猿が心やと。我が身の上に引き當てゝ。 フシ過分に思ふ嬉しいぞや。地深い中をば引きはなされ請けられて來た其の日より。晩に死なうか明日かと輕々しげに思うたる。命が大事になつて來た。かういふ心になつたのも男猿が通つた心中を。話したそなたは命の親。手を合はして拜むぞや戀しき人にあふ迄は。勤と思やさのみには恪氣妬みも有まいが。命の綱と殿樣に折に抱かれて寢もせうと。 フシ始めて見する笑ひ顏。地將軍悅び給ひつゝ抱き寄せ引寄せて。ヤレ猿牽めに酒のませかねを取らせ衣裝もやれ。是は當座の褒美ぞと下し給はる御佩刀。久國もやれ兵藤やれ〳〵とは嬉し今川も。上着を脫いで投げ遣れば猿も悅び猿牽も。肌の緣の紈綸子やがて逢ふ身と疊み込み。御座の邊へ式禮し オクリいそ〳〵として立歸る。地兵藤御前にさし向ひ。詞先づ以てお目出度い。猶此の上に某が智謀をもつて俊秀を。何の手もなく打殺し女房奪ひ差上ん。地此の儀如何と伺へどさういたせとも無用とも。答へもあらず恍惚と魂は早寢所へ。飛び立つ計大將の近がつゐこそ 三重〳〵是非もなき 地今日よりは我をもちゐの鏡草咲きさかえたる君が代に。忠義の味方不義の敵二つの底を三つ物組。歲旦開きとなぞらへて今川桃井兩人も。細川宅に招き寄せ。世を非に見たる老武者の。地虎の眠りや文臺脇。硯の水も零れ月裏に映りてはなやか匂。戀句は君の御好物。したろ過たるお身持も。匂ひの花もをさまりて。あげ句は春の扱ひに。フシ沉くへ寄りてぞ語りける 地勝元悅喜限りなく誠に連俳なんどとて。武士が慰みくらす事四海靜謐我が君の。御盛德の餘慶ぞとサテ〳〵滿足仕る。詞來月の會席は御兩所の内いづれへか推參を仕らう。今川ためらふ氣色もなく御尤には候へども。今宵の御會は格別の儀改て又來月も初會は御館へ參るべし。日限のお極一順お廻し有べきかと。憚りをかへりみず發句を致し置き候。コレハ〳〵忝い何とぢや〳〵承りたい。しるやいかに。しるやいかに。かまくら櫻八重櫻。鎌倉櫻八重櫻おもしろい〳〵桃井殿。出來たぢやござらぬか。なか〳〵なか〳〵歌人の家でござるから。ちらり〳〵とまたしても。仔細なことが出まするてや。ハヽア是は〳〵御挨拶千萬痛み入りました。句は惡うござれと

ゐ所存が有て致いたが。細川殿にはお心がつかぬさうに見えました。成程々々最前から申さうと存じて居た。鎌倉山の松とこそ歌に詠み馴れ候に。櫻とかはるが俳諧の手際所と聞えました。桃井何と思召す。サレバ拙者は左樣なる故事來歴は存ぜねども。八重一重は九重。九重は都の空いせ櫻江戸櫻などにほひ渡ると言ふことぢやと。聞いておいても濟みまする。イヤ今川が所存は左樣の儀には候はず。頼兼公の御行跡日にまし月にしたがうて御酒宴長じ給ふに付き。御病氣なんど出でたらば御快氣の程覺束ない。若君とては候はず萬一の儀が候はゞお家はやみになりまする。御先祖尊氏將軍の。御家督は義詮公。御舍弟基氏公鎌倉の守護として取分け武名を輝かし。地御連枝兩輪の如くにして年は百歳代は十繼。今迚も又京鎌倉遠くもあらぬ御一門。御男子數多ましませば御養君に迎ひ入れ。細川殿は御後見桃井今川相加はり。政道評議仕若木の櫻を花咲かせ。四方の空迄長閑にと。一句に仕立て候と　フシ思ひこうでぞ吟じける。地思はず知らず桃井は二王立にずつと立ち面白い〳〵。歌人は居ながら名所を知る。俊秀殿は居ながらに。名大將を知つたれと。あふぎ立〳〵　フシ悦びあふこそ道理なれ。地勝元も手を拍つて誠に文武の今川殿。十七文字の其の中に天下を治むる金言は。唐土の詩賦天竺の靈文なりとて恐らくは。是にはいかで勝るべき。詞いで〳〵勝元脇致さん。巣なる燕に猫の爪研ぐ。俊秀莞爾と打笑ひ。巣なる燕は頼兼公下なる猫は侯人共。天下に爪を研ぎ立つるを物陰より熟々と打まもるとの心よな。桃井は大聲揚げ差詰第三仕らう。長き日に夜討と言ふは。珍らかになんとばしござらうぞ。兩人をかしがり面白さうにはござれども。夜討ははやまり過まする。ムヽ夜討がお氣に入らぬなら。ぬけがけと直りましよ。イヤとてもなら第三は。目出度いやうに遊ばされい。きこえた拙者も故事を仕らう。食くうて。箸を落すも麗かに。此儀はいづれも知つてで有らう御前において久國めが。食くふ箸を取落し近習外樣の笑ひ草。地なんとよい句か〳〵と兩人どつと笑へども。地今川獨りすまぬ顔挨拶もなく座を立て。私宅に用事候へば拙者はお暇申すとて。亭主へ時宜もそこ〳〵に立ち歸らんとする所。桃井やがて引きとゞめ。詞貴殿が顔付のみこまぬ。舅を

そしつた某に意趣を殘して歸るかとはつたとにらめば。今川はから〳〵と打笑ひ。はれやれ興がる男が有遺恨を含む程なれば二言とはない打ち果す。今宵の八つに參れと有る君の諚意を承りながら。興に乘じてはつたりと今迄失念致したと。いはせも果てず。アヽこりや〳〵其の紛らしは猶濟まぬ。遊女狂ひに夜晝のわかちも知らぬ大將が。お主になんの用があらう。地よし何にもせよ大切な座敷をけたつる無躾者。一寸なりとも踏み出さばすね切りをらんとつめ寄るを。詞細川聲をかけ桃井殿御無體ぢや。叶はぬ御用と有る上にたつてとむるは不調法。しかしながら勝元がちと御意得たいこと候。お隙は取らさぬ暫しの内　地是へ〳〵と招かれて。はつと計りに兩人はフシもとの座敷に直りける　詞細川小聲になり。只今申合せし儀はいはゞお家の一大事。一門扨は朋友にも互に他言致さぬとの。御契約申さうと傍に有りあふ蓬萊の。地土器取つててうど請け腕を突いて血を絞り。さらりとほしてさし出すを今川如何思ひけん。物をもいはずあしらはねば桃井中へずつと出で。某お合申さんとさしぞへぬいて太股を。ぐつとゑぐつてだんぶと請け俊秀慮外致さうと。ついとのんで投げ出す。地今川受取り押戴き。詞先づ頂戴は致いたが。朋輩の約諾は私にして義理かろし。主君の恩は天下の義理但心の變るべき。今川なりと兩人のお鑑識有ての事ならば。一つたべてもいらぬ事。地殊更夜中のお召しは。岩清水へ代參と。仰せられんも知れがたしさすれば不淨の恐れも有り。御酒は重ねて〳〵といひ捨て歸る今川が。智慧の淵瀬は白波の。二人は殘る友千鳥。フシすまぬ座敷となりにけり。地勝元ほつと溜息つぎ。詞桃井あれは何とぢやの。何と所ぢやござるまい二人が心てい聞賺し。あまさかさまに御前へはいひ散らさんとの謀計を。うま〳〵と食てのけた。最前仕舞うてのけたれば此後悔はないものを。地と有てきやつをのめめと御所へやつてはおかれまい。追つかけて討つまいかといかれば勝元打うなづき。生て置いては國家の仇是計りは短氣がよい。サア行けござれ合點と。股立刀取り敢へず目釘に心付合うて。仁義と血氣の力足どう〳〵。ばた〳〵立つ鳥の飛がごとくに。三重八かけり行。地後とはいはじ今川が心の駒もはだせにて。勝元が秘藏せし柑子栗毛の逸物を

案内なしに乗り出し。腕を限り鞭限り啣ませし泡はちら〳〵〳〵。蹴立つる煙はむら〳〵〳〵。霧覆ふ白牡丹勺ひはいざや白雲の。空をかけらせ行先に外道見付けし韋駄天も。フシ斯くやと思ふ景色なり。地後に續いて細川桃井兩人は。息を限りに追かくれど龍蹄の勢ひ何かは以て屆くべき。遙か並木を隔てしが桃井豐常小高き岸に立ち上り。詞ヤレ待て今川。今敵味方となる上に後を見せな卑怯者。主に弓引く天罰何國までか遁るべき。天は八天地は奈落金輪際遁さぬと。大音聲に呼ばはりける。地勇みに勇む今川も東風に持て來る人聲の。敵味方と呼ばはりは早大事こそ起れりと。進む手綱を引きかへし フシ暫く控へ待ちかけたり。地程なく兩人かけ付けて舅に勝る人でなし。詞武士に大事を語らせて悪人への注進か。それは叶はぬ今爰で死出の旅路へ鞭打す。閻魔の廳へ注進せよと口を揃へて詰めかくる。今川少しも驚かず。ハテ方々と存じたら躊躇ふ事もなかりしに。地由なき時刻移せしと又鞭打てかけ出づるを。兩人は立ちかゝり馬の兩口緊と取り。詞此の場になつても遁れうとや。のぶといも相手による。コリヤ。桃井が留めたが動きたくば白狀せよ。地俊秀猶も鞭打て。急ぐといふに邪魔するな退いてとほせとかけ出す。コハリ留れ。と留むる桃井は天下無雙の大力。驅ける駿足名譽の鞭勇めば。返し留むれば進みもみにもうだる地有樣は。滄海の蛟龍がフシ波を分くるに異ならず。詞勝元は大音上。天下の人に賢人の名を歌はれし今川が。利慾に眼が眩んだか女房に心奪はれたか。仔細を語れと呼ばはれば。俊秀後へ振り返り。あら曲もなき御一言。是非に及ばぬ某が所存を語て聞け申さん。御前に於て久國が持たる箸を落せしとな。遠き昔を考ふるに。魏吳蜀の三國鼎の如く爭ひしに。蜀の玄德曹操が心を緩めん計略に。二人對して食する時はためきわたる雷に。恐れ戰慄く風情にて持たる箸を盤に落す。曹操つく〳〵打凝視り臆病者よと玄德に。油斷の心起りし故果して軍に利を失ふ。愚蒙の久國それ程の思案は有るまじさり乍ら。手に持つ箸の落つるをば知らぬ程なる白癡でなし。内に思ひの迫る故萬事を忘れし物ならん。彼今榮華に餘り斯くまで腦に迫つたる。思ひといつば逆心なり。然れば君の御身の上斯う言ふ内も氣遣はし其處退き給へと言ひけ

れば。兩人はつと驚て。左樣の大事をおしかくし忠義を一人立てんとは。大人氣なしや今川殿。いざ御供と勇み合ふ。ア、愚かなり〳〵。お主の爲に身を果すも生きてお家を治むるも。忠義に重い輕いはない。日向の前司は某と壻舅の緣あり。方々の手にかけさせては世の人口も如何なり。早々歸つて御譜代家の軍勢催促なされよと。言へども桃井合點せず國治むるには智慧が要る敵を殺すは力が要る無分別なる桃井は討死するが勝手ぞと。地言ふより早く驅け出づるを勝元暫しと抱き留め。詞思ひ込んだる今川殿今更引いては歸られじ。地其の身一體分身の。盃に約せしなり。目出度く爲果せ給ふべし急げや今川。返せや桃井さらば〳〵と禮儀して。左右に別る忠義の道行くも歸るも善悪の。衢に枝折ろ道案内 オクリ駒を早める フシ向ふより。地町人數多出で迎ひ。詞憚りながら御訴訟申し上げ候。我々共は六條の傾城屋にて御座候。商賣體の女郎を毎日十人二十人。御城内へ召し入れられ。代金の御沙汰もなくかつみやうに及び候。御家老樣の御慈悲を偏に願ひ奉ると恐れ入りてぞ申しける。俊秀打頷き尤も〳〵。某も只今登城相勤むる。地宜しく沙汰し得さすべし御門近くは見苦しい。今川が屋敷へ行て暫く待てと言ひつくれば。是は有難しさりながら追手の御門を打せられ。詞御老中でも入れますなと久國樣の命令を。慥かに只今承る。地折角お出でなされでも。中々通し申さじと口々に訴ふれば。地天晴頓智の今川もはつと思案に行き當り。詞何と申すぞ久國が我々共を入るゝなと。追手の門の打たるか。地南無三寶遲れじと スエテ暫時呆れて立ち給ふ。詞町人どもは差寄て。憚りながら我々が料簡に附き給はゞ。此の乘物に乘せまして又珍らしき女郎を差上げますと僞らば御門は通し候はん後の難儀は知らねども有難きお裁判に。あまえて申し上げますと詞を揃へ言ひければ。今川大きに悅びて 地屈竟の事ござめれとオクリ馬よりへひらりと フシ飛んで下り。地乘物に乘り移れば大勢一度にばらりと寄り。懸ける細索七重八重包み回せば今川は内より怒れる聲を揚げ。詞扨汝輩騙つたな。鐵石を以て包めばとて打破らでは置くべきかと。地力を出しえいえいと打てど撲けど角々に。鎖筋金網覆ひ フシ出づべきやうこそなかりけれ。詞下部共聲々に。御主人榑井兵藤殿。

お手前への御馳走に用意なされた牢乗物。湖へ伴れて行て生きながら水施餓鬼。地なにほど泣いても籠の鳥鶯聲に經を讀め。四相を悟る今川を生捕々々。安賣の今川と フシ笑ひざゞめき行く先の。地木陰より も若侍五六人拔き連れて。隙間も有らせず切りかくる。思ひがけなき下郎共周章て狼狽き我一と。乗物捨てて逃げ行くを遁すまじとて追ひかくる。中に色有る若男取つて返して乗物の。索寸々に切り解き手を取つて牽き出し。見れば互に知らぬ顔。ハア違うたは南無三寶。是は〳〵と狼狽へしが腰の刀をすらりと拔き。すでに自害と見えけるを今川やがて手に縋り。詞近付でない某が命を助け其身は又。生害せんと有ることは何とも其の意得られぬ儀。地仔細を語つて其の上に兎も角も遊ばせと。詞を盡し制すれば。詞さん候某は東寺邊の浪人者。今川と云ふ傾城と子までなしたる中なるを。頼兼公へ召し出され飽かぬ別れに堪へかねて。友達共を相談合ひ御城内へ忍び入り。奪ひ返さんと來る所に今川の生捕と。呼ばはる聲を聞くよりも前後を忘れ斬り散らし。人數多殺める上科人までを助けしは。地何れ免れぬ運の盡き樣子と言ふは此の通りと。復振り斷るを抱き留め。詞些とも苦しからぬ事。自分は今川俊秀とて國の政道致す武士。悪人どもに謀られて不慮の難儀に及びしに。命の親か天下の親。地御恩の禮は御秘藏を取り戻し進ぜうと。力を付くれば手を合はせ互に悦び居る所へ。又々大勢馳せ來り。先なる男大音上げ。詞ヤア卑怯なり今川。兵藤殿の御内にて。桑原茂七と言ふ男討手に向うた覺悟せい。扨又前なるきよろまつめ。素町人の分として科人を隱まひ立。地命知らずの不敵者いで物見せんと驅け寄れば。こなたも同じく腕捲りづか〳〵と差寄つて。詞汝如きに某が家名を名のるは無益なれど。冥途の土産に能つく聞け。桓武帝の末葉に伊勢新三郎長氏。地參ぞうと言ふ儘に南方一度に拔きはなし。フシ火花を散らして戰ひける。地もとより長氏早技の隙を見かけて打つ太刀に。眞向二つに切り割られかつぱと倒れ失せにけり。こは無念やと侍共一度に喚いて驅け寄るを今川太刀を拔き翳し。當る者を幸にはらりはらりと離ぎ立つる。さしもに逸る若者共二人が名譽の太刀先に。叶はじとや思ひけん。フシ皆散り〳〵に逃げてんげり。地長氏勇んで驅け行くを。詞ヤア深入すな早まるな。あつたら器量を損ふなやがて目出度く今川が仲人をして今川を持たすぞ〳〵待ちかねな。地暫しは國を立ち退いて榮ふる時節を松竹の。鄰は千年萬年も命冥加な俊秀が。忠勤勵む天命の備はる道の臣々たる。明德爰に顯はれしと皆人感じ合ひにける

第三

地梓弓取り傳へたる武士の。家の吉例格式は違へぬ春の事始。男の留守も間に合はす鎧を床にかざらせて。重代の太刀しづ方の長刀持つて牀几に坐し。軍配團扇指し上ぐれば仲居おはした腰元まで。見馴れ聞き馴れ手馴れたる小太刀の極意槍の秘事。上段下段見合はせて　オクリ彼方へ潜り此方へ飛び　ハツミ柳に燕。フシ百千鳥。姿の櫻。みよし野の屏風繪を見る如くにて。春めき渡る　フシ景色なり。地斯かる所に女一人驅け入て北の方に縋り付き。後より追手の掛る者。影を隱して給はれと　スエテ聲もしどろに手を合す。地淺香つく〳〵凝視り。詞此の邊にも見も馴れぬさりとはは すはな態度は。地大事の肌を澤山に商ひにする女中よの。心中に出て中途から不圖思案でも變つたか。すべに依つて頼まれう有樣に仔細を言や。詞成程御推有通り今川と言ふ流れの身。日毎に顔は變れども誠を立つるは唯一人。地深い中をば引裂かれ久國殿に請けられてと。言はんとするをヤヽ是〳〵。詞後を聞てはかくまはれぬお家の忠臣今川が。地女房が頼まれた氣遣ひなしに奥く行て。疲勞で有ろ休ましやれ皆の者共油斷すな。定めて追手來るべし門戸を閉めて追ひ返せ。異議に及ばは塀越に根無矢放して追ひ散らせ。必ず双物で向ふなと急な所に主從の。禮細密に言ひ含め其の身はもとの牀几に坐し。常に變らぬ顔は。フシ天晴武士の女房なり。地暫時有つて大門を破れよ碎けと打ち敲く。そりや追手よと女房達羣々と立ち掛り。詞何者なれば喧しい御一家中をお節にて。座敷は酒宴の眞最中。お迎ひの衆か行んでおぢや。地小間物屋なら挿櫛を明日買ふと應答ふ　詞イヤ私ぢや茂太八奴ぢや。地そんなら疾うに

言はいでと潛開くれば一散に。お座敷へ騙け上り北の方を屹と見て。詞ム、早先達お館へ。注進の有りしよな嬉しや健氣な御有樣お供致して片端。地斬つて〳〵斬りまくり御殿を枕に主從が。潔う死にませうさあいざ〳〵と手を取つて。怒れる眼に血筋立ち拳を握り齒を食ひ締め。フシ樣子も言はず急き狂へば。地淺香は餘り興醒めて。詞ヤイ麁相者。今日は鎧の御著初。なれども主は夜前より御所へござつてお留守故。名代勤むる有樣を珍らしさうに咎むるは。酒に醉うたか但しは又口論でも爲て來たか。スリヤ御存知はなされぬか。旦那は夜前暗討にお遭ひなされて候と。地大聲揚げて叫ぶにぞ淺香もはつと取り亂す。心をぢつとおし鎭め。詞何ともそれは呑込まぬ。お供に付いて其方が慥かに樣子を見屆けたか。さん候拙者奴は夜前町家に一宿し。只今歸る土手道に。一二町が其の間。草葉を朱に染めなせり。こりや何者の鬪諍ぞとけしからず胸さわぎ。立ち休らひし向うより兵藤が草履取某に聲かけて。お主が主の俊秀を上意を承けて。身が旦那。此の處にて討ち留めし褒美と有つて只今も。御太刀拜領なされしと名乘つて通るを飛び掛り。何の手もなく突き殺し血刀堤げて城内へ。騙け入らんとは存ぜしが。地お前に知らせ申さん爲立ち歸つて候と。急けば詞も後や前齟齬と誠の界をば。淺香は更に分かかねて眉を顰めて思案して。とつついつも早速にフシ智慧の出ぬこそ道理なれ。地茂太八は氣を急いてさあ兵藤を討ちましよか。但しは惡の本締の久國殿に致さうか。寧に御所へ亂れ入る御覺悟かと伺へど。答へもやらず泣きもせず常に變らぬ顏付に。茂太八苛つて聲荒らげ 詞年來日來御心てい見損うたが無益しい。義理になりとも最前より泣かいで叶はぬ場所を。さゝらけもない有樣は。親子の間に篤りと牒し合はせで有つたもの。道理こそ〳〵。今日よりは大將の御臺所のお身なれば命が惜しい筈の事。斯う打明いて言ふからは最早伺ふ事はない。地片時が内も兵藤奴が首をば胴に附け置いては。冥途の主へ不奉公いで引き拔かんと飛び出づるを。鐺を取て引き戻し。詞コリヤ爰な慮外者。女の主とて侮るか。逆上したる魂を撫り下して能つく聞け。何ぞや久國兵藤が愚かな智謀に乘せられて。討たれ給はん俊秀と日來に思うて仕へたか。さは言ひ武士の運盡きて闇討に抜遭ひ給はば。地無體の繼母遊ばせし我が君よりも自らに參れと有るのお使に久國殿か兵藤か。地追付來るは知れた事撰し賺して引き寄せて。たとへ親でも一太刀は討つて夫へ手向けうぞ。跡はお主が存分に粉に碎いても腹をいひ。只今言うた雜言を憎いと更に思はぬと。賺しつ宥め居る所に門荒氣なく打ち敲き。樽井兵藤大音上げ。詞我が君よりの上意が有る急いで開けと呼ばはれば。地茂太八聽て立ち上るをやれ未だ早い自らが。聲かくるまで顏出すな。人に見られな覗くなと オクリ無理にへ一間へ押し入れて。地門を開けば兵藤は隅々つまり〳〵まで。眼を配り氣を附けて フシ上座にどつかと押し直り。地使者の趣面談に申し入るゝもお笑止や。地日來は忠義の俊秀殿何と思案が狂うてか。惡黨大勢談合ひて君寵愛の傾城を。夜前盗んで出でられしを主命なれば是非もなく。地唯一人追つかけて首討つて候と。家來に持たせし器物淺香が前に差置けば。是れはと狼狽へ蓋を開け見れば面の皮を剝ぎ。我が夫とも他人とも辨へかねて凝視り。鬢搔き上げ顏を撫で訝しげなる有樣を。詞兵藤ちやくと詞をかけ。オ、不審なは道理道理。膝の下に引敷いて首をかかんとせし時に。俊秀暫時と取り付いて。討たるゝ命は惜しからねど不忠の武士の死顏を。地主朋輩に見られん事思へば〳〵恥かしい。料簡顏むと歎いたる。最後の一言不便さに面の皮を剝いだるは。兵藤が情ぞとフシさも有りさうに言ひければ。地淺香は少し嘲笑ひ。詞天晴お手柄さりながら。此方は一人惡黨は大勢有るとの物語。斯くゆたやかなる擧動を其の者どもは見て居つたか。地但しは眠つて知らぬかと問はれて兵藤行き詰り。詞誠に〳〵失念した。大勢斬つてかゝりしを弓手馬手へ投げ倒し。中に獨小賢しき新三郎と言ふ奴が。後へほうど抱き付きしを同じく膝に引敷いて。地首捻ぢ切つて捨てたるとはちげんはなせば奥よりも。新三郎こそ今川が。夫よ汝逃さぬと躍り出づれば茂太八も。お主の敵尋常に名乘つて勝負と飛びかゝるを。地兵藤彼處へ逃げ退きて。詞やれ侍共今川に疵ばし付けな生捕れと。地下知に隨ひむら〳〵と取つてかゝれば。兩人は太刀打揮つて騙け寄るを淺香は長刀押取りのべ。眞中に押隔たり聊爾をせまい早まるな。渡せならば渡しもせう討ちたくば又討たしもせん。

地方々最期の慰みにいで一曲を進めんとて。牀几にふはと腰をかけ急かず騒がず悠々と。長物語をはじめける。詞鳥に比翼の翼あり。松に連理の枝交す。況してや人の身の上に妹背の間は吉野河。江戸フシ地淺からざりし。年月の。千代に八千代の玉椿。變らぬ色を頼みつゝ　ハツミかけし情もフシ徒らに。秋ならねども散る紅葉。血汐に染めし俤は夢か。現か。現か。現とも夢とも更に分きかねてフシ暫し。呆れ居たりしが。地詞實に今思ひ出したり。首に五つの見樣あり。右眼左眼天眼地眼佛眼とて。智者聖人は身を悟り浮世に心殘らねば。笑ふが如き顏を。フシ眠れる花に譬へたり。フシ色に。心を。繋がれて。首は切れども煩惱の。羈絆は切れぬ死顏は尻目遣ひが癖になる。男を怨むは左を明き。女を怨むは右を開く。飢ゑて死すれば地をまもり。怒つて死する其の時は。兩眼くわつと見開いて。フシそらを睨んで亡ぶとかや。詞今川程の武士が。人手にかゝる無念さに。空見る筈をさもなくて。地に向ふのは怪しやと。地見れば耳せゝ鼻の穴。土の有るこそ不思議なれ。正しく贋首拾ひ首。證據をいざや見す可しと。かう鬢月代後髪。一度にぐつと引き拔けば。フシ腐つた西瓜の如くなり。地淺香莞爾と打笑ひ我が身の夫も女郎の。思はく樣も息災で遲しと待つて居給はん。跡慕ひ行く旅衣二人手に手を取り交し。奴供せいいづれもは綏りと是にござんせと敵の中をしやな〳〵とフシおめず臆せず出て行けば。詞兵藤怒つて聲を揚げ。エヽ腑甲斐なき侍どもそれ搦めよと罵れば。茂太八はつたと睨み付け。ハヽしやら臭いうんざいめ等。定めて音にも聞きつらん。奴が曾祖父祖父は新田殿の御馬添。栗生篠塚畑渡。其の名も高き四天王。地扨茂太八は草履擲と申せども。先祖も栗名字もくり。眼球もくりなれば。蟲喰なしの力瘤丹波越する遣錢。シヤ何程のことあらん。さあ打立てや尤もと勇み。進みし勢ひは。如何なる天魔疫神も恐れつべうこそ　三重見えにけれ

淺香今川道行

流れては。妹背の山の。中を行く。流れの末の今川や。戀の深みに沉めども。外見許りは。フシ淺香の前。浮世渡りのたつぎともやつし憔悴れて出て給ふ。フシオクリ心の〳〵内こそ哀れなれ。只今當町を速かに進め奉るは紀州渚の郡加田淡島大明神樣のみ御供洗米燈明の勸めなり。抑淡島大明神樣の由來を詳しく尋ね奉るに。忝くも天照皇大神宮樣の第六番目の姫宮にて渡らせ給ふなり。婆と言ひ形と言ひあら美しやしをらしやしつとりぽつとりちよい〳〵の濡者でござんすなり。御年十六歳の春の頃祝言目出度う住吉大明神樣の。一の后に備はらせ給ふこと。フシ疑ひなし。フシあらいたはしや。神や佛の御身にさへ。五する三ねつと申して。八つの苦しみ候をこれを。煩き病と思召しかやの。オクリうつろふ舟に。綾の卷物神樂の太鼓を相添へ。三月三日と申すに堺七度の濱より。おし流されさせフシ給ふとかや。フシ心の麻桿。わくせきと。絡め纏ひて藤の森オクリ花むらさきの色外に世をや厭ひてさま變へて。本フシ身は墨染の仇櫻。枕の露に吳竹の。伏見も後に眞菰刈る淀野の。情人知らじ。アヽ我とてもフシ遊女の。スヱテ筆に言はせて書き盡す。謠其の文月の七日の夜。君と交せし睦語の比翼連理の言の葉もかれ〴〵になる〳〵天の川逢ふ夜逢はぬ夜〳〵數へくるフシさだの瑞離神寂びて。舟と魚荷と爭闘も。都の手振削り掛け後は目出度う棹の歌　船歌憧るゝ。我は捨小舟思ひ。二つに三津の濱フシなにはにつけて。身を怨む。松蟲塚に音を比ぶ。左手は生駒葛城や。安部野に續く岸の松。歌住吉の橋の反つたは。恪氣からかも氣からかも。氣には恪氣をかけねども。恪氣からかも知らぬ人。十七で嫁入初めて髢小枕落した。落したるかや忘れたるかや。夜さり寢よとの約束か。今の世の中フシ色になり。フシ人の心は。仇惚の濡手で掴む淡島樣。長地諸人愛敬福德神御信心ある娘御に御器量よしの生よしの。殿御を持つて諸白髮。よね樣方は大盡が取り付き。吸ひ付く月の内一夜の暇も有らせじとの。御誓願にて候と口に。出次第言ひ次第間うつ。語りつ行く程に。女の旅路ぐど〳〵と道捗行かず足掻の。間ぢかき程とも思ほえず遠里。小野にぞ著きたまふ。なんまみだぶつ〳〵〳〵。地今川可笑しさ堪へかね。詞コレ奴殿。意氣筋張らずとえいわいの。何ぢや身兵を奴とは。

三衣を著して居るものを。 地近頃麁相千萬な。 詞そんなら蛸と言ひましよか。ヤイ。非修非學の女よ。既に如來の金言にも阿彌陀は錢程光ると有り。錢がなうては三人が鼻の下が干上るが。何とひつとも言うて見や。南無釋迦如來樣阿彌陀樣。 地淺香傍より笑止がり又々短氣が起つたな。何故いとしげに言ひ込める。 詞ハ、〳〵〳〵。何の實から申しましよ。つひに斯樣な辛苦いめは。なされもつけぬお二人ぢや。お心細うござらうと思へば涙が溢れます。私が泣いたら皆樣のおむづかろと存ずる故。あらぬてんがう申します。 地免にも角にも一刻も早う旦那に逢ひたさに。人の獨語さゝやくまで氣を付けて聽く故に。最前新地を通る時今川殿が二階にぢやと。言ふ聲を聞きましてづか〳〵と驅け上り。今川樣と呼んだれば。 詞座頭が琶琶を差置いて今川檢校是れに居る。何の用ぢやと咎められ手持不沙汰に逃げまして。 地後な新家で尋ねたりや。角力取の今川を フシ敎へましたと戲れも。 地奉公振に夕日影宿取るあだてもござらぬと。力おとせば今川はなう氣遣ひを爲給ふな。まあ半町か一町で我が親里の氣散じは。水風呂焚いて火燒して旅草臥も休ませしまよ。奥樣お出でと先立てば茂太八競うてきほひ口。 詞天道樣大日樣。一蓮託生にして下されませ。なんまみだぶつ〳〵〳〵〳〵念佛と共に 三重〈辿り行く。 フシ人目さへ。遠里小野の侘住居。樞も鎖さで出歩けどとらるゝ物も內證は。竹光らしい刀掛。 フシ是れ浪人の證なり。 地三人の人々は彼處に尋ね來りつゝ。今川內へずつと入り父樣私ぢや母樣と。呼べど答へるものもなし。淺香外より差覗き。 詞ハアお留守ならよいわいの。 地又明日でも來ませうと。呼べば茂太八不承顏。 詞留守なら留守と先達飛脚に言うてこしたが可い。 地武士でなうて無躾な。念佛を棒に振らしたと フシ錫杖を投げ付くる。 地今川打笑ひ此方のが尤もぢや。近所へがな行かれたもの親子の間に遠慮はない。這入つて休息んで下さんせ。 詞ソレ〳〵。其れで落ち著いた。 地奥樣おはひり遊ばせと オクリ連れたちつ內に入りにけり。 地今川ははや亭主顏下差憍べて釜に水。煎茶は何處に在ることと障子を開けて コレハ〳〵。

奥母樣疾こ變てござる。 地涙夜業でも遊ばしたか申し〳〵と起せども。搖り動かせど答へなし被せたる衣を引きくれば。襟に滴る血の雫悲しや母樣死んでぢやと。驚く聲に主從も立寄り見れば此は如何に。自害と見えて咽喉を一文字に三寸ほど切り割いて。消えて間の有る魂しは起回る可きやうもなし。周圍を見れど遺書も死骸に抱き附き今川は聲を揚げ。扨淺ましのお姿や死ぬる程なるせつなさは。我が身計りと思ひしにお前は何をかく計り。浮世の中を見限りてスエテ空しく成らせ給ふぞや。 地持病に恪氣は有りながらお年老られて左樣なる。はでな最期は爲されまじ。貧しき上に我が子をば預けし故に物事が足らはぬからのあらましか。度々毎のお文にも孫が顏見りや一入にゆかしい戀し懷かしと。繰言計り遊ばせしが今日來る私を待ちかねて。何故なう死んでは下さんした。母樣顏を見せに來た。唯一言物言うてお目をも明けて給はれと。 フシ恨み。かこつぞ。せつなけれ。 地淺香も共に涙含み別れは同じ道ながら。非業の樣に思はれて殘り多さも一入に。 フシ心の內のおいとしや。オ、理や道理やと抱き擁へて撫で擦り。慰めかねつ諸共に傍も離れず凝視れば。死骸の上に打覆ふ小袖に付きし紋所。抱澤瀉に二つ引はつと計りに驚きしが。さあらぬ體にもてなし。 詞覺悟の上とは言ひながらわるびれもせぬ顏はく男に勝るいさぎよさ昔は如何なる人やらん。奥ゆかしやと尋ぬれば。 地今川涙の隙よりも憂きも辛さも同じ身に。何にかは隱し申すべき。 詞父は近藤某とて。仙洞の上北面母は高貴なる藤原の緣はあれど埋木の。お愧かしく候なり。ム、成程々々さもあらば。藤原氏も近藤も常紋はみな藤の丸。それにあれなる小袖には變つた紋が見えまする。由緒ばしさふらふか。如何樣見馴れぬ紋所殊更今の身の上には。結構過ぎた春小袖誰ぞやつたか知りませぬ。 詞オ、知らしやれぬ筈のこと。抱澤瀉は自らが親久國の家の紋。二つ引は足利の御所の御紋を拜領し。二つを一つに取り合はす此紋所を著る者は。久國ならで外にはない。其の着る物が有るからは親御は惡に一味の人。茂太八必ず油斷をすな。敵の住家にうつかりと足は留めて居られぬと。身拵へして立ち行くを今川袂に縋り付き。 詞留めはしませぬ遣りましよが。何故私も參れとのお詞はかけられぬ。ム其方に如才はなけれども。 地大惡人の娘をば。 地伴侶にはならぬと振り放せば。軈て向うに立ち塞がり奥樣何うし

たお詞ぢや。詞お前と私と芥子程も重い輕いはない身ぢやに。悪人呼ばはり遊ばすな。淺香詞に針を持ち。今川其れは慮外で有らう。君傾城に成り下り性根の腐つた其方と。地曩らぬ武士の女房と一つ口に言はれうか。今川はつと差俯き。エヽ口惜しい無益しい。何故に浮川竹の勤めの身とは成つたるぞ。父は悪人母様には思ひもよらず死に別れ。二世とかけたる我が夫を尋ね逢ふべきしるべさへ。なき身の果ての淺ましやと。彼處へどうど臥し轉び フシ消えかへりてぞ泣きにける。地淺香も哀れ催せど。心弱くて叶はじと。見知らね態に立ち出づれば又起き上り手を上げて。奥様待つて下さんせ。詞性根の腐らぬ證據には親をば討つて見せましよと。地叫べば驚て驅け戻り。詞今よう合點が行きましたか。其の返答が聞きたさに故と詞は荒せしぞや。見遁しにもと言ひたいが工みの程が覺束ない。地お家の大事になる時は臣下の道が立たぬ故。此方が斬らにや主從が手にかけて討ちますぞや。詞御念に及ばぬさりながら。悪事の品も知れぬ内逸まつて下さんすな。必ずうちや。地斬りますと。互に詞固め合ふ心悶々茂太八も。杖に仕込みし槍提げ。二人隱るゝ障子の内。オクリ外もへ生死の フシ親子の縁。今逢うて今別るゝと知らでや歸る平次兵衛。久振りでも見わすれず。詞娘か扨も能う來たな。詞お伴侶は何處に御座なさるゝ。イエ〳〵伴侶はござんせぬ。詞ハレ脇宿がなされたもの。三人などは寢らるゝに。ハア異な事を言はしやんす。何の伴侶をば誘ひましよ。ホヽそんならば先づ其の通り。母が其方に寢て居るわ。障子を開けて逢うて來い。イヤマア緩りと逢ひませう。何故又障子が明けとむない。それでも後に逢ひたいもの。ムヽわりや母に逢うたであらうがな。アイ最前に逢ひました。然うであう〳〵。こりや娘。お主は父が可愛か。但しは母が最愛いか。異つた事を問はしやんす孰れに愚かはござんせぬ。イヤ〳〵。父と母とは善と悪。心に雲泥違ひが有る。孰れに從ふ言うて見い。地今川ずつと差寄つて。定めしお前が善で有ろ。詞イヤサ身共は大悪人。預り置いた茶々丸も久國殿へ遣はした。地お主も連れて參らうと御契約致いたが。應とは言はぬ容貌ぢや。例へば縛り括げても渡さにゃ分が立てられぬと。徐々立つて後なる。早速取れば今川も。かけたる刀

脇挟み。詞コレ父様。お年が老ればそれ程に。地心が解む物かいの悪事に。味なさるゝを。意見しかねて邸樣は御自害をこそなされた物。それにも直らぬ此方樣に無益な諫めは言ひますまい。私には夫が御座るぞや 詞伊勢新三郎長氏とて武士の女房でござんする。地搦めだてなぞなされたら親とは言はさぬ斬りますぞや。詞ハヽ義理ばつて面白い。親を殺すは夫へ義理。子を搦めるは武士の義理。汝縛つて連れて行く。寄らしやつたら切りますぞや。縛るぞ。地切るが。縛るぞと フシぐるり〳〵と附き廻れば。地今川堪へず拔く太刀を其の儘捻ぢ取り踏み倒し。危く見えし後より障子越なる槍刀。兩の脇つぼ刺し通されうんと計りに反りかへる。今川見る目もいぶせくて。詞父様怨みて下さんすな。胸の中なる悪心が其の身を責むると諦めて。地潔う死なしやんせ天の罰とは言ひながら。餘り無慙の姿やと スエテ裾に喰ひ附き。縋り附き フシ悶え歎くぞ哀れなる。詞平次兵衛打笑ひ。娘愚かな事を言ふ。障子の内に兩人を隱せしことは最前より。平次兵衛が知つて居る。男へ立つる義理の太刀首差伸べる筈なれど。親を討つたる天罰が報はん事の悲しさに。待ち設けたる他人の槍。何程嬉しい滿足な。お家の大事をお主等に知らせたく思へども。互に言ふな言はじとて固め合うたる平次兵衛。地眼の明いて在る中は中々人には語らぬぞ。アヽ槍先が鈍いやら贈に中らで死に難い。兩人の衆遠慮はないまそつと抉つて抉つてと。望むに任せ左右より胸先かけて突き返せば。流れて落つる紅葉河。下は血に泣く涙川。親は泣かねど今川はわつと計りに。泣き叫ぶ。詞ヤレめろ〳〵と囂しい。嬉しや最期が近づいたか人顔がもう見え難い。佛へ懺悔の獨言必ず傍で聞くまいぞ。某武士の其の昔慰みにせし繪の道が。今は渡世の種となり。自然と上手の名も高く久國殿へ召し出され。お成座敷の繪を描きしに。狩野雪舟にも劣らぬと御褒美の上宣ふは。何と昔の名人は馬を描けば草を喰ひ。猫を寫せば啼いたと云ふ。其方抔が筆先にも奇妙が有るかと尋ねられ。地烏滸がましくは候へども皆一心の所爲なれば。有るまい物でも候はずと御返答申せしに。近くへ寄れと招き寄せ。詞久國出世の望み有り。無間の鐘を其方が心を籠めて寫してくれ。本懷を達したら褒美は望みに任すとある。此の身

は老木の事なれば何の願ひも候はぬが。地たゞ一人の男子の孫お取立に與らば。兎も角もと答ふれば。幸ひ〳〵久國が養子分に致さうと。證據の爲の墨附は。此の帶の中に有る。詞其の上當座の要用とて金五十兩頂戴し。直に都を旅立ちて佐夜の中山分け入りしを。怪しき者と搦められ既に御前へ召し出され。今川殿の御意見は胸に徹へて忘れねど。地武士の約諾極めし上鐘の形は見て戻る。三日が内斷食して頭の血を取り墨に混ぜ。一念の筆端に孫が出世を祈願して。思ひの儘に描き寫し平次兵衞は悦べど。女房は取り敢へず。詞其の身〳〵の貧福は神佛の力にさへ。叶はぬと聞く物を其の上應ぜぬ幸ひは。子孫のかゝはしとかや娘が方へも言ひ遣りて。談合づくが宜からうと意見するのも聞入れず。久國方へ傳へしに今朝自身來られて。向後一家の證とて御紋の時服をくれられて。孫も受取り繪も受取り歸られて半道も。はや行かれんと思ふころ家來に申し越さるゝは。貴殿の娘今川こと淺香と言へる女房と。茂太八と言ふ奴めと今晩か明晩は其の邊へまゐるべし。屹度搦めて出せと有る。何とも合點行かざる故使の奴を縛りあげ。大竹持て打ち撲けばあら勿體なや恐ろしや。孫茶々丸を隱匿ひ置き大將の子と僞つて。權威を附けて後々は國を奪はん工みとの。白狀を聞くよりも南無三寶欺された。取り戻さんと驅け出でしが多勢の者に取圍かれ。地犬死しては誰有つて訴へ報らす者なしと。宿へ歸れば女房は咽の邊を切り割いて。臨終の體に見えたるが某が手を採つて。詞言うて回らぬ事なれど。麁相なことを遊ばした。近藤平次兵衞こそ反逆人の一味よと。世間の人に謠はれては先祖末代萬々年。家名の廢る悲しさに。否々今度の惡心は。女房の所爲ぢやと言はれん爲。私や自害して死にますと。言はれた時の愧かしさ。娘推量してくれい。地浮世に心は殘らねど今日來る娘に逢ひたいと。言うた計りで程もなうがつたりと落ち入つた。詞母は世界の大善人。世に在る限りは回向せい。平次兵衞は無道者。云ひ出しもすな泣きもすな。親孝行と思ふならば茶々丸を取り戻し。反逆人の惡名を何卒雪いでくれたらば。地千僧萬僧供養より。フシ草の蔭にて悦ばう。地織梅と言ふは是れ計り南無阿彌陀佛と。言ふかと思へば息絶えて。フシ欲處へかつぱと臥しにけり。地今川給り密へかねて。共に

死なんと泣き狂ふを。前と後に取り付いて呵つても見つ泣いても見つ。漸う諫め立ち出づる行くは三人留まるは。二人連なる冥途の旅。又逢坂の關ならで。遠里小野油賣戀せぬ人は嬉しさも。物の哀れも知るまじと皆人。語り傳へける。

第四

斯くて其の後　地日向の前司久國は已が心の曲りたる。慾の釣針四海に下し餌に罹りし近藤が。孫茶々丸を賺し取り大將の子と僞つて。新たに殿を構へつゝ諸大名へ觸れ流せば。御祝儀の獻上物緞子卷物東京錦。宛然寶の山こかし終には天下をひんまろめ。懷にせん下工み。フシ逆意の程こそ恐ろしけれ。地然るに若君御不例にて次第に重らせ給ふに付き。典藥衆は枕をわり針立按摩も時ならぬ。手に汗握る計りなり。地爰に名譽の梓神子生國は伊勢國。二見の浦の者なるが此のごろ京都に入り込んで。歌をひかして占ふに一代の善惡を。神の如しと言ひ囃す久國大きに悦んで。急いで參れと呼びづかひフシ櫛の齒を引く如くなり。謠神慮。種とこそなれ歌占の。彈くも白木の。手束弓。フシ矢竹心か。今川が。面を人に知られじと。髮おつさばき立烏帽子後に梓小短册。長絹の袖搔き合はせ。さも悠々と若君のフシ御前。近くおし直るワキ地久國詞殿懇に。詞早速入來滿足せり。疑ふにはあらねども歌を引いて占ふこと。昔も例候か粗物語いたされい。シテ謠夫れ歌は天地開けし初めより。陰陽の二神天の衢に邂逅の。小夜の手枕結び定めし。世を學び國を起して。今も道有る妙文たり占とはせ給へや歌フシ占問はせ給へや。詞何れにても候へ。手に當らうずる短册を引いて御覽候へワキオ、尤も〳〵。若君の名代に久國が引いて見よ。そのはらや伏屋におふる帚木の。有りとは見えて逢はぬ君かな。如何有らうの。シテハア顏さへ知らぬお袋に逢ひたい見たいのお心が。積り〳〵て大切なお煩ひに成りました。ワキさう占うた心は如何に。シテ地ハテそのはらとは母の事。伏屋におふる帚木とは。賤しき喩へに候へば若君樣は判然と。げしやく腹でござんしよう。詞ワキサツテモ神子殿名人ぢや。成程々〳〵若君は大

將軍の折節に。ちよつちよとお手をかけられしお湯殿が産みおとし。母は亡くなり祖父祖母の手に養はれ坐せしを。久國不慮に尋ね出し御親子の對面も。地近日なさるゝ筈なれば御大切なるお身の上。御病體は先づ知れた御理運の儀を占はれ。成程其の儀も知れますが。尋ねる人の心底に曲りが有るで合ひますまい。ワキハテ久國は曲りはせぬ。シテイヤ曲らぬとは申されまい。地そのはらや伏屋におふる帚木の。有りとは見えて逢はぬ君かなとは仰しやれぬか。ワキ詞ソレガなんと。シテさればいな。お袋は息災でおまめで無事で。地有るとは見えてでござんする。されども人目を忍ぶ故物をも言はず名乘りもせぬ。辛い心の限りをば逢はぬ君かなと詠むからは。歌が實でござんする。ワキ詞神子殿考へ違ひで有らう。シテ地麁相な事は言ひませぬ。ワキ詞スリヤ占ひは赤下手ぢや。シテアヽ下手か上手かは知らねども。母有る證據を見せましよと。する〳〵と走り寄り茶々丸を取つて伏せ。懷刀さし付くれば。ワキ詞久國大きに驚きて。アヽ待つてくれ早まるな。扨は儕は今川よな。狼藉したら討殺すぞ。シテ愚かにござる久國殿。親の遺言守らん爲。威勢强きお座敷へ女の獨り來るからは。討殺さるゝは覺悟の前。地此の子を冥土へ伴立てば私は本望さりながら。此方の工んだ惡心が世間へはつと知れたらば。御一分が立ちますまい料簡をして此の若を。竊かにお戻し有る時は私も沙汰せずお前にも。お名の立つ義は有るまいが。二つに一つの返答とフシ死ぬるを恐れぬきつ相に。ワキ地久國ほうど持て餘し態と詞を和げて。詞天晴武士の娘ぢやな。詞オヽ出來したよ潔い。ことに依つたら其方が望みを叶へて取らさうが。久國が願ひをば其方同心してくるゝか。地子をだに戻して下されば何でも異議は言ひますまい。ワキ詞さして異つた事でもない。それに掛けたる繪を見たか。是れぞ則ち汝が親。平次兵衞が一心を。筆に籠めたる無間の鐘。奇妙不思議も有る可しと廣言はいたれど。何ぼう撞いても音を出さぬ。天鼓が鼓の例も有り其方立寄り撞いて見よ音をさへ出さば悴をば案内なしに伴れて行け。シテ何と仰有る久國殿。地未來の罪も恐ろしき無間の鐘を私に。詞ワキ鐘かねば汝討殺すが。シテ鳴つたら此の子を戻しやるの。ワキ遲いと一所に免さぬが。謠シテ縱

へ罪には沉むとも。〳〵。又は罪にも沉まずとも。浮きながら我が子の代りに。詞久國殿撞きますぞや。ワキサア撞け。シテ地今川逸方涙ぐみ昔が今に至るまで。繪に寫したる鐘が音を出す例なけれども。孫可愛いと思召す其の魂魄は彩色の。中に隱れて見給はん今一念の無間の鐘。鳴らねば現在親と子が命を果す劔の中。未來は扨措き現在に蛭の地獄へ墮つるとも。親への孝行子の命。助くる爲の一聲を聞かせて給べ父禄と。スエテ袂のしたに手を合はせ。謠薄氷を蹈む心地にて。心も危き此の鐘を。撞けば不思議や其の聲の心耳を澄ます聲出でて。フシ實にも親子の證のこゑ。地サア其の子をば請取ろと寄らんとするを。ワキ引抱かへ。撞木の繩にて咽喉を。ぐる〳〵卷いて締め付くれば。シテ今川は泣き叫び。扨は久國欺したな。ワキ詞ヤア欺すとは推參な。智謀計略常の事。諸願の鐘に音を出せば我が本懷は達した物。地汝は後日の邪魔になる觀念せよとて締めつけられ。シテ地眼を見つめ身を震はし。いとたへげなる聲音にてエヽ口惜しい腹立ちや汝三日と立たせじと。言ふ聲計り命の綱彼處へかつぱと投げ付くれば。コハリあら〳〵不思議や一念の。火の玉體を飛び出でて。怨むが如く地久國をぐるり〳〵と追ひ廻りフシ後の長押に。地當ると見えしが忽ちに怒れる形を現はし。コハリ眼は電光石火の如く叫べる聲は雷霆の。轟々と蹈み鳴らし。高塀練塀飛び越え。〳〵行方も知らず〳〵失せにける。シテワキ二人よき光ぞと影賴む。世の光ぞと。鉢叩賴む茶の經は佛のキヨヒヨン。御寺立舟キヨヒヨン。會津の里きよに陸奥國有りキヨヒヨン。瓢簞ふくべに緒を附けて。折々風の吹く時はヒヨヒヨフヒヨン。しほうじの鐘の寒きに有りせい〳〵がくにかけて。後生を願はばなどか佛に。フシ成らざらん。シテ詞コレ新三郎。一番鷄が鳴いてから二三里程も歩んだに。見やれ破軍の劔先は南の方へ指して有る。今宵はいかう夜が長いなう。ワキされば〳〵あの鳴る鐘が七つでござらう。シテ實に鐘の音がする。アヽ合點の行かぬ。爰は遠州の鹽見坂。中山寺に鐘はないが。待ちや〳〵。地の底で鳴るぞや。ワキ眞に地の底で鳴りまする。イヤ〳〵合點行きました。あれは談義の鐘でござる。シテハヽ〳〵。たはけた事ばかり。地の底に談義が有るものか。ワキムヽ世間

を見ぬ者は知らぬの〳〵。是れ。了海和尚は死にやつたぞや。何が談義好きな和郎では有る。三途川の婆蓮に法華を誹つて聞かすのぢやわいの。 シテ是れは如何樣さうも有ろ。何ぢや知らぬが滅相に大地がゆさ〳〵動くぞや。 ワキ動きます〳〵。是れはならぬ〳〵。桑原〻〻。ヤレ俊秀殿。何處ぞに二階のはつた山はござるまいか。世直し〳〵桑原桑原 シテ謡 魂は籠中の鳥の開くを待つて去るに同じ。消ゆる物は二度見えず。去る物は重ねて來らず。 フシ 俤も。フシ別れに。變る。鐘の聲。習ひ悲しきえんぶの道。申し。〳〵。 ワキ詞ヤア誰やら呼ぶぞや。アヽ悲しや幽靈じや幽靈ぢや。 シテ詞ハレ爰な和郎わいの。假にも法衣を著する身が幽靈でも化物でも。懼い事が何が有る。 ワキオヽ然うぢや。空也上人の流れを立つる。茶筅賣にまうしとは誰樣ぢや。 シテツミ歌誰とは愚か飽かずして。別るゝ今朝の道芝は。數より外の露涙。相の枕の鴛鴦に。二世と交せし言の葉の。 フシ昔語に來りたり。 ワキ詞相の枕とのたまふは。神子町の幽靈ぢやな。 シテフシ紅の。涙に染むる戀衣。今墨染に引換へし。人の俤現と夢に 小オクリ交すへ契りはうき身の牀のうへに亂るゝ。寢亂れ髪は下に解けずと フシ人は知らずや。 フシあさましや。 二人あら〳〵〳〵嵐吹く。紅葉は顏にちり泥の積る思ひは 曉の。鐘に殘して谷風。山風そよ。〳〵〳〵そよぎ靡くや青柳の。絲に纏るゝ絲の袂。戀しさ募る淵瀨川。我は歸らぬ渡川。ありし勤めの其の內は。 シテ歌月日かぞへて何日か扨。地眞の名附けて我が內と。 長地人に呼ばれて見まほしく二人が中に我が子ぞと寢させても見ぬ垂乳女が。迷ひの種の數々に。 フシ人目包めば涙さへ。 地我が物ならず我が物は。心計りともてなせど是れも外面へ出す事か。他所に見なして育てつる小笹の露の五つ六つ。三世を契る妹と背のまるに一夜さ添ひ果てず。此の世からなる三瀨川。散れば芥の仇櫻。身の成る果ての悲しやと。 フシ泣くより他の事ぞなき。 ワキハヽ〳〵。怖い物の又大事ないもの。逆緣ながら口說いて見ましよ。ヽウ〳〵其れなる幽もじに物問はう。冥土の旅にも新銀は四層倍に遣はるゝか。五文餅も大きいか。 二人ナウ五郎三郎田舍へお下りあらうずるには。瓢簞なりとも置いて行け。小瓢簞をなりとも置いて行け。それはや女郎安き間

の事なり。生國はや女郎でづくでん。づでんと闘うずるには。瓢簞なうてはお笑止や。 シテ語るに罪も消えぬべし。語るにつけて。 フシ恐ろしや。 江戸地罪を顯はす淨玻璃の。鏡に惡を寫せば。八萬奈落明らかに。 恐く見得たり。劍錐地獄の苦しみはさも凄じき炎の中へ。眞逆に落つる事。 フシ三羽の征矢より速かに。 コハリ下より猛火を吹き上ぐれば咎は上より落つる所をさつ。〳〵〳〵と吹き上げて。隙なき苦患を送るなり。劍樹地獄の苦しみは鐵石をたつこと一由旬。劍を犇と植ゑ列べ罪人の追廻し。岩石背に結ひ付けられて。地嶺よりどうど突き落さるれば骨は微塵に碎かれて。風に木の葉の フシ如くなり。 フシ火盆地獄の。有樣は頭に火焰を頂けば。百節の骨髓より焰々たる火を出す。 コハリ或時は焦熱大焦熱の焰に咽び或時は。紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ。火槍あなうらを燒き足蹈はとう〳〵と。地手の舞尺拍子打つ音は。窗の前の立ちつ居つ。苦しや フシ堪へ難や。我とは撞かぬ無間のかねごと。親の報いと敵の刄と我が身一つを責めに責められ。修羅の太鼓は今日の身の上。仕舞ひ太鼓は昨日の今川。我が身の敵我が子の仇。久國討つて給はれと。言ふかと思へば妄執の フシ雲に形は消えてんげり。 ワキはつと計りに新三郎空しき跡を詠めやり。やれ懷かしの我が妻や。身は瓢簞の浮れつゝ。憂きが中にも逢ふことを待兼山の時鳥。巫山の神女雨となり。雲と聳えし古の夢ならずとも今一度。姿を見せよ聲聞かせよ。死出の山又三途の川。我を伴へ今川と前後をわすれ西東。彼方へ走り彼方へ行き。途方涙に伏し轉び フシ慕ひ。歎くぞ道理なれ。 シテ詞俊秀諫めて聲張り上げ。アア狼狽へたか新三郎。何程泣いても悔んでも立ち歸る可き道もなき。此の世に心殘さまじ迷ふが故に地獄有り。 地悟れば其の身其の儘の胸に開くる蓮葉の。半ばを分けて待ち給へ。 ワキ頓生菩提と伏し拜めば。 シテ復現はるゝ今川が笑める容顏莞爾と。あら有り難や尊やな千歲交せし睦言も。かからん後は何かはと思ひ知られて諦めて。火宅を出づる法の印を是れ見給へと。言ふかと思へば俤は フシ旗の。文字に殘りける。二人兩人はつと感涙の袖にも餘る心地して。急ぎ都に忍び行き敵を討つて手向けんと。急ぐは。 ワキ心留まるは。名殘の袂新三郎。消えにし空を詠めやり

二人よしや君唯。ア、寢ても覺めても忘るなよ。唯一念の念佛なりけり思へば浮世は夢の世ぞかし。榮華は是れ皆春の花。名利の心を振り捨てて。菩提の岸に至る可し。夫れ一代教主釋迦牟尼如來の說法には。華嚴あごんはうどう般若。法華涅槃法相律宗なんどと云へるこむづかしい事共我等が樣なる愚智無智鈍なる衆生の爲には思ひも寄らず。彼方の門ではひよつひよひよすひよひよ。此方の門ではたん〳〵からり。ころりと打ち鳴らして願ふ後世は茶筅召せ。茶筅召せ佛法あれば世法有り。煩惱有れば菩提有り。柳は綠花は紅の色々なれば。急いで淨土を願ふ可し。ワキ南無阿彌陀。シテはるひた。二人はつぱいと茶筅。御佛本願力。もんめうよく往生界しつとうひこくじち。ふだい天。實に西方極樂の。法の友又情の友。忠義の二字の友こそは現世も。後世も頼もしき

第五

地いで其の頃は文明二年孟夏の天。若葉秀づる花の御所日向の前司が推擧にて。茶々丸君と御親子の御對面有る可き旨。兼日仰せ出さるれば。地細川桃井島山。仁木赤松吉良石堂。在京の諸大名殘りなく相詰むる。地今川備中守俊秀。伊勢新三郎長氏は。お目通も遙かなるフシ大庭に伺候する。地兵藤目敏き男にて。詞ヤアそれなるは俊秀にてはあらざるか。御勘氣を蒙る身が何故御前へ出づる誰かある彼。引き出せと怒りける。細川詞おだやかにさな宣ひぞ榑井殿。全く彼等が私に罷り出でたるに候はず。此の座の大名殘りなく料簡付けて上のこと。必ず麁相遊ばすなとおほやうに應待せば。大將御氣色損じつゝヤア何と言ふ勝元。諸大名が談合はせば如何なる無禮も頼兼が。料簡せんとの結構か。此は勿體なき御仰せ上を輕しめ候段。憚りなきには候はねど御家の一大事。事急に候條押して召し伴れ候と恐れ入つて申しける。君頷かせ給ひつゝ。家の大事を兩人が訴へんとの所存よな。語れ聞かんと御說有る。今川謹んで申すやう。承れば御養君御所へ御入り遊ばす由。御吉左右と申さうか御家の破滅と申さうか。御思慮有るべく存じ

候。もろこしの堯王は七人の實子を捨て。舜を位に即け給ふ例も數多候へば。地況んや御實子なきからは御養子の儀を俊秀奴が。貶し申すに有らねども。當年僅か五歲の若。發明にござらうやら。何ともならぬ頑童やら。行末見えぬ他人の子を親にも知らせずお館へ。召し入れられ候事。麁忽の儀に候とフシ詞正しく相陳ぶる。地時に久國進み出て。詞ヤア珍らしや俊秀。其の樣になられても今にもがりを止めぬよな。コリヤ若君の御事はな。お袋の遺言にて某願ひ奉り。御實子に紛れがない。狼狽者と。言はせも敢へず新三郎詞をかけ。イヤ異つた事を承る。二子は世間に多けれど一人の茶々丸が二人の腹から生まれうか。慥かに母の有る若を。それにも爭論ひ給ふかとフシ詰め掛け。詰め掛け罵りける。地久國怯む氣色なくこりや素浪人。詞俊秀に頼まれて由ない事の命がけ。宜い首尾に歸らいでな。若君のお袋は鹿間殿とてお館に奉公有りし女中ぢやが。汝が方に母と言ふ女を爰へ伴れて出い。ハレとぼけた顏を致されな。後日の難儀を厭がつて其方が殺されし傾城の今川よ。地血を分けたるは新三郎親が名乘つて出るからは。外に證據の要るべきかと詞を荒らげ一命を。義に輕くする長氏がフシ心の中こそ潔き。地榑井兵藤つゝと出て新三郎とは汝よな。詞若君の詮議より先づ盜人の詮議しよう。日本の地に住みながら大將に敵をなし。惡黨どもを談合うて御城内へ忍び入り。御寵愛の傾城を奪ひ取るのみならず。家來栗原茂七奴が首をば能うも切つたな。地何卒搜し出さんと色々世話をやいたるに。己と曜る天の網彼奴めを縛れと喚はれば。俊秀は聲を上げ是れ〳〵麁忽し給ふな。詞全く以て新三郎。城内へ入らぬ儀は某が證據人。栗原茂七と言ふ奴は討手と名乘つて某に。無體に切つて蒐りし故即座に討つて捨てたりしが。地貴殿は何の意趣有つて。御上意と僞つて俊秀討ちにおこされた。詞イヤ虛言申されな。兵藤曾て覺えがない。其方如何なる所存にかお暇も乞ひ受けず本國へ下りし故。君も御勘氣なされしを笑止にこそは存じたれ。中々討手は遣はさぬ疑はしくは茂七めを。今爰へ引き出されい對決を仕らう。フ、其方は俊秀をいづな使にめさるゝか。地討つて捨てたる茂七めに物言はす儀は存ぜぬとフシ空嘯いて居たりける。詞久國呵々と笑ひはあ地工

んだり〳〵。跡方もなき事どもを口に任せて言ひ散らし。證據に詰れば殺されたのいや此方が殺したと。死人に妄語といふやうな淺々しい義を持ち出いて。御親子の御中を妨害せんとの俊秀が。心底心許なしと四邊をきつと睨め廻す。桃井腹を据ゑかねてつか〳〵と立ち寄つて。膝下にどつかと坐り。詞コレ親父。貴殿の言分尤もぢや兩人いかい迂論者。何までもない若君のお袋を呼出せばさらりと濟む事さ。館へお入れなされたか但しお里に在すか。お迎ひに遣つたが宜い。イヤサ桃井そなたは何と聞かれたぞ。鹿間殿には若君を産の上にて死去なされた。スリヤ只今は御座らぬか。ハテ五六年以前の事桃井ふつと吹き出し。やいたはけ者。今兩人が言ふ事をば死人の妄語ぢやなんどとて。此の頬骨で嘲つたが何故若君の證據には。死人を立てゝ言ひ廻る。サア其の鹿間とやら言ふ女死なうが土になられうが。蘇生らせて伴れて來い。いやと言うたら兩人共首の骨を捻ぢ折ると。地言ひ詰められてうじ〳〵とフシ尻ごみするぞ小氣味よき。地大將扇を上げ給ひ桃井必ず聊爾をすな。鹿間が事はうす〳〵と心に覺えある女。證據は卽ち頼兼と御鼎眉餘る御詞に。いきりきつたる桃井も。諸大名の顏見合ひフシ惘れ果てたる計りなり。地細川はつと手を打つて古人の詞に違ひはない。日月明らかならんとすれども浮雲是れを覆ふとは。大將の御身の上聰明叡智の背も。讒佞の雲覆ふ故理非善惡も悟れば。數百人の大名を久國兵藤兩人に。思召しかへられぬ。地曲もなき大將に。忠勤勵んで何かせん。詞東海に舟を漕ぎ魯仲連が跡を追ひ。南山に歌謠うて寧戚を友とせん。地面々如何と言ひ捨てゝ座敷を出づれば諸大名。一度にはらりと立つ所に俊秀が女房淺香の前。奴茂太八驅け來り御前に畏まり。詞恐れながら御注進申し上げ候。趣は親久國老耄仕り。若君様とて差上げしは僞り事にて御座候。御吟味遂げられ給はれとおとし付けて言ひ上ぐる。桃井は喜んでさあよい者が出て來た若やいで來て面白い。地是れも緣者の證據にて。糠悦びにならうかと。フシ堅唾を呑んで聞き居たり。地大將暫時御思案有り親子の中に兩說有り。所存の程こそ心得ぬ但し慥かな證據ばし。持參せしかと宜へば茂太八はつと飛び出で。久國方より近藤への書子證文を翻狀。斯樣々々の次第にて此の奴めが手

に入れて。ごはりまらすもこ短うフシ恐れがましく差しあぐる。詞大將啓き見給へば紛れもなき久國が直筆印形鮮明なり打驚かせ給ひつゝ。久國兵藤搦めよと御意。地待ちかねる桃井は。蹴たふし〳〵蹈み倒し天命知らずと引据うる。詞大將かさねて御詰には。茶々丸知らぬ惡と云ひ一旦親子の約あれば。久國が所領をば殘らず彼に宛て行ふ。地新三郎後見して先祖の家名を顯はすべし。大惡人の久國めもあさかが忠義の褒美して。命を助け追ひ拂へ。詞兵藤め一人は不忠の者みせしめに梟木にさらすべし。地俊秀が金言を今こそ思ひ合はせしと。御機嫌の能き御笑顏。それが則ち君が世のフシ久しかる可き例ぞとフシ皆々悦び勇みつゝ國も太平壽も。大平樂と治まりて賑ふ。春こそ目出度けれ

右之本遂吟覽頌句音節墨譜等不違毫釐令加筆且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也

豐竹上野少掾
作者紀海音
大坂上久寶寺町三丁目
正本屋 西澤九左衞門 版

傾城無間鐘終

攝津國長柄人柱

攝津國長柄人柱

作者　並木宗助
安田蛙文

序詞　浩々たる萬古備に甄さずと雖も。周處は長橋の害を救ひ。橘姫は王船の難に代る。御秡川の形代鄂里の河の婦人。日本唐土異れども是皆河伯の心となす。滄海原の浦安く傳へ治めて三十五代。豐財の姫帝　皇　極天皇と申し奉るは。萬乘の坤位を踐み。和らぐ國の岡本や。飛鳥の里の宮所　オロシ尊き聖化ぞ盛んなる。地色玉にも勝る御粧ひ。寶祚二八に渡らせ給へば。一人の師範たる藤原の鎌足公。同じく政務に年を經し蘇我の蝦夷大臣。胸に包みし惡心は誰か白髪を引入れて。冠正しく着座する。御階の下には鎌足の老臣。山上の次官有風。此方は蝦夷が雜掌縣の押照。御殿に月卿雲客の麗き從ふ時津風。鳴らせる枝は荒海の。フシ障子の。波も靜かなる。地色天皇御聲麗しく。詞古へよりも代々の帝。都の土地を定め給はず。所々に遷さるゝは皇居に相應せざる故。今此飛鳥の宮所も。四方の間狹くして群臣諸卿も是を歎き。政に障あり。毛法の廢れる時は萬民の爲ならず。地それ故都に程近き三輪明神へ籠り參らせ。三七日の其間。都相應の地を祈り。神の慮に任せんと思ふは如何にと宣旨ある。詞鎌足紫の冠を傾け。勅諚の如く都の土地と申すは。青龍白虎朱雀玄武。四陣の勝地備はらざれば九條の廣路整はず。三七日の御參籠然るべしと勅答し。ナウ蝦夷公。女帝の叡慮を痛められ。地臣下萬民を御惠み有難く思さずやと。云へば蝦夷は打頷き。詞下萬民を子の如く。御憐みの叡慮の程。折柄好ければ某も申し出す仔細あり。年罷り寄る此蝦夷が。悴入鹿は不行跡。

地色勿體なくも天皇に心を懸け奉り。艶書を差上げし由。聞くと等しく勘當し。詞今は何處に居るとも知らず。大臣職の跡目無く。政道の家絶ゆれば自然と君の爲ならず。つく〴〵思案を運らすに。悴入鹿も艱難し先非を悔いて歸るは治定。さるに依つて御邊の娘藤照姫を某が貰ひたし。彼と夫婦になすならば。自ら天皇へ戀慕の心も思ひ切り。地色大臣職も斷絶せず。兩人一家と成るならば猶政道を熟談し。天下の爲君の爲。是非藤照を賜れと。己が惡事に引入れるお爲ごかしに云懸けられ。例に變らぬ我儘と鎌足公は山上と。顏見合せて笏取直し。詞娘藤照所望の儀祝着に思へども先達て御邊の甥。石川三位光成と許嫁せし上は。はや某が儘ならずと。地仰せも果てぬにイヤ〳〵それは內證の詮議。詞緣組といふものは。凡そ六ツの禮あつて。表立たねば成らぬ事。御前に於て申し出すは國家の爲の表向。光成は我甥なれども。伯父さへ知らぬ口約束。御邊の儘に成らぬとは。フウ扨は蝦夷を嫌ふのか。地一家に成るが厭ならば光成とも緣組無用。サア返答はとせりかゝる。鎌足騷ぎ給はぬを。山上次官堪へかね。詞コレ蝦夷公。主君斷り申さるゝに。無體に望みの御詞。一物もあるやうに。何とやら人聞き惡し。我も人も年寄はもたへがなくて腹が立つ。胸を鎭めて御思案あれと。云はせも立てず縣の押照。ヤア慮外なり山上。主人と主人の御前沙汰。老耄の差出て。無體の望み人聞きが惡いとは。今一言吐出さば。地痩首を打落すと。反打ちかゝれば。から〳〵と笑ひ。詞主人の無體を意見もせず笑止さに諫める某。老耄といふ詞は。汝が主人の蝦夷へ差合。年寄つたれども山上次官。其刀一寸にても拔放たば。地腕切折らんと立ちかゝる。イヤ緩怠と雙方が。寄らんとするを御簾より。待てと遙かの綸言に。フシ恐入つてぞ畏まる。地色帝は鎌足蝦夷を召され。詞藤照姫緣組のある上は。假令鎌足承引するとも。聟光成が得心せじ。然れば數多の挑みとなる。蝦夷は入鹿が道ならぬさがしき心をやめ歸らば。公卿の內の娘を娶り。大臣の家を繼がすべし。鎌足は藤照を光成に添はされよ。かく自らが云ふからは。兩方仲良くし給へと。地物美しき御捌。蝦夷主從苦い顏。鎌足次官は有難く時の面目悅ぶ所に。詞三輪明神の神職。高木大之進慌忙しく參內し。昨夜明神の御山へ。車輪の如き星落ちて。神木の杉八本ぽつきと折れて震動す。餘り不思議に候まゝ。奏聞のため參內。地上の御沙汰もあるべければ。吉凶は申さずと色を違へて言上す。地色鎌足暫し御思案あり驚き給ふ御氣色。詞是客星とて天上に常に無く。帝位を望む者ある時。現れ出づる惡星。杉八本の折れたるは。坤の卦の數女帝の位。直なる御代に災をなす前表。地御愼みあるべしと。奏し給へば帝を始め。月卿雲客山上もフシハツと驚くばかりなり。地色蝦夷は胸に應ゆれど。些とも怯まず冷笑ひ。詞こと〳〵しや鎌足。三輪の山に星降りしは。天皇都や他に遷す勅願ある故。三輪明神へ行幸と。天帝是を告ぐるのみ。草木に心無し。星に限らず。雷にも折れ風にも折れる。數を以て理を盡さば。木の事は扨措いて鋸屑もいへば云ふ。地蝦夷が申すが誤りならばヤア大之進。汝吉凶包まず申せ。違ひはせまいと問懸けられ。詞御意の通り蝦夷公鎌足公。御推量の一方が。天文に合ひ候と。地寄らず障らぬ詞の末。詞イヤサまだるい返答。孰れなりとも慥かに云へ。しかし其方が娘櫻井は。次官が悴源內が妻と聞く。緣者の主の因緣を思ひ。鎌足が肩持たば汝が贔屓の沙汰となる。眞實な某が。詞に附かば是順道。地サア〳〵どうぢやと退引させず。後に押照き詰め廻せば。次官も眼に角を立て。詞粗忽を云はゞ大之進。一家とは云はせぬと。地詰寄せられて迷惑顏。詞拙者は此事奏聞ばかり。吉凶は申さぬと始めより申譯。地はやお暇と占の。フシ逸散にこそ立歸る。地色天皇左右を押鎭め。都遷しの願といひ斯かる不思議のある上は。愈々三輪に行幸して三七日籠るべし。鎌足蝦夷に政。宜しく任すと言の葉も。纖弱なりし女帝。御帳臺へと立ち給へば。四人の主從善惡に。別れ開くる。大八洲。搖がぬ國と。三重仰ぐなるフシ春霞。靉靆く雲の上人も。心賑ふ彌生頃。三輪明神へ御幸とて。供奉の官人先拂ふ。中にも三位光成卿。非常を糺す警固の司。御車よりも二三町みそ川土橋物隱れ。女見る目は格別に戀と情と淫と。三ツを合せて光成と。スエテ人も面を見知るらん。フシ續いて是も色含む。地色二八の眉のかほよ花。鎌足公の一人姫藤照姫と名付けしは。君に卷かれて寢て見たき花の姿に引添うて。山上次官が末子八王。主と家來の不相應。龍田の山の紅葉と。三笠の山

の毬栗を。フシ並べて見るが如くなり。地色我より先の人止めんこれよ申しと呼懸けて。立寄る中に振返る。今見た顔で光成卿。詞是は〳〵鎌足公の息女。定めて父御の御名代。近頃御苦勞千萬と。地色云ひさし歩む袂を控へ。御苦勞とはお前の事。今日の行幸を幸ひに。ちつと云ふ事怨みる事。覺書して參りしと。手を執り給へばアヽコレ〳〵。詞爰は人中。あれ。八王も彼方向く。地面目無し恥しと。振切り給へば大事ない〳〵。詞幼きより許嫁。地天下晴れての夫婦仲。其の祝言は何時の事。二月延び三月延び。半季一年便々と琴の糸ほど延びたがる。伯父御蝦夷樣が不得心。イヤ從弟の入鹿が勘當故。今は成らぬのまあ待てのと。地延びるは一物。さあお迎は何時の日ぞ。それ聞きたいと執着いて。人目構はぬ催促は。フシ傍で聞くさへ身を冷す。地色光成ほうと持ちあぐみ。斯くあらうと存じわざと見ぬ振。幸ひ帝三七日の御逗留。其間に緩りつと。申譯には恁う〳〵と。囁き默頭く互の心。解け合ひたる折柄に。はや御車の牛の足。次第に近づく五井やせりつみにこそ轟けり。フシ然る所へ。地色編笠眉深に傾けたる大男子。訴訟の者と云捨に隨兵警固押分け〳〵。御車近く立寄れば八王つゝと轅を圍ひ。詞ヤア何者なれば。一天の君をも憚らず。緩怠なるしれ者。罷退れときめ付くる。何サ。おのれ如きの匹夫下郎は。相手に取らぬと見向きもせず。地懷中より認め持つたる一通を。御簾の内へ投込めば八王苛つて。詞ヤア訴狀ならば取次を以て。叡覽に供へる筈。己れが慮外を顧ず。下郎呼ばはり何奴なるぞ。笠を取つて面突出せ。但し此方から手を懸けうかと怒れども。ハテ扨て要らざる世話。笠も禮儀もおのれには習はぬと。地惡口たら〳〵フシ詞募れば。地色光成も立寄つて。御前なるは雙方共に。鎭まれ〳〵と制せらる。彼男子編笠取つて。詞なう久しや光成と。地云ふを見れば蘇我の入鹿。詞是は〳〵珍しの對面。君の違勅父の勘氣。從弟づからの某何ぼう氣の毒に思ひしが。只今の一通とは心得難し。道を立てゝの願ひならば。一家の好みに某取次。若し理不盡に及びなば。直に武官に引渡さん。返答如何にとありければ。ホヽウ至極の察賞さこそ〳〵。我如何なる業報にや。帝をちらと拜せしより。勿體なくも戀ひ奉り。艶書を差上げしより。父が

見限り勘當し。方々と鹽をふみ。其鹽がきれめ〳〵に浸渡り。君の御事ふつゝりと思ひ切り。暗夜の明けたる如くにて本心に立歸り。地色今の悔みを推量あれ。只今車へ投込みしは先非を悔いたる一書なり。取次を賴まんにもかく零落れし某を。見やる者も無き故に此仕合。御機嫌を伺ひ一家の情に。宜敷執成賴み入ると。さすがの入鹿も扶持に離れし唐犬の。フシ悄れ果てたる如くなり。地色やゝあつて御簾の内より。光成。光成と召さるれば。はつと答へて伺候ある。詞入鹿が願ひ誠に不便の有樣。誤り狀とあるからは科を赦し得さすべし。汝一家の事なれば。父が方へ同道し。地其方宜しく差計ひ。不興をも赦さすべし。詞又此一書は。鎌足方へ封の儘遣はすべしと。御暇賜れば。光成入鹿を伴ひて。フシ蝦夷館へ急ぎ行く。地色八王丸聲を上げ。詞ヤア〳〵牛飼舍人。よしなき事に御遊の妨げ。御車急げと下知すれば。隨兵女中ざゝめいて。廻る兩輪は三輪の山。鹿の呼ぶ聲鳥の聲つれて。山路に三重行幸ある。地色萬乘の位を望む者は千乘の家より起るとかや。蘇我の蝦夷大臣。面に忠義を見せ懸けて心にこもる逆心の。胸に釘さす障子さす一間の內に取籠り。天の時と地の理をば フシ考へ見るぞ不敵なる。地色家來坂熊九郎遠路の使。甲斐なくも立歸り。かくと報せば蝦夷立出で。詞ヤレ〳〵九郎戻つたか。在所は知れたか何と〳〵。さん候御子息入鹿公の御行方。當國は申すに及ばず。近國殘らず相尋ね。津の國長柄と申す在所にて。樣子を尋ね候へば。十日餘り彼の地に滯留。それより行方知れずと申す。先づ御健勝の段御報せ申さん爲。立歸り候と申す。オヽ太儀々々。ハテ何處へか立越えしぞ。地覺束なしと思案の體。坂熊九郎近く差寄り。詞若殿入鹿公。御不行跡とて懲しめの御勘當。又御赦免あるに何の御遠慮。今我君の御威光を以て。國々へ廻文の遣はしお尋ねあらば。早速相知れ申すべし。此儀如何と伺へば。蝦夷はほつと溜息つぎ。それ程の事汝に習はうか。悴入鹿を勘當は。皇極天皇へ繇慕せし事を云立て。誠は內心に一物あつて逐出す。今密かに行方尋ぬる仔細は。天皇の事思ひ切らせ。鎌足が娘を娶り入鹿に妻せ。一家となつて帝位を奪はゞ。舅は親聟は子。慾知らぬ者無きと心得。鎌足に娘を貰ひ懸けし所。はや先達つて某が甥。三位光成

と許嫁あると云ふ。所詮嫁入の乘物を入鹿に奪はせ。ほつかりと娘に疵付け。地是非に平にと叩付け。娘の緣を以て鎌足に抵抗させぬ思案。汝是より山城邊に立越え。詞何卒巡り逢ひ。入鹿と諸共爲果せと。地聞くより九郎慥かに受合ひ。畏つたと立つ所に石川三位光成卿。入鹿公を伴ひ御出でなりと注進す。人ごと言はばめしろ鳥。諸羽もがれし入鹿が姿振。光成卿の跡に附き。フシみすぼらしげに座に直る。地蝦夷は故と尻目で睨み。珍しや光成。詞不孝者めを同道し。何故に來られし。若し勘當の詫言なら。地無用々々と表面の應對。光成卿手を仕へ。詞今日三輪明神へ行幸の供先。押割りせり割り御子息入鹿。天子の御車へ一通を投込み。先非を悔いて勘當の願ひ。天皇御憐み深く。某一家の好みを以て。親子の和睦取りまかなへとの綸言。御了簡下されなば某も大慶と。地詞を添ふるは正眞の。龍にあてがふ水海の。フシ渡りに舟ぞ是非もなき。地色蝦夷は時待つはや合點。詞左程叡慮に叶ひし上。違背申すは上への恐れ。勅答宜しく。光成太儀。馬鹿者め。地性根直せと表面はきつくり心はほつくり。フシ折れくちも。フシよき老木なり。地色光成嬉しく早速の御得心忝し。詞コレ〳〵入鹿殿。お年寄られた親父御孝行が肝要と。地氣を付けられてあい〳〵と。誤り涙鬼みその。夕立空に電光。フシ底氣味悪く見えにける。地色篤と合點の參りし上。御意見に及ばず。詞幸ひ某行幸のお供に外れ在宿仕る。不日に又こそ參上。ヤ坂熊九郎。伯父君へ宜しく執成。地お暇申すと立出づる。蝦夷も見送り甥の殿。お世話過分と挨拶に。別れて出づる表口。入鹿は跡より手をつくね。忝しといふ身ぶり。お禮に及ばずさらばとて オクリ急ぎ我家へ歸りける。地色跡にはもぢ〳〵うぢ〳〵と九郎も氣の毒差當り。執成す詞も無き所に。蝦夷は思案の臍を堅め。詞コリヤ入鹿。爰へ〳〵。つゝと寄れと。地呼付くる程氣味悪く尻込みするをはつたと睨付け。詞ヤイ狼狽者の大白痴め。天皇へ直奏とはまだ愛着の心離れぬな。父が性根は須彌山を庭に置き。西海を泉水と眺める工。纔な女一人に迷ひ。子孫永々の樂しみを知らず。おのれ勘當したはな。我れ萬乘の位を望めども。人間の天運知れず。萬一爲損ぜばおのれを踐し。父が本望を遂げさせん爲。爲果せ一天下を手に握ら

ば。主ある女でも心の儘。足元の寶を知らず。隣の木まぶりを狙ふ烏め。鳶が鷹の子は持たず。鷹が鳶の子を持つとは。地我身の事か殘念やと。子の鵰に經緯付けて。親が教へる鷲摑み。フシ爪の長いぞ恐ろしき。地色入鹿は戀路と逆心と胸に合うたり叶うたり。詞誤つたりお氣遣ひあるな。假令天崩れ地が裂けても望み込まれし天子の位。地皇極さへ手に入らば何からでも望み次第。力は百萬氣は鐵石心に入らぬ月卿雲客。かたひしに摑裂き。追付け目出度き御即位と。悪に色增すしゆ天の相。親に似ぬ子を鬼子とは。フシ此時よりや傳へけん。地色斯かる所へ鎌足の執權山上次官有風。お使者とこたへ立出づる。此方も入鹿を傍に隱し。家來坂熊九郎出迎ひ。蝦夷も出逢ふ老人同士。わけて有風病後の歩艱。御免と斷り自由に坐し。詞主人鎌足申し越し候趣き。御子息入鹿卿の勘當。今日御赦免あるやなしや。御返答に依つて申し達する旨あり。有無の御返事承りたしとぞ相述べける。蝦夷默念として。はれ異な事を尋ぬる使者。上のお詞を添へられ。某得心の上。勘當を赦したがそれが何と。成程左樣と察しての儀。勘當赦免あらば是打つて。お渡しあるべしと申したばかりでは合點參るまじ。今日行幸の御車へ。入鹿卿の投込まれし一通。帝勘當の願ひと思召し。光成卿にお詞を添へられ。此一通は封印の儘主人鎌足へお渡し。御子息の手跡見覺えあるべし。地色披見あれと投出す。ハテ氣遣はしと蝦夷公。披いて見れば口書の願ひはそこ〳〵。思ひ〳〵べくが二ツも三ツもこりやどうぢや。君が姿に絆され〳〵。テモ野太い好色者し。地不屆者とは思へども。使者の見る前差當り。返答すべき樣も無く。スヱテ差俯向いて在します。詞有風詞を和げ。親御の御身で當惑は御尤。是打てとは表向。御若氣故卒爾の一書。一天下の君に戀慕とは。帝位を亂す朝敵も同然。篤とお心直るまで御勘當が上分別と。主人も內意を申し越す。地天皇御叡覽なきを幸ひ。穩密に御計ひと。溫和やかに氣を付ける。地蝦夷の家來坂熊九郎。小差出てどつかと坐し。詞コレ鎌公の使者。戀は心の外とて。上下の隔て無きと聞く。天皇へ戀慕云懸け。御承引無くは無き儘。表向にもせよ是打てとは出過ぎたる計ひ。勘當も親心。赦さうが赦すまいが此方の氣儘。似合うた樣に御殿の留守番ばかりを。

よく召されと立歸ってお云やれと。 地無法無體を聞かぬ有風。推參なり若者。 詞蝦夷公の御子息故是までも穩便。餘處外なら疾に斷罪。一度に懲りず二度三度。勘當とは主人の了簡。何を存じて出る儘の過言。 地飛退れと睨付け〳〵。蝦夷公御返答。承らんと立直る。九郎堪らず立上り。 詞ヤア要らぬ老耄の惡口。 地命知らずと拔討に斬付くるを。四ぶんに開き重ねて來るを引躱し。取って押へる老木の早業。 詞なう烏滸がましき若武者。年寄つたれども昔作り。事は好まぬ立つて退けと。 地引起しかつぱと投退け素知らぬ顏。蝦夷公も氣の毒の兎角は悖が過り跡よりお返事申さんと。思慮を運らす底心。疑ひ懸れど根を押さぬ。智惠有風が分別も。歸り支度の折も折。逸り切つたる入鹿が勢ひ。走り懸つて有風が。首筋摑んで撞と打付け。しつかと押へて息の根止め。 詞勘當の上塗親仁。古狐の骨頂。 地冥途で化せと首捩切り。門より外へ投出す。折節供の靑侍待兼ねたる眞中へ。是はと驚く主の首。やれ殺したは〳〵とフシわめき騷ぎて立歸る。 地色蝦夷にはつと怪轉顏。しなしたり入鹿。 詞此場を品好く歸し。油斷をさすが味方の勝利。早速家來が事知らさば。小事より大望の妨げ。 地はて是非なやと跡の述懷。入鹿ちつともたるまず。 詞廻り遠き御思案。日本國が攻來るとも。水の上の泡盛たつた一息。 地氣遣ひあるなと思慮無き一言。 詞いや〳〵油斷大敵。彼めが悖に源内左衞門。八王丸とて兄弟の勇者。斯くと知らば押寄するは治定。こりや〳〵坂熊。館の者ども殘らず召連れ逃歸りし家來に追着き。一人も殘らず召捕つて來れ。 地急げ〳〵と仰せに隨ひ。フシ我も〳〵と騷出す。 地色山上源内左衞門參内の道。家來が報する父が最期。聞くより直に韋駄天走り。折節手の者三十騎。開きし門を幸ひに廣庭に取りかけ。 詞ヤア〳〵蝦夷公御親子。何科あつて我親有風を手に懸けしぞ。親の敵尋常の勝負。遁れぬ所と呼ばはつたり。 地扨てこそ大事と蝦夷公。返答も無く身拵へ。入鹿緣先に進出て。 詞ヤア小ざかしきうづ蟲め等。親の敵とは共に冥途を望むのか。イデ一々に暇をくれん。 地かゝれや〳〵と招くも强敵。寄手も鐵石。命惜まず切結ぶ。シヤ殊勝しやと天邊肩先。當れば剽子割かゝれば胴切。勢ひ込んだる入鹿が勇猛。さしもの大勢引色逃

色。フシ何處までもと追蹤行く 地潛つて驅込む源内左衞門。館の内には最前の。追手に懸り人も無く蝦夷一人。是ぞ好き敵參りぞふと切懸かる。蝦夷も遁れぬ太刀先双先。上段下段に受けつ流しつ。源内左衞門血氣の早業。蹈込んで一刀切付けられし蝦夷は老武者。枝も堪らずのり返る。透さず取つて心元。刺通し〳〵親の敵を目の前に。討つたる嬉しさ。討れた運命フシ天の責とぞ見えにける。 地色入鹿はかくと夢にも知らず。猶も進む軍勢を。薙立て〳〵切卷くるは。六天魔王の暴軍。三十人の寄手の者。一人も殘さじと。入方無盡に薙立てるは凄じかりける 三重、次第なり。 地色所の騷動隣鄕より蝦夷有風討たれし事。報せの早打町々は。フシ上を下へとかへしける。 地色源内左衞門立忍び入鹿を待てども深入か。隙取る内に蝦夷が首。太刀に貫き歸る道。氣を奪はんと突立てゝ。又も樣子を窺ひ居る。入鹿は殘らず首並べ。引提げ歸る道の眞中。 詞南無三寶親仁樣。何時の間にこりやどうぢやと。 地さすがの入鹿も胸ひいやり。仰天せしが扨てこそ〳〵。 詞源内めが行方知れず。 地何處までかは遁さんと。弱氣が結句婆羅門阿修羅。爰よ彼處と目懸ける所に。 詞山上源内左衞門是にあり。親の敵は互の晴業。心を鎭めお出であれと。 地悠々と呼ばはる聲。入鹿も首ども投捨て〳〵。 地よくも待つたりさすがは山上。いで來い勝負と鋒先揃へ。打てば飛越え。切れば開き勢ひかゝれば。此方へはづし。源内左衞門飛鳥のしれ者。入鹿は大剛狗賓の勢ひ。摑み裂かんと飛付けば。ひらりと躱してぐるりと潛り。雞黃と矮雞の鳥合せ。一時ばかり戰ひしはフシ目覺しかりける次第なり。 地色中納言土師の連。勅書指上げ奮くと。呼ばはり〳〵驅來り。双を分ける天子の威光。兩人左右に引別れフシ互に汗を入れにける。 地勅使は笏執直し。 詞帝行幸の御車。此四五町彼方に轟く。委細の樣子叡聞に達し。私の宿意を以て。御遊を妨ぐる條不忠たるべし。有風討たるれば蝦夷も討たれ。雙方互角の其内に。蝦夷公は大臣職。高官と無官との依怙を以つて。入鹿には父の跡目。官祿も相違無く。帝の御階近く召されんとの儀。何れにても違背あらば朝敵たるべし。綸言の趣きフシ此通りと相述ぶる。 地色源内兄よりハツと平伏。入鹿は父の跡を繼ぎ。御階によらば我戀の。便り求むる

根心にて。奏聞宜しく違背なしと。勅答あれば勅使も悦び フシ挨拶そこ〳〵立歸る。 地跡も別るゝ敵味方睨み。寄合ふ心の勝負。勅に免じて拔かぬは太刀先。 詞拔いたら朝敵合點か〳〵。おのれも合點か。赦して戻すは殘念々々。此方も殘念。おのれが首はおのれに預け。其方の首も其方に預け。 地兩方四方勝負は後日。互の首が命の釣緒。體にしつかと括付け。五體を絡む藤原臣下。逃げず恐れず館に入鹿。 詞其時見參。應扨て〳〵。 地後れは取らじと氣を張る。肩張る二人が勢ひ。 地猛將勇士が心の爭ひ。云はねど面は修羅天魔王。此方も愛染不動の猛火。燃立ち逆立ち。龍の怒りに虎の嘶き。突合せたる鰐と鱶魅入られて。左右へ別れける

第二

地善惡二ツに分るゝは脊を合はして東西に歩むが如く。本は一ツの血の筋も心は遙かに行違ふ。入鹿大臣と從弟同士石川三位光成卿。天性柔和の生付直なる名にし大なむち。三輪行幸の御供の道よりお暇賜りて。知るよししたる山田の里 フシ御館にぞ休息ある。 地色折柄入鹿の大臣が雜掌縣の押照。上使なりと嵩高に門外よりも呼ばはれば。御上使とは如何ぞと石川三位光成卿。執權伴の主税之助。同じく跡に附添ひていざ先づ是へとありければ。 詞勅使同然の押照。 地座上へ參る御免なれと挨拶そこ〳〵座を構へ。 詞此度天皇三輪明神へ三七日の參籠は。飛鳥の都を他所へ遷さんとの御願。昨日滿ずる曉に。津の國長柄に遷すべきよし神詫に依り。先づ光成に土地見分の仰此山田の里の小地を替へて津の國半國充行はる。此旨主君入鹿の大臣お指圖に依つての勅諚。政繁ければ名代を以て申し達す。 地有難く勅答あれと云ふに光成恭しく。 詞勅諚の趣は身に取つて有難し。されども此事入鹿公の執成とは。生中好みある故に。 地人の思ふ手前もありと。仰せも果てぬにいや〳〵それは悪い御合點。 詞我君は大殿蝦夷大臣の跡を繼ぎ。入鹿大臣と成り給へば天下の政務は我君次第。勸氣赦免の蝶し給ふ光成卿へ。此役儀をとお取持。お受け無くては難に背き。入鹿公も一分立たずなう主税殿。 地如何思ひ召さるゝと詞の内より主君に差寄り。 詞入鹿公は内證の事。勅諚にて候へば違背は却つて恐れあり。 地何か苦しう候べきと。主從目と目に心を合せ。勅諚の御趣畏り奉ると。領掌あれば目出度し〳〵。 詞入鹿公も悦び外に直談の事もあれど。それは追つての御沙汰ならん。 地早く長柄へ越えらるべしと底には工ありながら。直に座を立つ青疊。 フシ云殘してぞ歸りける。 地色主從跡を見送りて主税之助苦り顔。 詞入鹿大臣勸氣を赦され半月も經つや經たず。押して勅諚乞ひ奉るは心得ず。 地一家の主人の前とも云はず押照が緩怠無禮。胸を撫つて控へしと拳を握ればいや〳〵左にあらず。 詞假令六位北面にても勅書を持てば大臣にも下馬をせず。彼が緩怠に見えたるは天子の威光と思へども。 地いかにも外に仔細はあらんハレ訝かしと宣ふ内。主税之助表を見渡し。アレ又是へ女の使人に聞かせじ奥の間の。あまき襖を押明けて オクリ密々〳〵語る其内に。フシそれと案内の。和らかに。 地色入來る女は山上の源内左衛門が女房。名も櫻井のみづ〳〵とフシ花の鏡や是ならん。 地色奥より出づるは主税が女房。色も香もある梅苑が御取次と差向ひ。 詞コレハ久しや櫻井樣。テモ珍しや梅苑樣。こな樣もお變り無う。お前もお健康でお目出たやと。 地にこ〳〵應待ひ又改め。お使の一通り承りたうござんする。 詞さればとよ光成樣と妾が姫君。藤照樣とは許嫁。未だ祝言無けれども光成樣への大事の文。 地御屆け給はれと差出す文箱を受取つて。 詞こりや姫君の御尤も。我も人も待兼ねるは火の遠い伽羅と嫁入前。 地早うお迎へあるやうに執成を申しましよと。立つて行くをアヽコレ申し。まだ口上がござんすと聞いて梅苑居直れば。 詞知らしやんす通り。妾が舅山上の次官は入鹿公に命を取られ。又入鹿公の親御蝦夷大臣は夫源内左衛門首を取る。光成樣と蝦夷樣とは伯父甥なり。入鹿公とは從兄弟同士。夫親子は姫君のめのうと。互に意趣しある中へ嫁入する心も無い。先づ不緣なと思し召し。緣を斷つて給はれと。 地文には委しく記せども猶口上にて許嫁。是非變改を致せとの。お使なりと云ふに悔り。 詞フウ そんならば此文は。姫君樣より光成樣へ暇の狀でござんすの。アイまあいへばそんなものと 地聞くより梅苑

身繕ひ。 詞コレ櫻井。 其方は三輪の神主大之進といふ禰宜の娘。武士の作法を知らぬ故此お使に御座つたの。暇の狀といふものは殿御の方より行くは法。終に世の中始つて。女房の方から旦那殿を去狀とは是が初。 地こんな取次わしや知らぬと文箱も割れよと打付くれば。櫻井くわつと氣をせき上げ。 詞コレ梅苑。 一世一度の三行半澤山さうにこりや何ぢや。禰宜の娘であらうとも山上源内といふ武士の妻。女の方から緣斷るも術に寄る事に寄る。緣に觸れたる敵同士。劔の刄を渡るやうな嫁入は成りませぬ。約束變改常の例。 地鈍な取次頼まうより直に屆けて直に云ふ。其處を通しやと行かんとす。立隔つていつかな〳〵。 詞此梅苑が居る内は無法な者は奥へは入れぬ。イヤ推參な。イヤ慮外なと。 地彼方を留むれば此方へ廻り。透を見合せ フシ行違ふ。 地色どつこい遣らぬと後より。そつてふうわり蹶られてくわつたり。膝てにじれば立身でかゝり。 互に挑み爭ふは。珠數に繋ぎしげんげ花。 フシ揉合はせるが如くなり。 地色奥より光成主税之助走出てて引分くる。光成卿左右を宥め。 詞心を鎭めよ櫻井奥にて樣子つぶさに聞く。一理あるには似たれども次官が首を取らるれば。蝦夷も命を果したり。互に意趣を殘すなと勅諚にて和睦せり。又我が爲に蝦夷は伯父入鹿とは從兄弟なれども。藤照姫と緣を組めば姫は妻なり鎌足公は舅なり。親しみを較ぶれば鎌足公へは緣深し。姫が仕方は憎けれども。許嫁ある上は何時までも夫婦なり。 地此分にて去なれずば文引裂いて返すべし。それ主税と仰せに任せ文を披けばこは如何に。思ひも寄らぬ一味の神文。 詞蘇我の入鹿無道なりと雖も。父蝦夷大臣が最期の怒りを宥めんが爲。大臣の官に任ぜらるゝ所。數日も經ずして政道を我儘に執行ふ。殊に天皇に戀慕深く叛逆に遠からず。忠勤を擢んでて誅伐を加ふべし誓ひの詞は讀むにも及ばず。鎌足公へ。石川三位光成と。 地讀むに各胸開けば櫻井は遙かに退り。 詞光成樣主從のお心を見やう爲。夫が參る筈なれどそれと知らせぬ姿が使。神文に及ばねども入鹿公にも御因緣。 地申し開きの御爲に御判遊ばし候が。御夫婦仲の色直し。醉高なりしは鵠の醉今手をつくは鳶の彩。嫁入を祝ぎ千秋樂 フシ萬々歳と祝すれば。 地色光成殆ど御悦喜あり血判して返さんと。御鞘刀を寛げ給へば

主税之助押留め。 詞天子の爲を存ずる故主從樣々胸を碎くに。飽くまで心を探られて其上直に血判とは。さながらも姫君に心惹かれし樣に見え。人の譏りも憚りあり。 地先づ神文は此方に留め御祝言の日を改め。某御迎ひに參る時此神文に御判を据ゑ。嫁入の御輿と引替へに致しなば。雙方圓く調はん此儀。如何と尋ぬれば。 地色光成卿も御得心櫻井は横手を打ち。 詞兩家の一分立つ了簡誰か否と申しましよ。光成樣の御心底委細は歸りて我君や姫君樣にたくりかけ。咄しましたらお悦び。 地いざお暇と立出づれば梅苑も跡に附き。 詞何にも知らいで最前は。ほんにまあはしたない。されどもお髪は損ねもせず。何處も痛みはしませぬかえ。何のお主の爲ぢやものさすつた樣に存じます。 地さがない事はわしからと云へどびり〳〵正眞の。痛み入つたる互の仕儀。始めに變る睦まじさ。光成主税主從の笑顔を跡におさらばと。詞に花の櫻井は立別れてぞ。三重へ行く道の。 地ゆがまぬ君と神南の行幸もはや日を重ね。今日は還御の御名殘珍菓珍膳美を盡し。供御に參らす味酒の。 フシ三輪の山路ぞ賑はしき。 地色麓へ颯と吹下す。風に逆うて來る侍。入鹿が郎等坂熊九郎遙か下郎も高振りて。主の使の進物は目八分を十分に。いかつがましく見上ぐる山。豫て心を合したる神主高木大之進。樓よりも瞰下して。 フシ鳥居の前にぞ出で迎ふ。 地坂熊九郎進物の太刀前に差置き。 詞主君入鹿の大臣天皇を憧れ給ひ。其戀を叶へん爲。萬乘の御位にそなはり給ふ御心。百官百司は云ふに及ばず。猫鼠に至るまで身の毛を立てて怖ぢ隨ふ。只今内裏を乘取り給ふを。只しぶときは鎌足主從。いで支へんと蹤けども。龍車に向ふ蟷同然鎌足は早や負色。先頃も申す通り。天皇を奪奉るに。お怪俄あつては無調法。今日の還御を幸ひに術を以て渡されよ。 地然らば愈々正四位の中納言となし。大和半國賜はる事相違無き證の進物。 詞黄金作りの太刀一振。是のみならず御邊が娘の櫻井は。源内が妻なれば赦すべき者ならねど。此事を仕果せなば源内夫婦も助けんとの御事。有難く思はれよと。 地聞くに悦ぶ大之進進物を押戴き。 詞冥加なき御頼み故種々に愚案を運す所。只妨げは八王一人。幸ひ還御の後備神酒を勸めて遲參させ。欺すに手なしと刺殺さん。 地色それまでは此下の三輪町に屯あり。還御

の樂をお聞きあらば各急に御登り。天皇の御車を手渡し申すは某が。案の内に候と。フシ手に取る如き詞の末。詞オオ天晴なる上分別。地必ず手筈其通り手柄は面々身の爲と。打連れ行くも御褒美を オクリ町端れにぞ フシ下りける。地色跡に殘つて大之進爲濟し顔に打頷き。詞天運も至れば至る。心の障りも打拂ひ。出世の望みも一度に叶ふ。地忝や滿足やと。慾に鋭き太刀作り目を光らせて見る所に。此方の山路に慌忙しく女一人餘所目も振らず。走る拍子に進物を。はつしと蹶飛し其身も倒れ。ほつとばかりに息をつぐ。大之進腹を立て。詞扨々無禮な女郎めかな。大切なる此進物。蝶や花とも見て居るを土足に懸けて蹶散らかし。御赦されとも吐さぬは。何奴なるぞと太刀押取り。地色引立て見る顔と顔。ヤアわりや娘の櫻井か。ほんに父樣大之進樣。餘り急いでよう見なんだ。何彼なしに問ひませう。天皇樣のお身の上何事もござんせぬか。やはり館に御座んすかえ。地ちやつと知らせて下さんせと。せり立てられて詞ア、やかましい。天皇に御怪俄あつて大之進が立つものか。御安體にて我館に。御入あるはと云ふに落着き。ハツア嬉しや天の助け。さすがは私が父體ぢや頼母しうござんする。地色サア御座所へ行きましよと。走り行くを押留め。詞何をうと〳〵騒がしく。汝ばかり合點して急ぎ廻るは何事ぢや。樣子をいへと尋ぬれば。サア小短う云ひませう。妾は使者に參りし故。歸りてお返事申す折柄。入鹿が内裡を暴廻り百官を切靡け。三種の神器も奪ひしよし。聞くより軈て驅着けて。鎌足樣夫源内。命を限りに軍最中。天皇樣にお報せ申し。八王殿と心を合せ。是より密にお供して。鎌足樣の新御殿へ忍ばせ參らす大事の御用。地色サア父樣も共々に。力を付けてといふを打消し。詞假令如何なる騒動ありとも氣遣ひは少しも無い。コリヤ娘よ。父がいふ事篤りと合點せよ。忝くも入鹿公は。御父蝦夷大臣より御威勢强く。政道は御身の儘。百官自然と隨ふは天の與ふる御位。遲かれ疾かれ鎌足も隨はねば命がない。地幸ひかな入鹿公より某を頼み。天皇を奪ひなば。正四位の中納言となし。大和半國下さるゝ。證に賜はる此御太刀。詞父が是を爲果せなば。其方達夫婦が大きな仕合。地色委細といへば時刻が移る。父が館に忍び居て。天皇八王に報せは無用。

詞呑込んだか胃腑へ落ちたか。地色娘どうぢやと云はせも果てず。突退けてつこと聲。詞コレ父樣の大惡人。神祟を勸めながら。入鹿といふ魔王の魅入。胸の鏡が曇つたの。地心の錆た其太刀を。私はようも蹶散した。斯かる樣子を知る事も天皇樣の御運の强さ。詞今の詞に隨はゞ。此方の蔭で夫婦とも逆磔にかゝります。並大抵の異見では。よもや合點さつしやるまい。地親子の緣も是限り。此方から勘當ぢや。隙取つては猶大事と。行かんとするを後より。引戻して入れ替り。是はと娘が寄る所を。はつたと睨付け。詞おのれ大事を打明けさせ。愛想盡しをよく吐すな。天皇に告知らさば。父を殺すも同じ事。親が惡い事はいはぬ。某が詞に付け。厭と吐すとコリヤ。此太刀で討殺すと。地嚇しの刀拔翳せば。ア、コレ父樣。まあ待つて下さんせ。詞そんなら父に隨ふか。サアそれは。サア何と。合點するか殺さうか。地サア〳〵〳〵と追廻す。子故の闇に運ぶ足。道を思うて逃ぐる足。親子の心入違ひ。亂れ騒ぐは花山に。風雲走る如くにて。フシ見るも危く切なさよ。地色櫻井心を取直し父が持つたる太刀の下。搔潜つてしつかと取る。詞ヤア抵抗かと振放し。地留むる心の背打を。受けて驅出す後より。親の困果が子に報い。手の内廻つて。一刀。肋を深く斬込まれ。うんとばかりにのり返る。父は慌てゝ太刀投捨て。ヤレ櫻井よ娘よと。呼生けつ抱擁へ。切られし者より色變り。スエテ介抱。するぞ騒がしき。地色山上の八王丸大之進を尋ぬるに。かくと見るより訝かしく。フシ鳥居の陰に彳み聞く。娘はやう〳〵息出でて。エ、父樣胴慾な。詞コリヤ眞實殺すのぢやの。其太刀を奪ひ取り。わしやこな樣を斬る氣は無い。此場をさへ遁れなば。天皇樣や八王殿に。内裡は入鹿が亂せしと。告參らせて館を落し。鎌足樣へ還御あればこな樣の科知れず。命に障りもあるまいと。心に庇護ふ効も無く。地ようも酷う手に懸けて娘を殺す無得心。非業の死をするのみならず。大事の御用を告げもせず。お主へは不忠となり夫へは義理を缺き。帝の歎きも妾が科。此深手の苦痛より。それが苦しい悲しいと。わつと叫びし涙には フシ血汐も。濯ぐばかりなり。地色娘の恨みと苦しみに父も涙に咽びしが。大地を打つて大之進。詞ア、淺ましや。謀計は眼前の利潤と思ひ。忽ち

罰を受けしよな。僅た一人の娘ぢやもの殺す心で何の打たう。詞其方が夫聟の源内左衞門は。入鹿が爲に親の敵。緣を組んだる中なれば。共に命を取らるゝは。鏡に懸けて危さに。地色汝夫婦が助かるやうに我明神を祈りし所。詞入鹿が頼みし一大事。是究竟と與せしは。其方と聟とが命を庇護ひ。陪臣の名を削捨て。高位を望む大慾心。背打の手が廻り。地却つて娘をあやめしは神罰直に當りしと。思知つたる フシ悔しさよ。地しかも因果と深手なれば。最早命は堪るまい。詞我悪心を止まれば。天皇樣に凶事は無い。其方が命のある内に。父が自害をするを見て。地せめて心を霽してくれ。娘さらばと云ふ聲に。櫻井は猶身を悶え。這寄る力も泣く涙父は刀を取直し。突立てんとする所を。八王透さず飛んで出て。刀の柄を握り留め。詞一々樣子聞屆けた。八王丸ぢや櫻井殿。兩人共によく聞かれよ。櫻井殿の深傷は。父を善心に歸せし故。是忠孝の最期となる。大之進の自害とは。善にもとづく詮も無く。天子の御用に立たずして。是犬死と申すもの。斯かる折柄一人にても。御用に立つて死なれよと。地色血氣盛の若者も武家に生れし道理の金言。大之進は伏拜み。忝き御了簡。兎も角もとは云ひながら。現在親が手に懸けた。娘の深手が不憖なとスエテ又立ち。寄つて泣叫ぶ。地臨終の娘は聲を上げ。父樣嬉しう フシござんする。詞ソレ其太刀は。入鹿が贈りし進物なれば。こな樣に切られはせぬ。敵といふは入鹿主從。討死をして下さんせ。未來で必ず逢ひませう。八王樣は何處にぢや。もう目が見えねど。源内殿は。面影にけく見える。地さらばとばかり云納め。フシあの世へ息は引入れたり。地色兩人涙に暮れながら。大事の前と死骸を隱し。八王屹度思案顏。詞帝に樣子を知らせては。却つて叡慮の痛みとなる。コレかう〳〵と 地囁きて互に頷く草の露。フシ諜し合せて入りければ 地程無く調ぶる物の音は。今ぞ還御と長慶子の。音樂高く 三重聞えける フシ待設けたる。坂熊九郎大勢引具し入り來る。時刻を違へず大之進。祭に引出す御車に。山田をかへす牛を付け。坂熊九郎に引渡せば。出來た〳〵大之進。直に同道サア來いと。フシ皆引連れて急ぎ行く。地宿はしや天皇はかくある事も知り給はず。藤照姫に御免あり同車に還御し給へば。共に聟も逃出立ちて。後陣の警固は八王丸。叡慮を安あ思ふかと。お車の出でたるも都と急がす。フシ控へ居る。地天皇車の内よりもなう藤照。古き歌にも繼しくば。尋ねても來よ我宿は。三輪の山もと杉立てる門。かく詠めしは此邊り猶遙すがら歌枕。共に詠めて語らんと。フシ叡慮穩か。なりければ。地色八王車を轟かせ十町ばかり行く所へ。坂熊九郎が軍勢ども。息をはかりに群り寄せ。中にも坂熊首引提げ。詞ヤア〳〵八王。大之進に云含め。某を誑し。よく空殼を渡したな。痩骨にて暴れたる。かす彌宜が首是を見よ。其御車を渡さねば一々に此通り。返答如何にと投付けたり。八王丸ちつとも騒がず。帝に騒動知らせじと。命を助け歸せしに。死にうせたはござんなれ。地八王一人が千萬騎。寄手は何萬嫌ひなく。掴みひしぎ腕捩折り。五體を碎いて慰まん。サア來いやつとぞ待懸けたる。地物な云はせそ討取れと。一度に寄するを卷り立て。先に進むを人礫。只一揉に追拂へば。こは叶はじと一同に。フシ命大事と逃げて行く。地オ、左も爾うずと立歸り。驚き給ふはお二方。是から牛より逸散と オクリ車を〻引いて入りにけり。地色入鹿が大將縣の押照。かくと聞くより驅合せ。坂熊八郎も引返し御車を尋ねかね。詞よもや遠くは行くまじと。軍勢ひしめき合ふ所に。押照遙かに眼を配り。あの松原に車あり。軍兵續けと下知をなし。地飛ぶが如くに驅けたる勢ひ。牛も仕丁も散亂し。跡に殘りし御車を。フシ悦び勇んで引戻す。地雜兵左右に引包み。押照坂熊前後を圍ひ。詞サア是こそは天皇ぞ。いで龍顏を拜せんと。雙方立寄る車の内。地四方へぐわらりと蹶放して。車蓋を押上げ八王丸。すつくと立つたる有樣は。堅牢地神が須彌山を。フシ指上げたるもかくやらん。地各ぎよつと驚くを。八王ハツタと睨付け。詞汝等が望む天皇は。兄源内左衞門が御迎ひに來りし故。お心安うはや還御。追人の奴原踏ひしやぐは。此八王が承る。體に名殘を惜めよと。地車蓋をくわつしと打付くれば。前に進みし雜兵が。フシ眉間を割られて死してげり。地縣の押照聲張上げ。詞妨げをなす上に斯かる慮外は推參至極。せめて己れを生捕つて。入鹿公への御土產。八王覺悟と言はせも立てず。くつ〳〵と吹出し。此八王を生捕とは。蚊の脚にて大石を踏割らんとする同然。サ

ア此儘に引いて行け。此山本の其外は。地引くとも押すとも動かじと。フシ勢ひかゝつて立つたりけり。地ヤア緩怠なり此車。引けや押せと云ふ儘に。ぎり〳〵〳〵と三間ばかり。江戸引くと見えしが八王丸。金剛力士の力を出し。五體の重さは大磐石。ナホス兩足どうど踏据ゆれば。先へは一寸にじりもやらず。後へ戻せば力を弛め。ぐわら〳〵ぐわらと引返し。元の所を行過ぐれば。力を出してしつかと止め。同じ山路は踏みゆるめ。車は引きつ引返し。どろ〳〵と鳴渡る。地木魂の響えい〳〵聲。八王車を揺り据ゑ。大地に入れよと踏む足音。大千世界の雷を。フシ一度に聞くが如くなり。詞さつても太儀ぢや日雇の衆。一生の草臥休め。首引抜いて取らせんと。地車の上より飛んで降り。山も崩るゝ聲を懸け。大輪に廻つて一ツにぼひ寄せ。薙立て揉立て打散らされ。大將押照押しなめて。フシ足を空にぞ逃走る。地手に立つ者も無かりしと拳を握つて立つたる所に。車の後に隱れたる。坂熊九郎が主從二人。捕つたと左右に執付く所。家來をうんと撲殺し。坂熊九郎を引廻し。だうど打付け頭を踏へ。髮腰摑んで身を逆様。詞おのれは優しい腕立なれど。一度の懲せず二度の死。大之進が敵と云ひ。天子に敵對奉る。逆罰とは此事と。地力に任せてえいやうん。フシ體を引抜き捨てゝげり。江戸軍始めに勝色の心地好げなる山上前髪。生抜く忠義に勇む足。とゞろ〳〵と山道を飛越え跳越え。躍り越え。響くは谷河騒ぐは杉の。山嵐神の力や勇猛力。天地の力諸力。數へ數へて八王丸緊那羅摩睺羅の勢ひも。取拉ぐべき若者やと代々に。傳へて口ずさむ

第三

地人は一時の凶暴を以て天に勝つと雖も。天定つて强悪の人を破る。理を辨へぬ入鹿の大臣帝に心を懸卷も。行幸の跡を押領し。淵は瀨となる飛鳥の都。己れと天子におしなれば。縣の押照羽黑の鰐峨丸。身の程知らぬ左右の大臣。地臣下郡の官位を授け。長袖に猶贈を張り鬢に支ゆる冠の緒。跡先括らぬ驕の體。殿上人と云ひながらフシ空恐しく

ぞ見えにける。地色今日ぞお召しと百姓ども門外に差集ふ。中にも河内の弓削の者朝談の物なりと。白木の棒を富に懸け御前に直し引下る。嵯峨丸押照見改め陛下にかくと奏すれば。帳臺の御簾すら〳〵と。卷上げさせて入鹿の大王。玉の冠袞龍の御衣。左右の袖は鵬の翼。千里も覆ふ其勢ひ。只戀ゆゑの一心に百官を押靡け。自然と我を高御座。桓々と見下して。詞ヤア土民ばら。朕位に備れども肝腎の望み達せず。仔細に依つて軍は絶えじ。火花を散らさば汝め等も先陣の燒草。老耄どもは用に立たねば。捻殺して山河へ捨てさすべしと思へども。年だけの智惠もあるかと。此木の本末しらせよと吩咐しが。七度生れ變るともいつかな〳〵。無分別面押上げて吐せヤツとぞ仰せける。弓削の庄屋白洲を這寄り。お御意の通りを毎日毎夜。村中の年寄が豆茶で智惠を搖り出し。此棒を早川へ流し。川下へなる方が木の末ぢやと申す故。川へ流して知り候。即ち西の方が末。地東は本でござります。御褒美には及びませぬと。云ふに兩臣顏見合せ。案に相違の入鹿の大王。さあらぬ體に苦笑ひ。詞三筋足らぬ猿松めら。早川に流し見て本末を知る事を。うぬ等風情に習はうか。見たばかりでも知れば知る。蔑ろに推參至極。此木の代りに殿閣に使ふ材木千本。貢物に持ち來れ。違背せば一々に首捻切らんときめ付くれば。地酷いと思へど恐ろしく。一生に無い分別を。フシ棒に振つたと入りにける。地色次は當國芳野の者。烏羽を布に載せ御前に畏り。詞烏の羽に書いた字を讀んで見よとの御仰。黑い羽に墨色知れず。どうしても御無理様。讀まずば定めて殺さるゝ。命賭の工夫物。羽を蒸して布に當て。墨をうつして候へば入鹿大王と文字あり。地御覽下され候へと。入鹿が前の智惠袋。ふるひ〳〵も出來し顏。嵯峨丸布を取擴げ御覽覽と差上ぐれば。入鹿も是には我を折りしが。弛みを見せぬ唸り聲。詞烏羽の字を讀めとは。おのれ等にこそ吩咐けたれ。蒸して文字を現はせしは。そりや蒸籠が讀んだといふもの。其上朕が名を蒸立て。左文字にうつせしは調伏すると覺えたり。過怠に布を五千匹。相違無く差上げよと。地叱付くれば皆がつくり。烏に墨の難題を。フシ上塗してぞ歸りける。地色續いて長柄の百姓ども。繩を撓いて土臺に載せ。庄屋德助振返り。詞コ

レ皆の衆岩次も聞きや。灰を繩に綯へとの御意。岩次の智惠で出ごとは出來たが。先刻にから來た衆は首尾散々で歸られた。何と過怠を受けうより直に去なうぢやあるまいか。いや〳〵去んだら猶過怠。地若し御機嫌に違うたら。其處が又年寄の智惠。岩次一人を突出さうと。やう〳〵差上げ蹲る。押照近く立寄つて取らんとすればア、申し〳〵。

詞いらふと忽ち切れまする。村中への仰せ故。灰を繩に綯ひましたと。地申し上ぐれば入鹿の大王。猶も逆立ち突立上り。詞ヤア有罪餓鬼の大がたりめ。繩は物を繋留め。强きを以て其益とす。指をさゆると切れる繩は何の爲何の益。朕を嘲ける蠅蟲め等。命を取らうか過料にせうかと。地横に車のわな〳〵と百姓どもは戰慄出し。岩次を前に突出せば。老眼に氣を張詰め大王の顏形。ためつ。すがめつ捻寄り摺寄り。さつても似たり。似た〳〵と。地云ふを庄屋が袖を引き。詞爰は御殿ぢや何いやる。似た〳〵と獨言。何方樣が誰に似た。さればいの。去年の夏秋此方の門へ。のら〳〵と來た大男。親の勘當受けまして。イむ方の無い者ぢや。餓死を致します。隱匿うて下されと吐饑るさうに賴んだ故。半月ばかり隱匿うた團六といふ者に。あの入鹿大王樣が。似たとこそいへ生寫しと。地色いへば庄屋は笑止がり。粗相云やんなコレ岩次と。目交をすれど見向もせず。入鹿が顏を打眺め。立寄つては不審顏。下れ〳〵の聲につれ。横に退つて目を殘し。見上げ。見下し打頷き。詞ホウ團六ぢや〳〵と。地覺えず近く這寄れば。入鹿も覺えある故に。御座をうぢ〳〵居直つて。面を振れば嵯蛾丸押照。ヤア老耄の慮外者と。叱るに構はずにた〳〵笑ひ。

詞フウ入鹿大臣殿樣とは。わごりつ樣ぢやの。勘當の內隱匿うた。岩次ぢやが見知つてか。見ぬ顏はそりや胴慾。去年の事忘れてか。娘めは參宮の留守なり。犬の手も人の手にしたい時分。賴むというてお御座つた故。何處の息子か知らねども。見た所がかつぽくも好し。小力もありさうなり。在働きをさせうまでと。嚊にやう〳〵呑込まし。飢を救うておましたぞや。お蔭で命繋ぎますと。其肥えたお手できたなう拜み。茶瓶の樣な目の玉から涙を滴して。禮おもしやつたぞ樣が。扨今はいかいお出世ぢやなう。お目出たいと申さうか。お醋いと云はうか。地ちつとも恩を思召

さば。無體な事はおしやますなと。恨み歎きに座も濕り。横紙破りの大王も。恩は有やう理窟詰め。見合す顏の赤面は。常より赤く照深ひて。フシあたり眩きばかりなり。地色入鹿は詞を和らげ。詞長柄の里の岩次オ、よく見知る。恩を知らぬにあらぬども。大望に支られて今までは延引せり。今日逢ふこそ幸ひなれ。何事にても望むべし。恩返しに叶へて得させん。いかに〳〵と仰せを聞くより。ハ、ハツと頭を下げ。只今申すも憚りあれど。詞なう何れも。上をなされうとは。下々を憐みの。お情深いが顯はれた。地共にお禮を〳〵と。云ふに皆々手を合せ。ハア難有やと一同に。伏拜み伏拜む。中に岩次は土に平伏し。詞忝き御仰せ。外に望みも候はず。地長柄の里の繁昌を。冀ひ奉ると言上すれば。詞易い事〳〵。津の國は海を抱き大河をあて。南暖に北寒く。要害よくて五穀熟す。故に朕長柄の豐崎に。都を移す心あり。然らば自然と土地の繁昌。地是汝への恩返しと聞くに岩次は遙かに退り。冥加なや難有やと。庄屋も共にこれはまあ。地獄にも知る人と。フシ悅び勇むぞ道理なる。詞オ、悅ぶは尤々。土地を繁昌さすから天子には父母の恩さへなし。況やうぬ等が恩呼ばはり不屈千萬。壹萬貫が遲なはれば。かたはしに水牢。地立つて失せうと睨廻し。押照嵯峨丸引連れて。御簾に入ればこは如何にと。岩次は見送る庄屋は引留め。詞何にも云うて貰ふまい。壹萬貫と詞にも頻張る貢物。云譯する程わらが出る。さしばかりの庄屋に任せ。地早う戻りやと引きずられ。何も岩次が口惜さ。御殿を睨めど詫方も。オクリ泣く〳〵へ里へぞ歸りける。地世につれて共に絡まる藤原の。フシ鎌足夫婦諸共に。入鹿が召しに隨ふは。心にあらぬ參內を。取次かくと奏すれば。地紫宸殿にて對面せんと。公卿臣下に敬はれ。ゆすり出てたる入鹿大臣。殿上の板敷を堂々たる其有樣。天地も狹き威風凜々。金輪際より生拔きし。欲天の魔醯首羅。フシ魔界になすかと凄じし。地色此有樣を見ながらも鎌足の御目には。禁裏は荒れて人住まぬ。野原と

なりしか淺ましやと。摩利四天の怒りをも内に包みし柔和の臣。御臺も共に渡殿より。眺め渡して魂に。フシ涙を沁ますばかりなり。地色嵯峨丸押照詞を揃へ。詞ヤア〳〵鎌足。大王の出御なるぞ。是へ寄りて三拜せよと。地色飽くまで嘲く不敵の詞。聞くよりくわつとせき上し。つか〳〵と歩み寄り。入鹿をきつと見上せば。見下す入鹿は天子の威光。奇怪なりと兩眼を。八角に見出して。ハツタと睨めばする〳〵と御臺の許へ跡退り。尻居に撞と座したりしは。六十餘州を手の内にフシ入鹿が。威勢ぞ類無き。地色夫婦隨ふ風情を見て。詞ヤア押照嵯峨丸。代々棟梁の臣と呼れし鎌足。今日の對面に。彼が敬ひ畏るゝは。これ我威勢のなす所。とは云ひながら鎌足に油斷は成らぬ。地彼奴が連れたる家來ども門外へ逐拂へと。仰せを受けて兩人はフシ軈て御前を立出づる。地色跡に夫婦は顔見合せ。薄き氷を踏む如く。危くは思せども再び天下を泰山の安きに置かんと。左あらぬ體に鎌足公。詞ヤア仰々しき御振舞。お召しに隨ひ參内せし女連。一人の鎌足に御心を置かるゝは。憚りながら大王とも覺えずと。地宣ふ詞を御臺は引受け。詞お心を置き給ふは。我々が敵對もせうかとの事。オヽきついお疑。皇極様は君の戀人。隱匿うたは身を思ふから。地夫婦が心を竹ならば莞になして見せたいに。節吳立ちしお詞と只纖竹に和らぎて。フシ根も葉も無くぞ見えにける。地色入鹿面色打和らぎ。詞ムヽ其筈々々。何皇極は健康なか。軍を起し辛い目憂い目。心懲らさば其方から。靡いて來うと思ひしに。樣子聞かねば氣遣はしく。汝夫婦に仔細を尋ね。且は此戀取持たせんと。其爲に召寄せたり。エヽ思へば胴慾な皇極。此入鹿が一度怒れば天下亂れ。安座すれば四海治まる。只あの女一人を。隨へること成らずして。地心を碎く無念さよと。不思議に浮む涙を隱し。睨付けてもはら〳〵〳〵。車軸の雨に日月の。フシ照輝くが如くなり。地色鎌足近く立寄つて。詞左程宣ふ戀慕の心。誠と思はぬ仔細あり。御勘氣の其以前は。未だ昇殿を許され給はず。天皇の玉體を拜し給ふ謂れなし。但し見ぬ戀に憧れ給ふや。又は天下に望み深く。戀に擬へ天皇に近付いて害せんとの御事にや。二ツに一ツの御返答聞かまほしやと尋ねられ。ホウさすがは鎌足尤もの問事。天皇の美

人の聞え日本に隱れ無し。我れ見ぬ戀に憧るゝ折柄。元日節會の夜目遠目。御姿をちらと見しより。いよ〳〵增つて思ひの種。度々の艶書に事顯はれ。勘當流浪の其間も片時も忘れず憧るれども。我戀ばかりは一天下に媒介なし。所詮位を奪ひなば天皇は此方のものと。地色今大王には成りながら。憂き物思ひを推量せよと。語れば鎌足。から〳〵と笑ひ。詞人聞かざるお詞。誰か左樣に思ふべき。其御心誠ならば。三種の神器を此方へ渡し。天皇を天皇として。叡慮を宥め給ひなば。媒は此鎌足。地色然らば天下に敵對無く。戀も叶ひ威勢もます〳〵。此戀は某に任せ給へと。言ふにぞく〳〵ふわと乘り。詞コレ鎌殿。おことさへ呑込まば。大方は埒明くべし。入鹿が天下を望むならば。三種の神器は力にせず。地まして戀さへ叶ひなば。いかにも渡さんさりながら。詞御邊が館へ寶を持參し。天皇と緣結び。其上にて渡さんと。地戀に釘さす詞の末。鎌足御臺に目くばせし。ずつと立つて行過ぐるを。詞待て〳〵鎌足。返答なく座を立つは。違背に及ぶか何と〳〵。イヽヤ違背にあらねども。是此胸にあるべきこと。天皇に戀慕深く。天下を奪ふ心は無しと。帝に寶を見せ奉り。叡慮を安め奉らば。恐らく此戀叶へんと。思慮をめぐらす効も無づるを。入鹿透さずつゝと寄り。首筋摑んでどうと打付け。これはと御臺が寄る所を拂ひ退けて怒りの胴聲。詞天下く。某が詞を疑ひ。只今寶を渡されずばふつ〳〵戀は叶ふべからず。地叶はぬ事に長居は無用。いざおさらばと立出を覆す丸が戀。ふつ〳〵と叶ふまじとは忌々しき顯た骨。今一言吐出さば微塵になしてくれんずと。地持つたる笏にて冠をはたと打落し。睨付けたる其勢ひ。御臺は焦慮り堪りかね。入鹿に咬付く氣色にて。寄らんとするを鎌足公。髮束取つて下に引敷き。詞サア抵抗は仕らぬ。申したき一言あり。怒りを鎭め給はれと。地詞を盡し押宥め。御臺を取つて引起し。詞女は人我の相深しとはおのれが事。眼相變りし立擧動。御怒りの最中なれば。夫の難義を詫びるとは。よもや思し召されまい。今某が引据ゑられ。冠を落されしは。身に覺えある天罰。地天津兒屋根の先祖より。天子を守護する我身にて。入鹿公の戀慕を逆ひ。帝の位を降居させ。我館に引込みしは。埴生の小屋のお住居同然。

斯かる罪ある某なれば、紫の冠は似合はず。入鹿公の手をかつて天より我を罰すると。フシ思ひ知らざる愚さよ。詞入鹿公も某も。天皇を大切に思ふ心は同じ事。戀さへ叶はゞ御位は元の如くになし給はんと。此間夫婦とも天皇に勸め參らせ。今日參内するを幸ひ。地色猶大王の戀慕の心。探り知らんと計りし故。ふつ〳〵戀は叶はぬと。偽り云ひしはかくなる覺悟。詞されどもお怒り強くして。若し我命を果しなば。天皇の御代にもならず。入鹿公の戀も叶はず。地お二方の御爲に。我身ながらも大事の命。詞アレ今こそ逆鱗鎮まり給ふ。女の事ぢや御免を蒙り。一命を助かるやうに。お詫申すが夫の爲。地腰を屈め膝を折るとも。恥とは更々思はぬと。口には云うて心には。我こそ入鹿を亡して再び御代に返さんと。碎くる胸を撫摩り。天下の爲の咄泣フシ有難くも又哀れなり。地色御臺も涙に伏沈み。夫の心酌みかねて。詞彼方へお詫と申すのは。天皇様と緣を結ばせ。其上にて御寶を受取りませうと云ふのかえ。ハテ云はいでも知れた事。何を云うても某が命が無ければ。ナ。お爲にならぬ合點かと。地心を知らす目遣に。御臺は軈て打頷き。入鹿が前に立直り。詞お聞きの通り此戀は夫婦の者が取持つ心。御位をさへお渡しあらば天皇様も御得心。最前の仰せに任せ。妾が忍ばせ參らせん。地三種の神器は其後の事。お心を見よう爲。夫が詞の云過し。幾重にもお赦しと。云ふに入鹿は弛み出し。詞ハテ慇懃な何の詫言。聞けば夫婦がいかい世話。知らぬ事とて鎌足御免。地色帝の爲に大事の寶。此方に取置くは。戀を叶へん爲なれども。詞天皇其方達が思ふにも。帝位の望みは誠にて惚れたと云ふは僞りかと。疑ふ事は尤も。眞實底から戀故なれど。入鹿は地獄も恐れねば誓言も贅事なり。兎角心を引いて見よ。天皇と緣を結べば位は渡す心入れ。地いよ〳〵早う媒を。フシ頼む〳〵と手を摩れば。詞アヽ申し勿體ない。なう鎌足殿。御機嫌が直るといひ。大方お心見えました。地色幸ひ明日は日柄も好し。密かに忍びて御通ひ。戀に心を盡す體。寢間の睦言御鍛錬いざ夫婦ともお暇と。立ち上って鎌足公。笏取直す風情にて。入鹿がきたる冠を。かつしとばかり打落す。是れはと入鹿が怒るを騒がず。詞アヽまだお心が知れぬ〳〵。戀さへ叶はゞ御位に望み

は無いとの御仰せ。玉の冠は天子の物。打落され給ふとも。戀を取持つ我々に。其お怒りはあるまい事。地戀に心が。薄い〳〵と云はれて入鹿。詞ウヽ扨は心を引くのぢやの。腹は立てぬぞ退出々々。地ハツと答へて兩人が。戀の媒立出づる。南殿より見送れば。渡殿より見返りて。上は生鈍心根は。研ぎすましたる鎌足夫婦連れて館へ三重へ歸らるゝ。地王者は四海を家といへども入鹿が惡逆日に長じ。天皇玉の臺を離れ鎌足館に移らせ給ひ。雲に隱るゝ日月の花の御遊も徒に。御心痛む折柄に。今宵まれ人通路の吉祥吉日良辰とて。目出たき事を云並べ。鎌足夫婦が計ひに。御心に染まねども新御殿に出御あり。官女侍從が立並び。入鹿は戀のやさ者と囁き笑ふ噂をも。御簾に響きいとゞ猶。フシ宸襟惱むばかりなり。地鎌足公の御臺所松竹植ゑし島臺に。長柄の銚子のし〳〵と自身携へ長廊下。スエテ御殿間近く手を仕へ。詞恐れながら奏聞と御簾に向ひ。誠に君聖帝とは申せども入鹿が逆威に襲はれ。地色お力とては鎌足一人。元此起りは強ち天下を望むにあらず。勿體なくも君に戀慕し。戀の叶はぬ恨みの謀叛。詞戀さへ叶はゞ三種の神器。帝位も返し奉らんと申すにつき。先達て申上ぐる通り。今宵此家へ忍ぶ約束。地色御身を穢され御名の汚れも民の歎きに替られずと。夫が諫めも叡慮に叶ひ。玉體危き案じも無く。悦びの捧物御覽と奏すれば。御簾の内より天皇は御聲も冴え給はず。朕が身一つ失うて天下の爲になるならば。よきに計へ方々と。只一言の勅諚も。スエテ御涙に掻濁り。フシ共に袖をぞ絞りしが。詞ハアヽ有難き御賢德。自らが差上ぐる此島臺。下々にては夫婦仲。此年までと尉と姥。竹に鶴龜松は千歳。皆壽を祝へども。此方は聊左樣で無く。鶴龜の飛ぶと飛ばぬは天地を表し。松と竹との青き葉も。地の潤ひし豐年に。民を撫でよの姥箒。翁のさらへは木の葉まで。皆お味方に搔寄する。取分け心を付けし此長柄。内にこめたは菊の水。劔で舌を切るやうな。冷やりとした氷酒。甘い跡ではびんとした。切れ口の好い名作名酒。入鹿公へ御馳走に。君が思ひを只一つぎ。ひるむ所を飛びかゝり。透さず私がくはへの役。つきつぎかくる詞をば。ようおききすい遊ばせと。地酒で知らす長柄の劔。官女侍從はうつかりと。扨ても強い

御馳走。私等もそんな氷酒。相伴したしとあひしらふ。お心聰明く天皇は御簾の隙より白紙の。しらけて云はぬ言の葉を。覺るは神の知らせぞと。差出し給ふ心と心。フシ洩るゝ方なく見えにける。地斯る所へ表口入鹿王より御勅使と。呼ばはる聲にそりや何ぞ。起つて來たはと怯恐れ。官女は奥へ逃走る フシ御臺は。次へ出迎ふ。地色勅使の權柄横柄鬚。眞黑羽黑の嵯峨丸大臣。黑衣の裝束厚額。纓の長みを首にひん卷き。玉座間近くどつかと座り。詞ムウ婦人は鎌足の御臺よな。入鹿大王の勅諚。皇極帝へ直々。地色取次召されと出る儘の過言。時の權威にはつと敬ひ。詞勅諚の趣仰せ聞けられ給はれと云ふや否や。ヤア出過ぎた女。我君入鹿大王の戀人。皇極君は何處にぞ。案内せよと立上る。詞アヽこれ申し。昨日まで六位以下。今假初の大臣職。天皇を直々とは慮外至極と。云ふを睨付け何の慮外。天皇に遂に出逢はず。知らぬ神に祟の無い左大臣。大方此邊の御簾の内。地イデ直談と傍若無人。つか〳〵と立寄る玉座の御簾。颯と上げて皇極天皇。山鳩色の上の衣容顔美麗の御眼尻。さすがの嵯峨丸目も眩み フシハア、ハツと。ばかりに蹲まる。地天皇お詞和らかに。詞入鹿大臣の使。朕に對して直奏とは。如何なる事ぞと宣旨ある。嵯峨丸頭を持上げ。主人入鹿。君の愛着に迷ひ。是なる鎌足夫婦が媒にて。今宵此家へ忍ぶ約束。媒ばかりの得心覺束なく。直々君の叡慮。承つて參れとの儀。御心慮如何と奏すれば。地天皇笑を含ませ給ひ。詞朕に心を迷はして入鹿が募る惡逆も。地色皆自らがつらいから天下治世と成るならば。引けよ靡かん夜の鈴妻戸の陰で待てと云へ。思はね人を思ふ程世に憂き事は。フシ無しと聞く。地よきに慰め忍ばせよと。仰せも輕くさら〳〵と。フシ玉座の。御簾は下りける。地嵯峨丸横手を丁と打ち。詞扨々案じたより旨い穿鑿。此島臺も壽の用意か。婦人も嘸お取込み。鎌公へも宜しくと立れば。地色御臺も嬉しく夜のおとゞに入御なるは。五つと四つの間の鈴。鳴すが合圖と傳へてたべ。つきつきなしに只一人。みすぼらしいで戀增る。粹樣計ひ給へとて。しとゝ打たれて呑込んだ。詞お供に來ても隣の餅搗。耳へ入る程口へは入らず。地色今宵は兎角酒盛つて。盛殺してお戻しと。辻占も好き挨拶に。此方も嬉しくいそ

いそと。フシ見送り歸す。跡よりも立代つて使者男。三位光成卿の執權。伴の主税之助と假名を聞き。取次かくと奏する内。御臺の目通り近々と立寄る武士の袴肩衣。折目正しく手を仕へ。詞定めてお聞及びも候べし。主人光成都を立退き。津の國長柄の領地に居を構へ。世の成行をと身を退く。豫々御娘藤照君とは許嫁。只今流浪の身なりとも。よも御違背は候まじ。幸ひ今日最上吉日。御迎ひの輿押付けて持參。姫君お渡し下されなば。主人の大悦使者の面目。宜しく御沙汰と述にける。ヲヽ尤もの使者太儀々〳〵。光成卿都を立退き。津の國とは豫て聞く。遠々を好うこそ好うこそさりながら。娘遣ることまあ成らぬ。歸つてよきにと思ひの外。地主税之助ぎよつとして。詞先達て二心なき一通。源内左衞門に渡し心底はよく御存じ。何見落して。主人光成は嫌ひ給ふや。仔細承らんと立直る。御臺威丈高になり。ヤアいふまい〳〵。都の騷動に出逢はず。天皇此家に御座あれども。一度の參内も無く。世の成行を見んなどと。津の國へ引込む臆病。聟に取つて不足々々。詞ウム其御立腹にて變改な。敵勢ひに乘る時退いて不意を討つ。是武の家で計略と申す。百官殘らず入鹿に從ひ。主人一人天皇へ參らば。そも安穩に置くべきか。命を捨て天皇のお爲にもならず。よし左程に宣ふお御臺が。入鹿が戀慕を取持ち。帝に御身を穢さする心底如何に。地色サア此返答何と〳〵とせり付けられて。サア其事は。詞何と。地夫はかうしてどうしてと。いへども當座の間に合に。フシ好き拔口も無かりけり。地色折節鎌足立出で給ひ。詞主税之助が不審。尤もながら愚な問題。天皇入鹿に隨ひ給ふほ。下賤の智慧に及ばぬ所。御臺が不足も愚痴の至り。一旦の契約變ぜぬ鎌足。娘を今宵密かに送らん。暫く休息々々と地事を分けたる御裁配。主税之助も奥深く。退つて三拜御臺も頷き。互に後程々々と。オクリ別れて奥に入り給ふ。忍ぶ身を。フシ誰が戀草の。土も木も。我大君の物ならば。此身も君に。卷れて〳〵。君に卷るゝ我戀衣。面まばゆく白きぬに。包む戀路に引かされて。忍び入鹿が。身の思ひ。引くに靡くの綸言も。スエテ汗で身流す探足。詞なう一生に斯程まで。物恐れせぬ身なれども。地戀は曲者後髮。骨身に通る。フシ恐ろしや。地色さあ是よりは合圖の鈴。

これや此方の組糸を。引けば引かれてお〻〳〵と。出て來る人は誰ぞや誰ぞ。詞さう仰やるは入鹿樣ではないかいの。此方は鎌公の御臺か。地成程首尾好し。此方へと。オクリつれて入一間に入りにける。フシ燈火そむけ。引合はす。痛はしや天皇は。面はゆげにも口惜く。御臺が媒。取結ぶ。島臺出して二銚子。並べる内に入鹿はもぢ〳〵。猫に追れし鼠の顫ひ。フシちうの聲さへ無かりける。地色天皇土器御手に取り。朕が心は玉の盃。幾夜重ねん印ぞと下し給へば。入鹿は千度押戴き。こは〳〵お傍に這寄り摺寄り。小暗がりにて盃事。どうやら減多に氣が揉める。まあ一寸寢所へと。御手を執つて立上る。御臺は押留め。詞申し是は強い急きやう。地色夜長に綏りとお床入。まあ其天盃で。一ツ〳〵。詞いや〳〵盃古い〳〵。地長き思ひを今宵は霽す。日本開基の仕合者。あやかれ御臺と戯れて行くを押へて。詞アヽそりや御卑怯お手が悪い。地つぎかゝつたる此長柄。馳走に込めた氷酒。一つぎつがんと立ちかゝる。君も持つたる手を振切り。詞臣下なれども今宵は殿御。地丸もお酌と又長柄。入鹿が心に不思議立つ。兩の眼は金銀の。土器取つて兩手に持ち。詞さあお酌。さあつげ御臺。地一つ受けんと身構へに。天皇御心痛ましく恐ろしながら立ちかゝり。御臺も後れわな〳〵と。慄へど共に付け廻す。入鹿は眼を四方に配り。心ゆるさぬ閨の酒盛。透間を狙ふ兩方婦人。長柄もわな〳〵足もわな〳〵。まはる入鹿は疊に膝節摺れつ。縺れつ柳のひな腰。亂れ亂るゝ鬼百合姫百合。薊の花に蝶々の。フシ戯れ遊ぶ風情なり。地色此場をいかで遁さんと。御臺は氣を据ゑそれと合圖の聲より早く。長柄の劍拔討に。討つてかゝれば掻潜り帝の双に飛上り。續いてかゝる御臺が弱腰。引摑んで二三間。拂ひ投たる其隙に。帝の御手を取つて引伏せ。双捩取り乘懸る。なう悲しやと御聲の。口に手を當てしつかと押へ。入鹿が戀の叶はぬ恨み。思ひ知れと突通す。あつと一聲身に徹へ御臺は起立ち南無三寶。詞天皇樣を手に懸けし。出合へ出合へと哮る聲。地家内どよめく足音人音。取卷かれては一生懸命。戀に絆され入込みしと。臣下百官笑ふもいかゞ。一先づ退かんと庭の飛石。柴戸蹴破り裏道を。フシ心懸けてぞ歸りける。地色跡は北面四位五位下。山上兄弟折悪う。

帝の代參誰あつて遁手にかゝる者も無く。廳立つ程御臺は高々。詞皇極天皇崩御ぞと。地呼ばはる聲にハアはつと。驚きながら平伏は。フシ庭に涙ぞ溜りける。地色鎌足奥より靜々と。衣冠正しく立出で給ひ。詞仕丁の面々慥に聞け。帝の崩御は入鹿が悪逆。天恩思ひ命を捨て。入鹿に双向ふ心や否や。仰せに及ばず神國を奪ふ大魔王。天子の敵をなどか赦さん。オヽ神妙々々。誠は是に皇極天皇御安泰なり。地色拜し申せと懸けたる御簾を引上ぐれば。天皇玉體恙なく。女官もかしづく有樣に。各はつと二度恟り。フシ悦び勇むばかりなり。地色鎌足猶も押鎮め。崩御と知らすは敵の聞え。其旨心得退出と。退け給ふ明智の程。フシ感じ。入つてぞ入りにける。地色今までそれと名を呼びし。手負の女は苦しげに。詞父樣母樣。敎への通りはかくなれとか。勿體ない此御衣を。脱して死して下されと。地聞くに堪らず御臺は驅寄り。詞コレ鎌足殿。娘が敎を聞入れて。まんまと敵を欺騙つた。爲果せた出來したと。地一言褒美に云うていのと。ワツと泣出す母よりも。父は猶しも目をしばたゝき。詞一天の下君の子ならぬ者も無く。生の親より恩深し。其恩に返す命。惜しいと思ふな恩にも被ぬ。天皇を害せしと入鹿が思はゞ氣をゆるし。玉體恙あるまじと。父が計ひよく聞覺え。手籠に逢うても色目を包み。よう覺られず隱したな。地汝が命捨てし故。君の顱顏よく拜み。臨終せよとありければ。娘は這出で這寄つて。女は氏より玉の輿。我は天子の玉の冠。有難や冥加なや。此上は望みは無けれども。詞幼き時より許嫁。夫と定まる光成樣。三日なりとも夫婦となり。二世の堅めがして死にたい。地嫁入してたゞ父上と。消ゆる命の望事。フシ哀れにも。又道理なる。地色天皇御聲搔曇り。朕が命に代る者。即ち四海の母たるべし。不德の君に仕ふ故。世の憂哀れに逢ふ如く。思ふ心も恥かしと。御衣の袂を顏に當て。フシ歎かせ給ふぞ有難き。地色夫婦娘は三拜の中に御臺は猶涙。下萬民の者までも娘の悪性男の不義。戒め叱る親の身の。我は敵の手引して。閨の懸引盃の。酌に立ちしは何事ぞ。四海の母との綸言は。我子の譽れ身の冥加。有難うて悲しうて。泣くも返らぬ死出の道。誰が附添うて未來まで。送り屆けん不愍やと。縋りては泣き立つては泣き。スエテ悶え

苦しむ有樣に。 地色天皇女官も諸共に。歎く涙は水晶を。 フシ水に寫すが如くなり。 地色鎌足公は天皇の叡慮に恥ぢて涙を隱し。 詞コリヤ娘藤照よ。母の歎きに必ず迷ふな。三千世界の涙より。君の一滴が好き土產。親の身では嬉しうて五臟六腑に徹へるぞや。 地女は涙の足早く只一筋の桶の水。夫は義理で堰留むる。胸の苦しさ推量せよ。分けて娘は父親の。不愍重なる者なれば。幾萬人でも一人でも。思ひは同じ思ひぞと。猛き心に。持つ涙押へかねてぞ見えにける。 地色娘は苦しさ悲しさも。餘りてやう〳〵起上り。 詞なう母樣。もう歎きを止めてたべ。天皇樣も御叡覽。女官達も見て御座る。未練卑怯と笑はれて。お愛想の盡きぬ樣。もう 私 はお先へ參る。父樣母樣お二人を。頼み上げます天皇樣。 地いづれもおさらばと。無常の風に誘はれて。 フシ眠るが如く息絶えたり。 地色母は勿論天皇女官。ワツと泣出す涙につれ。鎌足公も一時に スエテ轉び。伏してぞ泣き給ふ。 地勝手口より最前の使者。伴の主税之助。 詞姫君御迎ひの刻限延引。誰そお取次頼みたし。御披露々々々とたける聲。 地スハ人こそと玉座の御簾。さつと下し鎌足公。 詞主税之助か。嘸待遠是へ〳〵。 地はつと立寄り手をつかへ。 詞委細最前より承知仕る。皇極天皇崩御の事。驚入つて歎かはし。姫君は相違無う。お渡しなされ下されと。悔みを籠めて平伏す。 地御臺は聞くに猶悲しく。娘が此世を去りし事。知つて望むは胴慾と。 フシ怨み喞ちて在します。 詞鎌足公暫く思案し。ムウ次の間に控へ。娘が最期はよく存じつらん。二人となき娘强つて望むは汝しれ者。言分あらば云へ聞かんと。 地御佩刀に手を懸けて。御氣色變つて見え給へば。主税之助膝立直し。 詞やあら心得ぬ御上意。最前仕丁の面々へ。皇極天皇崩御ぞと仰せられしは僞りか。萬一世上の口變。天皇と取違へ。藤照姫を害せし故。緣組も變替と。沙汰あつては忠義は徒事。崩御なされしは天皇。姫君はソレ其處に。別れを惜しみ寢てさうな。否でも應でも受取つて。乘物引立て罷り歸る。サアお渡しなされいと。 地知つても知らぬ空とぼけ。流石の鎌足横手を打ち。 詞志過分々々。息ある内に渡しなば言譯もあるべきが。 地體は朱に身は切れ〳〵。あの姿を見て主税之助。夫婦が心推量せよ。前世の業とは云ひながら。 地不愍にお

じやるとばかりにて フシ又御。涙にくれ給ふ。 地色俱に涙を拭ひ御尤もなりさりながら。 詞假令御身はひし醢。手足は離れ斷れても。二世と組んだる御夫婦。 地せめては野邊の送りをば。 地主人方にて取りまかなひ。別れを惜しませ申したし。 詞一つは敵へ聞えの爲。嫁入の儀式祝言のまなび。 地御了簡と涙にくれ。願ひ申せば實に尤々。 詞娘が最期を隱すは天皇崩御の印。ソレ〳〵娘が嫁入裝束早く〳〵。 地あつと御臺も涙に暮れ取りつくろひし祝言の。衣裳も白無垢亡者も白無垢。 詞コレ〳〵奥。色直しは要るまいと。 地氣を付ける程悲しさの。猶も增來る物思ひ。夫婦がまかなふ其中に。はや乘物に舁乘する。面影隱す綿帽子未來の爲にすんばうし。逆樣事のとりおきは是も約束嫁入も約束。悲しき夫婦が身の上と。手に手を執つて冠のフシ朽つる。ばかりに泣き給ふ。 地色主税之助故と聲張上げ。 詞姫君の一世一度。御祝言のお嬉し涙。何時までも盡すまじ。 地五日歸りは拙者がお供。はや乘物を立てませい。ない〳〵と六尺奴。肩を揃へて舁上ぐる。待てよ〳〵と取縋る。御臺を押へ鎌足公。 詞須達が十德も無常は止まらず。阿育が七寶に壽命は買はれず。 地いづれか生者必滅の理りに洩れん。見るも夢覺むるも夢。夢とはいへど覺めやらぬ思ひの種を乘物に。乘せてしらすの花ばたけ。ナウこれ暫しと母親の。聲に止まる下部が足元。嫁入の儀式取りまかなふ主税之助も力無く。餘處への聞え高聲に。 詞嫁入よ〳〵。嫁入に附くも麻紅杆。 地娑婆を去られて行くも白無垢。門火を焚て送り火に。闇路を照らす冥途の道。跡賑しが直ぐに吊ひ。舅入をば一七日。母の土產は香焚物。聟の祝儀は娘の白骨。骨になるのか嫁入が。灰になるのか祝儀かと。夫婦が見下す。供は見上ぐる互の。涙。通ひ車くるり。くるりと庭の繁みを舁いて廻れば。供に附添ふ親の身の。今が此世の別れと別れ。父が涙は人目を隱し。母の名殘は涙で惜しみ。迎ひの武士は乘物へ。問はず語りも泣聲に。三つに隔たる雨霰雪や氷も。村雨も。一ッに流す芥川。堰留めかねてやう〳〵と長柄の里へぞ歸りける。

第四道行

世の中は。フシ月に叢雲。花に風。思ふに別れ思はぬにあゝうるさはの菖蒲草。水に繪を書く戀の淵。御痛はしや天皇は。めしもならはぬ旅の空。鎌足夫婦八王も。道より召連れ給ひつゝ。小オクリ夜半に。紛れて落ち給ふ。御有様こそ哀れなれ。昨日と暮れ今日と過ぎ。スエテ飛鳥の御所の御車も。引替へ今日は徒歩路の道。其頃しもは秋の田の苅穂の稲のちら〳〵と。ちらめく星のかず〳〵は。いふに。云はれぬ天の河。空にも戀があればこそ。四方に浮名は七夕のいとしをらしき。フシ夜這星。飛ぶ火の森の。木蔭れに人目忍ぶの笠の内。世を厭ふ身はいとゞ猶心。細井のはしづかこそ。崇神帝の御叔母君。もゝそ姫の御陵なり。長地雲井の上の憂思柳の糸のやなぎ本亂れ初めにし世を治め。何時かしとねの帶解川。フシ渡りくらべて今爰に。行くも山中。又行く道も。山中の。半仲峰に谺の音すれば谷に落來る水の音空。恐ろしや我身より。我身を責むる我心。ナホスフシ心留めそ。いそのかみ。急ぐとすれど。捗取らぬ。人目堤の奈良坂や。本フシ皃手柏の兩面。逢はでしのぶの篠薄。風に靡きてあちりナこちりナ。あちりこちりと吹いて落ちたか木のめ坂。杖に縋りてよろ〳〵と。よろばひ給ふ御よそほひ。フシ勿體なくも恐れあり。地鎌足夫婦御手を執り。詞はや津の國も程近し。御心靜かに御歩行の道すがら。地今宵の月の冴えたるをも。叡覽あり。興じさせ給はゞ。御心も晴れさせ給はんと申上ぐれば。天皇。稍打笑ませ給ひ。フシげにも今宵は。秋も最中の空清く。二千里の外に隈も無き。地月の入るさの山高く。大内山の山ならば歌を詠み詩を作り。フシ百官儀式華やかに。月見物見の管絃講。それには變り今日の今野に伏し月を見る事も浮世なりけりなか〳〵に問ふべき人も無かりしに。いたはり助くる人々の心をいかで報ぜんと。御衣を絞らせ給ひければ。御供の人々も。共に涙を催せり。詞八王御心を慰めんと。江戸外記アレ〳〵。向ふの小松原。君の御幸を待顔に。山を隱して並木の松。是を味方の軍兵と名づけ。軈て御

加勢雲霞の如く。日月の旗眞先に朝敵入鹿が館に押寄せつまり〳〵に隱し勢追手。搦手押取卷き。四方より攻入らば何程猛き。猛將も。フシ弓折れ矢盡き。詮方無く。ナホス己れと自滅疑ひはし。吉左右よしや旅立も。よしや世の中フシ世なりけり寄邊を分かぬ。道なれど暗がり峠打越えて難波の。葦の津の國や長柄の。里にぞ三重へ着き給ふ。地津の國の土地は上品上生の。菩薩の種を植置きて今日は草取り水かきの。星戴いて霧拂ひ。土から土に入るまでと。一人の手にて作り出す岩次というて土地でも。小理窟いうて小分別あつても内は提燈の。日の目も射さぬ在の家。夫の留守に女房が出の口明けて針仕事。公儀袴の洗濯もつゞれ水うす茶呑み時。娘おこよが氣を付けて。地花香も丁度十六か七というても九にならぬ。ぼつとり者の手入らずは。フシ生れ長柄の里育ち。地色出花一つに母は手をやめ。詞オヽよう氣が付いたどれ〳〵。オ好い茶の花香。額に當てると頭痛もさめる。ヤおこよ。親父殿の留守の間其方に喝す事があるよう聞きやゝ。知りやる通り以前の配偶岩次殿に別れてより。下作のとひもはなれあつけに入つて居る内。今の岩次殿は西國生れ緣でこそあれ此家へ入聟。白髮交りの緣結び恥しい祝言も。其方がやう〳〵七つの年。僅かな作德を力に今日まで暮す所に。今の王様入鹿殿とやらが。此村中へ壹萬貫といふ餘荷の吩咐。竈役に五兩とやら七兩とやら跡の月からの催促。地家督家財を賣るもあり。田地を質に入るゝもあり村中が上を下。返す當なき無心も云はれず。難儀は此方の親仁殿其方や俺が苦にしよかと。くろめる内に日が切れて。地毎日毎夜の催促という て金は無し。膝とも談合と概略を語れば娘も打悄れ。詞ぼつ〳〵と其事を聞いても知つても女の身。何處でどうする當も無く。地父様の顔ばつかりを眺めて居ますとばかりにて。フシ親子。案じの涙なり。地色又も來るは庄屋の德助ぬつと入つてきよろ〳〵と内を見廻す不興顔。親子驚き是は扨。詞人の内へ案内無し。地無遠慮とは云ひながらフシ好うぞお出でと機嫌取る。詞何云はるゝお内儀借金乞ひの案内と鮒のうは水足音聞くとすつ込み。何時來ても見付けられぬ親仁又留守ぢやの。生中親仁が御前にて理窟はつたて七兩壹歩。竈役に村中の難儀外は大方調うて。埒の明かぬは

是のばつかり。段々延びて月越の日切。いはねど今日が願以此功德金次第の申し上げ。地埒が明かぬと直に水牢。有無の返事を僅た一口。フシきり〳〵云はれとせりかゝる。詞成程お道理御尤。地遲うて今晩明朝まで。お待ちなされて下されと云ふを打消し。詞ヤア云ふまい。御尤もお道理を涙であへてももう叶はぬ。是から直ぐに代官所。地太儀ながら牢の飯。宵から炊いて置かれいと。立つて行くを娘のおこよ立塞がりて手に縋り。詞父様の難儀私等親子の悲しみ。地思ひ遣つて下さんせ世には情もあるものと。抱留むれば庄屋はぐんにやり。詞美しい此方に留めらるゝと身が縮む。幾度來ても抱留められ。來しなの腹立ちより去しなに立つが迷惑。コレお袋明日まで屹度待ちましよ。岩次殿が戻つてなら。催促に來た事よういうて下され。おむす去ばや。オ好い縹致と。地しなだるゝ。柳腰より弱腰を。フシふなつかしてぞ歸りける。地母は見送り目に涙おこよ。おこよと傍に呼寄せ。金に詰つて水牢させ泣いて居たとて益ない事。膝とも談合と最前に咄し懸けたは其方へ無心。詞有やうは一昨日寺參りを詫け。一日がけに江口町お傾城屋へ尋ねて行き。十六になる娘何程でござると問うたれば。賣ると買ふとて高下あり。六兩や七兩は鼻かけでも直があると。地いふに大方談合しめ。今日見におじやる約束。義理堅い親仁殿。氣風聞いても邪魔になる。晝間時までおぢやれ行かう合點々々で歸りしが。詞親仁殿へは五七日西の宮の伯母女へ。留守に遣つたと紛らかし末で知れたらまゝのかは。地親方さへ目に入らば奉公しよと思はぬか。秋が入つたら其金で。つい取戻すまでの事誓しの内親の爲。往てたもやいのと輕はづみ。賺し込むにも呑込むにも。胸の涙をせき隱す。フシ母の。心ぞ遣瀨なき。詞ア、母様の何のいな。私等が様な不束者お傾城とは餘り。舟引きとやら槍さしとやら前垂懸けの奉公でも。置いてくれてがあるならば何處へなりと參りましよ。地何奉公でも親の爲恥しい事ござんせぬ。有付の有るやうに神棚へお神酒をと。悲しさ隱す君傾城。明日から太夫天神の。フシ神も哀れと思すらん。詞オ、出來すさう思やるが身の冥加。地我も他力本願を願むと云うて一間なる。持佛の陰へそろ〳〵と。フシ泣きに立つこそ哀れなれ。地色娘おこよは泣く涙袖に隱

して目を拂ひ。身を浮舟の流れとは多くの人に肌觸れて。酒と情を賣ると聞くごんすやんすの詞付き。口舌とやら日くとやら。誰に習うて明日よりも憂勤めすることぞ。田舍育ちの田夫者せめて風俗品貌。繕ふ術でも知りたやと。スエテ獨り咄ちて居たりしが。詞ハア、それよ〳〵。日外村の友達と紋日とやらに道中を。見物したはこんな時。地役に立てよと神の告。人の來ぬ間に稽古せう太夫の道中揚屋入。こんなものかと小褄取り。鷺の鰌の八文字。眞一文字も蟹の横。河豚の横飛び猿走り。歩むとすれど探足。フシ可笑くも又哀れなり。地色一間の母は障子越し差覗いてはちやと引き。引いては覗く親の心悲しさ辛さ身の因果。地獄の種に實が入つて胸でこなする血の涙。つき込み〳〵呑込む辛さ。堪りかねて一時に スエテわつとばかりに泣沈む。地色こは何故と驚く娘。抱起すれば縋り附き。詞可愛の者の心やな。親の爲とて聞入れて。其身に染る里稽古。地子を賣る親が安閑と障子の陰で見物は。人食ふ鬼も得せぬ業。如何に貧苦に逼ればとて。かくまで逼るものかいのと。抱緊め抱緊めて聲も。惜まず泣きければ。地色娘は涙を猶隱し愚の母の仰せやな。詞山家の櫻は陰に朽ち。都の花は歌に詠む。わしや傾城が嬉しいと。地口と心は二重三重。八重の櫻の散々に。オクリ別れを惜む涙なり。地色折節來る傾城屋。岩次殿とやらは此方か。お内儀はお内にかと。曖廉引明け。詞エ爰ぢや。江口の里の花卷屋。地見知つてゞあらうのと。内へ通れば。ようこそお出でと泣く目を隱し。程ある所を御苦勞と。母が挨拶是は〳〵痛み入る。詞商賣づくは百里でも飛びまする。シテ咄しの娘御は是か。したり好い縹致。ても扨てもこりや惚り。十兩足らずの端物。物にならずとけあなどり掻いなぐりの相談。本年ならば五十兩。太儀しよがお袋どうぞ談合なるまいか。さあ其處が氣の毒。親仁殿に隱し。當分預けの年二年。地短うて厭ならば。外へ談合とはね袴。仕立てかゝればこりや待つた。地手きゝの娘で猶望み。突出し二年七兩壹歩。金拵へて持つて來た。受取つてと投出し。手形は吉日娘御が證文。地垂水の茶屋に駕籠もあり。親父殿の留守の内。連立つて去ましよと身拵する所に。向の畦の細道を。ぶら〳〵歸るは父の岩次。娘見付けて。詞アレ母様。父様が見えまする。

ドリヤ〳〵。ほんに大きなけど。地今やつては事の破れ。垂水まで首尾見合せ。跡から私が連れて行こ。先で待ツて下されと。如才無き體見て取る粋顔。天窓から隱す親父。首尾ならねは氣の毒。手具合ひして跡からと。フシ色屋は先へ出でて行く。地色長柄村岩次兵衞と土地でも。人に知られた痩親父。鍬の柄先に雉子一羽ぶらり〳〵の拾物。年は六十はち卷に。弱みを見せぬ堅ものは。フシ昔者とて持囃す。地色女房ちやくと針仕事。娘は釜の下地から。するわざ見せるさいかくを。何の氣もなく内に入り。詞娘戻つたぞよ。地えい〳〵とあがるお上に雉子一羽。投出す足の膝まくり。詞コレ嚊。針仕事置きやいの。又目が悪なろ。娘釜の下焚いて大黒になるなよ。デエ息繼に茶一ツと。地常の機嫌に此方もほれ〳〵。公儀ことが多い故袴に繼して置きまする。詞もう破れたか。今朝から庄屋のぬつくりは見えなんだか。來たとも〳〵。金が濟まぬと水牢と。きつしくな催促。白痴者めが。さう云うて和御女達嚇すのぢや。誠にすなよ娘。怖い事もなにも無い。水牢は舟遊びよりやつと樂な。王殿が逆鱗ばつても。神武此降無い物取ろが何處にある。案じる事は些とも無いと。地色口は達者に云ひながら。奥齒に挾むかねごとは。フシ鐵に鐵をぞ寄にける。地色娘おこよ聞くに悲しく。詞村中が調うて此方ばかりとの口上。幸ひ西の宮の伯母樣。夷子講の懸錢急な事なら云うて來いと。常々の内證私が云へばつい埒する。地秋が入つたらほうをつゝら。間を合はす爲往きましよかと。江口の町を西の宮。伯母に擬へて身の代の。フシ金の出口ぞ哀れなる。詞置きや〳〵要らぬ物。隣國他國は云ふに及ばず。在々村々未進の催促。伯母女の邊りも此方同然。アヽまゝよまゝの川。一度死んで二度死ぬまい。王でも頭でも去がけの駄賃。死損なうてさか高にはいつた此親父。金銀故に王の座で詰めらるゝ覺悟。案じな悔むな天道が正直。地どうなとなろぞと苦にさせぬ。親の心の慈悲深く。餘處見する目に一包。詞嚊其包んだ物は何ぞ。地是かと取つた七兩壹歩。忘れ置いたか南無三寶。覺られては當座の出合。詞隣の婆樣が寺參りの土産。燒饅頭僅た一ツ。地吝い人ぢやと紛らかし膝に隱せば。詞テモ扨も慾な目からは悉皆小判。地よう似た物と打笑ひ。さらば我等も土産物。少分なが

らと雉子取出し。詞仕合せが直らう端か。思ひがけも無い此鳥。下り松の砂山足元でけん〳〵と。吠えるを見れば薄中。地まん直しに酒買うて燒鳥で一盃しよ。一升買うておぢやらぬか。詞仕舞仕事の手がとまる。ソレおこよ。太儀ながら往ておぢやと。云ふに親父がアヽ不精ばかり。若い者が德利提げ。他處目が悪い見苦しい。地六つかしくば置きや〳〵と。無機嫌顔を見るも氣の毒。詞そんなら我が往きましよ。地ま一つぎで縫了ひ。其間に料理と俎板を娘が直し毛を拐る。まだ暖かな鳥の肌。可愛や己が己でに。泣いて取らるゝうつけ鳥。烏を鷲と爭うて。命助かる者もあり。小網に罹り餌にさゝれ。定業非業の死をするは人間とても變らずと。思へば羽も拐りかね涙。フシかぞへるばかりなり。地色岩次は何の氣も付かず。詞是は扨嚊まだ往きやらぬか。臂の重たいわろ俺なと往こかとせり立てられ。おつとまかせと立上り。詞コリヤおこよ。此袴疊むなら。地折目高にと云ひさして。フシ德利ひつ提げ出でて行く。地色跡には親父が切刻み。娘が重ねる羽の數。十ヅゝ六ツは六十の。八に當りし年男。二人連れにて驅來り。詞岩次殿お宿にか。代官殿から急の御用。地お出であれと呼出つる疵持つ足の惚りに。娘も狼狽き最前の金の咎で水牢か。母樣呼びに走らうか。どうかかうかと氣を跪く。岩次表に走出で。見ればいつもの寺講中。詞七九殿左次殿。代官殿より呼出しとは。金の事なら病氣々々。いや〳〵驚く事でもなし。又驚かぬ筋でもなし。變つた事のお尋ね。六十八の年の者村中を詮議して。殘らず連れて來いとある。善か悪かは知らねども此方共に八人。病氣ならば戸板と念が入つて急のお召。詞何れもあれに待合はす。袴羽織を引懸けて。いざいざ御座れと云ふに付き。詞先づそれならば外の事。雉子の料理で飲みかけた。底入れてござらぬか。いや酒どころじやござらぬ。物案じで咽喉が通らぬ。皆も待遠さあ〳〵ちやつと。地早う〳〵のせり立に。在合ふ袴踏みしだき。紐の長みをかい挾み。娘があてる腰板も。横になる程せき立てば。詞コレ父樣。年寄つての物急ぎ。地怪俄の基と氣を付ける。詞いや〳〵ぶち驚きの無いは悪い。善悪知れぬお上の事。聞くまでは落着かぬ。うろ〳〵せずと留守よう

しや。内明けな。地雉子を猫に取られなと。急ぎ馳出す二足三足。行くと轉たるあいたしこ。なう悲しやとおこよが飛出で。抱起すれば顔眺め。詞娘どうやら往きともない。地嚊はまだかと問ふ不思議。こな親父はと兩人が。引立て行けば取縋る。娘の手先引放し。突倒し行く親と子の別れは。後と三重知られたり。地郷に入つては郷に隨ふ世の例。石川三位光成卿都を離れ攝津の國。長柄近在二里三里一家の好みに赦されて。色慾强き入鹿の下知受けて流する川端に。屋敷構へる代官所。執權伴の主税之助上の仰せを眞直に。勞る下も自ら。繩取りよりも太刀取の。フシ役目も辛く座に直る。地色筆紙取次闕所役元締役もそれ〳〵に。何村の何兵衞未進の勘定算盤も。歸一倍々割りかける主の見一無たうの捌何れ。是非なく見えにける。地色郷手代帳面改め。詞近在は殘らず上納銀相調ひ。此長柄村に七兩壹歩籠一軒の不足。如何仕らんと伺へば。主税之助頭を痛め。少々の儀は尋ねに及ばず。家財田畠に離れ差上ぐる金銀。土地盛んなりとて當地に建てられるゝ禁裡普請。成就とも思はず主人光成卿お心弱く。萬民の歎きお耳に入るゝも氣の毒。引つ取つて某が御名代。先帝の御代にならば此百倍にて戻す思案。地色武烈王以來の入鹿。天の責め近きにあり。詞と云うて當前下の歎き。其方達も大概は見遁し。山開梁田に竿入るゝ事無用。地色泥水はすゝるとも山水清河に心を清め。必ず上を見習ふなと。心は仁義禮智信。五字の掟も自から。フシ川の水屑となりにける。地色取次の諸太夫一ツの箱を忝しく上座に直し。詞入鹿大王よりの綸旨。主人光成卿へ差上げし所。貴公に頂戴あれとの御意。御拜見と控ゆれば。主税之助打頷き。尤も綸旨院宣の頂戴には。其儀式ありと雖も。地色大悪强敵の入鹿民家の訴へも同然。光成卿手に觸れ給はぬも尤々。貴殿披いて見られよ。と云ふに隨ひ讀立つる。詞謹而頂戴あるべき一書。長柄村の橋先達て申遣はし候通り。人柱を以て成就致さるべく候。一つ鎌足の大臣都を開き津の國へ立越え候よし。其近郷見付け次第。首討つて送らるべく候。其方大王の好みあるを以て。其地に差置かれ候君恩。有難く存じ奉るべし。者執達件の如し。三位光成へ右大臣。縣の捌照判と讀了る。地色主税之助えせ笑ひ。詞俄公家の右大臣。

綸旨の文章も亂次。先帝崩御と心得。鎌足公ばかりを書載せしは重疊々〳〵。地必ず此家に御座の儀。神文の通り齒節へも出さば。部類を絶す合點か〳〵。よきに勅答とかす公家を逐返せ。仔細聞くまで落付かぬ都の使。是で胸さつぱり。詞ヤ今朝申付けし當村の百姓。六十八の者人數揃はゞ是へ通せと。地仰せに依つて呼出す。木まぶり頃の老の年眼鏡で道を歩むもあり。耳の遠いは口先で動きにつれる。二重腰。疝氣のくわりやうだい〳〵を五十六十七十に。二ツ足らぬを擇出され。せう事なしの蟲くひば伊丹。邊から此村へ隱居しに來て死に來て。閻魔の前の問事は何の事やら白髮の揃へ。雪をまいたる川端の。白砂に畏り。フシ上意。如何と蹲まる。地主税之助人數を見廻し。詞村中に六十八の者は是ばかりか。つゝと寄れ苦しうない。云渡す事ありと。地色其身も端近く差寄り。詞當村長柄川の儀。水逆立つて矢の射る如く。渡しの自由さへ心に任せず。此度内裡を建らるゝにつき。橋無うては叶はじと。千度百度架けかれども。夜の間にながれ成就せず。其通り入鹿大王へ申上げし處。禁庭にても評議樣々。天文の博士奏聞して曰く。是水神の咎。水は陰なり男は陽なり。六十八は癸の亥。十干十二支共に水。水に水を合はすれば。同氣相求むる道理。陰陽合體すれば橋成就疑ひ無しと。博士が申すに隨ひ。急ぎ六十八の男。人柱に入れよと入鹿大王の勅諚。汝等は六十八癸の亥。相詰めし内。地色一人命を取るぞと。聞くより恟り。詞エ、思ひ寄らずこりやどうぢや。寢耳に槍か泥龜の。地餌食にせうとは情ない。こりや云譯をと出る男。詞私は六十八でも大晦日の夜半生。やう〳〵と一時を一年。よう思へば六十七。地しちと云へば流れは嫌ひ。水のかみも大きな禁物。札付は御赦免と。願ふ内より這出づる。詞私めは九と申す申譯。其仔細は。閏が丁度廿月。八といふたは何ぞ又。御褒美でも出ようかと。少しの慾に迷ひしと。地知れぬ命はお赦しと胡亂な事を仲間同士。詞其云譯は暗い〳〵。地抽者は屹度證據人確かな事とつゝと出て。我等が親父は粗相者。節分の夜を取違へ。煤掃の夜豆打。それより一ツ二ツづつ年まめが違ひ出し。七十やら八十やら。委しき事は舊冬の。地厄拂にお尋ねとたわいやくたい役所の正面申し上げます。詞身どもは當年六十六。見かけ

より二ツ程老けたと云うて八仲間。さすと引くとで名も七九。八々はらふ占に。地色ま一度お尋ね下されと。鷹ふ所へ。又一人。詞某母の胎内をぬつと出たのが戌の年。正月餅も大と小。地搗違うたがよいならば。臍の緒吟味下されと。眞顔も時の出合口。或は七十内外の八のあたりを撫廻し。口重たきはうぢ〳〵と。塵を捻りて居たりける。地主税之助氣を痛め。詞命助からんとて樣々の云譯。地無理と思はず。フシさりながら。地色老少不定の世の例。今日助かりて明日の日の。無常菩提の催促は何と云拔け成るべきぞ。詞さすがは凡心愚痴の至り。地如何樣に陳じても一人の命は遁れず。前世の業と諦め。覺悟せよとありければ。わつとばかり一時に。庭に倒れて泣く涙。フシ川も水増すばかりなり。地色主税も涙を浮めながら。嘸や妻子眷屬が歎きも思ひ遣られたり。詞何れにもせよ。人柱に立つ者の命金銀にて買ひ受け。殘る妻子の糧とせん。地色せめてそれを力と思ひ潔く望み出で。命を捨てよと仰せを聞くより皆一同に詞を揃へ。詞金銀にて買ふ程なら。入鹿王でもあり樣でも。サア買ひませう賣らつしやれ。地色世に大切な物なりやこそ邪非道の掟をも。守るは命が惜しいから。聞分けてたべお代官。お役人樣〳〵と。手を合はせしは罪人のフシ責を。詫する如くなり。地返答に持ちあぐみ如何と躊躇ふ其中にも。聞分ある岩次兵衞。惣中に立出で。詞取締もなき方々。殘らず命を捨つるでなし。一人とあるからは定つた上のお詫。何かと云うて叶はぬ事。地色歎きを止め思案あれと。云ふにちつとは力を得。詞お云やればそれもさう。どれがどう成らうやら。闇の夜の礫中つた者が因果。地色どれなとお指圖受けましよと。云ふも猶々支配の迷惑。どれと名指しも贔屓もならず。ハテどうがなと差俯向き。思案の胸を碎けども。何といひ出す事も無く。フシ案じ餘りて見えにける。地色岩次見かねて進み出で。詞某當在所へ入聟に參りしは十年以前。生國讃州志渡の浦海上を商賣し。鱶鰐に見入らるゝ事度々。多くの乘合の内。孰か見入れられたるとも知れず。地其時は椀折敷扇當笠の類。各自が印を付け海へ打込み。其取られたる者を。餌食となす眞ツ其如く。詞人柱も水神の見入れ。各自の物是なる河へ投入れ。假令渦に卷込まれうが。又は自然と沈まうが。

其主を捉へ人柱となし給はゞ。恨みの筋も候まじ。地此儀如何と伺へば主税之助。横手を打つて奇妙々々。詞奇體の敎へを受けて胸を開く。殘る者どもあの通りに。違背あるまじやと尋ぬれば。何が扨て此上は互の運づく。地色思案の深い岩次殿其色品は持合はさぬ。とてもの事に何はめう。それも序に案んじてと。こだねあつらへ身の程の。フシ助かるやうに頼みける。詞いかさま小道具在合はさず。何れも着する袴。地惜しくとそれをと指圖に任せ。何の惜しい事がある命の代りぢや脫ぎましよと。手ん手に紐解く結び解く親の代から洗はぬど。洗濯致して歸らうと緣喜祝ひの麻袴。拙者は小紋輪違ひを思ひ違ひのないやうと。心を籠めて差出す。我等は眞黑烏色。烏は權現つかはしめ。力を添へてと手を合はす。其外茶小紋水淺黄。紐の切れたを目印に板の無いのを證據にと。並べる内に岩次が袴。麻黄小紋の同じ色。紛らはしいがオ、それよ。袴の襠につぎ一ツ。是が目當と差上げる。時の役人立出で。搔集め引抱へ川端近く差寄れば。主税之助立上り。詞今が一生懸命生死の境。地色必ず跡で爭ふなと。流れにひろげ一ツ入れ。二ツも過ぎて三ツ五ツ。流るゝ袴の主は悦び。浮く人々は飛上り川の面に目を離さず。六ツ目も浮み情なや八ツ目の岩次がつぎ袴。はめるや否やづぶ〳〵〳〵。詞ヤア悲しや南無三寶。ありや取れたは沈んだは。地見入られたるは岩次ぢやと。口々云はれ我も又。川の面を差覗き上へ走り下へ行き。尋ね廻れど水の面。其色影の見えざれば。ワツとばかりにどうと伏し スエテとかうの。詞涙より。フシ尋ぬる外は無かりける。地色殘りはいそ〳〵うき〳〵と。悔みの詞足も空 オクリ勇み〳〵ざゝめき。フシ立歸る。地色主税も不憖と思へどもわざと聲を荒らげ。詞ヤアおくれたるか岩次。汝が敎への通り贔屓も無し依怙も無し。恨みの歎きか。悔みの涙か。地卑怯至極ときめ付けられハツとばかりに顏押隱し。詞かくならうと端にや。家を出る折柄石に躓き伏したるを。娘が飛出て早速介抱。其時娘が顏見るより。後髮が引かされ一足も動かれず。誘ひの兩人に引立てられ。參るや否や人柱の吩咐。其時の事はや忘れ。小さし出て要らぬ裁配。思へば前兆であつたよな。妻子が儀を頼み上げまする。地路頭に立たぬ樣お慈悲の惠みと手を合せ。佛を拜する

如くにて　フシ涙に。暮れて居たりける。　地色狹き在所は知れ易く。かくと聞くより女房娘。徒歩跣足にて驅來り。詞嬉しや爰に變らずか。亘細は聞かぬど人柱と。　地聞いて驚き驅付けた。此方一人は殺さぬぞ。死なば親子三人連。怖い事も何ともないと。肱張懸けて女房。　詞コレ代官殿。六十八の者人柱は是非ないが。數多ある中親父殿只一人。擒にしたは何事ぞ。科あつてか但しは意趣か。　地其譯聞かうサア聞かう。　詞オ母様それ〳〵。好い聞所 問所。父様ばかりが亥の年か。お代官づら返答しや。　地云はぬと咬着く拷着く。どうぢや〳〵と兩方より。親子があせる心を感じ。　詞ヤレ氣を鎭めよ兩人。様子知らねば恨み尤も。意趣も無し科も無し。せかずと仔細篤と聞け。人柱に入るゝ者以上八人。其中にて彼か是かと評議區々。岩次が才覺を以て各自が袴。印を付けて河へ投込み。其沈んだるを人柱と定め。何れも河へ流せし所。其方が親父岩次が袴。水にうつすと其儘沈んだる因果。委細は岩次に問へ〳〵と。　地云へども女房せき上げ〳〵。　詞其筈ぢや其袴は沈む筈。ヤイ狼狽者。袴だ水に沈む筈とは。コレ其袴の襠には。つぎが當てゝあらうがの。成程々々其つぎが目當。　地なう其つぎの中にこそ。親父殿に隱す金。七兩一歩入れ置いた。ヒヤア。ヤア。　地と云うても聞いても詮なきながら。岩次は這寄り摺寄りて。　詞コリヤ女房。粗相云ふな僞るな。一粒一錢の貯へ無く未進に逼る某。其方が金とてある筈なし。　地仔細はどうぢやと云はれて女房。又改めて聲涙。　詞成程合點の往かぬ筈。竈役の金餘り切なく。水牢といふ悲しさ。娘を江口町へ賣る筈にて受取つた金。見付けられじとつぎの内。　地隱し入れたは正眞の。此方を殺す双金か出双か。情ない事しましたとわつとばかりに。泣沈む。　地色岩次はまつくろ氣はいらだて。女房取つて膝に引敷き。　詞ヤイ女め。娘を賣る事誰に斷つておのれが差配。先夫の遺子。種は蒔かねど身どもゝ親子。娘の蔭で榮耀すりや。今此身にはならぬはやい。某以前はめかりの戸次とて。讃州志渡の浦にて。面向不背の玉を取返せし。滿月といつし海士が親。一廉の恩賞をも貰はぬはな。娘を先立てた業人。榮耀して何外聞。尋ねに逢はね内國を立退き。　地此里の士氏となつたは。子供の恩を受けまい爲。　詞可愛さうに答の花をたらし込み。傾城恭公

とは。おのれは娘が可愛うないか。おりや身に代へても彼が不憐な。榮耀えとくに育てたら。冥途で先の親どぜに。禮も受けう自慢もいはう。娘賣つた其金で。未進遁れて來ましたと。どう面出して父御に逢はうぞ。　地女の鼻の先智惠で。夫を水のすもりにするが本望か願ひかと。叩いては泣き泣いては打ち。かう云うても人柱は。おりや遁れぬとどうと伏し。恨み歎けば傍に立つ。主税之助も堪りかね。障子の内へ暫くは。　オクリ涙隱しに。フシ入りにける。　地娘は悲しさ母に執着き。父様のお腹立て尤ととは云ひながら。水牢に嚇されて。母様より自からが江口町へ身を賣りし。科は私母様に。恨み殘して下さるなと。詫びこがるれば。　詞オ、さうもあらう。孝行な其方。親となり子となりいかい世話になりました。何れ因果といふものは。水といふ字の曖籬にて。首を縊りし其例。娘の海士も水に死に。我も水に緣深く。水牢遁れた其金で。　地又水に入る因果さは思へば水は我に寇水。フシ未來も氷の地獄ぞや。　地色海士の手業は幾萬とも。鱗くずを取集め世渡りにせし其報い。親子共に魚の餌食。是殺生の好い手本。　詞必ず佛經の吊ひより。一四一合の鱗くずなりとも。助けて放すが經陀羅尼。　地必ず娘忘れなと。因果の道理を辨へて。　フシ云置く。事ぞ哀れなる。　地色折柄來る傾城屋。手の者連れて押取卷き。　詞ヤア大騙の不敵女。娘をつれてよう來たな。金戻すか娘を渡すか。無體に引立て行かうかと。　地色理を理につのる無得心。母は起立ち手をつかへ。　詞其金は水に入り。娘も今では渡されず。家財殘らず賣代なし。　地受取つて下されと。詫びるを聞かずヤア成らぬ〳〵。　詞金が無くば此娘と。　地引立てるを母驅寄り。傾城屋が腰の物拔くより早く我と我が。咽喉にぐつと突立つる。是はと驚く轡屋主從。娘も夫も狂氣の如く。こは何故の自害ぞや。父母二人私一人。何故手に懸けて給はらぬ。二人一緒に死にたいと。くどき歎けば岩次も繰言。　詞最前の打擲を無念に思ひ死ぬるのか。面當か女房。　地おことが死んで此娘。どうならうと思ふぞと。抱起せば苦しげに。夫の杖は稻のきね。一皮内は眞實の菩薩の行で　フシ有難し。　地色娘が爲にする自害。お傾城屋へ申譯。近う寄つて聞いてたべ。　詞夫の爲とて娘をば。賣つたる金が水の泡。却つて夫の害となる。かうならうとは夢

にも知らず。江口町へ尋ね行き。親の口から傾城に。子を賣りませうというた時。地安い高いのをり極め。鬼でも泣かねばならぬ事。せき來る涙を呑込んで。七兩一歩の身の代は。榮耀にせうか伊達にならうか。親父殿の水牢を。助けうぞ救はうぞ。金は寶と思ひしに。敵となつて人柱。やつぱり思へば水牢が。增してあつたに フシ情なや。地色悲しみに悲しみ重ね。娘を此方へ渡しては夫が冥途の迷ひとなる。詞爰を思うてする自害。盗人の老耄女。大騙めを殺したと。思うて腹を癒て下され。夫も我故。娘も我故。地此方へまでかたりして。是が死なずに居られうか。腹が立つなら寸々に。刻んで去んで下されと。搔集めたる身の科を。聞いて泣出す娘のおこよ。夫も始終取縋り。慾に目の無い轡屋も。心の手綱緩みしか。フシ馬の脊をこす涙なり。地色主税之助奥より立出で。詞ヤア〳〵岩次。歎きは何時までも變らず。制法の時移る。急ぎ最期の用意々々。用意と申して繩懸るより外は無し。地色御勝手次第と手を廻せば。傍屋へ連れて行く雜人。繩と竹との卷き支度。手負の母は伸上り。いたはる娘も立上り。見て泣きあせる鶴の子の。親を慕へば慕はれて。見る影も無き姿形。思ひ續けて。フシ泣くばかり。地色心強き傾城屋。物にならずと立寄つて。詞さあ〳〵お内儀。娘と金との出入り仕舞ひ付けよとせりかゝる。地主税之助懷中より金一包み取出し。娘が身の代受取れと。眉間目當に小判の手裡劍。直に戴く手足の早業。且那露かと輕口も。フシ逸散にこそ逃歸る。斯くの通りと引出す。岩次が體を簀卷の俵物。娘も母も二目とも。見るに甲斐なき親子の別れ。母は血汐を繰出し繰出し。娘。親父殿のあの姿は。此世の乞食冥途の餓鬼道。我此姿は修羅の猛火。赤いか〳〵。赤いが直に火の車引けや。引けやと引く息の。フシ弱るにつれて憂別れ。地なう母様と執着いて泣くも敢なき最期の體。見る父親は氣も消え〳〵。詞泣くな娘もう叶はぬぞ。父も今行く去らばぞよ。今日歸るさに雉子打つて。薦に包みし其如く。此姿を見よ日干の簀もり。雉子の鳴音で打たれたも。我と我でに言出して。袴の襠のつぎ柱。思へば雉子が知らせたか。雉子も口故。我も口故。地あの水底が我棲家。父戀しくば水そゝぎ。母戀しくば此土で。佛の像を供養せよ。父も無く。

母も無く。肩身のすぼむを見るやうな。可愛の者や不憫やと。隙行寄り這寄りて。歎く涙の。長柄川 フシ蛇籠も。水に浸すらん。はや引立つる。老の身を。見るに悲しく娘のおこよ。我をも共に連行けと。縋れば拂ふ露の間も。離れじなうと呼ぶ聲も。娘さらばと云ふ聲も次第に。遠き水の音。おこよはワツと泣倒れ。性根正體無かりしが思ひ廻して手を合せ。南無父尊靈 母聖靈。卽身卽是成佛の。回向に供ふ一首の歌。物いはじ。父は長柄の人柱。雉子も鳴かずば打たれまじものを。云うたが大事か。云はぬが云ふに勝るかと。彼方へ走り此方へ行き。一ツ二ツの石の數共に長柄の水の泡。後れはせじと身を堅め。飛び入らんとする所に。詞ヤレ待て女暫くと。地留め出づる貴人の相。何人なるぞ構うなと又驅出づるを抱留め。詞汝今死ぬる命。入鹿に近寄り一太刀討つて父に手向けよ。今此歎きは彼が業。心得たるかとありければ。女の力に思ひも寄らず。そもやや如何なる御方にて左樣には宣ふぞ。オ我こそは鎌足の大臣。帝諸共此家に忍ぶ。今汝が詠ぜし歌。君叡感淺からず。侍從の官を下され御はしに召されんとの叡慮。地是へ出御と仰せの内。天皇光成主税之助。御臺も共に立出でて。孝心歌道の御賞美あり。地色鎌足錦の袋より一ツの鎌を取出し詞入鹿を討つには神通力。汝に與へ諸共に力となつて討たせんと。地仰せは身にも冥加にも餘りてハツと押戴き。諸天晝夜のもんのとなへ。歎きを忘れ勇みの小躍。我賤くも土民の家に生るゝとも。今日侍從の官の戴き。入鹿が館へ密に忍び。親を沈めし恨みの刄。神變不思議の鎌の名作。女と思はゞあての土鎌。草苅鎌のひら〳〵〳〵。閃く臣下はおやすの公家達。爰に薙立て。フシ彼處にかり立て。地色青かり衣の青草若ばへ。實ばえも今は敵のすゑば。詞赦して置かぬでごんすでやんす。我等もちつくり色がま刄がま。地ふすゐの床の油斷を見付け。ふつてかゝるはお首の無心。在所生れのおこよが仕懸。心の下紐しつかと緊め。締めてくひ入るくさり鎌。鎌の威德は我等がおとく。はやお暇と平伏に。心も勇む鎌足光成。主税之助も力足御臺も君の御覺え。目出たく御代にかへり花盛りも。長く長柄川語り傳へて人柱きじなは。手とぞ傳へける。

第五

地強悪の人は天是を抑へ。奢盛んなれば亡ぶるに近し。入鹿の大臣都を津の國長柄に移し。人柱を以て橋成就し。民の金銀取集め新に建つる禁裡の結構。川の流れを庭に取り。橋も築地の内構へ前代。フシ未聞の奢なり。地色石川三位光成卿執權主税之助を召連れ。毎日毎夜の出仕隙なく。時の權威は免れず。廣庭過ぐる向うより縣の押照羽黒の嵯峨丸。左右の翼の横柄顔。詞ヤア〳〵光成卿。睨まれるが怖さに未明の參内よい合點。入鹿公の一家でも。鼻が高いと睨み落す。昨日も大王の御眼力で。金瓦が五枚忽ち湯となる。押照公の目先に烏が三羽。某が雀十羽。燒鳥には事缺かぬ。地自分が宿へも折々は見舞召されと舌長に。いへども光成猶まき舌。詞御懇意忝し。扨先達て申し上げし難波女の歌舞。蘆苅る業のしをらしさ。今日御叡覽に供へんと。車宿りまで召しつれ參内。地宜しくお執成と手をつけば。詞ムウ其儀は君にもお待兼。奇特にも氣が付いて太儀々々。取次しておません。難波女が舞歌ひ聞いて睨んでくれんずと。地色禁裡にはやる睨みの勝負。かけも構はぬ者までも。フシ減多に睨み入りにける。地色光成卿四邊を見廻し。詞コリヤ〳〵主税之助。豫ての望みは今日。何れも忍ひの用意は可いか。成程手合仕り。合語問言しらせの笛。支度宜しく候と申す。ムウ重疊隱密々々と。地主從心をフシ合はす折柄。地色入鹿大王出御と相見え。奥に聞ゆる管絃の調子。四方見晴す御殿を開き。生れ付いたる寢徒の乙鬣。詞ヤ光成。汝と鎌足とは聟舅の縁あれば。心ゆるさずさりながら。勸むるもの見物せずんば。恐るゝといふも奇怪。皇極帝を殺し跡に立つべき太子も無く。敵對すべきは鎌足一人。彼が力に何と及ばん。假令朕を狙ふ者にもせよ。手強き性根の者猶面白い。急いで呼出し。脚腰の折れる程。フシ舞うて見せよと憎さげなる。地はつとばかりに光成卿ソレ〳〵主税之助。難波女芦寢御目通りへ呼出せと。仰せに隨ひ差し心得フシ表へかくと知らせ行く。地フシ召しに任せて。立出づる。供のわつぱが瀧墨ぐ。面を作る品

作る。一荷の芦をゆつすりと。肩も朸もしゐわりと。目通り近くどつかと卸し。フシ許して貰ほと息をする。地色嵯峨丸押照詞を揃へ。詞ヤイ〳〵下郎め。大王の御前近く見苦しき雜物。持つて下れときめ付くる。いや〳〵是は商賣物。芦苅る業を御目に懸くれば。即ち是が飾り物。見苦しくと御免々々。さあ〳〵女歌ひかけて舞ひ出せ〳〵。地あつと答へて賤の女の扇にことを。寄せにける。謡名にし負ふ。難波の浦の濱風に。揉まれて育つ芦の葉を。ナホスフシいで〳〵苅りて參らせん。げにや歌にも難波津に。咲くやこの花。冬籠り。今を春邊と匂ひしも。スエテ芦の葉草の露の玉。心を磨く種ならば。人に見せばや津の國の小オクリ長柄わたりの春景色。舟漕渡る蜑小舟フシかたはの芦に。棹さして。波に揺るゝ風情とは。本フシ大宮人も詠。じけん。きくには霜のおきな草。フシからよもぎとは誰が云ひし。スエテ秋の薄の穂にいでて。尾花と云ふも理りや。人はともいへ我爲に。長地此水底は父の里往來の人のあしのはにかゝり給ふは悲しやと。思はず檐に立寄りしが。放下僧二上リあら面白の。水の流れや。筆に書くとも盡すまじ。東には八幡山崎。長柄堤を廻らば廻れ。ナホスフシ忘れたりとよ。放下僧餘處の見る前恐ろし。恐ろしの君の目元は。水車の輪の如く。河水はあしに揉まるゝ。ふくら雀が。ばつと辰巳の里よりも。舟に連立つ磯千鳥。三下リはんま千鳥の友呼ぶ聲は。ちりやちり〳〵。ちり〳〵やちり〳〵とちりとぶ所を。ナホスさいて取つたはあれ〳〵。これ〳〵此里の。たみのゝ島は憎からで。フシ憎むははしの渡しぞや。三津の濱邊に立つ煙。釣する蜑の漁火か。お手うち遥ふ手枕に。心もよしやあし引の山路は遠く。海近くあれ住吉の。フシ浦ぞかし。津の國の難波の。春は夢なれや。芦の枯葉に風防ぐ。匂ひおこせよ梅の花笠。縫ふてふ鳥の翼には。かさゝぎも有明の月の。かさに袖さすは。謡天津乙女のきぬ笠。それは乙女是は又。難波女の。〳〵。かづく袖がさ肘がさの。雨のあしべの亂るゝかたを波彼方へざらり此方へざらり。ざらり〳〵ざら〳〵ざつと。風の上げたる古簾つれ〴〵もなき心おもしろ。ナホスフシおもしろや。荻の上風。水に逆立ちざわ〳〵〳〵と澤の蘆。靡く草木は自ら。君の威光におそはれて。みなかさゝぎのはね合せ。難

波の賤が一節も重ねかさぬる御代の春。壽き祝ふ舞の袖。あらお目出たや目出たやと歌ひ。奏でて舞納む。地光成興じ給ひ。詞面白き一節とてもの事に見え渡る。名所に擬へ蘆を苅りお目に懸けよ。地苦しうない大王の傍へ寄りて所望所望と望むも一物。舞手も一物荷物を持ちしわつぱを呼出し。詞御所望にて候へば。蘆を苅り御目に懸け參らせうずるにて候。ワキ折柄宜しく候。地いで〳〵蘆を苅らうよ。諸共に苅乾す蘆を濱荻と。所かはれば品かはる オクリ變らぬ。物は松の葉と。竹の根節のそれ其處をと。フシ走りかゝるを。地色嵯峨丸押照立塞つてどつこいどこいと附廻す。此方へ來りていざ〳〵苅らう。いざ〳〵苅らう鎌の刄に。露のうきたつ我思。暫しは消えよ。フシ淡路島。時待つふねは播磨灘曾根にも松の千歳松。せくな向うは逆落し須磨の隙間もあるぞかし。鵠越に飛付いて。思ひを君に明石潟。西の浦々山々も皆一同にかたはの。あしがま。地御目に懸けんと立廻り。入鹿を目懸けるわつぱが面付。たゞ者ならずと嵯峨丸押照引挾んで切付くる。心得たりと鎌にてなぐり追立て。追立て切結ぶ。合圖違うて光成剛。待てよ〳〵と諸共に。オクリ追懸けゝ奥に入り給ふ。地色其間に娘が身拵へ。鎌閃かして立向ひ。詞ヤア〳〵入鹿。おことが呀吋け人柱に入れたる岩次が娘。鎌足公の情に依つて。お家の重寶片双の鎌。神々の力をかつて親の敵討ち留める。地覺悟せよと飛びかゝる。ヤア。詞小ざかしと引掴み。地鎌奪ひ取り投付けるあつと一聲絶え入る娘。入鹿は鎌を押戴き。詞鎌足が重寶我が手に入るは天の時。心に懸る事無しと。油斷は大敵合圖の笛。地わつぱと見えしは山上八王。嵯峨丸押照兩人が。首ひつ提げて立歸り光成主從兩方より。取卷き給ふ其内に一荷のあしは四方に別れ。内より鎌足源内左衞門手んでに鎌の刄先を揃へ。中にも鎌公大音上。詞古今に稀なる强敵。今日亡ぶる時節到來。急いで覺悟と呼ばはり給へば。入鹿ちつとも仰天せず。騷ぐまい蠅蟲めら。一言尋ぬる仔細あり。ヤイ鎌足。我皇極を打殺し。今又汝が手にかゝらば。一天下に王たらん者ありや否や。ヤア要らざる問事。汝が殺せし帝は某が娘藤照姫。天皇は御安體。跡の氣遣ひ無用々々。イヽヤ表裏いふな鎌足。家に傳はる片双の鎌。女に與へし不覺者。天皇在世も

偽り〳〵。愚や入鹿。女が心勵ます爲。草苅鎌を時の方便。眞の重寶こりや爰にと。地振上げ給ふ双の光。コハリ御殿に閃きさすがの入鹿。ナホスはつとばかりに眼を閉ぢ。思はずどつかと伏したるは。フシ神變奇特と云ひつべし。地色すはやと人々くさり鎌。打付け〳〵切付くる入鹿はむつくと起上り。打付ける鎌押取り〳〵。我と我でに首にひつかけ天も突拔く大聲にて。詞我愛着の緣に引かれ。思はずも帝位を奪ひ。末代朝敵の名を殘す。是即ち戀慕の絆。てん手にくさりを力に任せ。地引いて邪念を霽させよと。五體を堅める楠のたち木。えい〳〵聲にて引落す。體は生拔く深山の鐵石。首は敢なく觀念の。心につれて引落す。目出度く御世にかへり花直に。津の國長柄村。都の土地と末長く榮え榮える難波潟昔。語りを書殘す。

攝津國長柄人柱 終

南蠻鐵後藤目貫

後藤目貫

作者　並木宗輔

序詞兄弟は是手足の如く。垣を隔てゝ諍へども。外あなどりを防ぐといへり。夫婦の中は花衣色そめかへて新にす連る枝の離れなば元の根ざしを得がたしと。筆にいはせてをしへ置く虚無大道の源氏。頼朝公の漂平こそ。ヲロシ武將の大度と。仰なれ。地頃は文治の春の空何か評定有るべきとて。御黒書院に出で給へば。在鎌倉の諸大名殘らず伺候ある所に。畠山重忠は所勞の痛はり力なく羽翼の臣本田次郎近經陪臣なれども思慮有る男。君の思へも目出度き故。御前。フシ間近く相詰むる。地將軍仰出さるゝは。詞扨も弟九郎義經。婬酒の二つに其身を忘れ奢に長ずるのみならず謀叛の。企致すよし先達て聞及べり。事大事にならざる內早く討手を差登し。地然るべしとぞ御諚有る。伺候の大名誰有つて詞を出す人もなきに。本田ノ次郎進み出で詞諸歷々を差置いて下郎の某。言上恐れ多く候へ共。義經公の叛逆世上の取沙汰計りにて未だ實否も知らざるに。軍勢をさしのぼされば君の麁忽と世の嘲り。地一應も再應も虚實を糺され下さるべしと。いひも果ぬにお次より。梶原が郎等番場の忠太我は顔にてしらすに出で。詞陪者の分としてこしやくなる念に念拙者が緣類錦戸の太郎伊達次郎といふ兄弟。義經に傍近き出頭委細は彼が書翰にて。天下を奪ん下心に紛れなきとの內通。地疑ふには及ばずと。フシ顔を赤めてせりあふ所へ。地都堀川の御所より御使者有りと知せの侍。跡につゞいて立出るは。鎌田が後家の貞松尼。次信が母佐藤の局。權の頭兼房いづれも六十にあまれる老人。判官殿よりお使と頼朝公へお目見えは。尾をふむ心地虎の間の。フシ廣びさしにぞ畏る。地大將面を和らげ給ひ。詞遙々下りし義經が三使。何等の用事か覺束なし。口上の趣き逐一に相のべよと。仰に三人頭をさげ。詞主人義經我

我を差下し候段別儀にも候はず。御連枝の中何となく。近年はたゞ御疎意がましく見ゆるに付き。事を含めるいたづら者虚説を構いろ〳〵と讒言を致すよし。地萬一お耳へ達しなば御機嫌の程いぶかしく。虚名を申しひらかん爲。参着致し候と。フシ謹で述ければ。地頼朝公はさしうつむき態と有無の返答も。諸士に預けてましまさねば。是ぞ義經の心をさぐる手懸りと。本田の次郎膝立なほしゑせ笑ひ。詞何れもの仰せのごとく下々の轉事取上げいふにはあらね共。楊震四智のいましめを憚り給はぬ義經公。此頃の御振舞不審なきとも申されず心得がたき一通り尋ね申さん言譯有れ。此度御家來武藏坊を始其外の御家臣。南都東大寺大佛供養に事よせ。似せ山伏となり關所を僞り通りし事。義經御存じなかるべきか。取分け富樫の關所にて辨慶が讀上し勸進帳の願文に。諸人の助力を賴で。功德を本朝にあらはさんと。是賴朝の二字を別け。中へ文字を切入れしは我君を滅ぼし。義經公の御威勢を。本朝に顯はさんとの工の詞にあらざるや。扨又諸方の浪人者。忍び〳〵に堀川へ相集め給ふよし謀反の企ならずして。地今更新規の御家來を抱へ給ふ其仔細。フシ承はらんと難ずれば。地兼房ためらふ氣色もなく一々申開くべしと。二人の老女を押退てつゝと出で。詞武藏坊を先として御傍に仕へし御家來。山ぶしの姿と成り奥州へ下りし事御咎は至極ながら。先達て彼者共は義經公の不興を蒙り。逐轉致せしやからなれば。勸進帳の願文にあやしき詞候も是以て存ぜぬ事。扨又諸國の浪人者忍び〳〵に堀川へ參る事少しも招き寄するに有ず。先年八島一の谷所々の軍に我君の恩顧に預る武士共。尋ね登れば是非もなく。地此段宜敷言上あり御疑の晴るゝ樣願上げ奉ると。流るゝ水のよどみなく。フシ斷り立て申すにぞ。地頼朝公打點せ給ひ。詞ヲヽ口がしこき兼房が一言。聞入るべきにはあらねども。たとへ義經都にて反逆をおこさば起せ。我爲には大山の麓をせゝる蟻同然。地ちつとも動ずる事なければ。今日の使を規模として。罪をゆるし和睦せん。しかし國家の政道も猥となり。奢に禮儀を忘るゝは色と酒とにおぼるゝゆゑ。詞ほのかに聞けば錦戸の太郎。靜といふ白拍子を養子となし。義經が心をうばふと聞く。彼靜を人質として鎌倉へ差下せよ。もしさもなくば討手を登し。

地都の館をふみつぶさん。胸を定めて此返答只今せよと宣へば。兼房はハツト計り。遣背せば忽に一大事ござんなれ。一期の浮沈爰なんめりと取つつ置いつ思案の體。何がなさし出る番場の忠太。詞コリヤ權の守とやらいちの頭とやら。靜めを人質にて。義經の科赦すと有るは結構な御了簡。忝いと早速にお受申す筈の事 地何としておそなはる横蓍な髭親仁とかさにかゝれど耳にもかけず。詞御懇志の御諚意何しに否と申すべき。仰せのごとく靜御前差下し候段。地畏り奉ると云はせも果ず貞松尼。詞ア、これ〳〵兼房殿心得ぬ早請合。家にも國にも日本にも。かへまいと思召す靜御前人質とは義經公よもや承引なされまじ。地女ながら我々も使の數に加はれば。なぜ相談を致されぬ受持顔は見にくしと。フシ聲もするどに罵れば。詞ヲヽ成程三使と言ひながらかく大切なる場所になり。女中の智惠に及ぶべきか。地人質の儀は昔より其例あまた有る事と。やり込むれば佐藤の局。詞ヤア舌長なり權の頭。其身に疑有る時は人質は扨置き怠狀誓し。詞も書習ひ。地くもらぬ主人のお心を申し開きに遙々と。東へ下りし甲斐もなく靜樣をわたせと有る。お返事は得致すまい。詞ハテサ誤りになるならば。某切腹するばかり。御兩所へ難儀はかけぬ。地お氣遣なされなと思ひ込だる有樣に。お受申せば大將甚だ御機嫌よく。地二人の女が渡さじと靜ふも。皆義經を疎略にせざるまことなれ共。權の頭が早速に受合しは忠義の根元。則ち本田ノ次郎近經を請取に遣すべし。同道にて郷へ歸り萬事汝が心を付け。愚弟が輔佐をよくせよと慈愛も深き御仰せ。御座を立せ給ひければ。コハ有難しと三拜を。二人の老女はむつと顔。ハツトいらへもそこ〳〵につれて御前をたつかゆみ。やたけ心をおししづめ。フシ前後の首尾を兼房は。年ばへといひ分別の。深くも遠きもの思ひ近經を。伴ひて都の。空へと。三重へ立かへる。花は三芳野紅葉は龍田。フシ梅は浪花と定まれど。都上薗の風俗には。本ブシ詠もいかでまさるべき。地義經公の妾靜御前を慰に。うかれ出たる東山。お茶屋の軒に幕打せ。色香を錺櫻がり。フシ花も已をかへり見る。地外珍敷おく女中春に青野の草むしろ。かたしきざして四方山を。見晴す中に權頭兼房が獨り娘。戀の道には鵜鷹とて當世顔のしやれ者を。迷惑がらすこし

もと共。コレ爰な横着者。堀川のお館では龜井の六郎重清様の一か二迄に下らぬ男。詞夫をじつと暗がりで。饅頭を喰やうにつれ〳〵とだまつてぢやの。コレハしたり又わるロ。尤こちからほれたゆゑ。雨のふる程やる文に返事さへせぬ堅いお人。めつたな事いふまいぞ。盗人たけ〴〵しいと隱さしやつてもしつてゐる。あの重清様は器量なら武藝なら。地いふ所のない大丈夫。しめ心がよいとの噂。兎角一事が萬事に當る。君へ忠義の侍は。女房にも眞實なと。フシ仇口々の其中へ。義經公の麓までお出を知らせる先走り。フシ仰を請て。龜井の六郎。花のふゞきを打はらふ扇の骨もたくましき。力盛りの角前髪。あゆみ來るをちらと見て。彼がそれそこへこちらは粋ぢやはづしてやる。誰もない間に片陰で。水遊びは鵜鷹殿こなたの得物ぢやないかいの。ちよと濡さしやれと引連て。フシ幕のかげにぞ氣を通す。地わるじやれなさつきにから。ちひさう成る程なぶられたもよそ〳〵のお人ゆゑと立寄れば。すつと摺抜幕のこなたに手をつかへ。君も追付け御登山。さぞ御退屈なさるべし。しかし鎌倉の聞えも有れば。隨分密に御遊興。入相の鐘待たずとも還御をお急ぎ然るべしと申上ぐれば。詞ヲヽ堅。たまさかな御遊山にくると其儘せはしない。モウお歸りを催促かえ。そんな事いふ手間で。女房共も來てゐるかと。たつた一と口たのみますと。地取付くを振はなし。御眞實成數通の書翰。心もつて忝し。さりながら御親父權の頭兼房殿は。沙汰に乘つたる昔人。嚴格な御心から。此龜井を不義者などと御さげしみも恥かしさに。態と御報を致し申さず。折を見合せ媒を頼み。表向より迎へ申さん。地少も辭退の心底ならず。先づそれ迄は御用捨と。四角四面な切り口上。詞テモ扨も〳〵。いやではないといふ事さふなが。少しも辭退の用捨のと。女房に迄いんぎんな。いやでないのが定ならば。とゝ様はわし次第。地媒も何にも入ぬ。結納の印に幕の陰。ほん〴〵に抱付いてと手を取れば。詞ア、是々。靜様が見てござる。姫中も肌いてぢや。ハアテ大事ないわいの。あなた方はとうから御存じ。お呵はござんせぬ。地ひらに〳〵と摺よつて靜ふ内に幕しぼらせ。フシ立出給ふ靜御前。六郎ははつと赤面飛しさつて手をつけば。鵜鷹もどふやら氣味わるく。もぢ〳〵

としてひかへゐる。詞ア、コレ苦しうない重清殿。先達て鵜鷹の話折もあらば自が媒せんと思ひし所。今日幸の新枕。兼房へは我君から。娘と龜井と女夫にせいと。つい一と口おつしやつたら。さらりつと埒明く事。地其氣遣ひなら此靜が。手形をかいて請合ぢや。誰もない聞にきり〳〵はやう。幕の内で祝言のお紐ときを頼みます。ソレ鵜鷹氣が付かぬ。何とやらしんしやくを指合の出來ぬうち。フシヱヽはがゆいと宣へば。地アレあのやうに。靜様がお世話なさる手前も有りちやつとごんせと手をとれば。それでも夫が。どうかうのいやおう云はさず引立られ。フシ是非なく幕へ入にけり。地物見をそつと指足にて。のぞいて見たりさゝやきて。顔は上氣の濃紅葉高ほあからむ折からに。大將九郎義經公。大廣袖をたぶやかに昔平の宗盛が。湯屋を愛せし奢のごとく。謡車やどり馬とゞめ。爰よりかちの花見酒。錦戸伊達の兄弟を御供に召具せられ。幕のこなたに立給へば。靜御前歩み寄。詞私を先へおこして置て。今朝程より待兼しに何とてお出の遲かりしぞ。地御道草の深入かと。恨み給へばほや〳〵笑。詞ちつとの間傍に居ねば。もう御機嫌がそこねる。シタガ道々。折知り顔に咲亂れたる櫻を見ても。そもじの姿と。心の花にくらべてみれば。いつかな〳〵。ナ汝等もさうは思はぬか。いか樣君のおつしやる通り。自慢致すぢやなけれども。娘が器量に氣を呑れ。今日は花めがしほれて見ゆるナア弟。さうでないか。しほれた段か。山中の櫻めらがしよげに成り。見すぼらしうみえますと。地何かな御氣に入替り立かはりたる追從は。フシ見苦しくも又いやらしゝ。地をりから麓の方よりおゝいおゝいと女の聲。誰成るらんと振返れば。佐藤の局貞松尼足を空にかけ來り。詞堀川の御館へと心せく道すがら。花見の御遊と聞いたるゆゑ。地すぐに是迄參りしが。一大事こそ出來たれと。息繼あへぬ二人が面色。詞何一大事とは心えず。地仔細いかにと錦戸兄弟問かくれば詞を揃へ。詞此度の鎌倉下りは。義經公の御身の上誤りなき申譯。一々言上したりしに承引の上。頼朝公の仰には。靜御前を人質に渡せよとの御難題我々は呑込ず御返答も致さぬ内。權ノ頭兼房殿いかにもお渡し申さんと。御前にて慥の受合。則ちおそばに在合せし。重忠の郎等。本田の近經御迎の役を請け。

同道にて都へ登り。地粟田口より我々はかけぬけての御注進と。いひも果てぬに人々はあきれ。フシ果たるばかりなり。地靜御前は涙にくれナニ自をはる〳〵の鎌倉へ下すとや。君と國との爲ならば。唐高麗へ行とても。さら〳〵いとふ。フシ心はなし。地御得心もなされぬ上無體に引わけ送るのか。何ぼでも我君に。離れて東へ下りはせぬと。スエ泣入り給へば錦戸兄弟。是ぞ幸ひ兼房を。追ひ退けんと進み出で。詞氣遣すな鎌倉へは下さぬ。君しろし召れずや。さいつ頃より賴朝公專色を好み給ひ。女を集め給ふと聞く。靜の器量を聞及びおね間の伽との思ひ付き。人質に事寄せ。誠は妻になさるゝ工面。コリヤ兼房めがたらしこまれ。まいないの鼻ぐすりで請合うたに極つた。地につくいやついかゞはせんと。伊達諸共に齒をかみしめ。フシおだてかけたる讒言に。地義經甚だせかせ給ひ。家國にもかへまいと。寵愛の靜御前。兄賴朝が辯舌にのせられ。人質に渡さんとは奇怪成る老ぼれ。きやつも此場へ歸るは必定。汝ら兄弟心を合せ。一番手二番手と組子を定めて生捕よ。地なぶり殺しにさいなんで不忠の臣に見せしめせんと。以の外に怒らせ給ひ。靜こなたへ二人も來いと。二人の老女をいざなひて。フシお茶屋の内へ入り給ふ。地兄弟そろそろ身拵へ。數多の家來を捕手の手くばり。アレ〳〵向ふの人聲は兼房めと覺えたり。詞さりながら。年寄でも大體のやつならず油斷せば仕損ぜん。アノ岩かげに隱れゐて。地やりすごし繩かけん必ずぬかるな合點と。うなづき合うて大勢は。ヲクリこかげに忍びゐたりけり。地侯者は賢者に似るとかや。錦戸兄弟に迷はされ。義經の不行跡。鎌倉の怒り强く。さるに依つて家中で一の權の頭兼房を。鎌倉へ下されしに只今歸國の歸りがけ。是れも花見を聞付けて麓に本田を待せ置き。フシ其の身は直に歩みくる。地折よしとやり過し後より雜人原。取つたと十手振り上ぐれば。ひつぱづして利腕取り。詞シヤ慮外なる下郎めと。二三間投退れば。地殘るやつばらさわぎ立ち。番手の手譯もごつちやに成り。一度にかゝるを事共せず。かたはし抓んで狗投げ。命から〳〵岩角に。すてつぺいを打割られ朱に成つて逃ぐるも有り。胸骨をられて引くも有り。錦戸兄弟舌ふるひ。フシ驚をさして逃にけり。

地いづく迄もと追かくるを待つた〳〵と聲をかけ。龜井六郎股立取り進み出て。詞ヤア兼房。科は心に覺あらん。上意を請けて繩かくる。異變あらば首にして。御前へ伴ふ覺悟召れ。ナニ某を面縛せんとやムウ面白し〳〵やみやみ繩はかゝるまじ。地イザこいやつと我强き老人。するりと拔て待ちかくれば。是非なく龜井も拔き合せ。秘術を盡す若手の働き。權ノ頭も古兵陽に開き陰に閉ぢ二人が劣らず。三重へ戰ひけり。地はるかに見るより。鵜鷹がかけ寄りノウこれ待つてと留めてもとまらぬ太刀さばき。詮方つきてお茶屋の障子。引はづして二人が中。フシ身を捨て重しとこけかゝり。ノウ待ち給へ我が夫父上も聞入れて。いふ事いはして下さんせと歎くを兼房聞咎め。詞ムウ心得ぬ娘が一言。我が夫とは誰が事。サアいひたいとは其譯。常々お前の目を忍び。六郎樣を戀ひこがれ。文玉章で契りしに。今日といふ今日。靜樣の御媒にて夫婦の盃。スリヤ重淸と女夫に成つたか。ホヽ御免しもなき内にさげしみも恥じながら。靜御前の仰にて力なく緣を結ぶ。然るに我が君拙者を招き。其元に繩をかけ。引立こよとの御怒り。緣有れば猶用捨もならず。只今の仕合と。斷り聞て兼房は。何思ひけん拔たる刀。すぐに弓手の脇腹へぐつと突込引廻す。ナウ情なや何事と。娘は取付き半狂亂。六郎も驚きながら。コハ何ゆゑの御生害。緣組まれし事。不足にぼし有つての事かと。尋ぬれば色も變ぜず。七十近き今日迄。娘に聟を取兼しが。六郎を夫に持つたは。出かした娘大きな手柄。地緣有ゆゑに赦されずと。義を守つたる今の働き。天晴古今の聟を取嬉しい餘りの。フシ切腹ぞや。詞引出物は忠義の一句。代々源氏に仕へる。某とのにくしみ。靜御前を鎌倉へ。渡さんと請合しゆゑ。御咎めと覺えたり。地エヱ是非もなや御運の末。此度の鎌倉下り。疑ひ深き賴朝のお心。人質として靜を渡さば。御中和睦有るべしとの御難題。詞いやといはゞ早速に。大軍を以て責來らん。我が君色に迷ひ御座ゆゑ。數多の家臣が取々に。諫かれたる靜御前。引わけて東へ送らば。御身も納り一つは又。親と名の付く侯人の。錦戸。自然とお傍を遠ざからん。彼是國家の爲と思ひ。地扨こそ請合。もし御得心なされずば。御病氣といひのばし。隙取る内にしつかりと。味方の臍を堅めん

爲。とはいへ不興を請けたる某。何を云ふも甲斐有るまじ。殊に一旦武士の約束。今更何と言譯に。頼朝公へ切つたる腹。此詞を能く守り。二つ取には人質を。すゝめられよ龜井殿。頼む〳〵と今はまで。忠義を忘れぬ心の丈夫。娘は餘りの悲しさに。物もえいはずしやくり上げ消入ばかりに。フシ歎きける。詞六郎も目をしばたゝき。とても此深手にて。御存命は叶ひがたし。讓り置かるゝ御遺言。逐一に相心得。宜敷計らひ申すべし。地御心安かれと涙ながらに老人の。心を破らぬ一言を。嬉しげに打うなづき。詞ヲヽ重ね〴〵祝着せり。地此世に用なき某。聟舅の盃に御苦勞ながら御介錯。フシ聟殿頼むと合掌すれば。詞アいや其儀は御意にそむく。地たとへお呵りうけるとて。拙者に討てとは曲もなし。詞然らば娘汝を頼む。コリヤ。是程めでたい婚禮に。なぜ泣をるぞほへなやい。地苦痛さすのは大不孝。早う父が首を討てヱヽつがもない事おつしやります。なんぼ孝に成るとても。勿體ない親の首。そればつかりはゆるしてたべ。お留守の内に殿御を持ち。おかへり有つて御機嫌が。そこねもせんかと案ぜしに。悦び給ふが猶悲しい。叱られても叩かれても。助けらるなら助けてたべ。我が夫やいのと伏轉び。スエテあやも涙の悔み泣。詞エヽめろめろとほえづら。今にも本田が來りては。此兼房が犬死。地泣事はないサア〳〵と。いひつゝ親子一生の。別と思へば目に溜る。涙かくして居る内に。麓より來る人聲は。本田が迎ひ事急なり。とても未練な兩人に介錯は頼まじと。突込む刀取直しうなじに押當るい〳〵聲。我と押切る覺悟の臨終。フシ首は前にぞ落てげり。地娘は死骸に抱付き。フシ前後。涙に取亂す。地龜井六郎涙をおさへ。コリヤ〳〵泣て居る所でなし。こなたへ來れと死骸を抱へ立上れば。女房もかひなき父の首。かきいだき。フシ涙ながらもかひ〴〵しく。夫につれ立ち入けるは。ヲクリ哀れと。〻人もしられけり。地程なく來る本田の次郎。田舍めかざる男ぶり智勇備はる骨柄にて。ゆう〳〵と立出て。幕のこなたに手をつかへ。詞將軍の御前にて。契約有りし人質靜御前を渡されよ。御迎の爲本田の次郎是迄推參仕る。兼房はおはせぬか。權の頭はと呼はる聲。地かくと傳へて暮しばらせお茶屋の内より對の六尺。靜御前の乘物を。フシ櫻の木陰に

かきよすゆれば。地引つゝいて龜井の六郎禮儀正しく兩手をつき。詞ムウ聞及ぶ本田殿遠路の御迎駕御苦勞千萬。隨つて兼房がお受申せし人質。義經公にも許容有つて。お渡し申す靜御前。地お受取下されと。フシ慇懃に相述ぶれば。詞ホヽ早速に御得心御連枝のなかむつまじく。御世長久の基ぞや。地慮外ながら作法の通り。改めの爲御目見えと。立寄つて乘物の戸を引き明くれば。靜にあらで兼房が白髮首。三方に乘せたるてい。コハそもいかにと驚きしが。ムヽウ扨は義經得心なきゆゑ。義にたくましき權ノ頭。鎌倉への言譯に。切腹せしか殘念やか程切成る志。無下にはいかでなすべきと戸を引立て六郎に向ひ。詞契約の通り靜御前相違なく請取つたりと。地思ひの外成る挨拶に。ぎよつとせしが膝すり寄せ。詞改められし乘物は靜御前に違ひなきや。却つて手前に合點參らず。ホヽさも有らん御尤の御尋ね。畢竟靜を渡せと有る頼朝の御諚意は。御和睦の印なくては叶ふまじとの御難題。一度武將の詞を立て渡されし兼房の心底。請取つたれば事濟だり。しかし此事沙汰有つて。餘人にかくともれ聞えば。地將軍の御諚を背く天下の政道足らぬゆゑ。又もや國家の煩ひと成る。只其元と我ばかり。他にもらさぬが肝要ぞや。心え給ふか龜井殿といふに嬉しく頭を下げ。詞成程御邊察の通り。我君得心あらざるゆゑ。頼朝公への申譯に。權ノ頭の生害。此趣を申上んと存ぜし所。はや細道より靜を同道。還御成れば力なし此首を靜にして請取給はる御了簡。何しに外へもらすべき。萬事貴殿の御働き。宜しく頼み存ると勇士と勇士の詞詰。詞ヲヽ氣遣有るな鎌倉の御前は拙者に任されよ。地早お暇と目禮は互につゝむ一大事。言はず語らず六郎は　フシ立別てぞ入りにける。本田は龜井が忠心を深く感じて立つたりしが。日も夕陽にかたむけば片時も急ぐ旅行ぞと。下部を呼び出し乘物つらせ　フシ立歸らんとせし所へ伊達ノ次郎家來引ぐしどつとかけよせ。詞御寵愛の靜御前。無體に召具し歸るとて歸さうか。此方へ戻せばよし異議に及ばは本田次郎置土産に首を取る。地返答せいときめかゝれどちつとも騒がずから〳〵と打笑ひ。詞ヤア義蟲めらがほざいたり頼朝の御諚にて請取つたる人質。渡まいが何とする。地ソレ物いはすな討つてとれ。畏つて大勢が。つばなの穂先

と拔きつれて切りかくれば近經も拔合せ縱横微塵に切りまくれば前後の敵にあぐみし所へ龜井の六郎躍りいで。手頃の櫻木ゑいやつと拔くより早くかたつぱし。はらり〳〵と　フシなぎ廻れば。地さしもの大勢支へかね。空にしられぬ雪あられ。むら〳〵ぱつと逃ちつたり。隙をうかゞひ伊達ノ次郎。家來横淵藤次を引き連れ引返して。詞コリヤコリヤ横淵靜は爰に奪かへせと。地主從立寄り乘物の。戸を引明てコリヤどうぢや。詞兼房めが白髮首。ヱヽ役にも立たぬ骨折損あたいま〳〵しい老ぼれと。地土足にかけて踏散す。後へ本多が取つて返し。かくと見るより大きに驚き。詞それ見付けたら赦されずと。地飛んでかゝれば伊達次郎。コハ叶はじと物をもいはず逃る向ふに龜井の六郎。顯れ出づるをかいくゞり　フシほう〳〵逃げて失せにけり。地横淵は度を失ひ。うろたへ廻るを本田の近經。ぎやつとのめらし足下にふまへ。詞エヽぜひもなやモウ叶はぬ。鎌倉には梶原が家來番場の忠太といふ佞人。錦戸兄弟に緣有るやつ。きやつが見付し上からは。靜御前でなき樣子。忠太が方へ內通して。鎌倉中へ取沙汰せん。さすれば最前いふ如く。二度御中不和と成り。天下の騷ぎ程有るまじ。地入魂も互に是迄と。にがり切つたる殘念顏。かく迄心をつくされしに顯はるゝ上力なし。重ねて互ひの對面は。戰場にてこそ致すべけれ。詞ヲヽサ〳〵いふにや及ぶ。サア血祭の其下郎。御邊は頭拙者はすね。地イザ〳〵お出と兩人が。力に任せ兩方へ。引けばすつぽりほゝづき首。フシちぎれて空しく失せにけり。地今迄せつ成朋友も。義を見て勇む二人の勇士。うちに劔を抱けども。表へ出さぬ忠臣義士。フシ立別れたる有樣は。增長持國廣目天。毘沙門天の忿怒の相。帝釋天の荒れたるいきほひ。花ふみしだく東山。谷の水音ごう〳〵〳〵降三世。峯にひゞくはどう〳〵〳〵。どつとふきくる嵐につれて。韋駄天走りに立歸る末代。ふしぎのまれ者やと感ぜぬ。人こそなかりけれ。

第　二

地神は人の敬ふによつて威をまし。人は神の德による。近江の國栗本郡水府神の緣日と。上下さゞめく海道に樽を枕に餘念なく。浮世を夢と呑みくらし。世をへつらはぬ曲者有り。元來弓馬の家に住み。孫臏が術に達せしゆゑ。近江他國の大名より軍師に招き給へども。生國はなれ此邊に。刀をのみと鑓子にかへ。目貫の職を仕習ひて酒より外に主なしと。呑んで明かして行だふれ。月に三斗で足ざれば　フシ五斗兵衞といひはやす。地神參りの貴賤立集り。詞ヤ此醉どれは追分の目貫師の五斗ではないか。ムヽ扨も呑だの。跡の村から酒の匂ひ酒屋が有ると思うたら此わろ。地こちらが目からは人でなし。よう見て置けと跳橋の跡から來る上戸仲間。詞ハツア給られて好もしやと。ても呑むなら。あれ程に。呑むでなければ人でなし。地皆も見ておきやあやかり者と。そしれば譽る參れば下向。行つ戻りの口ずさみ。フシ是も御緣のはしならん。地暫く有つて庄屋年寄いかつがましく駈來り。詞コリヤ往來の道をふさぎ。狼藉な喰ひどれ鎌倉の御上使本田次郎近經樣のお通り。地起上つて片寄れと。ゆすりわめけば大あくび。頭も上ずのつとり聲。詞ハレどんどとやかましい。鎌倉の上使が何ぢや。此男は忝も都の土地に住みなれし。義經公の御領分の職人。賴朝殿は關東の將軍。鎌倉でこそ大事の殿樣。都者はへちまの皮。上使でも本田でも。片寄道理微塵もおじやらぬ。邪魔にならばそつちから。除て通つてもらひましよ。地あつたら夢を見殘したと。足なげ出すぞんざい者。引ずり起してぶてたゝけと。騷ぐ程なく近經はヤレ待てさなせそ。思ふ事有りと乘物つらせ。フシしづ〳〵とあゆみ寄り。詞コリヤ〳〵賣人。義經公の御下。都の地に住居すれば。鎌倉の某に禮儀せぬとの言分一理あり。さりながら。アレ乘物にお渡り有るは義經公の。思ひ人靜御前。囚と成つて鎌倉へお下り。汝が敬ふ義經公の御臺同然の靜御前。立上つて三拜せよと。地理を理でおさゆる一言に。ハツト驚きむつくと起き。乘物をためつすがめつ近經や。家來が顏を見廻し〳〵せゝら笑ひ。詞ハヽヽ世は末世に成つて侍も啞つくの。よいかげんにおなぶりあれ。地其手はたべぬと又ころり。寢るをねさせず引起し。詞靜殿と聞きながら禮儀もなさで尾籠の振廻。其上武士を僞り者とは緩怠

成愚人めと。地きめ付くれば色も變ぜず。詞アレまだけふとひ僞りの。アノ乘物の中ながなんの靜どの。地ばけ物でがなござらうと。いふもゑせ者問も堅意地。詞イヤ御供する某さへ。見違へぬ靜殿を似せ物といふ仔細は何んと。ヲヽそれ程聞たか申して聞けん。惣じて人に五運六氣とて。五臟六腑より出づる息。引息。聲なうして。物にぎはし。然るにあの乘物。自然と日のめのさしやう薄く。御自分を始め二合半の髭奴迄。五音の調子のいまはしさ。某が目や耳には。しつかい坊主のない葬禮を見るやうで。生た人とは思はれぬ。それでもあれが靜樣ならろくな靜じやござるまい。靜か泥靜か。地氣の毒顏が見えすくと。フシ見通すごとく言立つれば。地さしも明智の本田次郎。返答もなく口ごもりやゝ打守り居たりしが。詞ムヽ扨は儕都のやうす傳へ聞しやつならん。助け置いては後日の妨觀念せよと切りかかるを。地枕の手樽ではつしと請留め。一と跳はねて起上り。五斗は前後に眼をくばり心ゆるさぬ頬魂。本田は少しもたるみを見せず。詞きやつ生捕て土産にせん。ソレ家來共繩を懸よと下知すれば。地承て兩方より取つたとかゝる二人が肩口。詞兩手に抓んで車投。地跡よりかゝるを蹴飛し蹴かへしあたりをにらんで　フシ二王立。地又一時に立かゝるを。本田は聲かけ。詞ヤレ暫く〳〵手並は見えたり。家來共慮外すなと。地遙に遠ざけ。うや〳〵敷草叢に手をつかへ。詞ふしぎ成るかや貴公の詞。成程乘物は靜殿にあらず。五運六氣の考。我々式の及ばぬ所。猶も御心を引見ん爲。家來にいひつけ無骨の働きまつぴらまつぴら。それに付御尋ね申し度筋有り。地怒りを休め下されよと。いふにこなたも胸休まり。ゑがほ作つて是は〳〵御慇懃な。詞たつた今迄殺さうの。イヤしばれのと有つた私。尋ねたきとは何事でござります。サヽ、砂でお手がよごれましよ。地お上〳〵といふを察し。近經近くさし寄り。お尋ね申すは餘の儀にあらず。此大津の追分に今井家の御浪人。藤原氏の何某。武門を遁れて町家に住み。目貫とやらを家業とし。世の轉變をよそにみて嘲り暮し給ふよし。然るに最前より。貴公の振舞。只人とは思はれず。若左樣の御方ならば。主人頼朝數年の懇望。地早々鎌倉へ下向有つて三軍をつかさどり。頼朝が師範となり。士卒の力を助け

給はゞ。詞關東の大小名は蜀に韓信を得たる悦。地又某が面目は藺相如が使にも勝りたる忠義。偏へに願ひ奉ると。フシ頭を。地に付け賴むにぞ。地五斗はつと思ひながらとぼけたる顏付きにて。詞ヤ是は思ひも寄らぬ事。成程拙者も此大津で職人は職人なれども。氏素性の有る者でもなし。もと小相撲も取りしゆゑ。拍子で人も投た物。手のすぢから見ならひ。陰陽師の口眞似。合うた時はふしぎ。合はぬ時はまいす仲間。藤原氏の軍師のとは。お目がねが三五の十八。合ぬしよざいの內からも。地我らが藝は酒呑事。盃の相手なら。いづく迄も參りませう。外の事はお赦しなされ。詞ハレやくたいもない事に隙入れて日がたける。神參りのついでに得意方を廻り。宿へもどつて又。酒々。地お暇申すといひ捨て禮儀もそこ〳〵立上り。行くを暫しと呼びかけても。耳にも入れず足早に　フシ明きだるかたげ走り行く。地三德兼備の武士も。世をかざらぬは是非なしと。跡見送りて本田の近經。正敷く彼が今井浪人。此大津に隱れ住む目貫師とは思へども。氏を隱せば力なく。殘念ながら行く所へ。十三四なる小若衆の。町人めきしそぎ袖におしよぼからげの小りゝ敷。人を尋ぬる目はうろ〳〵近經に立向ひ。詞コレ申しお侍樣此道筋にもしやまあ。四十計な男の。酒に醉うて行たふれ。地ねてゐる人はなかりしか見給はずやと尋れば。近經胸にこたへ。詞ヲ四十計の醉たんぼ見たとも〳〵。地そちが尋ねて何用有ると。脇道から問かくれば。詞イヱ其人は私がとゝ樣。不斷酒が好物で。朝から晩迄酒びたし。きつふ醉うてはたわいなく。地山でも谷でも道なかでも。ねる事がおすき今朝からの神參り。今にお歸りなされぬゆゑ。氣遣さに方々尋ね候と。語るを聞て近經は扨は彼がせがれよな。だましすかして名を聞かんと。ゑがほ作つて聲やさしく。詞ナニ其方が爺親とや。若いに似ぬ親孝行奇特な事と譽そやし。それならそちが爺親は樂人。ハレ羨しい境涯。しよざいはないか名は何と。地あやかり物ぢや聞たいと。問はれて何のぐわんぜなく。商賣は目貫細工。彫物師の五斗兵衞。私が名は大三郎。ムヽスリヤ追分の目貫師か。然らば以前は今井浪人。藤原家で有うがなと。問はれてさうとはいはんとせしが。常々父が氏素性むざといふなといひ付を。爰ぞと思ひかぶりふり。イヽヱそんな人

ではなし生れからの職人。まあそんな事問ずともとさまのござる所。地早う敎て下さりませと。まぎらす詞聞き取つて。扨こそと心にうなづき。詞ヲヽ父が在所敎へてくれん。其目貫師の五斗兵衛は。醉狂の上に某へ慮外を働きたつた今まつ二つにぶちはなした。汝は子の役。地念頃に弔うて得させよと。フシ誠しやかにいつはれば。地大三郎は仰天し。詞何とゝ樣を殺したとや。地それは誠か悲しやと。わつと計りにひれふして　フシ前後涙にくれけるが。地目を押ぬぐひすつくと立ち。いかれるかんばせ炎のごとく。走り寄て本田がさし添。ぬくより早く親のかたき。覺えたりと切かくるを引つばづし。きゝ腕取つて膝に引つ敷き。用意の早繩手ばしかく。猿ぐつわにて聲をとめ。詞其性根を見ようばかり仔細は道々云聞かさんと。地乘物引明け無理無體。大三郎をおしこんで。詞コリヤ〳〵家來共。心入れ有り鎌倉迄三日半にて時付け〳〵。地大事の召人氣を付けよと。口にはいかり心には。詞ムヽムヽこう〳〵と。地思案も半ば日も半ば。詞ハアあの鐘は九つでござります。サアいけ。地ハアかしこまつて候と足を早めて　三重へたくましき。地本田次郎近經は夜前歸國の悦びとて。家内の賑ひ取分て類葉他門祝儀の使者。フシ門前敷なみなしにけり。地殊更今度都より。誘引來りし大三郎。賴朝公のお耳に達し。梶原父子答應の役を蒙り。未明より執權番場忠太光景。對客の間へ相詰る。主は早朝より。詞登城の留守妙共こぞり寄。詞ナント篠笹どう思やる。夕べ殿樣連てお歸り遊した奥のお若衆。見た所が町人の息子さうなが。美い生れ付。お姫樣と娶して。御夫婦になさるゝなら。鎌倉の歷々にいくらも有る若衆。それを指置。町人の息子とは替つた殿のお物好。地不審がはれぬといふに中居の浦葉がさし出で。詞ムヽ野暮な事いやるの。玉世樣の聟君に。丸びたいは若輩過る。其上早朝から。梶原樣の御家老が御馳走にきてござる。あれはの。將軍樣のお小姓に。地京から抱て來たのぢやと。聞て皆々コリヤ赦せ。詞つむるさへ大きい賴朝樣に。地可愛がられたあげくには。底倉へ湯治で有うと。フシと打笑ふ。フシ折から音なう。しはぶきは。奥方の桃園御前。娘玉世ゝ諸共に。大三郎をさそひ出て上座へ直し引下り。しとやかに手をつかへ。詞奥に計りはお氣むす

ぼれん。此館は我君より拜領有りし濱御殿。鎌倉中を見おろせば。風景をも詠め給へ。地御前の故郷は大津とやら。驛路と申す雙紙を見れば。後に三井寺逢坂山。前は水海膳所唐崎。詞近江八景とて景の能い所ぢやげなれど。地又吾妻にも住めば都。イヤなう姫。少おなぐさみに風景を。フシお咄し申しやと有りければ。地アイと玉世は。おもなげに。地あれ〳〵見給へ遙向ふの海のおもたなびく。霞堅横にかゝりて見ゆる八丈島。三浦三崎や伊豆の濱。フシ浦賀と云湊あり。こなたは金澤九里の濱。稻村が崎鶴が岡。汐干の景は夫れはその　フシ有つた物ではないぞいな。地ちと濱遊びにいかんすなら。母上諸共お供せん。名物の五色貝。おみやげに拾ろひなされぬか。先づ美しいお若衆は。三下リ歌梅の花貝拾ひてしなよく。色貝姫がひ。いとしらしいなりふり。かずのかいどり小づまにな。サヨヲさりとはさりとはなうさて。しだれ柳のますを貝。うづらすゞめのかいもよし。すがいやさしやア。フシいたら貝。フシ沖のしほがいにつこりと。笑ふつぼみの青梅も。都若衆にづを引いて。ほころびかゝる戀の枝めもとの花に　フシ顯はれし。地大三は一途に近經が。父を討しと心得て。親子が詞耳にも入れず。イヤ申奥方樣。親の敵の本田殿。討つて父に手向るより。外のたのしみ何んにもない。地無用の馳走なさるゝな。御用仕舞うて勝負せんと道すがらも云はしやつた。まだ御用は仕舞でないか。早う敵が討ちたいと云も。無念の涙なり。地桃園御前氣の毒と傍近くさし寄つて。詞ほんにマア〳〵其事を。自にこま〴〵と。お咄し申せと有しをば。外の事に取紛れ。忘れましたは不調法。夫本田の次郎近經。父御を討しといふは跡形もない僞り。親御は去る壽永の戰より。大津の町へ身退き。地春は山路の花を友とし。秋は湖水の月にうそむきたゝ天命を樂しみて。世の盛衰を見る心ざし。詞將軍是を聞し召れ。何とぞ味方に付よとの御内意。夫本田承り。上京の折から。密に樣子を尋ぬれども。元より祿貧らず。世を諂はぬ英雄なれば。すなほに聞入れの有るまいと。地お前をさそひ立歸り。此譯をお咄し申先御子息の出世を見せ。親御を味方に付けんため。詞賴朝公へも御目見えなされ。主從堅のお盃。地さらりと濟だ其上で。我子の出世を腹立る親も世界にない習ひ。

ハテ若木さへ合點なりや老木の枝は折れ安い。お歳はいかねど發明なお心にかみ分けて。サア能いお返事を聞きましたいと。詞工みに云ひなば。娘も傍から母親の。其尾に付て。大三樣母上のあのやうに。息勢ばつて云はんすはよくよくお前を大切にいとしぼがつての事ぢやぞへ。母上計か自らは猶しましくるおいとしさ。早うお返事聞せてとどこやら詞の端々に。色と情をちどりがけはづみ切たる小手鞠の。母の察しも打忘れ大三が返事をフシ聞たがる。地稚けれども大三郎親子が詞にふはとも乘らず。空嘘吹て取あはねば座もしらけ　フシたる時しも有れお下りぞふと告ぐる間程なく本田の二郎。白臺に上下地服うや〳〵敷。積重ねさゝげ出で。詞某が本心妻桃園に申付け置たれば。定てお聞候らん。貴殿の御事。頼朝公へ言上せしに。御祝着なゝめならず。所領の儀は。御見えの刻御沙汰有るべし。是は若君頼家卿の御召替。謹で。地拜領あれと白臺を。フシ大三が前に押し直せば。づんと立て身構し。詰寄て本田が顔。恨めしげに打守り。詞敵を討たば腹切覺悟。地小袖貰うて何にせう。御用終らば約束の勝負せん。詞但しは御用をだしにして。敵討を延すのか。お内儀迄同じ樣に。目見えせいの出世のと。地追從らしい取持顔。此小袖で敵討詫るはさもしひ卑怯な心。詞コレ本田殿。蠅頭で鮒は釣れど。古着で人は釣れぬと。地詞にもんしやもあやもなく。齒に絹きせず云ひちらされ。本田を始め妻娘。何とぬめらん詞もなく口を。フシつむぎて居たりしが。詞それ〳〵女房九献でも出し召れ。地娘も共に云付めさ。いきや〳〵。最早料理の時分よし。何として遲ると。料理をしほに大三が機嫌窺ひ。ヲクリ窺ひ立ちにける。地桃園玉世が手づからに。薄茶珍菓を持はこぶ。フシはえぬお髭のちりを取る。地勝手口より番場忠太。懸盤に美味をとゝのへ。御膳めし上らるべしと目八分に指上て。鎌倉風のすり足に膳のすゑぶり敬ひ深く。フシ通ひの座に手をつかへ。詞拙者は。梶原が執權番場忠太。主人は將軍の御用しげく。名代として某配膳仕る。御きげんよく。地召上られ下さるべしと。謹でのべければ。出合頭の折惡敷大三郎膝立直し。詞ヤア手を替へ品替へ。卑怯未練な追從輕薄。夫程に命がをしいか。其うへ梶原が取持とは。判官樣を讒言したげち〳〵が家來よ

な。地讒者の家來が給仕の膳見るもいまはし穢はしと。足下にぐはらり蹴返せば。桃園玉世はハア〳〵〳〵。フシ肝をひやしてあきれゐる。短慮の忠太くはつとせきあげ。詞ヒヤア酢の過た小でつちめ物を覺えて此かた。人の給仕抔終にせぬ此忠太。頼朝公の御諚意。主人の名代なればこそ。樽ひろひ同然の小躬めに。番場の忠太が給仕配膳。地土足にかけるのみならず。主人梶原をないがしろの雜言。細首はねて舌の根留んと。腰刀に手をかくれば。桃園玉世が引留るをふり放し〳〵。フシすでにかうよと見えたる所へ。地本田次郎飛で出で忠太を引のけ。詞ア、是々麁忽なり番場殿。雜言は扨置き。すねを持たせても堪忍せいとの御諚意を忘れてか。あれまだ。地其十面は何事と制しても。無念々々とせき立つ面色。漸々なだめ大三に向ひ。扇を持つてあをぎ立て〳〵。詞ホヽウ天晴いさぎよし大三殿。敵討を詫るかと。我をさみする詞の手强さ。たるまぬ勇氣。ハアさすが五斗殿の胤程有り。生先見えて頼もしゝ。地某が本心疑ひはさる事なれども。五斗を討しと僞りしは。頓智を以て本名を名乘らせ。武勇の芽有るやいなやはかり知らん一つの方便。二つには頼朝公御懇望の五斗なれば。御身を君につかへさせ。雛をおとりに。親鶴を餌飼ひなづけん塒落し。しかのみならず義經公。地御連枝不和に成り給へば五斗殿を軍師にまねき。御催しも有る時は。國家の騷動民の歎き。詞某が詞に付き將軍へ仕へなば。聖經軍術に傳達せし。五斗兵衞實基にてもなどか我子に迷はざらん其後君の御教書を。御身持參有るならば。すげなういなともいはれまじ。さなくとも御舍弟判官殿。いか程頼み給ふ共。子に引かされて味方はせられじ。然れば國家安全なり。地稚くとも道理を辨へて。御連枝和睦のたねとなり我念願も立ててたべ弓矢神を誓ひに立て。鎧を再び肩にかけまい。夫に首を提げられん。此詞に僞りなし。疑ひはれて將軍へ御仕官頼む大三殿と張子房が韓信に。劔を賣り故事と迄。かぞへ立て言ひならべ。天下の爲に心をくだく。近經は。唐の鑑と世の人の。フシ狂歌によみしも理りなり。地生得明智の大三郎。忠義の詞一々に。聞辨へて感涙し暫しいらへもせざりしが。ずんと立つて席を下り。詞吻數ならぬ父の五斗。天下の爲に懇望ある忠臣のお詞に。父の存命承は

り安堵の開胸仕る。親の心はしらね共御連枝和睦の綱にもと。仰もだしがたければ。違背申さん。フシやうはなし　地君の御前を御取成し宜敷。頼み上ますると。一揖して番場に向ひ。忠太様先程の不禮は御免下されいと。地詞を改め手をつかへ慇懃にのべければ。本田夫婦が悦びはたとへん方なく取譯けて。娘が嬉しさ雙六の。フシ纒目の出でしごとくなり。地近經喜悦の眉をひらき忠太殿には此趣。急いで君へ言上有れ。詞某は大三郎を跡より誘ひ出仕せん。寸善尺魔お急ぎ〳〵。地然らば左様仕らん。詞大三殿後刻御前で對顔と。フシ番場は急ぎ出て行。詞サア〳〵女房。大三殿に湯をひかせ。髪も衣服も改めさせよ。詞早う〳〵と差圖にまかせ伴ひ。フシ奥へいさみ入る。詞ヤア〳〵誰か有今日は晴の登城。いつ〳〵よりも歩行馬廻り男すぐつて供させよ。地ハツト答へてかち若黨。そろひ六尺引馬のいなゝく聲もはなやかに御所をさしてぞ。三重立かへる。地東路と　フシ都を爰に。追分や。大津八町に隱れなき五斗兵衛が住家には。息子大三が見えぬとて二親の歎きを察し。あたりほとりが云合せかへせ返せの日數も立ち。鉦や太鼓の音もくもり。フシ哀れにも亦物すごし。地主五斗は未明より尋に出たる留守の宿。娘の德女はやさしくも兄が身の上安穩と。幼心に神たゝき三社の棚へ燈明を。ともして拂ふ笹の露。フシ打鹽水のしほらしや。地母の關女も奥よりいで不淨を拂ふから手水。清めて共に立願をかけがへもなき男の子。無事に戻して給はれと祈る片手にコレ娘。詞ヲヲよう心が付ました兎角頼むは神佛。今更云ふに及ばねども。大三が實のお袋は。八年以前に大病のやみ死。やもめに成つて五斗どのはあの子の養育。地折に幸ひわしも後家住み。われ鍋にとぢぶたと人様が挨拶で。そなたを連子に此家へ嫁入。男の子珍らしさ大事にかけて十四五迄。育て上げた大三。連れ合や世間には。日比を知つてござるゆゑ。地云分けも立つべきが未來にござる母ごぜが。繼しい中ゆゑ麁末にして。失ひでもしたかなどと。草葉のかげから此母を。お恨でも有うかと。それが一倍悲しいと涙ぐめばおとなしく。詞コレかゝ様。常々おまへが兄様を。大切になさるゝとはとゝ様もよう御存じ。殊にあれほど近所のお衆や。とゝ様迄方々と尋にお出なされた物。つい連まし

てお歸りなされう。地くど〳〵思うて此上に。煩うてばし下さんすな。ほんに日脚も畫近く。皆お歸りを待ちましよと。母に力を次の間へ。フシ泣に立つこそ殊勝なれ。地いか様さうぢや。死んだ物かなんぞのやうに涙こぼすはいま〳〵しい。ア、泣くまいぞ泣くまいぞと。いひつゝ案じに胸せかれ。フシどうかこうかの折こそ有れ。地いきせき來るはせき女が兄。捻がねの門八とて所で名うてのいがみ者。門口からどす聲にて　詞くらひどれは内にか。小舅の門八が逢に來たと。地あがり口に大あぐら。コリヤヤイ妹。詞此月のさし入に。去るれき〳〵から頼まれ。あつらへて置いた百疋猿の目貫。手付の金は先へせしめて目貫を今に渡さぬぞよ。おれが先様へ立ぬはやい。今日の内に是が非でも。埒明にや聞ぬ門八。地どろぼめはどこへうせた。引ずり出してちやつと逢せ。詞コレ兄様。ヱ、こなたはの。こちは大事のむす子を失ひ。細工所ではないはいの。地主があれほど好な酒さへ一滴も咽を通さず。泣きくらすを笑止がり。他人でさへ御近所から。大勢が手わけをして。返せ〳〵の太鼓鉦が。其耳へ入りませぬか。詞こなたの爲にもいはじ甥御。共々尋にあるいたとて笑ふ者は有るまいぞや。ヤイ爰なそげめ。アノ悴が見えぬとて。おれが何の悲しかろ。そんな詮議にやこぬわいやい。地目貫が出來ずば手付を先へ戻せ〳〵。詞コレ其金が今時分迄ある物か。大三さへ戻つたらつひ出かしてやりませう。不承ながら待つて下され。テモぬかす事がみなどろぼ。いつ戻ろやらしれぬがき。それがどう待たれる物。地汝にいうては役にたゝぬ。晩に來てくらひどれと。さしむかひに埒明る。詞さうぬかして置あがれ。アタぼこしもない。地すりめにかゝってすねも雪蹈もたまらぬとわめき　ヲクリへちらして歸りけり。跡を眺めて。獨ごと。さりとはむごいど根性。兄と言ふのも穢はしい。義理も情もしらぬやつに。修羅もやそより神々へ。早う吉左右聞くやうの。お頼み申そと立上り。常に夫が神拜を。見習うて打つ拍手に。吐甫加美惠身多女眞實を　フシ神も哀れみ給ふらん。地誠や生智安行の聖人さへ。子のいつくしみは離ぬ習ひ。ましていはんや凡夫心軍術に達せしとて。などか我子に　フシ迷はざらん五斗兵衛はしほ〳〵と打しほれたる案じ顔。尋ね歩きしかひもなく。フシ今日もすご

すご立歸る。詞ヲヽこちの人戻らしやんしたの。まだ在かも知れませぬか。地様子はどうぢやと尋ぬれば。詞サレバイノ。もしや狐のわざではないかと。稻荷山を一ぺんさがし。戻りがけに藤の森。狼谷から六地藏を。立横十文字に尋ねても。知れさうな手懸もおじやらぬ。地近所の衆から便りもないか。どこに迷うて居る事ぞ。いぢらしや不便やと涙ぐめば涙ぐみ。こちと女夫が此やうに。泣き暮らすとは露知ず。尋もせぬかと子心に。さぞ恨めしう思ふらめ。地朝晩ねがふ御本尊三社の神の力にも。叶はぬ事か悲しやと。涙にむせぶないじやくり。フシ夫婦が。悔ぞ道理成地折から表へ笠ふか〳〵。只者ならぬ侍の。供をもつれず只獨り。用有げにさしのぞき。詞目貫細工の彫物師。五斗殿の住家は是かと。地網笠取つて内に入。少誂へ度き目貫有つて。堀川の館より泉の三郎。密に推參致したり。フシ御免有れと座に直れば。地心ならねど國主の家老。麁末にもあしらひ兼ね。詞コレハ御用と有らば。お座敷へ召寄られても仰られず。勿體なくも御大老の。見苦敷あばらやへ。地冥加に餘る俄のお成。イザこなたへと。ちり打拂ひ。フシ上座へもうけをなしければ。詞イヤ此方からお頼みの筋。誂へ度しとは目貫片し。ムヽ目貫は一對の物それに片し頼むとはエヽ聞えた。扨は胴亂のこはぜにでもなされますか。イヽヤ左にあらず。此度主君義經公は。鎌倉の將軍頼朝公と。梶原が讒言にて御中不和に成り給ひ。近々に大軍向ふよし。親兄の禮有れば。一先づ都を御開きと勸むれども地罪なき御身を落行き給はゞ。却つて誤り有るに似たり。思へば弓矢の勇もなし。所詮鎌倉の勢を引受け。勝負を一戰に定んと。評議一決に極る所。詞スハ合戰に及ばん時。搦手を守るさし裏の目貫は有れども肝心の表。追手を守るよき細工の目貫。かたしかけて拙者が難儀。兼て御邊が細工の手ぎは。地臥龍先生が肺肝を出て。子房に並ぶ英才を聞及べり。あはれ武門に立歸り。さし表の追手を守る。かたしの目貫を請取つて。士卒の力を助けてたべ生々世々の頼ぞと。軍師に頼むとしらけていはず。目貫によそへし謎々を。思ひがけなき五斗兵衞。兩手を組でさしうつむき只。フシ默然と詞なし。地女房何の氣もつかず。詞どうやら是は六ケ敷さうな誂へ物。地並大體の金では出來まじ。

算用して見さしやんせ。フシ算盤やろかとうらどへば。地五斗兵衞打うなづき。詞ムヽウ面白き目貫の誂へ。品によつて頼れん。地爰は端近人目も有り。奥の一間で細工の模様。貴殿の物好み承らん。イザこなたへと立上る。扨は御許容有べきとや。望叶ひし我大悦。始終の事は一間の内。夜光の珠を取得し悦び。思慮湧出る泉の三郎伴ひヲクリへてこそ入にけれ地女房は一圖に細工と心得。サア仕合が直つてきた。此きほひに大三も戻らう。首尾はどうぢやと奥の間を。さし覗ては立つたりゐたり。耳そば立れば表の方。いつ聞なれぬ轡の音。大勢の　フシさわぐ聲。地又人こそと見る内に。十四五成る小人の。上下大小さわやかに。かざり立たる乘馬にまたがり。こちの内を目當に來るは。慥か息子の大三ぢやが。テモよう似たと詠る内。門口に馬乘りはなし。詞コリヤ〳〵家來共。用有らば呼べき間さしひかへ待つて居よと。地フシ下部を遙に遠ざける。地横柄成る物ごし迄。聞けばちがはぬこちの兄。さもあれふしぎな形かつかう。うかつに詞も懸られず。内よりそつとさしのぞき。顔合すればノウかゝ様。詞お久しうござりますと。聲かけられて飛立斗。ソリヤこそ兄の大三で有つたは。ほんにさうぢやと走り寄り。詞其姿はどうしたわけ。地ようこそ戻りやつた息災でと。嬉しき餘り詞さへ。フシしどろになつて問かくる。詞ムヽ目なれぬ姿御不審は尤。かやうにわたしが出世の譯は。いつぞやとゝ様を。勢田へ尋ねて參つた時。本田の次郎近經殿に出合ひ。無體に東へつれかへり。今では頼朝様に御奉公。それに付きとゝ様へ。將軍様から御狀が參つた地お目にかゝつて見せましたい。奥に休んでござるならさう申して下さりませ。詞ムヽそれなら出立が立派な筈。地主に見せたら嘸悦び。イザと手を引き門口を。くゞるのれんはうすけれど。恩愛厚き親の子の。悦び聲を聞付て。五斗は奥より走り出で。ヤア兄よ戻つたか。ヲヽよい侍に成つたなア。親より生れ上りよつた。シタガ。いま嘸へ話しちらと聞いたが。本田といふは彼童が狂歌にゐむ。頼朝に過ぎたる物が一つ有る。陪者なれど本田近經。其本田が事かナ。さうであろ。それは夫れぢやが。頼朝様から此とゝへ御狀とは。地ハレ呑込ぬどれ〳〵と。いふに大三は懐中より。うや〳〵敷文箱を出し。御用の譯は直筆

にて。委細認め置かれたりと　フシ父が前にさし置けば。　地何事かはと封押切り。くり返し〳〵。讀をはつて押戴き。嘸も大三も聞いてくれ。鎌倉から此と丶を。御家來に抱へたい。悴と同道鎌倉へ下り奉公するなら。十萬石の大名にせうと有る御文章。忝い事ではないか。アノこなたを大名にやテモ有難い仰ぢやの。そんならわしは御前樣。此子は若殿娘は姫君。　地此上の出世はなし。一時も早う取急ぎ。大名に成つて見たい。旅用意さしやれぬか。　詞ヲヽそれ〳〵。是程有難い將軍の仰せ。何のいやと申さう。シタガちつとわけ有て。こちとらは二三日跡から。東へくだらにやならぬ。そちは先へ鎌倉に下り。父母共追付け罷下る筈にて。上意をお請け申せししるし。恐れながら返翰と。返事を君に差上よ。　地ドレ紙おこしや書いてやろ。　フシ硯はどこにと見廻せば。　地ハテ二三日の間なら。とてもの事に大三と一所。連立つて下らんせ。　詞ハレ何ぢややら樣子もしらず。おれ次第にしておきやれと。　地しかられて是非もなく。ヲイと言つても神棚の。德利の口の白紙より外になしぢの鼻紙を。　フシ是でよいかとさし出す。　詞ウンこな人は草紙紙で書かれる物か。　地ヲツト心え簞笥の引出し。尺長半分取出し。夫に渡して我子の傍。　詞コレ大三。此やうな仕合は寢耳へ水とはいはうやら。たとへやうもない出世。是もひとへにそなたのかげ。　地子とは思はぬ氏神と手を合すれば勿體ない。　詞皆と丶さまのお陰ゆゑ。　地私共迄思はぬ立身。お前も嘸嬉しかろ。　詞嬉しい段か餘りで。夢ぢやないかと思はる丶。いか樣ほんに。　地人の果報の付く時と。夏の日の夕立は。何時で有うも知れぬと。むつまじげ成る其隙に。五斗は返事書認め。文箱に封印しつかとする。　詞コリヤ〳〵大三。少しでも隙取れば。君へ對して不忠の至り。　地隨分道中心をせきはや立歸れと狀箱を。渡すを受取懷中し。然らば私はお先へ下り。お請の樣子を我君へ申上げ。此お返事を差上げましよ。嘸樣跡から。と丶樣や妹と一所にお下りなされませ。　詞ホンニ餘りの嬉しさで。妹に逢するのをはつたりと忘れた。　地慾しがつたに立ながらちよつと呼てと立上るを。　詞ハテ近い内一と所へ寄り集る親兄弟。二日や三日遲いとて。顏の詰る事もない。　地急げ〳〵に力なく。そんならそなたはそういきやるふ。こちらも仕

舞次第隨分急いで追付きましよ。まめで〳〵と門口迄送り出で。　詞こちの息子の大三樣のお立。ヤイ家來共。イヤ家來樣方。　地早お歸りと呼はる聲。　フシそりやお立よと詰かくる。　詞嘸樣さらば。　地早うお下り待ますと。につこと笑ふ暇乞。　フシ別れて大三は立歸る。　フシ跡見送りて母親が。誰を相手の自慢口。　詞ヲヽ器量なら骨柄なら。天晴の侍。　地若君には恥かしないと内に入り。　詞サア五斗殿。油斷する所ぢやない。仕舞事はどうぢやいの。ハテせか〳〵とやかましい。夫をめかる物かやい。マア佛壇に火をともしやれ。ヲヽそれ〳〵。此樣に出世するも皆佛神のお陰。お禮の看經よからうと。　地ほた〳〵悦び佛壇を。としや廻しと押しひめらき。御あかし上る其隙に。五斗は扉へべつたりと。何やらはり出す鉦鼓に鐘木。頓生菩提佛果聖靈。南無あみだ〳〵。南無阿彌陀。佛迄聞かず女房は。　詞コリヤ何ぞ。老先きの有大事の子。死だ者か何ぞの樣に。俗名五斗大三菩提の爲と。アタいま〳〵しい念佛はと腹立聲に。　フシ涙ぐみ。　詞樣子しらねは斷りぢやが。鎌倉へかへるやいなや。どうでも大三は死ぬわいた。ヤアそりや又なぜにそれ知りながら追戻す無得心。　地追かけて呼び返そと。かけ出るをしつかととらへ。　詞コリヤ待て仔細をいうて聞かせん。奥に控へし泉三郎。目貫を誂へるとは僞り。誠は此度。義經公御兄弟の。御中不和となり。近々に軍始るゆゑ。某を味方に招ぎ。一方を防ぎくれよとのお頼み。我古へは木曾の浪人。同じ源氏の末ながら。頼朝には仇有る家筋先祖の恨此時と思ひ。義經公の御味方。畏つたと請合し其跡へ悴が使。鎌倉より我を懇望いかに悴がためぢやとて。一旦武士の契約。今更違變成るべきか。　詞此譯を悴に語らんとは思ひしが。あいつも五斗が亂ぢや物。大事の使を仕損ぜしと。切腹するは知れた事。　地若木の花がむざ〳〵と。目の前で死ぬるのを。親の身でまじ〳〵とどう見物が成る物ぞ。追返さん計に。いつはりいひしを誠と思ひ。いそ〳〵として下るべき。將軍の幕下に付く事。罷りならぬといふ今の返事。頼朝公へ差上げば。手討に合ふか。其場で切腹との仰。生きては二度戻らぬ躰。　地今別れたが一生の。顏の見納め生別れ。死んだと思うてする廻向。ギンおしや不便とばかりにて。さしもの五斗がせきのぼす。胸

に涙のこらへ兼ねわつとばかりに泣きゐたる。地様子を聞て妻の關女。扨悦びと悲しみの。是程早う替る物かさう有うとは夢にもしらず。鎌倉へ下りなば。五斗殿の若殿よ。お世繼様と大勢が。敬ひかしづくあの子の威勢。見る嬉しさはいかならんと。樂みしかひもなく。死るとは情ないそれ知りながらつきはなし獨り戻る侍の道とはいへど餘りぢや。むごいと計りふししづみ正體。もなく歎しが。地奥より聞ゆる足音に。五斗は泣顔押ぬぐひ。詞コリヤ〳〵女房。未練と泉三郎が。心の嘲り恥かしし。泣くな。地〳〵と言つつも。こぼるゝ涙を脇目で拂ひ。フシ座したる所へ。地三郎は仔細聞けども聞かぬ顔。さあらぬ體にあゆみ出で。詞始終奥にて談ぜし通り。いよ〳〵替らず御味方と。主君義經に申聞せ。地すぐに今日迎ひの乘物。拙者が宅迄落付き給へ。後刻ゆる〳〵御意得んと フシ詞ずくなに立出れば。詞早御歸りか。稀の御來駕に麁末のあしらひ。地萬事御用捨下さるべしと。式禮目禮こまやかに。別れて出る門の口。子を持つ人は嘸かしと。歎きを汲で泉三郎。ヲクリしほれて我家に歸らるゝ。フシ見送りながら。女房せき女。客の立つ間を待兼て。無慚さかわいさ不便さを。フシ夫に。すがり溜涙。地あはれいやまず五斗兵衞。心に放れぬ我子の身の上。涙ぐみて立たりしが。天性備はる勇者の魂。忽ち心を飜へし。地ハツア迷うたり迷うたり。詞東福寺の聖一國師は。我子の肉を喰ひ大道心を立られし例も有り。出家も武士も義は一つ。地よしなき愚凝に迷ふまじ。都の迎ひも來るべし。用意せんと勇をなし フシ一間にこそは入りにけれ。地妻は歎きに氣もうろ〳〵どうかこうかと案じの最中。約束なりとしたり顔。時分考へ捻がね門八。どろめは内へ戻つたかと。すぐに座敷へのさばり上り。どこにけつかる引ずり出せと。フシ家内をきよろ〳〵ねめ廻せば。地小づらにくさのにくて口。詞ヲ、手付を返せなら。アタやかましい戻して仕舞ふ。もちつとそこに待たしやれと。地立つて行くをコリヤ〳〵〳〵待て妹。詞もちつと先までない金が俄に有つて戻すとは。ハア、聞えた。たつた今爰の内から。りつぱな侍が編笠きて京の方へびつか〳〵光る着物をきていかれたが。何ぞ善い事が有つたナ。常からぎす〳〵いふと思ひ此門八に隱すのか。アリヤ皆わいらが爲ぢやぞよ。なぜといへ。五斗兵衞

に酒を止させ。細工に精を出ささう計り。眞實何のにくからう。親は泣寄りと云事しらぬかい。地よい事なら共々に悦びたい。隱さずと咄して聞かしや。サアどうぢや〳〵とたらしこんでも。詞我れが心では合點せまいが。そこが親身ぢや。たつた二人の兄弟ぢや。地あはせ〳〵と フシ手をかへ品かへ問落す。地女心のあどなさに兄と思へば心をゆるし。詞其心底なら何隱さう今日は大三が戻つて來ての。様子を聞に賴朝様に御奉公。次手に親の五斗殿も。御味方に下れとお使の。地ちつとの違で連合は。義經様へ御味方申し。大三が死ると知りながら啞ついて追返したと。言も切らせずナニ。詞アノ五斗は都方へ。早味方召されしか。はて扨夫れは。ムヽヽそれ〳〵〳〵其様なめでたい事。聞ずに置てよい物か。手付の金もへちまも入らぬ。地逢てちよつと悦ばう呼でたもれと打とけ顔。そんなら主を呼びましよと。何心なく立上り。ヲクリ〳〵奥へ呼行く影を見て。地すつくと立つて一間を覗き身づくろい。小陰にひつそと息をつめ。フシ鼻息もせず窺居る。地かくとは知らで五斗兵衞。小舅殿かようこそと。立出るをやりすごし。聲をもかけず後より。まつ二つと切付るを。心えたりとかいくぐり。ずつと寄て刀をもぎ取り。大げさに切付くればフシうんとのつけに反かへる。地音に驚き女房娘。何事かはと走り出で。見れば夫の手にかゝり門八が苦痛の體。是はと計りあきれ果。しばし詞もなかりしが。地五斗兵衞は色も變ぜず。詞思ひがけなくだまし討にと切かけしは仔細ぞあらん。まつすぐに白狀せよ。様子聞ねば殺されずと。地突飛せばかつばとふし。苦しき息を起直り。詞ハア假にも人のつゝしむべきは身に應ぜぬ强欲ぞや。此程本田近經より書狀到來。汝に緣有る五斗兵衞。軍術に妙有る事賴朝兼て聞し召れ。深く懇望なさる故。躬大三を召捕置いたり若し味方にまねかぬ内。萬一五斗が都方へ一味せば。鎌倉の爲には心腹の愁。早く是を討つてくれよ。一つ廉の侍に取立んとの文章。なんでも儕れ仕畢せんと。百疋猿の目貫を誂へ。毎日々々入込しは。事の様子をさぐらん爲。今妹が咄を聞き扨こそと心の悦び。只一討にと思ひしが身の破滅。誰有らう日本の大將賴朝公の目がねに預り。地軍師の器量備はつたる五斗殿。我々風情がそもやそも古今に稀なる武士

の。手にかゝつて死ぬが仕合。詞本望はとげねども。一旦約束した通り志はやつて見る。モウ本田へも義理は立つた。妹や姪が事必お見捨て下さるな。サアいふ事も是迄。地早う此世の暇をたべと。常に替りし今は健氣さ。妹や姪は血筋の別れ。泣きたけれ共夫の心。かねてに違ふ云譯と忍び。スエテ涙にむせかへる。地五斗も袂を。フシしぼりしが。詞ハアヽ驚入たる御心底。善にもせよ惡にもせよ。人と約せし一言の。義を立ぬくが男の魂。地でかされたり〳〵とても此深手では。存命思ひも寄らぬ事。某を討んとせしは武士に成り度き初一念。未來閻魔の廳にては。義經公の御内五斗兵衞と引くんで。討死せしと傳へられよ。地我も亦鎌倉より。さほど懇望なされたる御厚恩を報ずる寸志。運つきて敗北せば味方の勇士にぬきん出て。一番に討せん。是をみやげに成佛有れ。苦痛させじと引寄て。とゞめをさせばはかなくも。フシ覺め行く夢と成りにけり。地親子は死骸に抱付。袖と袖とに聲涙前後。フシ不覺に取亂す。地早表には迎の大勢乘物つらせ入來る。晉に五斗は妻子を引立。ヤア悔な泣な返らぬ道。死の緣無量有爲轉變。定めなきこそ世の中と勇め〳〵て立出る。關女や德女が忍ねに。泣聲直に經陀羅に。手向と成れや未來の家土產。寂光淨土の蓮の臺に至り至らん彼岸の。彼岸の花や。入相の鐘を。限に住馴し。大津を出て九重の花の。都へ急ぎ行。

第三

三下りヲンドされば吉田の兼好が。つれ〴〵草の筆ずさみ。色を好まぬむくつけは底なき玉の盃と。書いたは何れ粹坊主兎角浮世は戀と酒呑めやうたへとたはぶれて。春の最中に秋を見る。座敷のフシ内で大踊。地音頭は九郎義經公三味線は靜御前。太鼓は龜井が女房の鵜鷹が役と定められ。錦戸伊達兄弟が。奴仕出しについてふる。妓多き其中に。花染狩衣ふり付けにて。晝夜をわかぬとちてん〳〵。すつてんてれつく天井拔。フシ呵手のないさはぎなり。地妓共は踊をやめ。詞コレ申し御兄弟様。お前方の手拍子がすつきりとすまたなゆゑ。私らが拍子も合ぬ。ちと氣を付けて踊

らしやんせ。ヤアちよこざいな女めら。總體踊といふ物はむかふについて踊るが秘密。儕等が不拍子を地我々にぬり付る地横着な引きさがれと。フシあたまごなしにきめ付ければ。地義經公打笑給ひ。詞コリヤ兄弟が尤。素股から本間の拍子はどうでも邪魔に成りそな物。地かりにも我等が御臺所。靜御前の親叔父に。慮外踊の批難。詞隨分二人が踊を見て儕等も素股に踊れ。地けつく慰み〳〵と何に付けても御ひいきに。詞ナント見たか。殿様の詞が正直正路どいつでもぐつと成りとぬかしてみよ。地相手にすると鰄の。柄ひねくつたるおとなげなさ。靜御前は氣の毒さ聞かぬ顏しておはせども。物にこらへぬ鵜鷹がさし出で。詞殿様の御意成れども。あんな踊に合せうなら。地三味線太鼓もあつらへて不拍子なを買ねばならぬ。不自由な踊でござんすのとフシやりこめられて。地むつと赤面。よいか惡いか現の證據。今一度始めてくれう。詞コリヤ面白からうはい。地靜三味線太鼓を鵜鷹。兄弟は隨分と間拍子揃へ一踊。ヲンド詞任せておけろとかけ聲は。そこらで音頭とらしやませソレやつとせい。ヲンドきて見よと。咲きくらべたる花相撲花壇をすぐに土俵入り。行司にすゝむ檀扇のまねき寄せたるよつの方。いせの濱をぎ角びたひなにはのあしのふんで出る。是をきて見よかしのえ。地をどり半に大將は御聲も打とけ給ひ。詞ヤア靜鵜鷹。けふのさわぎに妓中間の立物。花ぞめやかりぎぬが。伊勢音頭の所作踊り。地見殘すも殘念〳〵。フシ所望〳〵の御聲に地靜御前鵜鷹も共に。すゝめ給へば錦戸兄弟。詞ヤア君の仰ぢや踊れ〳〵。地間の延びちゞみを直してやらんとフシかさ取るにくさも殿の御意。地花ぞめかりぎぬ辭退なく。支度にかゝれば鵜鷹が太鼓。三味の音色もしづか御前。はやひきいだす。歌人目をつゝむ今のうさ。こはさあやうさおそろしさ。過し初戀君と我しのび逢うた事思ひ出す。地かゝる所へ大鰄の貫木ざし。踊の中へほゝかぶり。詞我等もちつくり踊るべい。アリヤ。コリヤ。リヤリヤ。やつとせい地女中の中を押わりへしわりフシ大手をひろげかきさがせば。地錦戸兄弟目に角立て。詞ヤア命しらずの愚人め踊りの邪魔する曲物の。地首引拔かんと伊達次郎。取付くをしつかととら

へ。詞任せておけろともん取りうたせ。ヤこいつもちつくり上手めぢや。次手にこいと錦戸が。地走りかゝるを引つかみ二三間投付くれば。詞ソリヤあばれ者怪我すなと。地靜御前に鵜鷹を始め。フヽ女中は殘らず逃げ入りたり。地兄弟ほう〳〵起上り。詞何やつ成れば我君の御前をも憚らず。地ほたえ過ぎたる狼藉者。顏を見んと立寄つて。ほゝかぶり引つたくれば。龜井六郎重清がにがり切つたる顏付にて。すつくと立つたる有樣に。兄弟兼て手並は知る。小氣味わるさにじり〳〵と ヲクリ尻ごみとこそ見えにけれ。地御心にさはれ共。詞をやわらげ義經公。詞ムヽ心得ぬ六郎が振廻。招かぬ踊に物好姿。地我慰を妨る所存いかにと仰を待たず。詞ヱヽ情なや。踊の破れには御心を痛め。天下の破るゝには御目も付かざるか。さいつごろ。鎌倉より仰こされし人質。御渡しなきゆゑ頼朝公の怒つよく。近近に大軍責來るとの風聞。萬民の心安からず。地然るに晝夜のわかちもなく。色と酒とに正氣を奪はれまします故。お家にふるき武藏を始め。十一人の御近習。入替り立加はり御諫め申せども。詞お傍に仕へる佞人めらが。甘き詞に迷はされ。御聞入なきのみならず。却て御不興蒙つて。皆分國に引きこもる。今にてもスハ。御大事といふ時。君の爲に一命を。露ちりいとはぬ忠臣は。御館に候はず。地此御合點も行かざるは天魔の魅入か淺ましやと スヱテ涙を。こぼし諫むれば。詞ヤアこしやく成る六郎汝燕雀の分として。大鳥の心いかでか知らん。一旦互に和睦をなし。地心とけたる兄頼朝。何しに胸を變じ給はん。詞ハツア愚か成る君の仰。梶原平三景時が樣々の讒言。殊更。權ノ頭が請合し人質靜御前。君御得心ましまさねば御舍兄も又契約を。何とて守り。フシ給ふべき。地只今にもあれ人質を鎌倉へくだし御憤をしづめ給はゞ。天下は自然とおだやかならん。最前より我君に逆ふとは知りながら。申上ぐるも國家の爲。是非靜殿を敵に渡し。早々佞人を遠ざけて忠臣を招き寄せ。お家長久の基とし臣等をめぐみ フシ給はれと。繰かへし〳〵。諫言したる若者は。十九歳にて討死せし義經公の御内に。四天王と名を得たる。フシ其一人の勇士なり。地氣ばやの大將御氣色變り。詞ヤア諫めを入るゝは家來の役と。宥免すれば付け上り。佞人に迷ふとは存外千

萬。定めて錦戸兄弟が事ならん。威勢を妬む讒言にて。佞人とは儕が事罷立て。重ねて目通りへかなはぬと。地以の外の不機嫌にて御座を立んと仕給ひしを。驚き御裾にすがり付き。詞情なき御諚御通りへ叶はねば切腹するより外はなし。たとへ御手に懸ればとて。申しかけたる我諫言。地露計り聞入れ給はゞ。何か命の惜からんとひたすら諫むる一圖の忠義。返答もなく立蹴に蹴やり。詞イザ兄弟奥へこよ。地一獻汲まんとの給ひて。フシ御座の。一間へ入給へば。地龜井は餘りに興さめて。しばし佇み詠める。地錦戸伊達はあざ笑ひ。詞ア、辨へなく出るまゝのほゝげた。佞人の惡人のと。人をそねむ報にて。君の不興を蒙りながら。のめ〳〵生きてはゐられまい。地恥を知らば切腹せよ。兄弟是にて見物せんと。さもにく體成る一言に。こたへ兼てくはつとねめ付け。詞ヤア儕等が性根にたくらべ。威勢をうらやむ讒言とは。奇怪成るあごた骨。地引さいてくれんずと飛かゝらんとする所へ。ヤレ待給へ龜井殿。いふ事有りと泉三郎。しづ〳〵と立出れば。さしも血氣の六郎が大老の詞に免じ。殘念ながら猶豫の體。其間に近く歩み寄り。詞六郎申し。若うござるよ。御意見が一圖なゆゑ却つて御前に聞入れないは。君が踊りを好み給ふゆゑ。錦戸伊達の御兄弟。よい年してさへやつこ踊。其元もなぜ踊り給はぬ。御自分が其かたくろしい心ゆゑ。きむら〳〵と浮名を取るは。ア、若氣ゆゑハヽヽヽ。たしなみ召れと。地兄弟が耳に釘さす詞に龜井は猶せき立ち。詞イヤサ御自分まで踊れとは。踊が國家の御爲に。成るとも〳〵。もゆる火をけさんとて水をかくれば猶さか立つ。さかん成る火を納るには。又火を以て消す道理。ナ爰を能く得心有れ。さるによつて某も。御前にて一踊り致さんと存れども。君の音頭は古風なゆゑ。道念ぶしのへん盡がよかろうと思ひ付き日本一の音頭取り。五斗兵衞を同道致した。此音頭で踊る時は。いか程大きな踊でも隊伍を亂さず一致して。進退かけ引き心の儘。追付け是へ來るべし。君に此事申し上げ。地はやし方の手配せん。其元は貴宅にかへり。踊の用意あらまほし。御前は拙者に任されよと。智勇をかねし三郎が。敎へに龜井も胸落付き。詞ハア驚き入つたる踊のさいばい。音頭取の物好き迄承つて安堵せり。地萬事貴公に任せ